

親鸞「一」（吉川英治）

序

歎異抄旅にもち来て虫の声——

わたくしの古い拙い句である。こんな月並に耽つていた青年ごろから、自分の思索にはおぼろげながら親鸞がすであつた。親鸞の教義を味解してというよりも——親鸞自身が告白している死ぬまで愚痴鈍根のたちきれない人間として彼が——直ちに好きだったのである。

とかくわたくし達には正直に人へも対世間的にも見せきれない自己の愚悪や凡痴を、親鸞はいとも自然に「それはお互いさまですよ、この親鸞だって」と何のかざりもなくやすやすといつてくれているので、あのひとですらそうだったかとおもひ、以後どれほど、自分という厄介者に、また人生という複雑なものにも、気がらくになったことかしかない。

もっともそのころ一時文壇にも親鸞が思潮の大きな対象となり、若い文学心と若き親鸞の求道心とが、幾世紀もおいた後世で生々とふれあい、現実の社会を鐘とし親鸞を撞木として、どんなひびきを近代人のここに生むか？——をしきりに書かれたり演劇化されたりしたこ

とがある。大正十年前後のことだ。あきらかに私なども、その文芸梵鐘にひきつけられていたものに違いなく、有名な遺文の中の——「善人なおもて往生をとぐ、いかにいわんや悪人をや。」とか「親鸞は父母の孝養のためとて、念仏一返にてももうしたることいまだそうらわず。そのゆえは、一切の有情はみなもて世々生々の父母兄弟なり。」とか、また「親鸞は弟子ひとりもたずそうろう。」などという語は、わたくし達には、七世紀も前の古人の言というような気はしない。むしろ最も官能の正しくひろく澄みきった近代人の声として常に新しい反省と若い思索をよび起されるのである。

そして親鸞の生涯したそのころの時代苦をおもひ、今もかわらない人間の相をかえりみると、自ら下根の凡夫といい愚禿と称した彼の安心の住みかは、求めればいまでもたれの目の前にもあるのだという事実を観ずにいられないのだった。けれどわたくしの場合それはそれも信仰のかたちでなく憧憬の中にいつも育っていた。親鸞といえばすぐ青年時代の文芸梵鐘が同時にひびいてくるせいかもしれない。事実また親鸞ほど詩人的な肌あいをもった宗教人も世界に稀であろう。

わたくしの作家生活と親鸞とは忘れ得ないものがある。いまおもえば恥かしい限りだが、私が初めて小説というものを書いた最初の一作が親鸞だったのである。當時わたくしは新聞社の駆け出しの学芸部記者だった。三上於菟吉氏去り尾崎士郎氏退社し、そのあとへ入った

ばかりで編輯の仕事すらろくにのみこめていなかった。その私へどうしたとか連載小説として親鸞伝を書けという社命なのである。いいつけた社も社であるがひきうけた私も私だ。知らないということほど気のつよいものはない。私は毎朝、他の同僚たちより二時間も早く出勤し、社用のザラ紙へ鉛筆書きで毎日の掲載分をその日その日書いた。下版の時間が迫ると、工場の植字さんがやってくる私の肩越しに原稿をのぞきこみ「そこんところは会話にしておきなさいよ」とか、ひどく時間がつまると「もう今日はこれでいい」と、まだ書いてるものを後ろから持って行ってしまったらしい。

連載中もよく本願寺関係のひとや篤学家などに社へやって来られて、堂々たる親鸞論を以て駁されるには閉口した。事信仰に関わるので読者の投書も痛烈だった。社内でも時代考証や文学論にやかましいのがいてゲラ刷りの出るたび手きびしくヤツつけられた。何分、社では参考書も見えていられないので、途中からは帰宅後、家で夜半に書いて行ったが、それでも思わぬ誤謬や不備を指摘されてきゅうきゅういわせられたことが幾度あったことかしかない。ついには社に行くこと屠所の羊のごときものがあつた。でもようやく何とか一年半余の連載を果した。それが「親鸞記」として社から出版の運びになったところだ。関東大震災が来た。かくて私の処女作は世間へ出ずに製本されたまま社屋とともに焼けてしまった。わたくしの出発にとっては意義のあるまた有難い業火であつた。

中年になってふたたび親鸞を書いた。台日、福岡、名古屋、北海タイムス等、地方紙五社の連合掲載のために書きおろしたのであり、昭和十三年に刊行された講談社版の「親鸞」がそれである。新聞紙上の連載は三年近くにも及んだかとおもう。

十余年まえにいちど書いた基礎はあるが、わたくしはいろはの習い直しをやる気ですれをつづけた。こんどは作家生活の中でやれたので参考書も自由にえらび見ることができた。そしてこんどはつつがなく出版もされた。

——だが自分の胸には依然新聞社時代の痛い批判が消されることなくそのまま自省のうちに残っていた。以後、わたくしの通ってきた人生も決して平坦ではなかったが、かえりみて自分がどれほど人間として成人したかをこの作品でみるとわれながら恥かしいと思わぬわけにゆかなかった。で、講談社刊行の一卷の序文にはこんな意味のことをしるした。

三十歳台に書いた親鸞は、めくら蛇に怖じずだったが、四十台になると生なかな人生や人間を観るにも、うす目のあいてきたせい、深嶽に足をふみ入れたようなもので、かえって迷いにとらわれがちだった。正直に言えば親鸞をかくにはまだ自分が力不足だし何よりも人間がそこに至っていない。五十台になったらもう一ぺん書きあらためたい。

いまこの書が講談社から再刊となるにあたって、私は初版の序文に約した自己の良心にたいして、どうしても黙しているわけにゆかない。私の年齢はすでにさきの公

約の時期に來ているからである。

ところが私はまだ三度めの親鸞をかいていない。いつかはと意欲は決して失っていないが、機に会わずにいるのである。また自分の成長も依然たる未熟にとどまっていることを知ってるからでもある。——が、出版社側のすすめとしては、それは将来の課題として置いて、現在の読書子にこの書を再刊する意義は充分にある。——あなたがすでに痲痺を怖れあうほどにまで眼に見、肉体に知り、耳にききあっている敗戦後のひどい世相の転変と荒んだ虚無感にたいし、またその中にもなお何か求めてやまぬ人たちへたいしても——と熱意をかえない希望なのである。著者としてはさきの序文の公約もあるし、さまでには——と青年時代の山を見ぬ獵夫の意気にもなれない躊躇をなお持つのだったが、終戦以後、出さずべくして出でない宗教小説ないし宗教面の書のこれが一投石ともなれば再刊もまた多少の意義にはなろうかなども思い直してみた。その結果、多少の加筆校訂をする程度でついに出すことにしたわけである。諸子のご諒恕を仰いでおく。

内容についても、一言附しておきたい。

親鸞の出現は、その時代にあつては、実に宗教の世界ばかりでなく、思想の上にも、庶民生活にも劃期的な変革をよび起した先驅者の炬火そのものだった。

久しいあいだの貴族宗教の弊や門閥教団の害を彼は打ちやぶった。法悦の樂土を殿堂の神秘から庶民社会へひ

き下ろした。また秘仏の壯嚴よりも赤裸な人間のなかに菩提の因子を求めて、これに偽りのない平明な教義を附したのも彼だった。いわば平民主義新宗教の宣布者であり、日本では前後に見ない民主的な教義をひっさげて出た革新児であつた。

だが、その親鸞においてすら、伝記の史料となると、偶像の瑤珞や粉飾とひとしく、余りに常套的な奇蹟や伝説が織りまぜられていて、これの科学的な分解と小説的調整は決して容易なことではない。

月の世界に兎がいるとしていた時代には、事実、月の世界に兎が見えていたのであるから、それらの奇蹟伝説も、かつては一価値のものであつたにはちがいないが、現代人にはそのままうけ入れられるはずもない。当然、わたくしの小説構成の上ではそうした既成構造がかなり変更され、また敢て無視した箇所もあり、創意も加えられてあることを憚りなくいっておく。そしてただ著者の惧れるのは、旧著の不備と、菲才にして懶惰、まだ十年の約を果していない罪とである。ふかくお詫びするのほかはない。

昭和二三・初冬 吉野村菴にて

著者

乱国篇

第一の声

一

朱雀の辻に、鈴を鳴らして、今朝から、喚いている男があった。

蜂にでもさされたのか、陽にやけた顔が、腐った柘榴みたいに凸凹にゆがんでいる。大きな鼻と、強情らしい唇を持ち、栗のイガみたいに、ぼうぼうと伸びた坊主頭には、白い埃がたかっていた。

年ごろは、そんな風なので、見当がつかない。三十とも見えるし、四十かとも思われる。身は、やぶれ衣に、縄の帯一つ。そして、沓よりは丈夫らしい素裸足で、ぬつと、大地から生えているというかたちである。

りいん！ りいん！ 振り鳴らす鈴の音も、凡な力ではないのだった。群衆は、取りまいて、「何じゃ」

「どこの山法師かよ」と囁き合った。

残暑の往来を、牛車が、埃をたてて軋る。貴人の輿が通って行く。

また、清盛入道の飛耳張目——六波羅童と呼んで市人に恐れられている赤い直垂を着た十四、五歳の少年らが、なにか、平相国の悪口でも演じているのではないかと、こましゃくれた眼を、きよろきよろさせ、手に鞭を持って、群れの蔭からのぞいている。

だが、男は、憚らない大声で、自分のシャガれ声に熱し切ると、われを忘れたように、右手の鈴を、宙にあげて、

「清聴つ、清聴つ——」と呶鳴った。

「——沙弥文覚、敬つて、路傍の大衆に申す。それ、今世の相を見るに、雲上の月は、絶えまなく政権の争奪と、逸楽の妖雲に戯むれ下天の草々は、野望の武士の弓矢をつつむ。法城は呪詛の炎に焼かれざるはなく、百姓、商人、工匠たちの凡下は、住むべき家にも惑い、飢寒に泣く。——まず、そうした世の中じゃ。——そうした世に生きる人間どもは、必然、功利に溺れ、猜疑深く、骨肉相食み、自己を省みず、利を獲れば身をほろぼし、貧に落つれば、人のみを呪う。富者も餓鬼！ 貧者も餓鬼！そして、滔々と、この人の世を濁流にする——」額に汗をして、そこまで、一息にいった。

そして、りいん！ とさらに、鈴を振りかけると、「乞食法師、待てっ」誰か、呶鳴った。

赤い直垂が、人垣を掻きわけて、前へ出てきた。

（六波羅小僧）人々は、眼と眼で、ささやき合った。不安な顔をして、法師の鈴と、少年の鞭とを、見較べた。法師は、傲然と、

「何かっ」と、いった。

平家の^{ちやう}序の威光をかさに着て、いかにも、小生^{こなまいき}意氣らしい町隠密の少年は、鞭で、大地をたたきながら、
「おのれは今、——富者も餓鬼、——貧者も餓鬼、——
そして、雲上は政權^{まつり}の争奪と、逸樂の妖雲におおわれていると」

「ははは……人の話は、仕舞いまで聞け、それは、昨日の源氏の世をいうたのだ。……これから、今日のことをいう。だまって、そこにいて、聞いておれ！」
鈴を、ふところに入れて、その懷中^{ふところ}から、文覚は、何やら、紙屋紙に書いた一連の反故^{ほご}を取り出した。

二

「これは、勸進^{かんじん}の状」文覚は、群衆へいって、それから、おもむろに書付をひろげだした。

眼の隅から、刎^はき飛^とばされたように、六波羅童^{わつぱ}は、手もちぶさに、人混みの中へ、引っ込んでしまう。
(ざまを見ろ)というように、人々は、赤い直垂^{ひたれ}の尻を、眼で嗤^{わら}った。

文覚は、勸進^{ふみ}の文をひろげ、胸をのばして、さてまた、大声を揚げ直した。

「——今、いったは、昨日のこと。さても明日の世はまた、冥々^{めいめい}としてわからない。今日が、平和というたとして、生死流轉^{しやうじやうてん}、三界苦海、色に、酒に、金に、跳猿^{ちやうえん}の迷いから醒^さめぬものは、やがて、思い知る時があるという

もの。白拍子^{しらびやうし}の、祇王^{ぎおう}ですらも歌うたではないか——

萌^もえ出るも
枯るるも同じ

野辺の草
いづれか

秋にあわで果つべき

心し給え、大衆^{だいしゆ}。いづれか秋にあわで果つべきじゃ。
ここに不肖^{ふしやう}文覚、いささか思いをいたし、かくは路傍に立って、われらの同血に告ぐるゆえん。ねがわくは、貴賤^{きせん}道俗の助成によつて、高雄山^{たかおさん}の靈地に、一院を建立^{こんりやう}立し二世安樂の勤行^{こんぎやう}を成就^{じやうじゆ}させ給え」と眸^{ひとみ}をあげた。

燃えるような眸である。人間同志の今の不安を見過し得ない憂世^{ゆうせい}の血が、その底を流れている。咳^{がい}一咳^{いちがい}して、「よつて、勸進^{かんじん}の状」と、手にひろげていた文を高々と読みはじめた。

それ惟^{おも}みれば

真如^{しんによ}広大なり

法性^{ほつしやう}随妄^{ずいもう}の雲

あつく覆^おつて

十二^{じふに}因縁^{いんえん}の峯にたなびきしより

この以降^{かた}

本^{ほん}有^う心蓮^{しんれん}の月のひかり

幽^{かす}かにして

まだ、三毒^{さんどく}四曼^{しまん}の太虚^{たいきよ}に

あらわれず
悲しいかな

仏日はやく没して
生死流転の巷冥々たり
ただ色に耽り、酒にふける
いたずらに人を謗し

また世を毒す
豈、閻羅獄卒の責めを免れんや
ここにたまたま、文覚
俗を払い法衣を飾るといへども
悪行なお心にはびこり
善苗、耳に逆う

いたましいかな
再び三途の火坑に回り
四生の苦輪を廻らんことを
故に、われ

無常の観門に涙し
上下の真俗をすすめて
菩提の悲願に結縁のため
一の霊場を建てんとなり

それ、高雄は山高うして
驚峯山の梢に表し……

声かぎり読んでゆくうち、汗はだくどくと彼の赤黒い
顔に筋を描いているのだった。群衆は一人去り、二人去
って、誰も、懸命な彼の声に、衝たれてゐる者はなかつ
た。

（なんじゃ、また勧進か）大衆は、錢乞いに、懲りてい
る。惜しげなく、彼を残して、散ってしまう。ただ一人、

立ち残って、
「おい、盛遠殿」と呼びかけた旅商人がある。

三

「盛遠殿」旅商人はまた、辻の柳樹の蔭から声をかけて、
「もう誰も、お身のまわりに聞いている者はないぞ。
——盛遠殿」文覚は、はっと、勧進の文から顔を離して、
いつのまにか、犬もいない辺りの空地に、舌うちをした。
そして、腹だたしげに、

「やんぬるかな！」つぶやいて、勧進の文をぐるぐると
巻き、ふところに突っ込んで、歩みかけた。

すると、日除笠で顔を縛った旅人は、ついと、彼のそ
ばへ寄ってきて、文覚の肩をたたいた。文覚は、じろり
と眼を向けて、
「おう。堀井弥太か」初めて、驚いたらしい顔をして手
をのばした。

弥太と呼ばれた旅の男は、なつかしげに、握り合った
手を、なぜか急に離して、

（しっ……）と、眼じらせをしながら、路傍へわかれた。

さっきの赤直垂の小僧が、ちんと、手湊をかみながら、
二人のあいだを、威張って通って行った。そして、小馬
鹿にしたような眼を振向けて、へへ笑いを投げた。

旅商人は、その眼へ、わざと見せるように、ふところ
紙を出して、錢をつつんでいた。そして、文覚の手へ、
「御寄進——」といって、渡した。

「や」文覚は、真面目に受けとって、押しいただいた。「一紙半銭のご奉加も、今の文覚には、かたじけない。路傍にさけんでも、人は、耳をかさず、院の御所へ、合力をとて願いに参れば、犬でも、来たかのように、つまみ出される……」

旅商人の堀井弥太は、先へ、足を早めながら、

「磧へ」と、顎をしゃくって、見せた。

頷きながら、文覚は、てくてくと後からついてゆく。牛の糞と、白い土が、ぽくぽくと乾いて、足の裏を焦くような、京の大路であった。

だが、加茂の堤に出ると、咸陽宮の唐画にでもありそうな柳樹の並木に、清冽な水がながめられて、冷りと、顔へ、濡れ紙のような風があたる。

「こちらでよからう」二人は堤に坐った。汗くさい文覚の破れ衣に、女郎花の黄いろい穂がしなだれる。

「しばらくだなあ」弥太がいうと、

「無事か」と、文覚もいう。

「いや、俗身はそこものように、なかなか無事ではない」

「俺とても、同じことだ」からからと、文覚は、笑って、

「聞かぬか、近頃の噂を」

「今日、京都へついたらばかり。何のうわさも聞いておらぬ」

「そうか。……実は、神護建立の勧進のため、院の御所へ踏み入って、折から、琵琶や朗詠に酒宴していた大臣どもに、下々の困苦の呪い、迷路の呻きなど、世の実相

を、一席講じて、この呆痴輩と一喝した所、武者所の侍どもに、襟がみ取って抛り出され、それ、その時の傷や瘤が、まだこの頭から消えておるまいが……」イガ栗の頭を撫でて、笑いながら示すのだった。顔の凸凹に腫れ上がっているのも、その時の棒傷であつたらしい。

四

文覚は、まだ十九の頃に、若い髻を切つて、大峰、葛城、粉河、戸隠、羽黒、そしてまた那智の千日籠りと、諸山の荒行を踏んできた、その昔の遠藤武者盛遠が成れの果てであつた。どこかに、面影がある。

いや、ありすぎる——と旅商人の堀井弥太は、そう思いながら、彼の磊落な話しぶりに、誘いこまれて、腹をかかえた。

「はははは。——道理で、庖瘡神のように、顔も頭も、腫れておる」

「まだ、いたい」

「懲りたがよい」

「何の、懲りる男じゃない」

「法衣はきても相かわらずの武者魂、それでこそ、生きていく人間らしい」

「生れ變つてこぬうちは、その魂というやつ、氷の上に坐らせても、滝に打たせても、たやすくは、変らぬものじゃて」

「わけて弓矢にきたえられた根性は。——したが一別以

来、お互いに、変らぬ身こそ、まずめでたい」

「いや、おぬしの身装は、ひどう変っておるぞよ。初めは、誰かと見違えた」

「これは砂金売りの旅商人、よも、侍と見るものはあるまい」

「陸奥守藤原秀衡が身うち、堀井弥太もある者が、いつの間に、落魄れて、砂金商人にはなりつるか、やはりおぬしも、無常の木々の葉——。梢から、何かの風に、誘われたな」

「何の」と、弥太は手を振った。

「これは、世をしのぶ、仮の姿じゃ」

「さては、京都へ、密使にでも来たという筋あいか」

「ま、そんなもの」

「俺の身の上ばかり糺さいで、その後のおぬしの消息、さ、聞こう。——それとも、旧友文覚にも、洩らせぬほどの大事か」

「ちと、言い難い」

「では聞くまい」

「怒ったか」

「ム、怒った」文覚は、わざと、むっとして見せたが、すぐ白い歯を剥きだして、

「そういうわずと、話せ。法衣は着ても、性根は遠藤盛遠、決して、他言はせぬ」

「……」弥太は、立って、堤のあなたこなたを、見まわしていた。頭に物を乗せた大原女が通る。河原の瀬を、市女笠の女が、女の使童に、何やら持たせて、濡れ

た草履で、舎人町の方へ、上がってゆく。

ほかには、蟬の音と、水のせせらぎと、そして白い水鳥の影が、気だるく、淀に居眠っているだけである。

「盛遠」坐り直すと、

「わしの名は、文覚。盛遠は、十年も前に捨てた名まえ、文覚と呼んでくれい」

「つい、口癖が出てならぬ。ならばついでに、俺の変名も、おぼえておいて、もらおうか」

「ほ。名を変えたか」

「旅商人が、堀井弥太では、おかしかろう。——一年に一度ずつ京都へ顧客廻りに来る、奥州者の砂金売り吉次とは、実は、この弥太の、ふたつ名前だ」

「え。吉次」

「そう聞いたたら、何か、思いだしはせぬか」

「思いだした。……おぬし、鞍馬の遮那王様へ、密かに、近づいているな」

五

鞍馬の遮那王。ずばと、そうだったのである。

この金的は、よも外れてはいまい——というように、自信をもった眸で、文覚は、じいっと、相手の顔いろを見る。

「……うむ」堀井弥太の砂金売り吉次は、えくぼをたたえて、頷いた。ふとい——大きな息で、
「……そうか」文覚も、うなずき返した。

遮那王といえ、源家の嫡男、前左馬頭義朝の末子で、幼名を、牛若といった御曹子のことだ。常磐とよぶ母の乳ぶさから挽ぎ離されて、鞍馬寺へ追い上げられてから、もう、十年の余になる。

「……」文覚は、黙って、指を繰っていた。弥太の吉次も、黙々と、大文字山の雲を見ていた。

「今年は、承安三年だな」

「さよう——」

「すると、遮那王様には、お幾歳になられるか」

「十五歳」吉次が、答えると、

「ほ……。はいものじゃ。もう、あの乳くさい源家の和子が、お十五にも相成ったか」

「文覚、おぬしも稀には、お会いなさるか」

「いや、一昨年、書写山に詣でた折、東光房の阿闍梨を訪ねて、その折、給仕に出た稚子が、後で、それと聞かされて、勿体ない茶を喫んだわと、涙がこぼれた。——

噂によれば、僧正ヶ谷や、貴船の里人どもも、もてあましている暴れン坊とか」

「さればさ、寺でも、困っておるらしい」

「その困り者へ、眼をつけて、はるばる奥州路から年ごとの鞍馬詣では……。ははあ、読めた」小膝を打って、

「——奥州平泉の豪族が、奢り振舞う平氏の世を憎んで、やがて源家へ加担の下地でなくて何であろう。これは、世の中が、ちと面白くなりそうだの」それには答えないで、

「おや」吉次は、空を仰向いた。ポツ、と雨が顔にあた

る。

加茂の水には、小さな波紋へ、波紋が、無数に重なった。東山連峰の肩が、墨の虹を吐き流すと、蒼空は、見るまに狭められて、平安の都の辻々や、橋や、柳樹や、石を載せた民家の屋根が、暮色のような薄暗い底に澱んでゆく。

「ひと雨来るな」文覚も、立ちあがって、

「弥太。——いや奥州の吉次殿、して、宿は」

「いつも、あてなしじゃ。塹を定めぬほうが、渡り鳥には、無事でもあるし……」

「高雄の神護寺へ参らぬか」

「いや、さし当って、日野の里まで参らねばならぬ」

「日野へ。何しに？」

「遮那王様のお従姉がいらせられて、いつも、鞍馬へのお言づてを聞いてゆくのだ」

「はて、誰だろう？」

「また、会おう。——そのうちに」

「うむ、気をつけて行くがいいぞ」

「おぬしこそ」二人は、別れ別れに、駈けだした。楊柳の並木が、白い雨に打ち叩かれて、大きく揺れている中を。

六

「雨は、やんだかよ」

「やんだらしいぞ」どこかで、誰か、つぶやいた。

兵燹で、半焼けになったまま、建ち腐れになっている
巨きな伽藍である。その山門へ駆けこんで雨宿りをし
ていた砂金売り吉次は、そっと首を出してみた。

町は、もう、たそがれている。濡れた屋根の石が、夕星
の光に魚みたいに着く光る。どこかで、ぱちぱちと火の
ハゼる音がするのだった。赤い火光が、山門の裏から映
してくる。そこから、がやがやと、

「阿女、何を、うまそうに、さっきから、ぴちゃぴちゃ
と、嘗っているだ、俺にも、分前をよこせ」

「嫌だよう」

「吝つたれめ、よこさぬか」

「鶏の骨だに、分けようがないだよ。なあ、菰僧さん」

「鶏を盗んできて、この阿女め一人で腹を肥してくさ
る」

「その、味噌餅くれば、鶏の片股をくれてやるだ」

「ふざけるな」

「だって、おら、子持ちだから。他人よりは、腹がすく
のは、当りめえだに。……あれつ、嫌だつていうに、

傀儡師さんよ、その、鶏の骨、奪り返してくんな」餓鬼
のように何か争っているのである。覗いてみると、女の

お菰だの、業病の乞食だの、尺八を持った骸骨みたい
な菰僧だの、傀儡師だの、年老いた顔に白いものを塗っ
ている辻君だの、何して喰べ何しに生きているのやら分

らない浮浪人の徒が、仁王のいない仁王門の一廓を領し
て、火を焚いたり着物を干したり、寝そべったり、物を

食ったり、宛として、一つの餓鬼国を作っている。

院の御所とか、六波羅の館とかまた平家の門葉の
第宅には、夜となれば月、昼となれば花や紅葉、催馬楽
の管絃の音に、美酒と、恋歌の女性が、平安の夢を趁っ
て、戦いと戦いと、一瞬の間を、あわただしく、享樂
しているのであったが、一皮剥いた京洛の内部には、こ
うした、飢えと飢えとの寄り合い家族と、家なき浮浪人
が、空寺、神社、辻堂、石垣、およそ屋根と壁の形さえ
あれば——そして住む主さえいなければ——巢を作っ
て、虫蟻のごとく、獸のごとく、生きていた。

（噂より、ひどい）吉次は、異臭に、顔をひそめながら、衝
たれて、見ていた。

（——五穀にも、風土にも、また唐土の文化にも恵まれ
ぬ奥州でさえ、こんな図はない）

惘然として、吉次は、見ていた。まざまざと、悪政の

皮膚病がここにも膿を出しているのである。平家の門閥
が、民を顧みるとまもなく、民の衣食を奪って、享

樂の油に燃し、自己の榮耀にのみ汲々としている実相
が、ここに立てば、眼にもわかる。

（これでいいのか）天に問いたい気がした。

（どうかしなければならぬ。——神の力でも、仏の力
でも駄目だ、兵燹は、神をも、仏をも、焼いてしまった

ではないか。——人の世を正しく統べるものは、人の力
だ、真実の人間だ。ほんとうの人間こそ、今の時世に、

待たれるものだ）

そう考えて、彼は、鞍馬の遮那王に近づきつつある自
身の使命に重大な任務と、張合いを感じた。

「やいつ、誰だ」すると、一人の乞食^{こじき}が、彼を見つけて、咎^{とが}めた。

七

去りかけるとまた、

「やいつ、何だ汝^わやあ？」傀儡師^{くぐつし}だの、菰僧^{こもそう}だのが、起^たつて来そうにしたので、

「へい」吉次は、戻って、

「雨宿り^{たびがらす}をしていた旅人でございます」

「旅鴉^{たびがらす}か」

「やみましたから、出かけたいと思いますが、日野の里へは、まだ、だいぶございましょうか」

「日野なら、近いが、日野のどこへ行くのだ」

「藤原^{ふじわらのありのり}有範様のお館^{ぐみ}まで。はい、使いに参りますので」

「あ、あのお慈悲^きぶかい吉光^{きっこう}御前^{ごぜん}様のお住居^{すまい}だよ」頓狂^{とんきやう}な声をして、女のお菰^{こも}が立った。

すると、浮浪^{うりやう}たちも、にわかに丁寧^{ていねい}になって、

「吉光御前様のところへ行かっしゃるなら、誰か、案内してあげやい」

「おらが行こう」竹の棒を持った河童^{かっぱ}みたいな小僧^{しょうそう}が、

吉次の側へ寄ってきて、

「旅人、案内しよう」

「すまないな」

「なあに、吉光御前様には、おらたち、どれほど救われているかしのだ。あのお館^{やかた}は、そういっっちゃ悪

いが、落魄^{らくはく}れ藤家^{とうけ}の、貧乏公卿^{くくげ}で、ご全盛の平家とちがい、築地^{ついきじ}の崩れも修築^{しゆき}えぬくらいだが、それでいて、俺たちが、お台所へ物乞いに行っても、嫌な顔をなされたことはない……」

一人がいうと、女のお菰^{こも}も、

「冬が来れば、寒かろうとて、わしらばかりでなく、東寺^{とうじ}や、八坂^{やさか}の床下に棲^すむ子らにまで、古いお着物は恵んで下さるしの」口をそろえて、その他の浮浪^{うりやう}たちもいうのであった。

「化粧^{けわい}に浮身を褰^{やつ}すおしゃれ女や、身の安楽ばかり考えている慾^{よく}ばり女は、お館という厳めしい築地の中にうんというが、あんなやさしい女^{によしやう}性が、今の世のどこにいるかよ。——あのお方こそ、ほんとうの、観世音菩薩^{かんぜおんぼさつ}というものだろう」

「そういえば、如意輪^{にょいりん}観世音がご信仰で、月ごとに、ご参詣に見えておいでだが、この春ごろからお姿を見たことがない。——もしや、お病褥^{いたつき}ではないかと、わしらは、案じているのじゃ」

鶏^{とり}の骨を嘗^{ねぶ}りながら、女のお菰^{こも}は、そういつて、山門の外まで、送ってくる。

吉次は、心のうちで、うれしかった。その吉光御前というお方こそ、自分が主命^{しゅめい}をうけて、機会さえあれば世に出そうと苦心している鞍馬^{くらま}の稚子^{ちこ}遮那王^{しゃなおう}の従姉^{いとこ}にあたる人なのであった。

「水溜^{みずたま}りがあるぜ、小父さん」河童^{かっぱ}は、竹の棒で、真つ暗な地をたたいて、先に歩いていく。

鼻を掴まれてもわからない小路の間に、野良犬が、吠えぬいている。犬すら、飢えているように、しゃがれた声に聞えた。

小川がある、土橋を越える。やや広い草原をよぎると、河童は、竹の先っぽで、

「あそこに、大銀杏が見えるだろう」と、指していった。

「……あの銀杏のそばの土堀が、正親町様だよ。藤原有範様のお館は、あそこを曲がると、すぐさ」

「や、ありがと」道をすすんで、二人は目じるしの大銀杏を横に曲がりかけた。すると河童は、何かに、驚いたように、

「おやつ？」と、立ちすくんでしまった。

八

「なんだ？ ……、なんだろう……あれは？」河童は、眼を大きくしたまま、怯えたように、そうつぶやいた。

「あ——」吉次も、その前に、足をとめていたのだった。

二人とも、呼吸をのんだ。そこの大銀杏から小半町先の一廓いに、館構えが見え、古びた殿作りの屋根が、墨で刷いたように、赤松の梢と、築地の蔭に、沈んでいる。それはいい。

それはさつき河童がいった有範朝臣の館にちがいないのである。しかし、二人は、そのほかに、異なものを見たのであった。

異なるものというのは、そこを曲がった途端に、眼を射

た光である。およそ、夜といえ、光に乏しい世界に住んでいる人間にとって、光ほど、尊く、有難く、また、妖しく考えられるものはなかった。

その光だった。白い虹といおうか、彗星の尾のような光が、有範朝臣の屋の棟とおぼしい辺りから耀々と映して、二人が、（あつ？）といった間に、眼を拭いてみれば、何事にも思えない元の闇なのであった。

「見たか、お前も」

「見た」と、答えて、河童は急に、

「小父さん、おら、ここで帰るよ」尻ごみをした。

「ご苦労だった」吉次は、銭を与えて、

「——今の光ものを、お前は何だと思う？」

「わかんない」

「俺にもわからぬ。ふしぎなこともあるものだ」

「皆んなに、話してやろう」

「こらこら、うかつなことを、言い触らしてはいけないぞ」

「ああ！」河童は、鴉みたいな返辞を投げて、一目散に、もとの道へ、駈けて行った。

砂金売りの吉次は、築地の外に立った。どこを眺めても、盲目のように門が閉まっている。雑草が、ほとんど、門の腰を埋めているのである。野良犬ならば、すぐ跳び越えられるように、崩れている所もある。蔓の絡んでいる棕の樹の上で、キチキチと、栗鼠が啼いた。

「変遷るなあ……世の中は」しみじみと、彼は、思う。

藤原氏の一門といえ、人間のなしうる豪華な生活図

を地上に描き尽したものである。それが、武家同士の興亡となり、武家政治となり、今の平家の全盛になってからは「落魄れ藤家」と嘲けられて、面影もない存在になつてしまった。狐狸でも住みそうな、この古館のしいんとしていることはどうだ。灯の気も見えぬし、犬すらもここにはいないとみえる。

とん、とん、とん……試みに、裏門とおぼしい所を、吉次は、そつと叩いてみた。そして、低声で、

「こん晩は——」何度か、訪れてみた。

「駄目だ」考えていたが、やがて、小石をひろつて、侍部屋らしい屋根を目あてに、投げつけた。

節を上げる音がした。——間もなく、壺のうちで、灯りが揺らぐ、そして、木履の音が、カタ、カタ、と近づいてきた。

九

「誰じゃ」姿は見えない。門をへだてて、中にいる侍が訊ねた。

「砂金売りの吉次と申します。お館様か、御奥の方に、さよう、おつたえ下されば、おわかりでございまする」

「吉次？」考えているらしい。

雨あがりの草叢に、虫が啼きぬれている。吉次はまた、ことばを足して、

「——奥州の堀井弥太と仰っしゃってくださいれば、なお

よくお分りのはずでございます。かねがね、ご書状をもちまして「いいかけると、ガタンと、門の扉がうごいて、秀衡殿のお身内人、堀井殿か」

「いかにも」

「それは、失礼を——」すぐ開けて、

「拙者はいつも、おん奥の御代筆を申し上げ、また、そちらよりの御書面にも、拙者の宛名で御状をいただいておる、当家の家来、侍従介でござる」と二十歳ぐらいな若侍が顔を出した。

「や、そこもとが」

「初めて、御意を——」二人は、旧知のように、あいさつを交わした。

「おん奥の方には、先つ頃、上洛りました節、清水の御堂のほとりで、よそながらお姿を拝したことがござりますが、お館には、今宵が初めて」

「よう御座った、まず」と、内に入れて、侍従介は、門を閉めた。

壺の内も外も、境のないほど、秋葉が生いしげっている。まだ、萩に早く、桔梗も咲かぬが、雨後の夜気は、仲秋のように冷々と感じる。

召使も、極めて少ないらしい。侍部屋へ通されて、吉次は、畏まっていたが、燭を運ぶのも、茶を煮てくるのも、みな侍従介だった。しかし、ここに入ってから感じたことは、外から見たようすとはちがって、なにか、藹々とした和やかな家庭味とでもいうものが、さすがに教養の高い藤原氏の住居らしく、身をくるんでくれるこ

とだった。あら削りな武人の家庭や、でなければ、浮浪の餓鬼の生活にしか接してない吉次には、

（やはり、ゆかしいものがある……）とそこらの調度や、どこかで薫らしている香木のかおりにも、そう思えた。

「失礼いたした」侍従介は、座に着いて、

「実は、ちと、お館におとり混みがござるので」

「ほ」吉次は、途中で耳にした噂を想いだして、

「どなたか、ご病人でも」

「なんの」と笑った。その侍従介の顔の明るさに、彼は、むしろ意外な気持がした。

「およろこびごとでござる。——この春、承安の三年弥生の朔日、珠のようなお子様がお生れ遊ばしたのでござる。それがため御当家は百年の春が回ったように、お館様も、おん奥の方も、御一門の若狭守様も、宗業様も、朝に夜に、お越しなされて、あのとおりに、奥でのお団欒。折から今宵は、お喰べ初めとやら、お内輪の祝いだな」吉次は、そう聞くと、とたんに、ここへ来る前に見た、屋の棟の光を想いだしていた。

十

「で……お目通りはなりかねるが、貴所の来られたこと、お取次ぎはしておいた」侍従介は、そういった。

しかし、吉次の用件よりは、彼自身、一緒になつて、主家の慶事にほくほくしていて、すぐ、そのほうに、話題をもどすのだった。

お子は、いと健やかで、貴相気高く、珠のような男子であること。

また、おん名は、母御前の君が、胎養のうちに、五葉の松を夢見られたというので、十八公鷹君と名づけられたということ。また、十二カ月も、御胎内にあったということ。

それから——母の吉光御前が、なみならぬご信仰であつたせいか、御入胎のまえに、如意輪観世音のお夢をみられたり、そのほかにも、いろいろな奇瑞があつたということ。

そしてまた、さる聖が、わざわざ訪ねてきていうようには、今年は、釈尊滅後二千一百二十二年にあたる、あるいは、靈夢やもしれぬ。松は十八公と書く、弥陀正因本願の数につうじる。この嬰兒こそ、西方弥陀如来のご化身ぞとおもうて、よくよく慈しまれたがよい——と、母体の君の枕べを、数珠をмонで伏し拜んで去つたということ。

彼の話は尽きない。吉次も、耳よりな話と、心にとめて、聞いていた。

鞍馬の御曹子に告げたらば、さだめし、一人の源家の味方がふえたと、力づくも思われよう。すると、奥まつた東の屋で、

「侍従介」と、誰やらが呼ぶ。

「はい」会釈して、彼は、立つて行つた。

この次、遮那王に会う時には、ちと、渡して欲しい物があるゆえ、立ちよつてもらいたい——と、かねて、吉光

御前からの書面の約束で、吉次は、来たのであった。

（お従弟へ、渡してくれとは、一体、何かな）吉次は、しびれた足を、少しくずして、待っていた。そして、吉光御前の、初産の美を、そっと、瞼で想像した。

一、二度、清水のあたりで、姿はよそながら見たことがある。まだ、年もお若いはずだ。人妻でこそあるが、まことに、清純な麗人でおわした印象が今もふかい。気品においては、源家の正統、鎮守府將軍義家の嫡男、対馬守義親の息女、云い分のあるうわけはない。

同じ、義家將軍を祖父として、源義朝は、いうまでもなく、彼女の従兄にあたるが、その義朝こそは、平相国清盛の憎悪そのものであった。

幸いというか、不幸というか、彼女は、見るかげもない不遇な藤家に、十五の年から嫁づいていたので、まさしく相国の仇敵義朝の従妹ではあったが、清盛の眼には、そのために、無視されて、無事のうちに暮して来られたのであった。

無視の中から、十八公麿は生れた。——のちの親鸞聖人である。

もし、彼女の良人である有範朝臣が、時めく才人であるか、政権をめぐる時人であつたらば、十八公麿は、生れていなかったかも知れない。

なぜならば——その前に、吉光御前の血統は六波羅の忌むところとなつて、義朝の子たちである——頼朝や遮那王（義経）のような厳しい追放をうけないまでも、何らかの監視と、束縛に、家庭は呪われずにいなかった

に違いないからである。

「や。お待たせした」侍従介は、やがて何やら、小宮を持って入ってきた。

十一

「これを、鞍馬の遮那王様へ、さし上げてくれいと、おん奥の方のお伝えでござる」

小宮を前に、侍従介がいう。平たい塗宮である。ゆるしをうけて、吉次は、そっと、蓋をとって見た。伽羅の香が、煙かのように、身をくるむ。

白絹でつつんで、さらに、帙で抱いた愛らしい一帖の経本がはいっていた。紺紙に金泥の細かい文字が、一字一字、精緻な仏身のように、端嚴な氣と、精進の念をこめて、書かれてあつた。

「どなたの、ご写経でございまするな」吉次がいうと、

「されば」侍従介は、改まった。

「お従弟にあたる遮那王様の孤独を、人知れず、おいとしがられて、吉光御前様が、日頃から、心にかけて遊ばされたもの。……その由、鞍馬へ、おつたえして賜われ」吉次は、ちよつと、不満な顔いろを見せたが、押しいただいて、ふところに納めながら、

「そのほかには？」

「おことばでよいが——くれぐれも、亡き義朝公、源家ご一門のため、回向おこたらずご自身も、朝暮に仏道をお励みあつて、あつぱれ碩学とおなりあるようにと……」

おん奥の方、また、お館様からも、ご伝言にござりまする」

「承知つかまつりました。では、これで……」吉次は、辞して、元の裏門から外に出た。

宵よりも、星明りが冴えていた。夜は通る人もない日野の里だった。

「なんのこった……」苦勞して、訪ねてきただけに、期待が外れて、彼は、がっかりした。

吉光御前の思いやりと、自分や自分の主人秀衡が考えている思いやりとは、同じ遮那王にもつ好意にしても、まるで、性質がちがっていたことを、はつきり、今、知った。

自分の主人、秀衡は、遮那王を、仏界から下ろして、源氏再興の旗挙げをもくろんでいるのであるし、吉光御前や、有範朝臣は、あべこべに、遮那王が身の終るまで、鞍馬寺に、抹香弄りをして、祈っているのだ。

なるほど、それは、遮那王の身にも、彼の従姉にも、無事な世渡りにちがいない。だが、そうして、源家のわずかな血脈が、一身の安立ばかり願っていたら、源氏はどうなる。平家をいつまでも、ああさせておくのか。また、路傍の飢民をどうするかである。

彼はもちまえの東北武士らしい血をあらだたせて、さりげなく、預かつて出た写経の塗篋を、手につかんで、唾をした。

「こんなもの！ 遮那王様に渡しては、ご立志のさまたげだ」

築地の下の溝へ向って、砕けるとばかり、たたきつけた。

汚水にそれを叩きつけたが、とたんに彼はふと、吉光御前のやさしい姿を瞼に見た。光りある人間のあたたかな魂へ、土足をかけたような、惧れに襲われた。

棕の葉のしずくが、背にこぼれた。ぶるっと、何げなく、築地のうちの屋根の棟を振り向いた。しかし、さっきの光りものも見えない、何の異も見出せなかった。

だが、その時、彼の耳をつよく衝つたものがある。生れて間のない嬰兒の声だ。十八公磨が泣くのだった。その声は、ただごとでない、地殻を割って、万象の芽が、春へのび出すような力のある、そして、朗かな、生命の誕生を、世に告げるような声だった。

「あつ……」吉次は何ということもなく、竦みあがった。両手で耳をおおって、暗い野を、後ろも見ずに駈けていった。

一

空地が半分以上も占めている六条の延寿院附近は、千種町というのが正しいのであるが、京の者は、源氏町と俗に称んだり、また、平家方の雑人たちになると、「牛糞町」などといって、振わない門族の果てを、住宅地の呼び名にまで嘲侮することを忘れなかった。

若狭守範綱は、そこに住んでいた。源氏ではないが、院の歌所の寄人たちの官舎は、昔からその地域内にあるのだからしかたがなかった。

なぜ、この辺を牛糞町というかというに、人間の住む地域に、

「六条お牛場」というのが割り込んでいて、汚い牛飼長屋だの、牛小屋だのが、部落みたいに散在している上に、空地には野放しの牛が、白いのだの、斑だの、茶だの、随所に草を喰っていて、うっかり歩くと、文字どおり、豊富な牛糞を踏みつけるからであった。

だから、秋になっても、なかなか蠅が減らなかった。歌人である範綱朝臣は、永く住み馴れた邸ではあったが、それでも時々、

（蠅のいないところに住んでみたい——）と、つくづく思うくらいだった。

しかし保元、平治以来の戦つづきに、歌人などは、まったく、無用の長物と忘れ去られて、ことに、為政者の眼からは、

（歌よみか。歌よみなら、牛糞町に住ませて置くのが、ちようどよろしいのだ）と、視られているかのようにであった。

生活力のない歌所の歌人たちは、それに対して、不平の不の字もつぶやけなかった。

「ちっ」範綱は、机をわきに寄せた。

硯に、紙に、たかつていた秋の蠅が、彼と共に、うるさく、起つ。

「奥所——」妻をよんで、

「栗田口の慈円様へ、久しゅう、ごぶさた申し上げているで、おあずかりの歌の草稿、お届けいたしながら、ご機嫌をうかがってくる」

「きょうは、ご舎弟様が、お見え遊ばしはしませぬか」「御所の戻りに、寄るとはいうたが……。よいわ、いずれ、帰りには、日野の有範の邸へ立ち寄るほどに、そこで、会おう」

日野へ寄るといって、彼の妻は、（またか）というように、微笑んだ。

子のない彼は、弟夫婦の邸に、子が生れてからというもの、三日に一度は、どうしても、訪れてみねば気がすまないらしかった。

「行っていっちゃいませ」妻の声をうしろに、籬の菊花に眼をやりながら、我が邸の門を出ると、

「やあ、兄上」末弟の宗業朝臣が、ちょうど、門前に来あわせて、

「どこへ、お出かけですか」と、肩をならべた。

二

「弟か、よいところへ」と範綱は、もう宗業が同行するものと独りぎめに決めて、歩みだしていた。

「栗田口の大僧正のもとへ、添削の詠草を、持って参ろうと思う。そちも来ぬか」

「参りましょう」

「そして、帰りには、日野へ立ち寄って、十八公麿の笑顔を見よう」

「見るたびに、大きゅう育って参りますな」

「ははは。嬰兒じゃもの、育つは、当りまえだ」

「でも、十日も見ぬと、まるで変っているから驚く」

「おまえも、こしらえたらどうだ」

「なかなか」宗業は、首を振って、

「平家といえは、平家の端くれでも嫁に来てがあるが、落魄れ藤家の、それも、御所の書記などの小役人へは、今の女性は、嫁にも来ないからなあ」と唧った。

「——といって、従四位藤原朝臣と、瘦せても枯れても、位階があれば、雑人や、凡下の娘を、妻にも持てず……」

空地の牛が、晩秋の長閑かな陽なたに寝そべって、悠長な声を曳いて、啼いていた。

弟の唧ち語に、範綱は、同情をもって、うなずいた。

けれどまた、妻をもち、沢山な子をもち、位階と貧乏の板ばさみになって、老いさらばっている同族の誰彼よりは、まだまだ独り身が気楽なのだ——とは、いつも、彼が弟をなだめる言葉の一つであった。

範綱、有範、宗業。こういう順に、男のみの三人兄弟ではあるが、長兄の範綱は歌人だし、中の有範は、皇后大進という役名で、一時は御所と内裏とに重要な地位を占めていたが、今は洛外にああして隠遁的にくすぶっているし、末弟の宗業は、書記局の役人で、どれもこれも時勢に恵まれない、そして生活力に弱い公卿ぞろいなのである。

そのくせ、当代、和歌では、藤原範綱といえは、五指のうちに数えられるほど著名な人物であるし、また末弟の宗業も、天才的な名筆で、早くから、写経生の試験には合格し、十七歳のころには、万葉集全巻を、たった十日で写したというので、後白河帝の御感にもあずかったほどな、秀才なのであった。

だが、どんな天才でも秀才でも、歌人や、書家では、今日の社会が、その天稟を称えもせず、用いもしないのである。それが、藤氏や源氏の家系の者の場合は、なおさらのことで、むしろ、自分を不幸にする才能とすらいえないことはない。

しかし、そうした生き難い世に生きて、兄弟は、心まで貧しくなかった。眺めやる七条、五条の大路には、糸毛の輦、八葉の輦、輿や牛車が、紅葉をかざして、打たせているし、宏壮な辻々の第宅には、昼間から、

催馬楽の笛が洩れ、加茂川にのぞむ六波羅の薔薇園には、きょうも、小松殿か、平相国かが、人招きをしているらしく、蛸集する頭官の輦から、眼もあやなばかり、黄金の太刀や、むらさきの大口袴や、ぴかぴかする沓や、ろうやかな麗人がこぼれて薔薇園の苑と亭にあふれているのが、五条橋から眺められたが、

（羨ましい）とは、感じもしなかったし、なおのこと、（不都合な平家）などとは、思いもしなかった。

平家を憎悪する気力すらないのが、今の藤原氏であり、源氏の果てであった。

「オ。……ここじゃ」いつか、栗田口へ、二人は来ていた。十禅師の辻まで来ると、範綱は、足をとめて、

「弟、御門外で、待っているか、それとも入るか」と宗業に訊いた。

三

「私は、外で待っていますよ」と、宗業はいった。

「そうか」範綱は、ちよっと、考えていたが、眼の前の、青蓮院の小門を片手で押しながら、

「じゃあ、今日は、わし一人で、ご拝謁をしてこよう。すぐに、戻ってくるからな」と、中へ隠れた。

宗業は、堀の外をしばらくぶらぶらしていたが、やがて、鍛冶ヶ池のそばへ行つて、雑草の中の石に、腰をおろし、鮎かなにか、水面をさわがしている魚紋に見惚れていた。時々、顔を上げて、

（まだか）というように、青蓮院の方を、振向いた。そこから見ると、青蓮院の長い土堀と、土堀の中の鬱蒼とした樹林は、一城ほどもあって、どこに伽藍があるのか、どこに人間が住んでいるのか、わからなかった。

「和歌の話になると兄上は好きな道だし、大僧正も、わけてご熱心だから、つかまると、すぐには帰れまいて」

宗業は、退屈のやり場をさがしながら、兄と、慈円僧正とが、世事を忘れて、風雅を談じている姿を、睨みえがいた。

僧正はまだ若かったが、山門六十二世の座主であり、法性寺関白忠通の第三子で、月輪禅定兼実とは兄弟でもあるので、栗田口の僧正といえ、天台の法門にも、院や内裏の方面にも、格別な重さをもっていた。

案のじょう、兄は、入ったきりなかなか戻ってこなかった。魚紋の戯れにも見飽いて、宗業は、退屈な足をのたふし、草原に彷徨わせていた。

ティーン、カーン、
鎧の音がする。

白い尾花の中に、屋根へ石を乗せた鍛冶小屋が見えた。尾花の中から痩せ犬が、野鼠をくわえて駆けて行く。

犬は、一軒の鍛冶の床下へもぐりこんで、わん！ わん！ 遠くから、宗業へ向って吠えるのだった。

この野原の部落には、三条小鍛冶という名工がひとこゝろ住んでいて、それから、この池の水が、刀を鍛冶つのによいというので、諸国から、刀鍛冶が集まって、いつのまにか、一つの鍛冶聚落ができていた。そして、下手

くそな雑工までが、栗田口某^{なにがし}だの、三条小鍛冶某^{こかじなにがし}だのと、銘^{めい}を切つて、六波羅武者に、売りつけていた。

「なるほど……。今の世には、書をかくより、歌をよむより、刀を鍛^うつ人間のほうが、求められているとみえる」一軒の鍛冶^{かじ}小屋の前に立って、宗業は、漠然と、鍛冶のする仕事を眺めていた。真つ黒な小屋の中には、あら金のような、男たちが、鞆^{ふいこ}をかけたり、炭を焚^たいたり、鋸^{のこ}を振ったり、そして、

ティーン！ カアーン！ 火花を、鉄敷^{かなしみ}から走らせていた。

あっちの小屋でも、こっちの仕事場でも、無数の刀が、こうして作られている。——やがて、この刀が、何にかわれるのかを考えると、気の弱い宗業は、怖ろしくなつて、そこに立っていられなかった。

「おうい」振向くと、兄の範綱が、青蓮院の方から、駈けてくるのが見えた。宗業は、救われたように、

「御用は、済みましたか」

「いや、やっと、お暇^{いそま}を告げてきた。午^{ひる}にもなるゆえ、食事をして行けと、仰せられてな、弱った」と、範綱は、貴人の前にひれ伏していた窮屈さから解かれて、伸び伸びと、晩秋の明るい野を、見まわした。

四

「僧正は、おすこやかですか」

「ウム、お褒^ほりない」

「和歌^{うた}も、おすすみでしような」

「ご上達だ。われらにも、およばぬお歌が時々ある」

「しかし、俗衆の中に生活^{くわし}している吾々のうたうのと違って、ああして、名門^{いで}に出て、深堂^{しんどう}の座主^{ざす}となられていては、花鳥風月の心はわかって、ほんとうに、人間の悩みとか、涙とか、迷いとか、そういう歌は、お分りにならぬでしょう」

「いや」範綱^{のりな}は、首を振った。山萩の寝ている野道を曲がって、狭いだらだら坂を先へ降りて行きながら、

「そうでないな」

「そうでしょうか」

「世間のことも、実によく知っておられる。武家達の行動、政治の策謀、院のお出入り。……ただ、知らん顔をしておられるだけじゃよ」

「ははあ」

「知った顔をせぬことが、今の時代には、賢明な、君子の常識じゃ。まして、名門のお子はな」

「なるほど」

「こんな事も仰せられた。——この坂下の吉水^{よしみず}に、ちかごろ、年四十ばかりの、ひよんな法師があらわれて、念仏専修の教義をしきりと説いておるが、凡僧^{つぎなみ}の月並^{つきなみ}とちがって、たまたま、よいことばがある。——参内^{さんだい}のせつ、おうわさ申し上げたことじゃったが、武権争奪、武門栄華の世ばかりつづいて、助からぬは民衆ばかり。その民衆のために、民衆の魂を、心から、救うてとらすような聖^{ひじり}が出てくれねば、仏法の浄土とは、嘘になる。——

そうした折に、吉水の法師は、待たれていた旱の雲じや。帰途に、一度、そちたちも聴聞してゆくがよいと、いわれたがの」

「ほ。……そんなことまで、ご存じでしたか」

「おしのびで、御門を、お出ましになるのであらう」

「吉水のあたりに、このごろ、熱心な念仏行者が出て、雨の日も、風の日も、説法しているという噂は聞きましたが」

「道のついでじゃ、廻ってみようか」

「さよう——」たいして、心をひかれるのでもなかったが、二人は、粟田口の僧正が、それほど、称える僧とあれば、どんな法師か、姿だけでも、見ておいてもいいというくらいな気持ちで、立ち寄った。

歌の中山や、清水の丘や、花頂山の峰々に抱かれて、そこは、京の町を見下ろした静かな盆地になっていた。

「お……なるほど……たいへんな人群れだ」吉水の近くへ来ると、祇園林や五条の坂や、また、四方の道を遠しとも思わないで、ぞろぞろと、集まってくる往来に、二人は、顔を見あわせた。

仕事の隙間に駆けてきたような百姓や、木挽や、赤子の手を引っぱった婢さんや、頭へ荷を乗せている物売りや旅人。——またやや反感を眼にもって紛れこんでいる他宗の法師とか、被衣で顔をかくしている武家の娘とか、下婢とか、侍とか、雑多な階級が、一色になって、その小さい三間ばかりの禅室へ、ひしひしと、集まって行くのだった。

「……何という勢いだろう」宗業も、範綱も、啞然として、このすさまじい人間の群れに衝たれていた。

すり切れた草履に、埃を立て、わらわら、ここへ群れてくる人々の眼には、一滴の水でもいい、何ものでもいい、心のやすみばを——心の息づきを——干乾びきつた魂の糧となるものならばと、必死に求めているような顔つきに見えた。

五

丘一つむこうでは、鍛冶聚落の刀鍛冶たちが、戦国の招来を謳歌するように、鉦音を飮させているし、ここでは、迷える民衆が、

「なむあみだぶ——」

「なむあみだぶ」一人の念仏行者をかこんで、飢えた子のごとく、群れ寄って、救われようとしているのである。「兄上、こちらへ来たら、少しは聞えるかも知れませぬ」宗業は、人々に押されながら、禅室の横へ迫った。

混雑するはずである。禅室の庭は、二十坪ほどしかない。柴垣も破れ、庭の内にも外にも、群集が、笠を敷いたり、筵をひろげたりして、いっぱい、坐りこんでいる。後ろの方にも、三重四重に人間が立っているのがある。

八畳、六畳、小部屋が一つ。わずか三間しかない禅室も、明り障子をとり払って、縁や、土間の隅にまで、坐れるだけの人間が坐っていた。

その、真ん中の一室に、うわさの人、法然房源空は、坐っていた。

高壇もない。金色の仏具などもない。

ただ、置台を一じょう、少し奥のほうへ引き下げて、古びた経机を一つ置き、それを前に、法然は、坐っているのである。朽葉色の衣に白い木綿を下に着て、そう高くはないが、よくとおる声で「念仏往生義」の心を、子どもにも、老人にもわかる程度に、噛みくだいて話しているのであつた。

「ウーム……」範綱は、何を感じたのか、宗業の耳のそばで、うめいていた。やがて宗業へ、

「あの僧、なるほど、異相をそなえておる。……慈円僧正は、さすがに、お眼がたかい」と、ささやいた。

兄は、相学に造詣があるので、そういわれてから、宗業も法然の横顔に注意を向け直した。見るとなるほど、なか凹高な頭のかたちからして、凡僧とは異っているし、眸が、眉毛の奥に、ふかく隠れこんで、炯々と、射るものを、うける。坐ながらにして、社会の裏まで、人類の千年先までを見とおしているような、怖い光にも見えるし、ふとまた、そこらにいる赤子にでも慕われそうな、やさしい眼ざしに、思われる時もある。

疑われるなよ人々

浄土はあり、浄土はやすし

源空が、九年の苦学に

得たるは一つにそうろう

ただ念仏往生の一義に

候なり

朗詠でもするように、法然の声は、澄んでいった。さわぎ立っている無数のたましいの波が、やがてしいんと、法の声に、耳を傾けだしたところに、彼の声は、熱をおび、信念そのものとなって、ぐいぐいと、民衆をつかんで説く。

「——疑うな！」法然は、第一にいうのである。

「まず、念仏を先に唱え候え。——自分の有智、無智、悪行、善行、職業、骨肉、すべての碍障に阻められず、ひたすら、仏光に向って、一念十念、称名あること浄土の一步にて候ぞや」

——何事が起つたのか、その時後ろの方で、がやがや騒ぎだす者があつて、

「え、文覚が」

「文覚が、どうしたと？」

「行ってみい、行ってみい」崩れだして、十人、二十人ずつ、わらわらと四条の方へ、駆け降りて行った。

六

水に映された月のように、澄みきっていた法話の筵も、風がたったように掻きみだされた。

「なにや」

「なんじゃと」

振り向く。起つ。そして、次々に、「行ってみい」と、崩れては、走り去る。もうこうなつては、何ものも映ら

ない大衆の心理を法然は、知っていた。

「きょうは、これまでにしておきましょうぞ」

経机に、指をかけて、頭を、人々のほうへすこし下げた。

残り惜しげな顔もある。また、なお何か、質疑をしている老人もあるし、

「ふん……」せせら笑って去る他宗の法師もあつたりしたが、多くは、わらわらと、木の葉舞して、ふもとへ散った。

範綱と、宗業とが、そこへ降りてきたころには、六波羅大路から、志賀山道への並木へかけて、

「わあっ——」

「あれじゃ」人の波であつた。埃がひどい。その中を、

「寄るなっ」

「凡下ども！」竹や、棒を持ったわらじばきの役人が、汗によれながら、群衆を、叱ってゆく。

見ると——人間のつなみに押しもまれながら、一台の檻車が、ぐわらぐわらと窪の多い道を揺られてゆく。

曳くのは、まだらの牛、護るのは、眼をひからした刑吏と雑兵であつた。

「文覚文覚」追つても、叱つても、群衆はついてゆくのである。その埃と、潮に巻きこまれて、範綱、宗業のふたりも、いつか、檻車のまぢかに押されて、共にあるいている。

丸太か石材でも運ぶような、ふつうの牛車のうえに、四方尺角ばかりの太柱をたて、あらい格子組に木材を

横たえて、そのなかに、腕をしばられた文覚は、見世物の熊のように、乗せられているのだった。

よろめくので、彼は、脚をふんばって、突っ立っていた。役人が、なにかいうと、

「だまれっ」と、呶鳴ったり、

「ぶち壊すぞっ」と、檻車のなかで、暴れたりするのである。

（手がつけられん）というように、役人たちが、見ぬふりをしてゆくと、

「俺たちの、同胞よ」文覚は、檻のなかから、いつもの元氣な声をもって、呼びかけた。

「この檻車は、東を指してゆくのだぞ。日出る東の果てを指して——。俺は、伊豆にながされてゆく。だが、

そこから必ず窮民の曙光が、遠からぬうちに、さし昇つて、この世の妖雲をはらうだろう」

「しゃべってはいかん」刑吏が、ささらになった竹の棒で、檻車をたたくと、彼は、雷のような声で、

「おれは、唾じゃないっ」

「だまれ」

「だまらんっ。——この世は唾になろうとも、この文覚の口は塞げぬぞ」

七

それからまた、

「天に口なし、人をもっていわしむ」文覚は、よけいに

声を張って、尾いてくる群衆へ、朗々と歌って聞かせた。

宝財永劫の珠ならず

位冠栄衣も何かせん

民の膏血に灯ともして

奢りの華ぞあやうけれ

明日にしもあれ一あらし

あらじと誰か知るべきや

「こらッ」竹棒は檻車を撲って、

「歌をやめんと、水をかけるぞッ」

「かけろ」文覚は、動じもしない。

「——俺を捕えて、伊豆へながすなどは、野に、虎を

放つものだ。あわれや、平家の末路は見えたと」

「走れ」役人は、牛飼へいつて、牛を走らせた。

軌が、すさまじい地ひびきを立て、そして、漠々と、

黄いろい土ぼこりを、群衆の上へ舞わせた。

「——この世に、無限の栄華はない。いわんや、平家に

おいてをや。民よ、大衆よ、気を落さずに、世の変るの

を待てっ！」

「わあッ」民衆は、どよめいて、

「変れっ、改革まれ」発狂したようにさげんだ。

びし、びし、と鞭に趁われて、檻車を曳いてゆくまだ

らの牛は、尾をふって、狂奔してゆく。

文覚は、遠ざかる人々へ、

「おさらば」群衆も、眼に涙をためて、

「おさらば——」埃で、陽が昏くなった。

「ああ」と、力なく、草いきれのような嘆息が、そこや

ここに聞える。そして、人々が見聞したうわさを持って町の方へながれて行くと、その間を、例の六波羅童が、しきりと、小賢しい眼をして、罪を嗅いであるく。

「どこへ、お出でたのか」

「こっちでもないらしい」三人の寺侍だった。

いちど、鳥居大路へ、群衆と一緒に、もどって行った

が、また引つかえしてきて、

「これだから困る」

「あの御曹子には、まったく、手を焼いてしまう。外出

は、禁物だ」誰をさがしているのか、きよろきよろと、

走ってきて、

「あいや、卒爾でござるが——」と、並木の下で、ぱつ

たりと会った範綱と宗業の兄弟に、すこし息をきって、

唐突に、たずねた。

「なんですか」宗業は、足をとめた。

「このあたりで、十四、五歳の御曹子を、お見かけにな

りませんか」

「さ？」兄を、ふりかえって、

「見ましたか」

「いや」範綱が、かぶりを振ると、三名の寺侍は、彼の方を見て、また、言葉の不足をつぎたした。

「——御曹子と申しても、実は、鞍馬寺の預かり稚子で

ござるゆえ、ちと、身装にも、特徴があるし、体は、年

ごろよりは小つぶで、一見、きかないお顔をしているの

ですが」

「知らぬの」兄弟とも、そう答えた。

「いやどうも」会釈も、そこそこ、寺侍たちは、彼方へ駈けて行つた。宗業は、見送って、

「兄上、今の侍どもは、鞍馬寺の者と申しましたな」

「そういうた」

「もしや……」小首をかしげていうのである。

「あの者たちが、見うしなつた御曹子と申すのは、遮那王ではありますまいか」

「遮那王とは」

「義朝の遺子——幼名牛若ともうす稚子です」

「ははあ」

「どうも、そんな気がする」血縁はあらそわれない、血が知らせるのである、宗業は足をとめたまましきりと見まわしていた。

すると、すぐ後ろの、源頼政の碑のある中山堂の丘に、白い尾花を折り敷いて、にこにこ笑っている稚子鬚の顔が、ちらと見えた。

「あつ、居る……」兄の袖をひくと、範綱も、見あげていた。そこは、さつき、文覚護送の檻車が通つた時、たくさん、見物がいた所である。稚子は、背がひくいので、そこへ登って眺めていたものと思われる。

すぐ、彼のそばの尾花の中に、もう一人、誰か屈みこんでいた。旅商人の砂金売り吉次だった。

何かささやいているらしい。しかし、遮那王は、吉次

のほうへは顔を向けないで、いかにもうつろな眸をして、いるように、真つすぐに、雲を見ていた。ただ、時々うなずきながら微笑するのである。

「——疑ぐられてはいけませぬ。はやく、お帰りなさいませ」吉次がいう。遮那王は、首をふる。

「いいよ」

「でも」

「いいというのに」

「まだ、時機が熟しませぬ。——今日のところは、山へお帰りあつて」

「わかつたよ」

「では」

「いいと申すに。ふだん、わしを、うるさく見張つてばかりおるゆえ、あの三人に、すこし、窮命させて、探させてやるのじゃ、あれ見い、阿呆顔して、焦れておるわ」並木を、四、五町も先へ行つて、寺侍たちは、つかれた顔をして、また、こっちへもどってくる。それを、おかしげに、遮那王の小さい顎がさして笑う。やがて、

「やつ、あんな所に」見つけたとみえて、寺侍たちは、わらわらと丘の下へ駈けてきた。そして、

「遮那王さま！」手を振って、呼びたてる。吉次は、とっさに、

「ではまた」と、一言のこして、野狐のように、中山堂のうしろへ、隠れこんでしまった。

けろりとした顔で、遮那王は立っていた。なるほど、十五歳にしては小つぶである。指で突いたように、頬に

はふかい笑^{えく}靨^ぼがある。齒が細かくて、味噌ッ齒の質^{たち}だった。なつめのように、くるりとしてよくうごく眼は、いかにも、利^きかん気と、情熱と、そして、やはり源家の家系に生れた精悍^{せいこん}な血潮とを示して、それが、稚子^{ちご}であるために、單純化されて、凡^{たふ}の者^{もの}が何気なく見ては、悪戯^{いたずら}ッぽい駄々っ子としか見えないであろうほど、無邪気な眸であつた。

九

「そんな所に、何をしておいでなされましたか」附人^{つけひと}の寺侍は、叱るように、丘を仰向^{あおもむ}いていった。稚子の遮那王は、

「何もしておりはせん」首を振って、

「おまえ達を、探^{あき}していたんだ」と、あべこべにいう。

下の者は、呆^{あき}れ顔^{がわ}をして、

「早く、下りておいでなさい」

「行くぞっ」遮那王は、風^{たか}のように、両袖をひろげて、

丘の上から姿勢をとって、

「ぶつかつても、知らないぞ——」丘のうえから、鞆^{まり}を

ころがすように、駈^かけ下りてきた。

「あっ——」身をよけるまに、一人の寺侍へ、わざとのように、遮那王は、どんと、ぶつかつた。大きな体が仰

向けざまに転がった。小さい遮那王は、それを踏んづけて、彼方^{かなた}へ、跳びこえた。

「ハハハハ。ハハハハ」手を打って、笑いこける。

「おろかなお人じゃ。だから、断つておいたのに」見向きもしないで、もう、すたすたと先へ行く。

足の迅^{はや}さ。寺侍たちは、息をきって、その小さくて颯爽^{さつそう}たる姿を追つてゆくのであつた。宗業^{むねなり}は、見送つて、

「兄上、やはり、鞍馬寺の牛若でございますな」

「ウム」範綱^{のりつな}も呆れ顔であつた。

「よう、成人したものだ。……常磐^{とこぎわ}のふところに抱かれて、ほかの幼い和子^{わこ}たちと、六波羅^{ろくはら}殿に捕われたといううわさに、京の人々が涙をしぼつた保元^{ほうげん}の昔は、つい昨日^{きのう}のようだが」

「義朝^{よしとも}殿に似て、なかなか、暴れンばらしゅうござります」

「附人も、あれでは、手を焼こう」

「いや、手を焼くのは、附人よりも、やがて六波羅の平家衆ではございますまいか。伊豆には、兄の頼朝が、もうよい年ごろ」

「しつ……」たしなめるように、範綱は顔を振つた。並木のうしろを、誰か、通つたからである。

「われらの知つたことではない。歌人^{うたよみ}や文書^{ふみかき}には、平家の世であろうが、源氏の世であろうが、春にかわりはなし、秋にvariはなし、いつの世にも、楽しもうと思えば楽しめる」

「けれど」宗業は声をひそめて、

「なんとなく、ぶきみな暴風雨^{あらし}が、京洛^{みやこ}の花を真っ黒に打ちたたきそうな気がしてなりませぬ、——高雄^{たかたけ}の文覚^{もんかく}がさけんだ予言といい、そちこち、源氏の輩^{ともがら}が、何や

ら動きだした気配といい……」

「いうな」と二度も、たしなめて、

「唾わになれ。ものいうことは、罪科つみとがになるぞ」

「文覚もんがくもいいました。唾の世だと」

「……そう」と、範綱は、何かべつなことを思いだしたように、

「唾といえ、有範ありのりの和子、十八公磨まは、生れてからもう半歳にもなるに、ものをいわぬと、吉光の前まえが、心をいためているが」

「それは、無理です、半歳はんさいの乳のみ児では、ものをいうはずがありません」

「でも、意志で、唇くちぐらいは、うごかそうに」

「ははは、取越し苦労というものですよ。吉光の前も、日野の兄君も、余りに愛しすぎるから」

十

露と、虫の音ばかりである。日野の里は、相かわらず、草ぶかい。

藤原有範とげが子飼こがいの家来、侍従じじゆうのすけ介は、築地ついでの外の流れが、草に埋うもって、下水が吐けないので、めずらしく、熊手をもって、掃除をし、落葉おちば焼やきをやっていた。

「おや？」何を見つけたのであろうか、そのうちに、水草のなかへ手を突っこんで、

「オ、これは、いつぞや奥の御方おんかたが、鞍馬しやなの遮那王おおう様へ贈るといって、心をこめて、お書きあそばした写経じや

ないかな。——吉次のやつ、かような所へ捨ておって、鞍馬へは持って行かなんだとみえる」水びたしになった塗ぬり篋ばこや、巻かんをひろいあげた。そして、

「憎いやつめ」腹だたしげに、踏み折れている草の足痕あしあとを、睨ねめつけている。

そこへ、範綱、宗業むねなりの二人が、連れだつて姿をみせた。

昂奮した顔つきで、侍従介が写経のことを訴え、

「ふむ……捨てて行ったか」二人はそれを見つめて、しばらく考えこんでいた。けれど、範綱も宗業も、べつだん不快な顔いろは出さなかった。捨て去る者には捨て去るものの心がまえがあるのであろう、浄土よのなかの幸さちは人に強しうべきものではないし、また、この社会よのなかには、浄土をねがうよりも、すすんで地獄の炎をあびようとすら願う者もあるのである。——たとえば、文覚のように。

二人は、そう考えた。そして、遮那王ゆくすえの将来を心のうちで占うらった。中山堂の丘に、ちらと見えた野狐のような男の影は、ことによると、先ごろの夜、この日野を訪れた吉次であつたかもしれぬと、それをも、同時に、覚えていた。

「よいわ、どこぞ、人が足をふまぬところへ、そつと、埋うめておけ」

「勿体ない、畜生じゃ」侍従介は、腹が癒いえないように、まだ罵ののっていた。

「お館やかたはおらるるか」

「はい、おいで遊ばします」

「取次いでくれい」

「どうぞ」と、熊手を引いて、先に立つ。わが家も同じようにしている館なので、わざと、式台にはかからずに、網代垣をめぐって、東の屋の苑へはいると、

「まあ」ゆくりなく、その南縁の陽だまりに、乳のみ児を抱いた吉光の前と、有範との夫婦が、むつまじく、児をあやして、くつろいでいた。

よく、女性の美は初産に高調するというが、吉光御前のこのごろのやつれあがりの面ざしや、姿は、真夏を越えた秋草の花のように、しなやかで、清楚で、常に見なれている二人にも、その蔭やかさが、時に、眩ゆくさえ見えた。

「おそろいで、ようこそお越し……。さ、こちらの室へ」

「十八公麿は」

「よう、眠っておりまする」

「どれどれ」何よりも先にというように、範綱は吉光の前の腕のうちのぞきこむのであった。

珠が珠を産むとは、これをいうのではあるまいか。母の麗質をそのままにうけている。すやすやと小さい鼻腔からやすらかな呼吸をしている。甘い乳の香と、母性の愛を思わずにおいが、この故郷からはすでに遠く人生を歩んできた範綱や宗業の心をもやわらげて、何かな、自分たちの生命の発生にも、ふかしぎなものを考えさせるのであった。

ここには、諸悪の魔も、ひそむ蔭がない。明るさで、いっぱいだ。

「どれ、私にすこし」宗業が、抱きとると、

「わしにも、抱かせてみい」眠っている十八公麿を、手移しに、膝へ取って、

「重うなったの」父の有範は、

「そうじやろう、凡の子よりは、ずんと健やかじゃ」と、自慢気である。するとまた、吉光の前は、

「もう、何か、ものをいうてもよいころではございませぬか」案じ顔にいった。

「ははは、今も兄上と、途々話したことですが、まだまだ」

「まだでしょうか」

「ご心配はない」

「でも、かた言ぐらいは」

「泣けば、よいのです、泣くことは、泣くでしょう」

「時々、耳のひしげるような大声で、泣きまする」

「それでいい」有範はべつに気にはしていなかった。何よりも、膝にのせると、ずっと重いものを感じるこの子の健康さに信頼ができる。親ごころに、啞かと案じれば啞のようにも思えるほどき、ちりと結んでいる唇は、なかなかあかなかったけれど、眸は、つぶらで、よく澄んで、青空のような白眼のうちに耀きをもって、この世

への意志を睡^{みひら}きかけている、そして、眠る時は、ふかぶかと、濃い睫毛^{まつげ}をふせているのだった。

「大丈夫じゃ」父みずからが、こう、折紙をつけていた。けれど——やがて、翌年になった。まる一年の誕生日がくる。かぞえ年では、二歳^{ふたつ}になったのだ。夏もすぎ、秋にもなった。

ところが、それにもかかわらず、十八公磨はまだ、ものらしい言^{こと}を唇^{くち}からもらしたことがない。

乳母は、ようやく不安らしい眉をひそめて、侍従^{じじゆうのすけ}介へ、

「和子^{わこ}さまは、やはり、啞^{おし}でいらっしやるかもしれません」そっと、洩^もらしたというし、父の有範も、

「よいわ、五体さえ、そろうていれば」と、かなしい諦^{あきら}めをもちかけて、妻に気を落させまいとした。誰ともなく、出入りする雑人のあいだにも、

「日野のお館に生れた嬰兒^{やや}は、啞子^{おしこ}じゃそうな」と、噂された。

母性の人には、それが、冷たく聞えた。彼女もまた、そう信じて、

「なんの因果」と、悲しみ沈んだが、子のない不幸をなげいて、如意輪^{にょいりん}観世音^{かんぜおん}に、

（どうぞ、夫婦に子を）と、祈願をこめたことを忘れて、授かった珠に、わずかな、瑕^{きず}があったからというて、不平をいうのは慾^{よく}のふかさというものであると思った。

ことには、自分の血液というものも考えだされた。源家の戦^{いくさ}人である祖先たちは、どれほど、この世に修羅^{しゅら}

を作ったかしのれない。父の義親^{よしちか}や、従兄^{いとこ}の義朝^{よしとも}が殺した人間の数だけでも、千塔万塔を建ててもおよばぬくらいな罪業であろう。その血統^{ちすじ}の末に、ひとりの啞^{おし}の子が産れるぐらいいは、諸行応報のさばきから遁^{のが}れ得ない人間の子としては、むしろ慈悲のお酬^{むく}いと、有難く思っているのではないか。彼女は、そう考え直した。

だが、母性としての悲しみは、依然として、悲しみであり、世間へも良人^{おと}へも、いいしれない負け目を感じて、その憂いは拭^{ぬぐ}うことができなかった。

十二

ともあれ今の吉光の前自身なり、有範^{ありのり}の家庭というものは、謙譲にして清楚な、足るを知って不平を思わない生活を持して、ひたすら、精神^{こころ}の位置を、信仰と、そして、夫婦愛と、子の愛育とに置いて、いわゆる世間の名聞利慾^{みやうもん}からは遠く離れて住み澄ましていたのであった。

で——朝^{あした}にも夕べにも、この館^{やかた}の持仏堂には、一刻のあいだ、有範夫婦のたのしげな念仏の唱^{しょう}名^{みょう}がもれる。また、それに慣^なって、若い郎党の侍従^{じじゆうのすけ}介も、顔をあらい、口を漱^{そそ}ぐと、太陽を礼拝して、

「……………」黙然と念仏する。

下婢^{かひ}も、そうであった。乳母^{うば}も、そうであった。水を汲^くみ、使いに走る童僕^{わっぱ}までがそれを習うようにいたって、この古館^{ふるやかた}は何か、燦然^{さんぜん}たる和楽につつまれているかの

ように、他人からも羨ましく見えるのであった。事実、六波羅殿の栄耀も、小松殿の豪華も、この草間がくれの夫婦の生活にくらべれば、その平和さにおいて、幸福さにおいて、遥かに、およばなかったに違いない。

雁がわたる——秋は深み行く。仲秋の夜だった。

「兄上、ちとばかり、酒瓶に美酒さげて参りました」宗業が訪れた。

やがて、範綱も見える。十五夜ではあり、こう三名の兄弟がそろうと、ぜひと、一献なければなるまい。吉光の前は、高坏や、膳のものを用意させて、自分も十八公麿を抱いて、円かな月見の席につらなっている。

わざと、燭は燈さずにある。すすきの穂の影が、縁や、そこここにうごいている。廂から射し入る月は燈火よりは遥かに明るかった。

杯のめぐるままに、人々の顔には微醺がただよう。

——詩の話、和歌の朗詠、興に入って尽きないのである。と、思い出したように、

「そうそう」吉光の前へ向って、宗業がいった。

「六波羅の探題から、なんぞ、お許様へ、やかましい詮議だては、ありませんでしたか」

「いいえ……」吉光の前は、顔を横に振って、
「べつに、六波羅役人から、さようなことは申して参りませんが？ ……何ぞそのような噂でもあるのでござい
まするか」

「いや何、私の取越し苦勞です。——というわけは、お
従弟の鞍馬の遮那王どの、とうとう、山を下りて、関東

へと、身をかくしてしまわれたということですよ」

「えっ……遮那王殿が」

「油断をしていたため、だしぬかれたと、平家の人たちは、地団駄をふんでおります。そうでしょう、謀叛気かなければ逃げるはずはありません。忽然と、あの稚子が、姿をかくしたのは、まだ、少年ではありますが、明らかに源家の挑戦と見られる」

「でも、まだ十六歳の小冠者が、どうして、逃げおおせ
ましょう。……傷ましいことでございます」

彼女は、ふと、月にかかる雲を見た。ひそかに心のうちで
禱っていた従弟の失踪に、また幾人の血につながる者たちが
哭くのではないかと戦慄した。

そして、気がつくと、自分の膝に戯れていた十八公麿が、
いつのまにか、月の光の中を、他愛なく這いまわって、縁へ
出ていた。

十三

「あぶない」と、有範は、彼女が起つまゑに立って、十八公麿を抱きとってきた。そして、自分の膝へのせて、
「近ごろは、もう、眼が離せぬわい」と、わらった。宗業や、範綱は、こもごもに、十八公麿を、あやしなから、
「今のうちに眼の離せぬのはまだよいが、やがて、遮那王の
ように成人してからが、子をもつ親は一苦勞じゃ」
「いや、あの冠者のようにはなるまい、なぜならば、この子は、
唾じゃ。——ものいえば罪科になる唾の世に、

唾と生れてくれたのは、これも、われら夫婦が信心のおかげであろう」有範は、膝の子を、上からのぞいて、そういった。

十八公磨は、仲秋の月よりも澄んだひとみをして、じいっと、まるい月を見つめていた。

（この子は、将来、どうなるであろう？）と、母である者も、叔父である人々も、今、鞍馬の冠者のうわさが出たところだけに、ひとしく、同じことを、考えていたらしくあった。

誰もが、十八公磨のその無心なひとみを、無心になつて、見合っていた。

十八公磨は、ふたつの小さい掌を、ぱちとあわせて、笑くぼをうかべた。子どもの掌は、菩薩の御手のように丸っこいものである。人々は、思わずに、こと微笑をつりこまれた。すると――

「な、む、あ、み、だ仏」誰か、いった。

低音で、聞きとれなかったのであるが、すぐ次に、かた言で、はっきりと、

「――南無阿弥陀仏」と、つづいて唱えた。

十八公磨を膝にのせていた父の有範が、その時、
「あっ？」愕然として、

「十八公磨が、ものをいうたぞ。十八公磨が、ものをいうた！」と、絶叫した。吉光の前も、さげんだ。

「十八公磨じゃ。ほんに、今いうたのは、十八公磨じゃ」うれしさに、狂いそうな表情をして、宗業に告げ、範綱に告げた。

「？……」だが、そのふたりは、茫然と自失していた。なぜならば、今の無心に出た十八公磨の声は、ただの嬰兒の初声ではない。あきらかに六字の名号を唱えたのである。眼のあたりの奇蹟にうたれて、慄然と、体がしびれてしまったかのように、沈黙しているのであった。

「ふしぎだ……」

「そも、何の菩薩の御化身か」と、ふたりは、後になつてまで、解けないことのように首ばかりかたがてていたが、有範は、それはなんらの奇瑞でもふしぎでもないといった。

「真如を映すものは、真如である。――妻のまごころは、胎養のうちに、十八公磨の心をつちかっていた。また、生れては、この家の和楽や、この家にあふるる法の感謝に、いつとなく、幼いたましいまでが、溶和されていたのは当然なこと。なんの奇蹟であろうぞ」

そう説明したが、ありがたさに彼も、彼の妻も、掌をあわせて、真如の太虚に、

「南無――」と、思わず大きく唱えて、泣きぬれた。

かげろう記

一

承安四年は、仏法日本にとって、わけて念仏道にとつて、忘れがたい春秋であつた。

誕生して、まだ、まる二つにならない日野の十八公麿が、十五夜の名月に心のひとみをひらいて、無心のうちに、南無——の六音を唱えたということが、いつか隠れもない噂ばなしと伝えられる前に、洛東の吉水禅房では、期せずして同じ年に、法然上人が、専修念仏の新教義を唱道えだしていたのである。

後に思うと——法然上人の第一声と、幼い親鸞の第一声とは、ゆくりなくも、生るべき時代に——約束のない約束のもとに——秋を同じゅうして世に出たともいえる。浅からぬ因縁といえる。

法然の堂には、毎日、求法の民衆が、草のなびくように、寄って行った。

宮廷からも、お招きがあつた。関白兼実も、聴聞した。はなはだしい平家の跋扈と、暴政と、いつそれがくずれ

て火をふくかもわからない危険な地熱とが感じられる一方に、そよと、冷やかな泉声でも流るるように、それは、民衆の不安と渴いた心に、争って、汲まれるのであつた。六条上皇が崩ぜられた。

改元して安元二年。吉光の前は、一年おいて、また一人の男の子をもうけた。——十八公麿の弟、朝麿である。その朝麿が二歳、十八公麿が四歳となつた。乳人にだかれてゐる弟を、

「あさ殿、お目あけ……」と、もう幼い兄ぶりを示す彼であつた。その兄弟のために召抱え入れた乳母が、ある時、

「介どの、介どの」侍従介を、よびたてて、二人して、仏間のふすまの間から、中をのぞき合つていた。

そして、笑いさざめいているので、吉光の前は、自分の居間を出て、

「和子たち、何を見ておりますか？」と、後ろから訊ねた。乳母は、

「まあ、ご覧じませ、あのようには、十八公麿さまが、小さいお手へ、数珠をかけて、御像を拜んでおいでなされます。誰も、教えもせぬに、何というしおらしい——」と眼をほそめて告げるのであつた。

「ほんに……」と、吉光の前の眸にも、思わず微笑がただよう。

子は、母の鏡であつた。黒業も白業も、自分たちのなすことはすぐ映してみせるのである。彼女は、おそろしい気がした。

「お母さま」人々の気配に気づくと、十八公麿はふりかえって、数珠をすてて彼女の膝へすがった。壇のまえに坐って、拝んでいた相には、無邪無心の光があつて、仏の再生でもあるように、何か尊いものに心を打たれたが、そうして、母の膝にからみついて、母の乳に戯れた十八公麿の容子は、やはり世間の誰の子とも変りのない子どもであつた。

翌年の春のことであつたが、一家を挙げて、珠とも慈しんでいるその十八公麿が、ふと、家のうちから見えなくなつて、乳母や侍従介や、召使たちは、色を失つて、騒ぎまわつていた。

二

「ここにも、お見えがない」侍従介は、いつもの持仏堂をのぞいて、乳母を、責めた。

「おぬしが、よくない。朝麿さまを抱いておれば、朝麿さまにのみ氣をとられてゐるから、かようなことになるのだ」

「今しがたまで、その前裁に、おひとりで遊んでおいでなされたので、つい、氣をゆるしている間に……」乳母は、自責に駆られながら、おろおろといった。

「――裏の竹叢へでも」とつぶやきながら、走って行った。

侍従介は、眉をひそめながら、草履を突っかけて、ふたたび、庭へ下りた。――そして邸内の畑だの、竹林だ

の、小山だのを、

「和子さま――」呼びたてつつ、そしてまた、奥のおん方やお館の耳へは入れたくないように、心をつかいながら、血眼で、十八公麿のすがたを探しまわつていた。ちやうど、折もわるく。

東の屋の一室に、あるじの有範は、この安元二年の正月から病にかかつて臥せ籠つていたのである。そのために吉光の前も良人の病室から一步も出たことがないような有様であつたので、それも一つは、こういう間違ひの起る原因でもあつた。

で、召使たちは、よけいに心を傷めて、病室にこの過失を知らすまいと努めたのであつたが、ひとつ館のうちの出来事ではあるし、そこへ呼ばれてきた侍女の素振りにも不審が見えたので、母である彼女が覺らないはずはなかつた。

「十八公麿のすがたが見えぬとて、そう、噪ぎたてることはない」侍女のことばを窘めて、彼女は、静かに良人の枕元を離れた。彼女もまた、それを知るとすぐ、病人の心づかいを惧れたからであつた。廊下へ出て、

「まさか、築地をこえて、館の外へ走り出はすまい。池の中の渡殿を見てか？」

「はい、あそこも、探したようでございます」

「池の亀を、面白がつて、よう汀で遊んでいることもあるが、よも、水へ落ちたような様子はないでしょうね」

「そんなことは……」侍女も、落着かない、そして自信のないことばつきで、答えるのである。

「穿物を、だしてください」沈着に、静かなことばで、そういうのであったが、さすがに心のうちでは胸が痛いほど案じられているらしい。廊下の階に立って、侍女が、穿物をもってくるまも、もどかしげにその眉が見えた。すると、

「姉君、どちらへ？」前栽の木蔭から、誰か、そういつて、近づいてくる者が見える。

橡色の直衣に、烏帽子をつけた笑顔が、欄干の彼女を見あげて、

「ひどく、面白いがわるいが？ ……。それに、介も見えず、裏の木戸も、開け放しになっているではありませんか」

「宗業様、よい所へ来てくださいました。 ……今、十八公麿が見えぬというて、介も乳母も、出て行ったところでございます」

「えっ、和子の姿が、見えなくなったと申すのですか」
「このごろ、陸奥の方から、人買いとやら、人攫いとやらが、たくさん、京都へ来て徘徊しているそうなの、もしものことがあっては、良人の病にもさわりますし、私とても、生きたそらはありません」といううちに彼女の眸は、もう、いっぱいに沾んでしまう。

三

まるい丘と丘が重なりあっている。丘の赤松の蔭からは、瓦焼きの竈の煙が、まっすぐに立ち昇っていた。

それを見ても、風のないのでわかる。

蝶の群れが、逃げてきた。キキキ、キツ、と軌の音がどこからかしてくる。見ると、日永の遊山に飽いたような牛が、一台の輦を曳いてのろのろと日野の里を横に過ぎて行く。

「七郎っ。——七郎よっ」輦の中で、少年の声がした。武家の息子であろう、ばらっと、乱暴に、簾をあげて、首を外へ出した。

「どこへ行った、七郎は？」牛飼は、足をとめて、後ろの道をふり向いた。郎党ていの青侍が三名、何かふざけながら、遠く遅れて歩いてくるのが見える。

「ちッ」と、輦の上の少年は、大人びた舌打ちをした。赤い頬と、悪戯ッぽい眼をもって、

「——わしを、子どもと思うて、供の侍どもまで、馬鹿にしおる」両方の手を、口のはたに翳して、おうーいっと、大声で呼んだ。その声に、初めて、気がついたように、郎党たちは、輦のそばへ駈けてきた。

「馬鹿っ、馬鹿っ、何をしてじゃっ」少年は、頭から怒りつけて、それからいった。

「あれ、あの丘の裾に、うずくまっている小童があらう。——怪しげなことをしておるぞ。何をしてるのか、すぐ見てこい」

「え？ ……どこでございますか」七郎とよばれた郎党は、少年の指さす先をきよろきよろ見まわした。

「見えぬのか、眼がないのか。呆痴た奴のう。 ……あそこ、梅か、杏か、白い花のさいておる樹の下に」

「わかりました」
「見えたか」

「なるほど、童わらべがおります」

「さっきから、ああやって、じつと、うずくまったままだぞ。怪け態たいなやつ。何しているのか、見とけてこい」
「はいっ」七郎は、駈けて行つた。

白い花は、梅だった。後ろからそつと近づいて見ると、まだ、四、五歳ぐらいな童どうし子が、梅の老樹の下に坐つて余念なく、土いじりをしているのである。

（や？）七郎は、眼をみはつた。

童子の前には、童子の手で作られた三体の仏像ができている。まぎれもない弥陀如来のすがただ。もちろん、精巧ではないが、童心即仏心である。どんな名匠の技術でも生むことのできないものがこもっている。

それだけなら七郎はまだそう驚きはしなかつたろう。

——だが、やがて、童子は、土にまみれた掌てをあわせて何か、念誦ねんずしはじめた。

その作法なり、態度なりが、いかにも自然で、そして気だかつた。ひら、ひら——と童子のうない髪にちりかかる梅の白さが、何か、燦々さんさんと光りものでも降るように七郎の眸には見えた。

（凡人の子ではない）こう感じたので、彼は、気づかれぬうちに、足をめぐらして、腕白な主人の待ちかまえている輦くるまのほうへ、いそいで、引返してきた。

「やい、どうあったぞ？」まるッこい眼をかがやかせて、少年は、輦くるまの上から、片足をぶら下げて、すぐ訊いた。

四

「べつに、面白いことではございません」七郎がいうと、
「でも、なんじゃ」と、腕白少年は、しつこい。
「輦くるまを進りながら話しましょう」

「待て待て」少年は、首を振って、

「話を先にせい」

「ちと、驚きましたので、落着きませぬと、お話ができません。……七郎めも、たくさんな童わらべを知っておりませんが、あんな童は、見たことがありません」

「それみい。面白くないというが、庄司七郎ほどな侍を、そう驚かしたことなら面白いにちがいない。——何じゃ一体、あの童わらべは？」

「どこぞ、この辺りの磨まろでござりましょう。私が、近づいて窺うかがっているのも知らず、一念に、三体の弥陀の像を土で作っているのでございます」

「なアンじゃ」少年は、赤い口で嘲笑あざわらつた。

「馬鹿よのう、そんなことに、驚いたのか」

「いえいえ、さようなことに、庄司七郎は、驚きはしませぬ。……やがて、念誦ねんずいたしている姿の気だかに驚きました。衝うたれたのでございます。何か、こう五体がしびれるように思いました。ちる梅花も、樹洩こもれ陽ひも、土の香から燃える陽炎かげろうも、真まことの御仏みほとけをつつむ後光のように見えました」

「ふむ……」

「凡^{ただ}の和子^{わこ}ではございません。作^{ただ}られている三体^{みぞう}の御像^{みぞう}の非凡^{ふふん}さ、容子^{ようす}のつつましき」

「ふーむ……」

「世の中に、あんな和子もあるものかと、ほとほと感服いたしました」腕白な主人の顔がおそろしく不機嫌なものに変わっているのに気がついて、七郎は、ちと賞^ほめすぎたかなと後悔して口をつぐんでしまった。案のじようである。

「小賢^{こさか}しいチビめ」輦^{くるま}のうえから、少年は唾^{つば}をして、罵^{のの}りだした。

「そんな、利巧者ぶるやつに、ろくな童^{わっば}はないぞよ。

第一、まだ乳くさいくせに、仏いじりなどする餓鬼^{がき}は、この寿童丸^{じゅどうまる}、大ッ嫌いじゃ」家来たちの顔を、じろじろ見まわして、どうだというように、待っていたが、誰も、雷同^{らうどう}しないので、寿童丸は、いよいよ不機嫌になった。「やい、やいっ。あの餓鬼^{がき}めの作^さったとかいうその土偶^で像^くを奪^とってきて、わしの前で、蹴^けつぶして見せい」

「滅相もないことを」一人の侍がとめると、

「嫌か？」

「でも」

「主命だぞっ」この腕白者は、身装^{なり}こそ小さいが、口は大人を負かしそうであった。主命といわれて、家来たちは、持てあました。

七郎は、扱い馴れているらしく、かりそめにも、仏の像に、そんな真似^{まね}をしたら、罰^{ばち}があたって、脚も曲がろうと、なだめたり、説いたりした。

「罰？」寿童丸は、かえって、罰ということばに、反感を燃やしたらしく、

「右大将小松殿の御内^{みうち}でも、成田^{なりた}兵衛^{ひょうゑ}為成^{ためなり}と、弓矢にしたられた父をもつ寿童丸だぞ。——罰がなんじゃ。あたればあたってみるがよい。おぬしら、臆病^{おくびょう}かぜにふかれて、それしきのができぬなら、わしが行って、踏みつぶして見せる」と、輦^{くるま}の輶^{なぐさ}に片足をかけて、ぽんと飛び下りた。

五

七郎は、驚いて、

「まま、待たせられい」だだっ子の寿童丸を、他の家来たちとともに、無理やりに、輦^{くるま}の上へ、抱いて、押し上げようとする。

「嫌だっ、嫌だっ」小暴君は、輶^{なぐさ}へ、足を突っ張って、家来の頭をぼかばか打ったり、七郎の顔を爪で引っ掻いた。

「離せっ、こらっ、馬鹿っ」

「お待ち遊ばせ。成田兵衛の若様でもあるものが、さような、泥足になって、人が笑います」

「笑ってもよいわ。わしは、侍の子だ。いちどいったことは、後へ退^ひくのはきらいだ。わしが行って、小賢^{こさか}しの童^{わっば}めの土偶^{でくぼとけ}仏^{ぶつ}を、蹴^け碎^{くだ}いて見せるのじゃ。罰^{ばち}があたりか、あたらぬか、そち達は、見ておれ」

「さような、つまらぬ真似^{まね}は、するものではございません

ぬ」

「何が、つまらぬ」寿童丸は、家来たちの肩と手に支えられながら、足を宙にばたばたさせた。持てあまして、「それほど、仰っしゃるなら、やむを得ません、七郎が参りましょう」

「行くか」

「主命なれば——」

「それみい。どうせ、行かねばならぬもの、なぜ早く、わしのいいつけに従わぬのだ」やっと、小暴君は、輦の中に納まって、けろりという。

「——はやく、奪ってこい」愚昧な若君だが、こんな懸け引きは上手である。七郎は、いくら主人の子でもと、ちよつと小憎く思ったが、泣く子と地頭だった。

「承知いたしました」気のすすまない足を急がせて、丘の下へ、戻ってきた。

（まだいるかどうか？）むしろ、立ち去っていることを祈りながら、七郎は梅花の樹蔭をのぞいた。見ると、自身で作った三体の土の御像をそこにすえたまま、あの髻がみの童子は、合掌したまま、さっきと寸分もたがわぬ姿をそこにじっとさせていた。

蛇のかすかな羽うなりも鼓膜にひびくような春屋である。七郎は、蹻音をぬすませて、童子のうしろへ近づいた。——近づくにつれて、その童子のくちびるから洩れる念仏の低唱が耳にはいった。怖ろしい強兵にでも迫ってゆく時のように、七郎は、脚のつがいが慄えてきた。どうにも、脚がある程度を越えられない気がした。いっ

そのことやめて引っ返そうかと惑った。

寿童の呼ぶ声が、おうウいと、彼方で聞えた。彼は、主人の邸へ帰った後の崇りを考えて眼をつぶった。

（そうだ、人の来ぬ間に！）七郎は、跳びかかった。

無想になって合掌している童子の肩ごしに、むずと手をのばした。一体の像を左の小脇にかかえた。そして、もう一体の弥陀如来をつかみかけると、童子は、びっくりしたように起って、

「あれっ？——」愛らしい叫びをあげた。そして幼子らしく、手ばなしで、わあっと、泣くのであった。

二つの像をかかえて、もう一体の像を七郎が蹴とばしたせつなのである。

「おのれッ、この下司！」ぐわんと、彼の耳たぶを、烈しい掌のひらが革のように唸って打った。

「あっ——」耳を抑えながら、七郎は、横にもんどり打った。仏陀の像は、また一つ彼の手から離れ、粉々になつて、元の土にかえった。

六

「大人げない奴めっ」叱咤が、頭のうえで聞えた。

七郎は、起き上がって、自分を撲った相手を見た。

十九か、二十歳か、せいぜいそんな年頃の若党である。腕を捲って、右の肩をすこし昂げ、左の手に、泣いている髻がみの童子を抱きよせていた。

「何処の青侍か知らぬが、よい年をして、なんで、稚

い和子様のお作りなされた弥陀みだの像を足蹴あやまにして碎いたのじゃ。それへ、両手をついて、謝あやまれっ」こう正面を切のしって罵ののられると、庄司七郎も陪臣ばいしんでこそあれ時めく平家の郎党である。尾を垂れて退ひくわけにはゆかなくなつた。

「おのれ、このほうを撲うつたな」

「撲うつた！」昂然こうぜんと、若者は、いって憚はばらなかつた。

「人もあろうに、わしの主人の和子様に、無礼を働いたゆえ、打ちのめしたのだ。それが、どうしたっ」

「おのれは、どこの若党か」

「前の皇后大進さきこうごうだいしん、藤原有範卿ふじわらのありのりきやうに仕える侍従じじゆう介すけというものじゃ」

「落魄おちふれ藤家の雑人ぞうにんか」

「なんであろうと、この身にとれば、天地無二の御主君。

……ささ、和子様、もうお泣きあそばすな」と、侍従介は泣きじやくる十八公麿まつまろをなだめながら、手の泥や衣服の塵を払はつて、

「お母様ははも、叔父様も、乳母も和子様のおすがたが見えぬとて、どんなに、お探し申まうしているかしれませぬ。泣き顔をおふき遊あそばして、介すけと一緒に、はよう、お館へもどりましょう」肩を叩たたいて、歩みかけると、七郎は、跳び寄はつて、

「待てっ。用は済まぬ」と、介すけの刀の鐙こじりをつかんだ。

介は、振り向いて、

「何か、文句があるか」

「おうっ、今の返報を」いきなり、拳こぶしをかためて、介すけ

の頬骨をくだけよと撲なぐりかかつた。

しかし、予期していた介は、巧者に、半身をすばやく沈めて、七郎の小手を抱きこむように手繰たぐつたと思うと、「何をさらすっ——」どさつと、草むらへ抛ほうり捨てた。

草むらには、狭い野川が這はつていたとみえて、七郎が腰を打つた下から、泥水が刎はねあがつた。

「や、や。あの若党めが、七郎を投げつけたぞよつ。七郎の仇かたきじゃ、おいかけて、ぶちのめせ」

鞭むちを打たせて走はつてくる輦くるまの上から寿童じゆうどうがわめいた。介は、それを眺めて、

「和子様、はよう、介の背なかに、おすがりあそばせ。

……相手が悪い。逃げましょう」

平家の御家人ごけにんと見て、彼は、無事な策をとつた。

と——もう小石の礫つぶてが、そちらへ、飛とんできた。輦くるま

をとび下りた寿童が、石をひろつて、ぶつけているのである。そして、

「あやつら、藤家とうけの者じゃないか。平家のお身内に、指一本でも傷つけたら、相国しょうこくのおとがめがあることを知らぬのか。逃がしては、なるまいぞつ。捕まえろ、牛の背にひつ縛くつて、六波羅ろくはらの探題たんだいへ、突き出してくれる」と、遠くから喚わめいた。

そして、介の逃げ走る方へ、牛飼や、侍たちと共に、先廻りして陣を布しいた。介は、背中ま中の十八公麿まつまろへ、手

のばした牛飼の男の腰りよがいものばねを、

「慮外者りよがいものっ」と、蹴けつて、また走つた。

下婢も、下僕も、仕事 hands が手につかないように、くりや 厨を空にして外へ出ていた。

箭四郎は、牛小屋の牛を世話したり、厨や湯殿の水汲みをする雑人だったが、やはり心配になって、井口のかけひ 笕に、水桶を置きはなしたまま、

「於久里どん、和子様は、見つかったかい」

ついで 築地のそとを、うろうろしていた下婢の於久里は、首をふって、

「どこにも——」と、昏い顔をした。

「見えぬのか」

「うん……」

「ふしぎだなあ」箭四郎は、於久里とならんで、腕ぐみをしていた。

この頃、しきりと、洛外らくがいのさびしい里を脅やかしている風説が胸の底にさわいでくる。それは、洛外ばかりでなく、どうかすると、白昼、玄武や朱雀すしやくの繁華な巷ちまたでも行われる「稚子攫い」のうわさである。

巷の説によると、稚子攫いを職業にする悪者は、男の子ならば室の津つの唐船からふねへ売りわたし、眉目みめよい女子おなごだと京の人々が、千里もあるように考えている東あづまの国から那須野の原をさらに越えて、陸奥みちのくのあらえびすどもが、京都みやこの風をまねて文化を創つくっている奥州平泉の城下へ遠く売りとはされてゆくのだという。それを思い出して、

「もしや、稚子さいいの手にかかったのじゃあるまいかなあ」箭四郎がつぶやくと、

「そうかも知れない」於久里も、かなしい眼をした。だが、すぐに二人の眸ひとみが、

「おやつ」と、かがやいた。

「介だ！」箭四郎が、突然さけぶと、

「おっ、和子様がつ」於久里は、転ぶように、木戸のうちへ、駆けこんで行った。

「和様がもどった」

「和子様」

「和子様」館やかたのうちにつたわる狂喜の聲が、外まできこえた。

「介ッ。介ッ」箭四郎は、両手をあげて、呼んでいた。十八公まつまろ麿を背に負って、野をななめに、草を蹴って駆けつけた侍従じしゆう介の顔には、すこしばかり血がにじんで、水に突つこんだように襟えりくびにまで汗がながれていた。「箭四ッ。うしろを閉めてくれッ」あえぎ声でいって、築地の中へ飛びこんだ。

箭四郎は、介にいわれた通り、そこを閉めた。西の木戸も、表門のくぐりも、堅く閉めておくようにと介はいいつけながら、奥の庭へ駆けで行った。

「おお」階梯きざしのうえに見えた吉光きっこうの前は、介が、十八公麿を下ろすのも待たないで、駆け下りて、わが子を抱きとった。そのまま廻廊の上に戻って抱きしめたまま暫くはうれいものと緊はりつめた心のゆるみで、泣きぬれていたのであった。

「和子」やがて、頬ずりの顔を離すと、母は、心のうちとは反対に、すこしきびしい眼をして、
「この母も、叔父様も、どのように案じていたことか。つねづね、よう教えてありますのに、なぜ、一人で外へなど出ましたか」と、叱った。

八

「あ、もし」介はあわてて、吉光の前のことばを遮った。

「——おしかり遊ばすな。和子様のは、世間のいたずら童が、飛びまわるのとは違いまする」

「でも、こういう時には」

「ごもつともです。けれど、介のぞんじますには、おそろく、和子様は、お父君のお病氣に、小さな胸をおいためあそばして、それを、お祈りしていたのではないかと思われます」

「ほ……どうして？」

「介が、諸方をお探して行きますと、いつか、和子様をおぶって粘土を取りに参りました丘の蔭にこう、坐っておいであそばしました」介は、庭へ坐って、十八公磨がしていたとおりに真似をして合掌した。

そして、三体の弥陀如来の像を作っていたこと、一心に何か祈念していたこと、それがとても幼い者の振舞とは思われぬほど端嚴な居ずまいであったことなど、目撃したまを、つぶさに話した。

「まあ……和子が……」母の眸には、涙がいっぱいで、それが笑顔にかわるとたんに、ぽろりと、白いすじが頬に光った。

「では……そなたは、お父君のおいたつきが癒るようにと、その小さい手で、御仏の像を作っていたのですか。……そうかや？」頭髮をなでると十八公磨は、母の睫毛を見あげて、幼ごころにも、なにか、すまないものを感じるようにそっと、うなずいて見せた。

報らせを聞いて、宗業も戻ってくる、乳母も、眉をひらいて駈けてくる。

侍女や、下婢までが、そこへかたまつて、口々に、十八公磨の孝心を称えた。それに、粘土で仏陀の像を作っていたということが、大人たちの驚異であった。

宗業だけは、そう口に出して、賞めそやしたり称えはしなかったが、家族たちの手にかわるがわる抱き上げられて嬉々としている十八公磨の姿に、まったく、心を奪われたように見入っていた。そして、

（この子は——）と、将来の眩ゆさを感じ、ひざまずいて、礼拝したいような気もちに搏たれた。

すると、築地の外に、黄いろい砂ほこりが舞って、がやがやと、口ぎたない喚き声がきこえた。

「ここじやな、貧乏公卿の有範の邸は」介の後を追ってきた寿童丸と、その家来たちらしかった。

「やいっ、今の若党、出てうせいっ。ようも、わしが家来を、投げおったな。出てうせねば、討ち入るぞよ。こんな、古土塀の一重や二重、蹴つぶして通るに、なんの

雑作もないわ」そしてまた、

「臆病者つ、答えをせぬか。寿童冠者が勢いに怯じて、音も出さぬとみえる。——皆の者、石を抛れつ、石を抛れつ」声がやむとすぐ、ばらばらつと、石つぶてが、館の廂や、縁に落ちてくる。一つは、宗業の肩を打った。

「なんじゃ、あの業態は？」介は、睨めつけて、

「おのれ」と、口走った。そして太刀の反りを打たせて、「おうっ、たった今、出会うてやるほどに、そこ、うごくなっ」

九

血相を変えて、介が、出て行こうとする様子に、宗業は驚いて、彼の太刀の鞘をとらえた。

「これっ、どこへ参る」

「あの悪口がお耳には入りませぬか。最前は、十八公磨様にお怪我をさせてはならぬと、じっと忪えて、お館の内へ逃げこんでは参りましたものの、もう堪忍はなりませぬ。介は、斬って出て、斬りまくってくれまする」

「逆上したか、相手は、平家の侍の子じゃぞ」

「あの嘴の黄いろい小冠者までを、思いあがらせている平家の横暴さが憎うござります。素ッ首斬って、介が、斬り死にしましたら、少しは、見せしめになって、世間の人々が助かりましょう」

「用もない生命を捨てるな。蠅が小癩にさわるとて、一匹二匹の蠅をたたいたら、数万の蠅がうるさいしぐさを

やめるであろうか。まして、お館も御病中、忪えておれ、黙っておれ」

「ええ、いかに、何でも」

「ならぬぞ、決して、築地の外へ出てはならぬぞ。唾になれ、耳をなと思え」

「耳も眼も、血もある人間に、それはご無理。——おのれつ、成田兵衛の小倅に、雑人ばら、今日のこと、覚えておれよ」築地越しに、唖鳴ると、どつと外で嘲笑う声がした。牛糞や、棒切れが、ばらばらと庭の内へ落ちた。

介ばかりではない。厨の召使たちも、歯がみをしてくやしがつた。けれど、宗業もなだめるし、吉光の前もおののきふるえて、

「忪えて賜も。相手になることはなりませぬぞ」頼むばかりにいうので、涙を溜めながら、つんぼのように鳴りをしずめていた。

すると、奥の小者が、あわただしく廊下を駈けてきて、「おん方様、宗業様、すぐおこし下さいませ、すぐに」語氣のふるえに、二人は、ぎよつとして、

「どうしやった？」

「お館様の御容体が、にわかに変でござります。唇のいろも、お眸も、急に変わって……」

「えっ、お悪いとな」宗業は、走りこんだ。吉光の前も、裳をすべらせて、良人の病間へかくれたが、やがてすぐ、宗業が沈痛な眉をして、そこから出てきた。そして早口に、

「介っ、介——」と、呼んだ。介は、階段の下に、黙然

と浮かない顔で腕ぐみに沈んでいたが、

「はいっ、介は、これにおりますが……」

「オオ、急いで、お医師の所と、その足ですぐに、六条の兄君のところへ、お報らせに走ってほしい」

「では、お病状が……」

「ウム、もはや望みがないかも知れぬ。いそいでゆけよ」

「はいっ、はいっ」木戸へと、駆けて行くと、

「介っ——」と、宗業はもちろぬ、声をかけた。

「くれぐれも、六波羅衆の息子などにかまうなよ。何と罵しられても、耳をおさえて、走って行くのだぞよ。よいか」

「はいっ」

「頼むぞ、はやく」介は、築地の木戸を開けて、夢中で外へおどり出した。

十

洛内のほうへ向って、介が、わき目もふらずに急いでゆくと、寿童丸とその家来たちは早くも彼の姿を見つけて、

「犬が行く、痩せ犬が、尾をたれて行くぞ」

「さっきの広言、何としたぞ」

「腰ぬけっ」またしても、悪たれや小石を、後ろから浴びせるのであったが、介は宗業のことばを思いだして耳の穴をふさぎながら、

「——堪忍、堪忍、堪忍」と口の裡で唱えて、後ろも見

ずに洛中へ急いで行った。

そうして、六条の範綱の館まで、一息に來たが、折れるく範綱は後白河法皇の院の御所へまかり出ていて、まだお退がりにならないという。

院へは、法皇のまわりに、平家の人々がたくさん取り巻いて、閥外の人間を遠ざけるから、範綱などは、めったに伺候することはなかったのであるが、近ごろはまた、法皇のお心もちが少し変って、あまりな平家閥に、眉をひそめられることが多く、ときどき、範綱にもお招きがある。むろん政治上の事にかかわる範綱ではないから、和歌のお相手や、稀に、御宴の端につらなるくらいの程度であった。

「いつも、お歸りは、遅うございますか」介が、当惑そうに訊くと、館の者が、

「お出ましの時は、たいがい遅くなるのが常でございます」と答えた。

「それは困った」介は、院の御所へ行って、衛士に取次ぎを頼んでみようと思った。で、そこを辞して、また駆けだして行くと、途中で、範綱に会った。

「介ではないか」呼びとめられて、

「おおよい所でした、六条様、たいへんです。有範様の御容体がにわかにはわるうござりまして、医師薬師も、むずかしいという仰せ。奥のおん方様も、宗業様も、お枕べに、付ききりです。すぐ、お越しくださいませ」

「や……有範が」そんな予感があったように、範綱は、すぐに、牛輦を引っ返して、日野の里へいそがせた。病

室は、しいんとしていた。胸さわが先に立った。だが有範はよいあんばいに小康を得て、すこし落着いていたのだ。

しかし、医師は、決してよい状態ではないから油断をしてはいけないといった。そのことばを裏切って、四月になると、有範はたいへん快くなった。そして自分はいつ死んでも心のこりはないが、こんな激しい社会の中に、生活力のない女や幼子をのこしてゆくだけが心がかりであるなどと、それが冗談に聞えるくらい明るい顔をしていった。有範もまた、戯れのように、

「そんなことは、心配には及ばぬ。微力でも、わしというものがいるではないか」といった。有範は、にことして、うなずいた。冗談ではなかったのである。それが生涯中の重大な一言であったのである。五月にはいると、やがて病が革まって、藤原有範は、美しい妻と、二人の子をおいて、帰らない人になってしまった。

（生活力のない女子ども。——流転闘争の激しい社会には、そののみが心配だ）といった彼の遺言をまもって、有範は、やがて、未亡人と二人の遺子を、六条の館のほうへ引きとって、自分には子のないところから、十八公磨と朝磨は、養子として、院へお届けの手続きをした。

一

草の育つ夜の雨であった。乳のようにしとくと蔀にしたたる雨だれの宵——

有範は、すこし疲れた筆をおいて、燭の丁字を剪った。どこからか入る濡れた風には若葉のにおいがして、この雨上りの後に来る初夏が思われる。

「はやいの——。もう一年になる」机に、脇をやすめて、有範は弟の死を憶い回した。

有範の世を去ったのが、ちょうど去年の五月である。それから間もなく、二人の遺子と、若後家とを、この六条の家にひき取ったが、自分にそれだけの生活力がわからなかった。色紙や懐紙に、何か収入を計らなければならなかった。色紙や懐紙に歌を書いたとて、それは足しにもならないし、大きな寺院から写経の仕事をひそかにもらって、筆耕に等しい夜業をしたりしていた。

だが、それも倦む。倦むと時々、

「時勢が時勢なら——」と、平家の世をのろわしく思うてもみるが、結局、無力なもの愚痴と自嘲して、子どもの顔でも見て忘れようと思うのであった。今も、

「……もう寝たか」自分の室を出て、渡り廊下をこえた

一棟のうちをのぞくと、

「おお、入らせられませ」若後家の吉光きつこうの前は、帳とばりの蔭に、添寝そいねして寝かしつけていた朝麿あさまろのそばからそっと起きてきて、敷物をすすめた。

「この二、三日は、朝麿の泣き声が、ひどう、むずかるようだが……」

「ちと、虫気むしけでございましょう」

「十八公麿は」

「あれにおりまする」

「まだ、起きているか」次の狭い室をのぞくと、なるほど、ほたる火のような淡暗い燈心を立てて、今年五歳になる十八公麿は、小机へ坐つて、手習いをしていた。

「勉強か。えらい」賞めながら、立つて行つて、墨に濡れた草紙をのぞきこんだ。

「うーむ、以呂波歌いろはか。……その手本は、誰がいたした」十八公麿は、ふりかえつて、

「叔父さまに」と答えた。

「宗業むねなりが、そちのために、書いたのか。……これほどの仮名かなの名手は、探してもそう数はない。よい師を持つていて、お汝ことは、しあわせ者だ」

「お父様も、おうたを書いてくださいませ」

「書にかけては、宗業にはかなわぬ。わしは、今にお汝ことがもっと大きゅうなったら、和歌の道を教えよう。和歌やまとびとは日本人の心の奏かなでじゃ。成人して、何になろうと、たしなみほどはあつてもよい」

誰か、その時、渡殿わたどのの廊下を、みしみしと歩いてきた。

「——誰じゃ」

「箭四郎やしろうでございます」日野の家を移る時から従したがいてきた下僕しもべは、この箭四郎と、若党の介すけだけであつた。介は、先ごろ故郷こきやうにのこしてある老母の病があつたという報しらせで、田舎いなかへ歸つていてこの二月ふたつきほどいなかった。

「吉光様へといつて、ただいま、かような文を投げ入れて参つた者がございますので——」と、箭四郎は、雨によくれた一通の書状を、彼女の前へさし出した。

二

「はての？」彼女は首をかしげた。

名も告げずに、投げこんで行つた文とは、一体誰からよこしたものであろう。さし当たつて、思いあたる人も泛うかばないように、封を解いた。

燭しよくを寄せて、読みかえしていたが、やがて、吉光の前は、ほつと嘆息ためいきをもらして、つぶやいた。

「まあ、とうとう、鞍馬を下おり山てしまわれたか。——あの稚子ちごばかりは父御の末路を踏ましとしないと祈つていたが」範綱は、さしのぞいて、

「誰からじゃ？」と、たずねた。

「めずらしくも、鞍馬の遮那王しゃなおうから——」

「なんというて？」

「どうして、あれほどきびしい平家の付人つけびとの眼を晦くらましたか、関東へ逃のがれて、身を潜ひそめ、今では、奥州の藤原秀衡ひでひらの懸人かかりゆうどになつてしているとやら……」

「では、噂は嘘ではなかったとみえる。ひところ、鞍馬の遮那王が逃げたと、やかましい沙汰であったが」

「よもやと疑っていましたが……これを見れば、元服して、名も源九郎義経と改めたと書いてあります」

「血はあらそえぬもの」

「野心のある豪族に、利用されるのでございましょう。

……それにつけても十八公麿の将来が案じられます。十八公麿のどこにも、源氏の血がひそんでいるのではないかと」

「そう取越し苦勞はせまいものじゃ。また、源家の血が、呪われた末路を踏むものとはばかりは限らぬ。白いか、紅いか、咲いてみねばわからぬ」

「どうか、平和で、静かで、風にも散らぬ樹となり、花を結ぶよう——」母性のうれいを眸にこめて、隣の室の隅をながめた。

燈心の光の下に、十八公麿は、眠るのを忘れて、まだ草紙に文字を書いていた。

「磨よ」

「はい」

「もう、お寝みなさい」

「はい」

「また、あしたにしたがよい」侍女が来て、彼の衣服をぬがせた。そして、十八公麿がすなおに帳の蔭の袵にかくれると、間もなくであった。小侍が、足早に、

「お館様」と、よんだ。

「なんじゃ」

「新大納言様からのお使者がみえられて、ぜひ、お目にかけたいと仰せられます」

「お使者が」

「お通し申しますか」

「この深夜に、成親卿のお使いとは……」いぶかしげに、考えていたが、

「ま、ともあれ、ご鄭重に」

「かしこまりました」小侍が去ると、すぐ立って、範綱は、客室へ出て行った。

客室には、二人の侍が、威儀をただして待っていた。あるじの会釈をうけると、

「てまえは、北面の兵衛所に詰めております多田蔵人と申す者です」次席の侍も、それに次いで、おごそかに、

三

沈湎として青じろい面に、どこか策士的なふうのある多田蔵人と、北面の侍所に豪の者として聞えのある近藤右衛門尉との訪れは、この二人の組みあわせを考えた

だけでも、時節がら、漫然たる用向きでないことは想像されるのであった。

まして、深夜。その深夜を冒し、雨を冒して来た客の二人は、二人とも、直垂から袴ごし、太刀の緒まで、片袖ずつ、ぐっしより濡れて坐っていた。

「時に……」と蔵人は、果たして声をひくめた。

「ちと、折入って、密々にお話し申しとう存ずるが」

「ご心配なく」と範綱はいった。

「——ここへは、許しなくば下僕の者も参りませぬ。見るる通り塗籠の一間、外にお声のもれることもない」

「うむ……」近藤と、うなずきあわせて、

「ほかではないが、新大納言の君の御発意で、この月十三日ごろ鹿ヶ谷俊寛僧都の庵に、同気の輩がうち集うて、何かと、お談じ申したいとのことであるが、貴公にも、枉げてもご出席あらるようにとのお伝えでござる。——ご都合は、どうお座ろうか」

「さ……」範綱は、返辞をためらった。

院を中心にして、先ごろから、思いあわされることがないでもない。相国清盛に対して、瞋恚を燃やしておらるるという噂がもっぱらにある。原因は、相国の嫡子の小松重盛が左大将に、次男の宗盛が右大将に昇官して、徳大寺、花山院の諸卿をも超え、自分の上にも坐ったということが、何としても新大納言成親には、虫のおさまらない不平であるらしい。

院の内政はいうまでもなく、叙位、除目のことまで、清盛父子のためにこう自由にされては、やがて、自分たちの官位もいつ剥奪されて、平家の門葉の端くれへ頒けられてしまうかも知れない——という疑心暗鬼も手つだってくる。

法皇にも、近ごろは、平家のこの専横ぶりを憎く思し召されている容子があると見てとると、成親の謀心は、油がそそがれた。北面の武士といわれる侍所にも、

同じような不平分子がたくさんいる。また、民衆も平家の顛覆するのを早に雲を待つように望んでいる秋である。今、策を立てれば、必ず成功するにちがいない。いわゆる時期到来だ。

こうした考えの人々がいつのまにか院のうちに、秘密結社をつくって、暗躍しているらしいことを、範綱は、あぶない火悪戯を見るように察していたので、（——それだな）とは早くも察していたのであるが、わざと、何もしらない顔をして、

「十三日……」考えこんでいた。蔵人は、膝をすすめて、

「ぜひ、お繰りあわせをつけて欲しいが」

「して、当日の集りに見えらるる方々は」

「されば」と、右衛門尉は、懷をさぐって、燭の下に、連名の一巻をひろげながら、

「——近江中将蓮浄どの、法勝寺の執行俊寛僧都、山城守基兼どの、式部大輔正綱どの、平判官康頼どの、また、新判官資行どのを始めとして、かく申す右衛門尉、ならびに、蔵人行綱」と、読んだ。

四

院の文官と、北面の武士と、もののしく連判してあるのである。

範綱は、眼をそらした。そして蔵人の眼をみると、蔵人は、じっと自分の眼を見つめて、こう秘密をうちあけた以上は、是が非でも加盟させずにはおかぬ、拒めば

即座に左の手によせている太刀にものいわせても——という殺気のある眸^{ひとみ}をかがやかしていた。

「なるほど」範綱は、すこし後へ退^{ひき}がった。そのあいだに、彼は思案を決めていた。

「——では僧都^{そうず}の庵^{いおり}にあつまると申しても、歌、猿樂などいたして、半日を、風雅に遊ぼうというわけでもないですな」

「もとより、表面は——そういう態^{てい}にしてあるが、まこととは……」右衛門尉は、深沈^{しんちん}と更^ふけてゆく燭の蔭を、見まわした。

「——まことは、北面の侍ども、また、ただいま読み申した連判^{ともがら}の輩^{ともがら}が、血をすすりあつて、院の法皇を仰ぎ奉り、新大納言の君を盟主として、暴悪な平氏を一挙に、覆^{くつが}えさんと思うのでござる。洛内^{らくない}にては、人目もあるゆえ、鹿ヶ谷^{しかがや}へ集った当日、万端お謀^うちあわせする考え。

——については、源家に御縁の浅からぬお家であり、わけでも、法皇の御信任もふかい貴公のこと、むろん、お拒^{こば}みのあろうはずはないが、改めて、御加盟のことおすすめ、一党の使者として、わざと夜中^{やちゆう}、推参^{すいさん}したわけでごさる」蔵人が、一息にいうと、右衛門尉も、

「範綱どの。ご返辞は——」と、つめよった。

「……」眼を閉じて考えている範綱の眉を、二人は左右から射るように見つめた。返辞によつては、太刀にものをいわせかねない気色であった。

（何と答えたらいいのか？）範綱は、当惑した。

平家がどうあろうと、政治がどう動こうと、自分は、

歌人である、武士でも政客でもない、また高位栄職をのぞんでもいない、歌に文学に、自分の分を守っておればよいのであると、常に、そうした渦中に巻きこまれることは避けるように努めているのだったが、周囲は遂にそれをゆるさないことになってしまった。

一言でも、大事の秘密を聞かれた時は、秘密に与^{くみ}すか、秘密に殺されるかどっちか二つに一つを選ばなければならぬ——。範綱はそれに迫られて、自身の窮地を感じるとともに、上^{かみ}は、法皇の御危険なお立場と、小さくは、奥の北殿に、はや平和に眠ったであらう幼い二人の者と、薄命な弟の若後家の境遇を、考えずにはいられない。

「……ご返辞のこと、一兩日、お待ちねがわれまいか」「ご即答は、できぬとか」蔵人の手は、太刀をにぎっていた。ただの握りかたではない、微^{かす}かなふるえすら現しているのである。

「法皇に仕え奉つる身、法皇のおこころのほども臣として——」いいかけると、

「あいや、六条どの、その儀ならばご懸念はいらぬ。秘中の秘、いいのこしたが、実は、当日の謀議には、上皇にも、おしのびにて院をお出ましある手筈……」その時、家の外で、樹の枝でも踏み折ったような音が、ぱりつと寂^{しずか}な夜気をやぶつて、この三人の耳を驚かした。

「やつ？ ……」右衛門尉^{うゑもんじょう}は、太刀のこじりを立てて、中腰になった。

一瞬のまをおいて、

(曲者くせものつ——)と、ふたたび遠い所で誰やらの声がした。ばたばたと屋外そとで——今度はやや間近な窓の下あたり、烈しい蹺音あしおとが駈けた。

暗い雨の音が、さあっと、その蹺音を前裁せんざいの木立のそよぎと追うらしい。

(曲者くせものつ) つづいて、

(お出合いなされつ——) 追いつめて、組みついたか、烈しい物音がする。喚わめく、打つ、そして、

(逃がすなつ)と、声が割れた。

蔵人くらうども、右衛門尉ゑいも、また主あるじの範綱はんづなも、思わず立ち上がっていた。そして、廊下の葎しとみを開け放って、「何事じゃつ」雨に向つて、範綱がいった。

しかし、それに答える違いとまもないように、木蔭や亭ていのまわりを、逃げる者と追う者の黒い影がみだれ合っていた。そのうちには、蔵人の供人ともびともまじっているらしかった。

いつのまにか、右衛門尉は袴はかまをくくり上げていた。武人らしく、さっと雨のなかへ躍り出て、築地つじを越えて出ようとしている曲者くせものをひっ捕えた。そして範綱と蔵人のあきれ顔をしている前へ、ずるずると引き摺ってくるのであった。

室内の明りは、吹きこむ風に消されていた。範綱は奥

へ向つて、

「紙燭、紙燭——」と、どなった。

ふすまや、几帳きちょうの蔭から、小さい燈火ともしびの光が、掌てに庇かばわれながらそこへ運ばれてきた。雨の打つ階梯きさはしの下に、曲者はねじ伏せられている。右衛門尉は、直垂ひたたれの胸紐をひき抜いて、曲者の両の手くびを背にまわして縛りつけていた。

「面おもてを上げい」泥土によごれた革足袋かわたびが、曲者の肩を蹴った。曲者は横に倒れたが、すぐに坐り直して、剛毅ごうぎな態度をとった。しかし俯向うつむいたきりで、顔を見せないのである。

蔵人は、廂ひさしの下にかたまつた自分の供人と、この家の召使たちを眺めて、

「こやつは、館やかたの者でござるか」

「いえ、当家には、かような者はおりませぬ」と、中にまじっていた箭四郎やしろうが答えた。

「すると、外から忍び入ってきたものじゃな」

「察するところ、お後あとを尾行つてきて、なお、去りやらず、築地つじを越えて入りこんだものと思われます」

「立ち聞きしていたか」

「されば、ちようど、お客間の窓の下あたりに佇たたずんで——」

「うぬつ」蔵人は、憎そうに、睨ねめつけて、「さては平家の謀者いぬじゃ。右衛門尉うゑもんゑい、打ちすえて、口をお開かせなされ」

「謀者いぬか、おのれは」右衛門尉は、曲者くせものの耳を引っ張つ

ていった。痛さに顔をしかめた曲者の顔が斜めに長く伸びた。その顔には誰も見覚えがなかったが、りりしい身支度や度胸をすえこんでいる態度を見ると、決して雑人ぞうにんや凡下ぼんげの輩ではない。平家のうちでも、相当な家の郎党にちがいがなかった。

「おのれ、誰にたのまれたつ。いえつ、いわぬかつ——」
右衛門尉のこぶしが、曲者の頭蓋骨ずがいこつを、三つ四つ撲なぐった。

六

見ている者すら面おもてをそむけるほど烈しい折檻せつかんを加えられたが、曲者は、頑として口をあけなかった。

「主人の名を申せつ」

「……………」

「頼まれたものの名をぬかせ」

「……………」

「何のために、立ち聞きしたつ。六波羅ろくはらのまわし者とは分っているが、誰のさしがねで、ここへは忍びこんだか」

「……………」

いくら拷問ごうもんしてみたところで、石にものを訊くようなものであった。

そのうちに、曲者は、うめいたまま、氣を失ってしまった。夜も更けてくるし、大きな声をだしているのは、近隣の館やかたに対しても、考えなければならなかった。

「忌々しいやつ……」と、右衛門尉は、手をやいたようにつぶやいた。そして、この曲者を、充分に調べあげる

まで、どこか邸内の仮牢かりろうに預かっておいてくれという。「承知いたしました」範綱は迷惑した。しかしこんな縄付なわづきを、一人の使者が曳いて歩けないことは分りきっている。平家の眼の光っている京の往来では——。

「箭四郎、この曲者を、裏庭の納屋へでも入れて、縛っておけ」

「かしこまりました」氣を失った曲者の体を、二、三人して雨の闇へ運んで行くと、右衛門尉は、足を洗って、席へもどった。そして蔵人とともに、ふたたび、新大納言の大それた謀叛むはんの思いたちを、熱心に説いて、範綱にも加盟をするようにすすめて、やがて、やっと立ち帰った。

範綱は寢所にはいつても、まんじりとも眠られなかった。自分は自分の分というものを知っている。不平をいだく北面の武士や、院の政客と聯脈をとって、栄権を夢みるような野望はさらさら持ったことがない。決して、明るい御世みよとは思わないけれど、歌人として自然を相手に生きている分には、これでも不足とは思っておらぬし、また、弟の遺した二人の幼子おさなこや若後家の将来ゆくすえなどを思えば、なおさら自分の進退は自分だけの運命を決するものではない。

考えは決まっているのである。そう初めから決している範綱であった。

だが、後白河法皇も、新大納言の私怨しえんにひとしい企たくらみにお心が傾いているというのは、彼として、自身以上の危惧きぐであった。万が一にも法皇が御加担となれば、臣

として眺めているわけにはゆかないことは当然である。おんみずから業火の裡へ、平家膺懲のお名宣をあげて、院の政庁を武人の甲冑で埋めるような事態にでもなつたならば、それこそ怖ろしいことである。

（ああ、どうしたものか）悪夢のなかに、範綱はもだえた。茜いろの都の空にまたしても悪鬼や羅刹のよろこび声が聞える時の迫りつつあるのではないかと戦慄した。

夜明けごろ、北の寢屋の奥に、朝麿がむずかるのであろう、幼子の泣き声がしばらく洩れていた。

（そうだ……。何よりは、法皇のおこころが第一、法皇さえおうごきにならなければ——）

うとうとと眠りぎわに彼は何か心の落着きを見つけていた。とたんに眠りに入つたのである。

眼がさめたのは従つて常よりも遅かつた。雨あがりの陽が強烈に眸を刺し、空は碧く、五月の若葉は、新鮮であつた。

七

院の御座所をさがつてくると、範綱はすこし眉をひらいた。法皇の御けしきによつては、随分、面をおかしでも御諫言するつもりであつたが、

（さすがは、老練でいらせられる、あの御炯眼ならば——）と、まずまず、安心して、いわんとすることは、暗示ぐらいな程度にとめて、御簾所を退がってきたとこ

ろであつた。

院を中心にして、策動し、流言し、暗中飛躍をする無数の政客や、武人や、策士を、法皇はやはり高い御座のうえからよく観ておられると、今さら心服するのであつた。もつとも、平治、保元の動乱期にあつて、法皇ほど、御苦勞もなされ、また、人間の表裏反覆と、烈しい権力の争奪を眺められたお方はない。

そういう法皇を奉じて、まだまだ、衰兆の见えない平家を廟堂から追ひ落そうなどとしても、所詮、躍るもの自身の自滅以外、何らの運動となるわけのものではない。まして、それが私怨と私慾の不平から結ばれた策動であるにおいては、言語に絶した不忠な悪謀みである。法皇の御運命がそういう野望家のために決しられるようなことでもあつては断じてならない。

範綱の意志は、そこに決まっていた。——だが、それを極言するまでもなく、法皇御自身が、院の内外にうずいている野心家の空気と、野心家の性格とを、ことごとく知り抜かれているようなので、

（このぶんなら——）と、彼は、自分の取越し苦勞を、むしろ恥じて、

（くれぐれも、御自重）と、ばかり奏して、あとは、いつもの和歌の話などして、心までが、はればれとしていた。

南苑の橘には、春のよごれを降りながした雨あがりの陽が強く照りかえしていた。伶人たちが、院の楽寮で、器樂をしらべているし、舎人たちは、厩舎の前にか

たまって、白馬に水を飼っていた。

「六条どの」後ろで呼ぶ者がある。廻廊の曲がり角に、待っていたように佇んでいた男だった。

「——おおこれは」見ると、故少納言信西の息子、浄憲法師という、才子で、人あたりがよくて、そして院のうちの切れ者といわるる人物だった。

時々、歌の詠草などを届けてよこして、評を求めるので、そのつど、歌はみてやるけれど、範綱とは、べつな世界に生きている人間であって、いくら永く知ってはいても、ほんとの知己にはなれないでいる男だった。

にやりと、浄憲は寄ってきた。何ということもなく、欄へ誘って丸柱に、背をもたせながら、

「何か、御内奏でもあって、御伺候か？」と、そろりと探りを入れる。

「いや、相かわらず、歌よみは、歌よりほかにはお相手のしようものうて……」範綱も、そっと、逃げると、浄憲はねちねちとした眼で、ぶしつけな正視を相手へ与えながら、

「ほ……。それにしては、だいぶ、お永い話であったの」

「きょうは、御興にいったとみえて——」

「歌の話を、お人ばらいまでせらるるとは、ご入念なことでだ」

「……………」

「ときに」と浄憲は、すり寄ってきた。そして、範綱の耳のそばで、

「新大納言の君から、なんぞ、そこもにも、耳うちが

あったはずだが……」

八

「ゆうべの使者から、あらましのことは、お聞き取りと思うが——」浄憲の眼は、しきりと、廻廊や南苑の人影へうごく。

人が来ないとみると、小声で、早口にことばをついで、
「どうじゃ、何とみらるる、平家の暴状、癩ではおざらぬか、忌々しゅうは思われぬか、小松重盛を左大將に、これは、まあ我慢もなるとして、その次男坊の宗盛——木偶に冠じゃ——猿に履じゃ。それを、一躍、徳大寺や花山院の諸卿をとび超えて、右大將に任ずるとは、なんと、阿呆らしい——」白馬が、遠くでいなないた。浄憲は、眸の小さい眼で、ぎらりと、あたりを見た。

「——この手で、まだまだ、勝手気ままに、清盛入道は、叙位除目を私するじゃろう。おそれ多いが、お上も、あるやなしの振舞、いわんや、吾々輩をや」

「……ちと、今日は館に、約束の客を待たしてもあれば」

「まあ」と、浄憲は、範綱の袖をとらえて、

「それと、これとは、事の大きさが違いましょう。貴所も、院の御信任あさからぬ臣下の御一名ではないか」

「こういう所では」

「いや、改まった場所では、すぐ、平氏の者がうるさい。……ではご一言、伺っておこう。新大納言のお考えに、そこもとは、ご加担か、お断りの肚かを」

「今は、申しかねる」

「二心おもちか」

「いや」

「さなくば、仰せられても、さしつかえおざるまい。か
ほどまで、平家の門葉もんようばらに、蹂ふみにじられ、無視され
ても、腹のたたぬやつは、うつけか、畜類ちくるいでおざろうぞ
よ」

「……………」

「法皇とても、おなじお気持ちでいらせられる。御気みけしき
にこそ出されぬが、お憤りはどんなにか、鬱積うっせきしてい
るのじゃ。さものうては、新大納言はじめ、われらど
う齒はぎしりしたところで、うごきはせぬ。……」

「……………」

「加盟こばにお拒みあることは、せんずるところ、法皇の御
意にそむき奉ることにもなる。……それでも、ご不承か」

「考えておきます」

「ゆうべも、そう仰せられたままと聞く」

「大事の儀は、大事に考えねば、ご返答はなりませぬ」

「賢いの……六条どの」

「さようか」

「ふ、ふ、ふ、ふ」

浄憲法師は、嘲あざむがごとく笑って、ついと、背を向け
た。

「では、いずれ再度——」すたすたと奥へ衣きぬさばきを切
って行った。

ほっと、虎口をのがれた気もちである。範綱は、誰に

も会いたくない気がして、いそいで、院の門を出た。

車寄くるまよせには、誰彼の参内の諸卿の牛輦くるまが、雑鬧ざつとうしてい
た。舍人とねりや、牛飼たちが、口ぎたなく、陽ひあたりの下に
争っている。

「箭四郎、箭四郎」供待ちへ、こう呼びたてて、範綱は、
あわただしく牛輦の裡へかくれた。そして、揺られゆく
途々に、ふとまた、不安なものを感じてきた。法皇のお
ことばに、もしや表裏があるのではないかという点だっ
た。浄憲法師には浄憲へいうように、また自分には自分
に対して下されるように、扱あじらわれているのではないか
という疑念である。

なぜならば、策士にかこまれている法皇御自身がまた、
ひとかどの策略家でいらせられるからであった。

九

それ以来、範綱は、病気といって引き籠っていた。

一室に閉じ籠こもっていても、世間の物音は、ごうごうと、
聞えてくる。

（また、山法師の強訴ごうそじゃ）

（白山の僧が、神輿しんよをかついで、延暦寺へ押しかけたそ
うな）

そんな噂は、もう珍らしくもない。政治好きな法皇で
さえ、山門政策には手を焼かれて、

（双六すごろくの賽さいと、山法師ばかりは、朕ちんの心のままにならぬ）
と、嘆じられたという。

その僧徒たちが、示威運動をやったり、延暦寺の座主が、そのために流されたり、院の政務も、洛内も、騷擾を極めていたので、新大納言一派の暗躍も、五月中は、ついに、法皇へはたらきかける機会がなくて、過ぎてしまった。範綱は、ひそかに、

（いずれも、一時の不平の寄り集まりじゃ、このまま、自壊してしまうかも知れぬし、そうなれば、かえって法皇のおんためというものだが）近ごろ、どこことなく鬱結しているものが、院のほかから炎を噴いて出ることが祈られた。

だが、最初に、密使としてここへ訪れた多田蔵人は、洛中の騷擾にまぎれて、あれからも、しきりと一人でこっそりと訪ってきた。

「——お不快なそうじゃが、だいじにせられい。いやなに、強ってお目にかからいでもよろしい。拙者は、お預け申してある平家の謀し者めを、調べて立ち帰る」そういつて、家人に裏庭へ案内をさせた。

いつぞやの雨の夜、大騒ぎをやって捕えた曲者は、一時、納屋へ押し籠めておいたが、家人が物を出し入れするごとに不安だし、もし逃げられて、六波羅へ、あだ口をきかれたらばお館の御運命にもかかわるといつて、箭四郎が、急ごしらえの牢を作った。空いている厩へ、材木を組み立てて、その中へ抛りこんでおいたのである。

「見るからに、強情そうな面がまえよ。きょうこそ肉をたたき破っても、口を割らせてくれるぞ」蔵人は、牢の外から宣言して、曲者を、縄目のまま、外へ出させた。

馬を打つ革鞭を持って、

「こらっ、下司」

「……………」

「六波羅のまわし者とは分っているが、誰にたのまれたか。何を探れと、いいつけられたのか」

「……………」

「いわぬかつ」ぴしいと、鞭が一つ鳴る。

「ぬかせつ」

「……………」

「ぬかさぬかつ」二つめが唸る。鞭のうなるたびに、曲者の顔に赤いすじが一つずつ腫れあがった。そして、しみには、紫いろになり、耳や、唇や、いたる所から、血しおが流れた。

「うーむ…………うーむ…………」ついには、大きなうめき声と、鞭の音とが、根くらべをするだけであった。蔵人は、精をきらして、

「よしつ、きょうはこれで、帰るとするが、また来るぞ。生命が惜しくば、口をあくことだ。考えておけ」いいすてて、帰ってしまった。

館の者たちは、眼をふさぎ耳をふさいでいた。しかし、こんな程度のことは、今の京洛の内には、ざらに行われていることだ。見馴れている蔵人などは、まだまだ手ぬるいと思って帰った様子なのである。

意地になって、蔵人はそれから後も、たびたびやって来ては、厩^{うまやう}牢^{ろう}の曲者を拷問^{ごうもん}した。

曲者の体は、そのために業病^{ごうびよう}のように腫れあがって、やぶれた傷口は柘榴^{ざくろ}の如く膿^{うみ}み、そこから白い骨が見えるほどだった。

「ころせ」曲者はいった。

そしてまた、打てば打つほど、あざ笑って、

「これくらいな折檻^{せつかん}で、口を割るような男に、なんで大事な役目を主人が申しつけるものか。無益なことをせず、ひと思いに、この首を落せ」むしろ自分の克己^{こつきしん}心を誇るかのように彼は屈しなかった。

ついには、蔵人の方が、根気も尽き、不気味にもなつて、だんだんに足が遠くなっていた。

六月に入った。葉ざくらの葉蔭^{さんご}に、珊瑚^{さんご}いろの赤い実^{あか}が、陽^ひに透^すいて血のように見える。熟^うれきつた桜の実は、地にもこぼれていた。

十八公廨^{まっまろ}は、それを、小さな掌^てにひろい集めていた。

すると、裏庭の奥で、

「和子様^{わこさま}——」と、誰か呼ぶ。

「和子様……」何度目かの声に、十八公廨はやつと気がついたように、無邪気な目をやって、辺りを見まわした。

誰も、人影はなかった。だが、やや脅^{おび}えたらしい童心は、急に、白昼^{まひる}の庭の広さが怖^{おそ}くなったらしく、あわて

て、館^{やかた}の方へもどりかけた。と——また、

「和子様、ここですよ」

「? ……」十八公廨はふりかえって、じいっと、厩^{うまやう}牢^{ろう}の中にみえる人間の影をふしぎそうに見つめていたが、やがて、怖^{こわ}々と寄^よって行^いって、

「おまえは、誰?」

「わたくしは、お館にしのび込んで捕^とまった曲者^{くせもの}ですよ」

「曲者さん?」

「名まえではありません、いわゆる曲者です。けれど、和子様には何も悪いことはしませんから、安心して、少しここで遊^{あそ}んで行^いってください」

「? ……」

「わたしは、淋しくてたまらないのです。いま、和子様のすがたを見たら、この胸が張り裂けるようになりまして。私にも、ちょうど和子様ぐらいな子があります。また私の御主人の息子様も、和子様よりすこし年上ですが、やはり無邪気な少年です」

「曲者さん、おまえは、どうしてこんな所へ入っているの」

「忠義のためです」

「忠義のためなら、よい侍と皆が賞^ほめてくれるでしょう」
「そうは行きません、味方に忠義な侍は、敵にとれば憎むべき悪魔に見えます」

「では、曲者さんは、悪魔なの?」

「ここに捕^とわれている間は」

「外へ出れば」

「善人です。少なくとも、悪人ではありません。その証拠には、和子様は私とうして話していてもちっとも恐いことはないでしょう。あなたに危害は加えませんか——」

「初めは、怖ろしかったが、もう何ともないよ」

そういつて、その言葉を証拠だてるように、十八公麿は、牢の隙間から掌を差し入れて、

「曲者さん、桜んぼを、上げようか」

十一

にこと笑つて、

「——これは甘そうですね」曲者は、桜の実の一顆を口にいでて、ぽつりと噛んだ。

永い牢獄の飢えと苦熱に渴いた舌に、一顆の桜の実の汁が、何ともいられない物の味を走らせた。思わず、四顆、五つ顆。

「これは、うまい」むさぼるように、掌のうえの紅玉を口へ入れて、胚子を吐きちらした。

食物にも、人情にも、渴き切っているらしい曲者のよろこびかたを見ると、十八公麿は、どこかへ走って行った。やがてまた、そこへ戻ってきた彼の手には、草紙の反古につつんだ麦菓子がつつまれていた。

「お食べ。——お菓子」

「えっ」牢格子の隙間からそれを見た曲者の眼は飛びつくように光っていた。

「私に菓子を下さるのですか。ありがとう！　こういう所に永く押し込まれていると、気が狂うほど、甘い物が、欲しくなります。……ああ、ありがとう！」おののく手にそれを取ると、獣が人の蹙音を憚るように、四辺を見まわして、口の中へ一つを押しこんで、残りを懐中へかくしてしまった。

十八公麿は、去りがてに、その前へしゃがみこんで、

「曲者さん、おいしいの」

「はい、これで、死んでもようございます。食物に飽いている平常の頭では考えられないほど、食物の尊さがわかりました。ああうまかった」舌つづみを打って、

「慾には、これで、家にいる妻子の顔を一目見て死にたいと思いますが、それは煩惱と申すものですから諦めています」

「………」

「和子様、私が首を斬られたら、どうぞ、私の髪の毛を一すじ切つて、御門の外へ捨ててください。——西風のふく日に、私の髪の毛は、妻子のいる家へ帰ってゆきます」

「おまえは、そんなに、妻子の顔が見たいのかい」

「それは、和子様でもお分りになるでしょう。もし、和子様のお父上が、よそへ行ったまま、いつまでも帰らなかったら、和子様はどう思いあそばすか」

「………」十八公麿は、突然、牢格子へ手をかけて、そこを押した。しかし牢は開くはずもなかった。

「和子様、和子様、何をするのですか」

「おまえを、ここから、出してあげようと思って——」
「飛んでもない」曲者は、首を振った。

「私が、牢を破って逃げたらば、新院の大納言や北面の武士たちから、あなたのお父上は、裏切者と睨まれて、お生命いのちがありません」

「では、おまえは、ここを出たくはないの」

「出たいのは山々です。……けれど、私が助かれれば、和子様のお父上に迷惑がかかると思うと、逃げる気にもありません」曲者は、そういつて寂然じやくねんと首をたれていたが、やがて首を上げると、発狂したように、牢の外へ向って呶鳴なうめいった。

「お館やかたのうちへ申し入れる。どなたなりと、お出てください。火急申しあげたいことがござる！ どなたなりと、お出合ください！」

十二

厩うまやう牢ろうからの喚わめき声こゑに、

「なぜ騒さわぐかつ」箭四郎やしろうがまず駈かけけだしてきて、曲者くせものを叱しかった。

何事かと、範綱のりつなも、奥から姿をあらわした。曲者は、牢格子にすがって、

「お館へ、申しあげたいのでござる。今日までは、骨を砕かれ、肉をやぶられても、この口は開あくまいと、心を夜叉やしやにし、固く誓ちかっておりましたが、十八公磨ま様のやさしさに、あわれこの夜叉やしやも、弱い人間の親に立たち回かえりま

した。いわずにはおれぬ氣持が急なのでござる。お聞きとり下さい。それがしの自白を——」と、叫ぶのだった。その声には真実がある。その顔には涙がながれている。範綱はいった。

「箭四やしろ、牢から出してやれ」

「えっ、出しても仔細はございませぬか」

「縄も解いてやれ」箭四郎は、いわれる通りにした。縄を解くだけは不安な氣もしたが、曲者は神妙だった。範綱の足もとに両手をついたまま、しばらく、男泣きに泣いているのであった。

わけをただすと、曲者は、十八公磨のやさしい童心に對して、醜惡な自己の姿がたまらないほど恥かしくなったのだという。奉公のためとはいえ、呪詛じゆそと虚偽の仮面をかぶって、牢獄につながれている自分の浅ましい姿も恥かしいし、また、家にのこしてある妻子に対する思慕にも耐えられなくなったというのである。

「もう何をかくしましょう、わたくしは小松殿の御内人みうちひとです。成田兵衛なりたのひょうゑの郎党で庄司七郎しょうじしちろうという者です。先年はまだ和子様が日野の里においでのところ、無礼を働いたこともあるので、うすうす、和子様のお顔は存じ上げておりました」

「ではやはり、藏人殿のご推察どおり、六波羅方の謀まわし者じゃな」

「いかにも」と七郎は、きっぱりいった。

「新院大納言が、相国しょうこくに不満をいだいて、何やら密謀のあるらしい氣配、夙とく、それがしの主人成田兵衛が感

づいて、あの衆の後を尾行よというおいしいつけなのです。すでに、小松殿も、それをお気づきある以上は、もはや、事を挙げて、成就せぬことは、火をみるよりも、瞭かです。決して、お館には、さような暴挙にご加担なされぬように……。申しあげたいといったのは、その一事です」

「ほう、それでは、すでに小松殿を初め六波羅では、新大納言の策謀を感じておられるのか」

「一兵なりと動かしたらばと、手具脛ひいて、待ちかまえているのです」範綱は心の裡で、

（あぶない！）と、思わず大息につぶやいた。さしあたって不安になるのは、法皇のおん身であった。あれほど、仰せられたことであるから、新大納言一味の策にのせられることは万あるまいとは思うが、

（もしかして？ ……）という気もしないではなかった。

「よう教えてくれた。——箭四郎、この曲者を、裏門から放してつかわせ」範綱は、そういいすて、あわたたしく自分の室へかくれた。

十三

やがて、玄関のほうで、
「箭四つ、箭四つ」と呼ぶ声がした。

箭四郎は、曲者の七郎を、裏門からそっと放してやつたところだった。

「はいっ」駈けてゆくと、玄関の式台には、範綱が直垂

を改めて立っていた。

「馬をっ——。急いで」

「はっ」箭四郎は、厩から馬を曳きだしたが、病氣と偽ってひき籠っている主人が、何でにわかに外出を思い立ったのか、そしてまた、世間の耳目にも憚りはないのかと、ひとりで危惧していた。

「いそげよ」門の外へ出ると、範綱は、鞍の上から再びいった。

あぶみの側へ寄って、馬と共に駈けながら、箭四郎が、
「お館様」

「なんじゃ」

「世間へ仮病が知れても大事ございませんか。裏道を通りましょうか」

「それには及ばん」

「して、お行く先は」

「仙洞——」さては参内であったのかと彼は初めて気がついた。仙洞というのは、後白河法皇の離宮である院の別名なのである。六条からはそう遠くはない。しかし本道の五条大橋を越えてゆくと、橋の東に小松殿の薔薇園があり、その向い側には入道相国の六波羅の北門があつて、その間を往来するのはいつも何となく小気味がよくないし、肩身の狭い気がするものであつた。

わけでも、今日は主人が何かつよい決心を眉宇にもつて、にわかに参内するらしい途中でもあるので、箭四郎はいそげといわれながら、道を迂回して、三条の磧から仮橋を越えて、十禅師の坂へかかった。

「箭四」

「はい」

「きょうは、たしか二日じゃの」

「六月二日でございます」

「……………」範綱は、時刻を考えるように、陽を仰いだ。

陽はずっと加茂川の末のほうへ傾いている。

「駈けるぞ」一鞭あてると、箭四郎は坂道にとり残された。やっと、追いついてみると、もう仙洞御所の東門に、主人の姿はそこになかった。

範綱は、院の中門へ、駈けるように急いで行った。そして、

「あつ……」と、立ち竦んでいる。

北の中門の外に、お微行の鳳輦が横づけになっているではないか。法皇は、ひそかにお出御になろうとしている。

いずこへ？ それは範綱には分っていた。六月二日の参会ということは、いつか多田蔵人の口から聞いていたのである。それを思い出したれば急いで来たのであるが、ここへ来るまでは、よもや、法皇がいつかのお言葉をひるがえして、新大納言や北面の不平武者にそそのかされて、そんな会合へ敢てお微行をなさろうなどとは、十中の八、九まで、ないことと信じていた。

けれど、事実は、範綱の正直な考え方とはあべこべだった。やがて、薄暮のころになると、武者所の人々がひそかに支度をととのえて、法皇の出御をうながした。

範綱は、樹蔭に身をひそめて、その動静を、じっと

うかが
窺っていた。

十四

藍草の汁をしぼったように、水っぽい夕闇が四圍をこめてきた。燭の影が、深殿の奥から揺れてきた。法皇のおすがたらしい影が、側近の人々の黒い影にかこまれて、お沓へ御足をかけている。

「しばらく——」そんな大きな声を出すつもりはなかったが、範綱は思わず大声でさげびながら、驚く人々を割って、法皇のまえに、平伏した。

「誰ぞ」法皇は、いちど、お沓へかけられた足を引いて、廻廊の上へ、立たれた。

「六条の朝臣らしゅうござります」側近がささやくと、「範綱か」

「はっ」

「病氣と聞いていたが……」

「仮病でござりました。上を、偽りました罪、いくえにも、お罰し下さりませ」範綱は、そういつて、さらに、語気をあらためて諫奏した。

「きょうは六月二日とあれば、さだめし、鹿ヶ谷の俊寛僧都の庵に衆会のお催しあることと存じまするが、院の御深くに在わしてすら、道聴途説、とかく、世上のうるさい折から、さような集まりの席へ、しかも夜中のお出ましはいかがなものかと存ぜられまする。——それについて、折り入っておん耳に入りたいこともござりま

すゆえ、しばらく、お見あわせ遊ばして、お人ばらしいの儀願わしゅう存じまする」

法皇は、黙っておられた。

先に、範綱へ仰せられた言質もあるので、やや気まり悪く思われたようなお顔いろでもあった。

新大納言に同心の側近の者や、侍所の人々は、一文官の、しかも歌よみの範綱が、何を、かような大事に、^{くちばし}嘴をだすかと、憎むように、睨めつけていた。

法皇は、板ばさみになったお顔つきで、ちよつと、当惑していられたが、範綱が沓のまえに死を賭して坐りこんでいる姿を見ると、むげに、^{しりぞ}退けられなかった。「しばしの間、遠慮せい」側近は、お声の下に、無言の頭^{かしら}を下げて、去るよりほかなかった。

範綱は、その人々が去るのを待ってから、すでに、新大納言に謀叛^{むほん}の下ごころがあることを、平家方では、察知しているということを、今日の庄司七郎の言葉を例証として、つぶさに、内奏した。

法皇は、さすがに、顔いろを変えられた。御自身が、謀主^{ぼうしゅ}になっても亡^{ほろぼ}したいほど憎悪する平家ではあるが、それほどにまた、怖ろしい平家でもあるのだった。わけ、法皇は清盛入道が感情的に激発したらどんなことでもやりかねない男であるということを、幾つもの実例で骨身にこたえて御承知なのであった。

「やめよう」すぐ、こういわれた。

たちまち、鹿ヶ谷^{しかがや}への行幸^{みゆき}は、沙汰やめになった。武者所の人々は、

「いらざる諫言^{かんげん}だてをする歌よみめ」と、範綱を憎み、「このままでは、味方の氣勢にかかわる」といって、調^{ととの}えた御輦^{みくるま}を、空のまますめて、松明^{たいまつ}をともし、暗い道を鹿ヶ谷^{しかがや}の集まりへと急いで行った。

だが、その列の中にいた多田蔵人^{ただのくらうど}だけは、途中から闇にまぎれてただ一人どこかへ姿を消してしまった。

十五

法皇の行幸^{みゆき}はなかったが、すでに、暮れる前から、鹿ヶ谷の俊寛^{しゅんかん}の山荘には、新大納言以下、不平組の文官や武官が、おのおの、微行^{しのび}のすがたで集まっていた。

「六条の範綱^{のりつな}めが、いらざるさしで口を——」と、人々は、空御輦^{からみくるま}をながめて口々に怒ったが、

「なに、法皇のお心変りは、時雨^{しぐれ}のようなもの、降ると思えば照る、照ると思えば降る——。明日^{あす}にてもまた、磨^{まろ}が参内して御心を励ませば、必ず次の集まりには、御参会^{ごさんえ}あるにちがいない」

大納言成親^{だいなんごんなりちか}は、自信をもつて、席の人々へいった。

浄憲法師^{じょうけん}も、相槌^{あいづち}を打って、

「よう喩^{たと}えられた。まことに、法皇の御気色^{みけしき}は、照り降り雨、われらが側近にあれば、また変る。お案^{あん}じあるな」席には、近江入道蓮浄^{おうみの}、山城守基兼^{もとかね}、平判官康頼^{へいはうがん}、その他の人々がいた。

主^{あるじ}の俊寛は、折角すすみかけた平氏顛覆^{てんぷく}の相談が、法皇のおすがたの見えないために、やや出鼻の白けたよ

うな様子を見て、

「軍立てのことは、次の会に改めて謀るといたして、今宵は、盟約の酒もりとしよう。ご異議ないか」

「よかろう」新大納言は、虚勢を張って、

「祝おうではないか」と、音頭をとった。やがて、酒杯がまわされると、

「亭主殿——、ご馳走をなされ」と、俊寛へ向って、浄憲法師がよびかけた。

「馳走とは？」

「猿楽など」

「心得申した」俊寛は立って、おどけた手振りをしながら舞った。笙鼓を鳴らして、人々は歌う。

住吉四所のおん前には

顔よき女体ぞおわします

男は誰ぞとたずぬれば

松ヶ崎なるすき男

「ようできた、ようなされた。——次には、新大納言の君こそ、遊ばされい」

「そのこと、そのこと」手を引き出されて、

「さらば、舞い申す」と大納言は床を一つふんで、

この時、都に流行るもの——

「やんや、やんや」

流行るもの——

肩当、腰当、烏帽子とどめ

襟の立つ、片さび烏帽子

布打の下のか袴

四幅の指貫

武者の好むもの

紺よ、紅

山吹、濃い蘇芳

茜、寄生樹の摺

よき弓、胡籥、馬鞍太刀

遊女の好むもの

雑芸、つづみ、小端舟

大笠かざして

鱸取り女

「あつ！」酒の瓶子を踏んで大納言がよろめくと、人々

は、歌の調子をそのままつづけて、

「たおれた！ たおれた！」

「瓶子がわれた」

「瓶子がたおれた」

「わはははは」

「はははは」そして、めでたいと、はしゃいでいい合った。

叡山の騷擾はその後もつづいていた。院政の威光も、平家の権力も、山門の大衆だけには及ばない有様なのである。

天台千年の法城は、帝室や、国家からの破格な待遇に狎れて、仏徒は思い上がっていた。平家一門が、人臣の分を忘れて、

この世をば我が世とぞ思う——といったような思い上がりと同様に、仏徒もまた、仏弟子の分をわすれて、政治を持ち、武力をすら持つて、社会を仏徒の社会と思ひ違えているかのように傲慢で、理窟ッぽくて、特権意識のみが旺だった。

（山門を討て）という声は、その前から北面の侍たちの間に起っていた輿論であった。新大納言や、浄憲法師や、鹿ヶ谷に集まった人々は、その政機を利用して、にわか

に、山門討伐の院宣を名として、軍馬の令をくだした。物の具を着けた武者たちは、夕方までに、数千騎、御所のまわりに集まった。武臣のうちでも、重要な数名の将のほかは、院宣のとおりになって、叡山を攻めるのだとばかり思っていたらしい。

「今宵こそ、山法師ばらに、一泡ふかせてくれねば——」

と、弓弦を試し、太刀の革を巻いて、夜を待っていた。

だが、院の中枢部の人々の肚は、敵は叡山にはなくて、六波羅にあった。山法師を討つと見せて、平家一門へ私怨と公憤の火ぶたを切ろうとする密策なのであって、刻々と、夜の迫るのを、待っていた。

その仙洞御所と、清盛のいる西八条の館とは、目と鼻の先だった。物々しい弓馬のうごきは、すぐ六波羅の御家人から、

「何事か、院の内外に、侍どもがただならぬ軍支度にござりますぞ」と注進されたが、すぐ、次々に来る物見の者からは、

「あれは、先ごろからの強訴一件で、院のおさばきに楯つく山門の衆を捕り抑えよと令せられて、それで御発向の兵馬と申されております」と、訂正した報告が、一致していた。

清盛は、聞くと、

「さもあるはず」と、うなずいた。

誰が、自分のすぐ足許から、平家の今の権勢に対して、弓をひくほどな不敵な行動をしようと、安心しきっているのであった。ところが、

「お取次ぎねがいたい。折入って、火急、相国へお目どりの上で、一大事を、お耳に達したいと駆けつけてきた者でござる」と、息をきって、西八条の邸に訴え出た者があった。侍たちが、

「名は？」と問うと、

「院の北面に勤えまつる多田蔵人行綱でござる」と、い

った。驚いて、その由を、主馬判官盛国まで取次ぐと、「なに、蔵人が」不審顔をして、平盛国は、奥から出てきた。蔵人は、彼を見るとすぐ、「お人伝ひとづつてには、ちと申し兼ねる大事です。相国しょうこくへ直々じきじきに、お会わせ下さるならば申しのべるし、さもなくば、このまま立ち戻る所存でござる」と、昂奮した声でいった。

二

蔵人は、庭へまわされた。庭には、侍たちが、きびしい眼をして、彼の姿を、一歩一歩監視していた。

「坐れっ！」大喝だいかつされて、蔵人は、

「はっ」思わず、敷物も求めずに、大地へひざまずいてしまった。

ふと見ると、相国しょうこく清盛は、中門の廊ろうまで出て、立っていたのである。五尺二、三寸の中背な人物で、体も肥満質なほうではない、むしろ肩が尖とがっているし、頬骨は高く痩せているといったが近いであろう。それでいて、廊ろうの天井へいっぱいになるほど、偉おほく見えるのであった。左右の足もとに、ずらりと並んだ近侍たちの頭ずが低いためもあるし、また、彼の一身にかがやいている勢威というものが、そう見せるのもあろう。

色は白く鼻ばしらが鋭いほど通っている。平家一門の多くの者がそうであるように、彼もどこか貴族的な美男型の容貌をそなえているが、きかない気性は大きな唇元くちもと

にあらわれているし、武士らしい睨みは、やや窪くぼんでいる眼と、毛のこわい眉毛まゆげにあり余っていた。

「蔵人行綱ざんぎょうというか」清盛はいった。

「はっ」

「――めずらしい者が舞い込む……」と、これは独り語のように笑いながらつぶやいて、

「院に仕える武将が、忍びやかに、この西八条へは、何しに来たか」

「されば……」蔵人の声は渴かわいていた。

「きょうの昼中より、あわただしゅう、院の内外に軍兵を催されておる仙洞せんどうのさまを、相国には、なんと御覧ごらんぜられまするか」清盛は事もなげに、

「山攻めと聞くが」といった。

「滅相もない偽りざたです」

「なに、嘘うそじゃと」

「まことは、真夜半まよなかのころを計って、この西八条の邸を取り巻かんとする軍いくさの催しでござる」

「わはははは」清盛は、扇子で膝を打ちながら肩を揺すぶって、哄笑こうしょうした。

「こやつ、なにを賢さかしげに、訴えるかと思えば、夢でも見てきたような囁言ささやかし。この清盛に弓をひく者はおろか、西八条の邸に小石一つ投げつけ得るほどの者が、天下にあろうか」

「その御油断こそ、院中の不平もの輩ばうが窺うかがう隙でござります」

「院中の不平者とは、誰をさしているか」

「新大納言を初め、浄憲法師、その他、北面の侍ども、挙つて、世を不平といたし、相国の御一門をば、呪つております」

「まったくか」

「なんで、かような大事に、虚言を構えましようや。山攻めとは、怖れながら、間近の敵を詐る詭計にござりまする」

「法皇は、それを、ご存じか」

「俊寛法師の鹿ヶ谷山荘にも、ひそかに、行幸ましまして、このたびの盟約には、ひとしお、お力を入れているように承りまする」

清盛は、入道頭を、ついと横へ向けた。そして眼下の蔵人はもうその眼の隅にもないように、侍部屋の廊へ向つて、

「筑後っ。筑後やあるっ」と、呶鳴った。

その声に威圧されて、蔵人は、白洲に居たたまれなくなった。思わず腰をうかして、挨拶もせず、こそこそと中門の方へ走って消えようとする、清盛が手の扇子を上げて、背後から叱咤した。

「しゃっ！ 捕えて置けっ」

三

侍たちが、跳びかかって、彼のきき腕をねじ上げると、「あっ、それがしに、なんのお咎めをつ」蔵人は、もがいた。

清盛は、答えもしない。筑後守貞能に向つて、何事かいつけていた。貞能が去ると、左馬頭行盛が呼ばれ、行盛があわただしく廊を駈けてゆくころには、もう右大将宗盛や、中将重衡などが、庭や、侍部屋に姿をあらわして、何事かさけんでいた。

一瞬のまに、西八条の邸は、兵の殺気にみちていた。甲冑、弓箭を、身によろつて、またたく間に、兵に、兵の数が加わつて、殖えてゆく。

こういう空気はまた、清盛の最も好むことらしかった。彼の眼は、別人のように耀やいて、奥の間を閉じこめた。そこへ召された安倍資成は、二十騎ばかりを具れて、仙洞御所へ、急使として駈けて行った。

また、烏丸の新大納言の宿所へも、これは、平服を着た身分のひくい者が、書面をもつて、使いに行った。

大納言は、何食わぬ顔をして、真夜半の火の手を自身の住居から待っていたのである。そこへ、相国からの使いが来て、

（即刻、お出でを乞う）とあるので、

「ははあ、これは、山攻めの結構を聞いて、相国が、法皇を申し宥めようとする肚とみえる」

そうつぶやいたことだった。

行かなければ、疑われる。大納言は、常のとおり、布衣、冠を婀娜かに着なして、鮮やかな輦に乗った。雑色、牛飼、侍十人以上をつれて、すぐに、西八条へと行った。「や？」夜の巷は、真っ赤だった。

諸方に、篝火が立っている。暗い小路には、松明がい

ぶっていた。道に捨てられてある武器や、人間の首や、胴などを、幾つも見た。

「あらわれたか」と、大納言は、狼狽した。そして、

「返せつ。輦くるまを、もどせつ」にわかには、さげんだ。

しかし、もうそこは、五条の平家の庁ちやうに近くもあつたし、いつのまにか、辻々からついてきた甲冑かちゆうの兵が、道の前後を取り巻いているのであつた。

「新大納言の卿きみにおわすか」兵の中から、一人の将が、薙刀なぎなたの柄えをもって、簾みすを刎はねあげた。大納言は、おののいて、虚勢も張れなかった。部将は、

「それつ、お迎え申せつ」

「あつ——」と、兵は、輦くるまにたかつて、牛を打ち、轆轤ながえをつかみ、また輦くるまの後を押して、

「牛頭ごず、馬頭めずだ」

「地獄車だ」

「押せつ」

「曳ひけつ」わあっと、声を揚げながら、輦くるまのまま、西八条の邸の中門さかの際きわまで、ぐわらぐわらと引っ張りこんだ。

武者の手が、大納言を地に引き摺ずり下ろした。

「縄をかけまするか」問うと、廊のうえで、

「縄目には及ぶまい」清盛の声である。大納言の顔いろはもう生きた人間のようなではなかった。

四

辻々で、小戦こぜりあいが始まった。不意に逆襲さかよせをくつた院の兵はもろかった。

一群れ、一団ずつ、武器を奪とりあげられて、降人かうじんとなる組があるし、反抗して、大薙刀おなぎなたで、首を打ち落されて、いる者や、組み敷かれて、

「斬れつ、おれの首は宙をとんで、西八条の入道に、噛みついてやるぞつ」と、呪いを、絶叫しながら、朱あけになつてすぐ路傍の死骸になる者もある。

その中を、首魁しゅかいの浄憲法師が、素裸足すはだしのまま、院の内から縄がらめになつて突き出されてきた。

近江中將おうみのちゆうじやう蓮浄れんじやう、山城守やましろのかみ基兼もとかね、その他の文官や武官も、ぞくぞくと衣冠いかんや太刀を剥はがれて、西八条へ召し捕られてゆくし、また、鹿ヶ谷の俊寛も、手あらい雑兵に縛いめられ、犬か牛のように、鞭むちで打たれながら、引つ立てられてきた。

清盛が、その人々を、どんな憎悪と怒りの眼をもつて見たかは、想像に難かたくない。

浄憲法師に向つては、
「この畜類きゆうるいめらが首、滅多には斬るな。手足を、枷かせに噛かませ、糺問きやうもんに糺問した上で、河原にひき出して、頭を刎はねい」と、罵ののした。

浄憲は、自暴自棄になつて、白洲しらすから口を裂いて吠えた。

「やよ清盛、そもそも、ご辺は、故刑部忠盛の嫡子であつたが、十四、五の頃まで出仕にもならず、京童は、高平太の、眇のといつておつた。さるを保延のころ、海賊兵二十人ほど搦め捕つた恩賞に、四位の左兵衛佐となつたのですら、その当時、人は過分なと沙汰してあつたに、その後は、とんとん拍子に、殿上のまじわりもあり、今は太政大臣の高位にお在すこと、自身にても、不思議な冥加とは思わぬかつ。それを、なおこの上にも一門の榮達ばかりを計り、すこしの善政も施さないでは、やがて、この西八条の大棟に、怨嗟の炎が燃えつかずにはおるまいぞよ。……ははは、平家の亡ぶ日が、眼に見えるようだつ。おぬしの入道首が磧の烏に啄まれる日が、眼に見ゆるわ！」清盛は、あおい眉間をして、「しゃつ！ その口を八裂きにしてくるるぞよつ。侍ども、この人非人めの皮膚を剥いで、焼けたる金鞭をもつて打ちすえろ」廊から唾をして、奥にかくれた。

空いている物の具部屋の板敷の上には、大納言が泣きぬれて、人心地もなく仆れていた。入道は、蹙音あらく、そのの障子を開けて、彼へも、いった。

「大納言、大納言。恩を知るをもつて、人は人間とこそいえ、恩を知らないでは、畜生にひとしい。ご辺は、平治のころにも、すでに誅せられる所であつたのを、小松内府が、身に代えて、その首をつないでやったのではないか。さるを、その恩を忘れて、当家を傾けんとは、憎い為打。見せしめには、こうして進ぜる」大口袴の片脚をあげて、つよく蹴つた。そして、

「まだ、かようなことでは、腹は癒えぬ。誰ぞある！ この恩知らずめを、もつと、もつと、喚かせいっ」具足をつけた兵が、板敷へ踏みこんで、大納言の手足をつかんだ。大納言成親は、清盛の望みどおりに、ひいっ——と声をあげて、もがき喚いた。

五

憎む者というと、その髪の毛を抜き、肉を裂いても、清盛の怒りは、容易に解けないのであつた。余憤は、院の法皇にすら向けられて、西八条は、夜明けにかけて、いよいよ兵氣が旺になる。

薔薇園の邸にいる子息の小松重盛は、それを聞くと、悲壮な決意をもつて、父の清盛を訪ずれた。そして、面を冒して、重盛は、聖徳太子の古言をひいて、憤怒の父を諫めた。

それは、聖徳太子の憲法十七条のうちにあるおことばだつた。

人、みな心あり

心、各々執あり

彼を是し

我れを非し

我れを是し

彼を非す

是非の理、誰か定むべき

相共に賢愚なり

環のごとく端なし

たとえ、人怒るとも
わが咎をこそ恐れよ

清盛はうつ向いて、内府の声を聞いていた。大納言を殺すことは、思いとまったらしい。しかし、怒りが解けたのではない。

やがて、囚人車に乗せられて、都から遠国へ差し立てられてゆく流人が毎日あった。京の辻は、日ごとに、それを見物する者で雑鬧した。

新大納言は、備前の児島へ。

近江の蓮浄、山城守基兼、式部正綱、等々々、一介の平人になって、無数の檻車が、八方の遠国へ、生ける屍を送って行った。

わけても、極刑にひとしい嚴罰をうけたのは、鹿ヶ谷の俊寛であつた。流されて行く先が、鬼界ヶ島と聞いただけでも、人々は魂をおのかせた。

六条の範綱は法皇の御行動を、あやうい業火の淵からおすくいした心地がした。もしあの時、西八条へ一筋の矢でも射いてから法皇が、その軍勢のうしろにおいでになると分つたら、清盛の手は、院中にまでのびて、勢い、法皇のおん身にまで、どんな禍を及ぼしたか分らない。「おそろしい世の中だ」と、今さらに思うのだった。

つとめて、身を慎しみ、処世の一步一步に、細心な自適を心がけるよりほかはない。

「箭四、箭四はいるか」ふと、思いついて呼ぶと、ほかの召使が、

「箭四郎どのは、今しがた、和子様を背に負って、流人の檻車を、見物に参りました」やがてその箭四郎が、十八公麿を負って、帰ってくると、範綱は、「和子に、さようなものを見せてはならぬ」と、いつて叱った。

しかし、十八公麿は見たがるのである。六条の館は、以前の日野の里とはちがつて、都の町中である。眼をふさぎ、耳をふさいでも、ごうごうと騒がしい世態の物音や、恟々と脅える人々のうわさなどが、敏感な童心のかがみに映らないはずはなかった。

母の病氣のために、久しく郷里に帰っていた侍従介も、やがて、帰ってきたが、わずかな間に激変した都のさまや、人間の栄枯盛衰におどろいて、

「こんなふうに、世の中が、三年も経ったら、一体、どう変るのでございましょうな」しみじみと、無常のつぶやきを洩らしていた。

壁は、墨汁すみずみによごれていた。四側よかわに並んだ机には、約二十人ほどの学童が、強しいて姿勢を正して、師の講義を聞いていた。

「孝経こうきやう」であつた。日野民部ひのみんなぶの講学が終ると、

「先生……」と、次の部屋に待つていた学僕が、側へすすんでいった。

「ただ今、御入門したいと申す児童が、二人の隨身を供に連れて、お玄関に控えておりまするが」

「そうか。通しておくがよい。——しかし何家どこのお子だ」「まだ伺つておりませぬ」学僕が去る間に、児童たちは、もう机の書物を、あわただしく仕舞つて、立ち騒いでいた。

「これっ」民部は叱つて、

「誰が、立てといいましたか、まだ、書物を仕舞つてはなりません。今、先生が、読み解いた一節を、声をそろえて、復習するのじゃ」すぐ静肅になる。

児童たちは、書ほんを両手にもつて、孝経の一節を、高らかに、読んだ。

「よろしい」ばたばたと、また騒ぎかける。

「——よろしいが、まだ、学課はおしまいではありません

ぬぞ。硯すずりに、水をおいれなさい、そして、草紙を出す」命じられるままに、手習てならひが始まつた。よしと見て、民部は、ほかの室へ立つて行つた。

その室には、何もなかった。儒学者の家らしい唐机からづくえが一脚と、書物の箱が、隅にあるだけである。

その板縁を後ろにして、一人の少年が、さっきから待たされて控えていた。民部は、そこへ何気なく入つて行つたが、足をふみ入れるとすぐに、はつと思つた。

この学舎がくしゃには、堀河、京極、五条、烏丸などの、権門けんもんの子をはじめ、下は六、七歳から十五、六歳の子弟を預かつていて、民部は今日までいぶん多くの少年を手にかけてきているが、まだこんな感じを初対面の時にうけた例たとしはなかった。

(凡ただの子こではない) すぐ、感じたのである。

永年の体験で、教育者として直感したのではあるが、べつに、その少年の容貌かゝたちとか、身装みなりとかに変わった点があるわけではない。少年は、手を膝にかさねて、入つてきた民部を、ちらと見上げている。そして、すこし後あとへ退さがつて両手をつかえた。

良家の子ならば、これくらいな作法は、どこの子弟でも仕込まれている。だのに、民部は、そのあたりまえな動作のうちに、やはり感じるのであつた。

(はてな? ……何家どこの子だろうか。これは、鳳凰ほうおうの雛ひなだ) そう思いながら、

「入門したいというのは、そことか」

「はい」すずやかな返辞である。

「お年は」

「八歳になりました」

「おん名は」

「十八公麿と申します」

「お父君は、武家か」

「いいえ」

「どなたで、何といわるる」

「六条源氏町の藤原範綱の子でございます」

「や、範綱うじの、御猶子か。……ウーム、道理で」

二

自分の眼が間違っていなかったことに、民部は、膝を打って、

「道理で——」と、何度も、うなずいた。

「六条どのは、和学、歌道の方では、当代での指折りである。その御猶子とあれば、なるほど、あらそえぬ」

「お父上か、叔父様が、共に参って、おねがい申すところですが、学問の徒になるには、自分で参って、ひとりで、おねがいするのが、ほんとだと教えられて、こうして、参りました」

「お気持が、ようわかる」

「先生、どうか、私を、今日から儒学のお弟子にしてくださいませ」

「お家庭にいるあいだは何を学んでおられたか」

「お父上から和歌を、また、叔父様から、書道や、やさ

しい和学を、教えていただきました」

「よろしい、明日から、お通いなさい。民部が、学び得たかぎりの学問を、おつたえいたしましょう」

「ありがとうございます」十八公麿の頬には、希望のいろが、紅くかがやいた。やはり、少年である。そう聞くと、いそいそと、玄関へ駈けて、

「介」と、弾んで呼んだ。侍従介と、箭四郎は、式台のすみに、うずくまっていたが、

「お、和子様、どうなされました」

「おゆるしを受けた」

「それは！」と、二人も胸を伸ばして、よろこんだ。

「上出来でございました。はやく、お父君にも、このことを」穿物をそろえて、塗の剥げた貧しい輦の轆を向ける。彼が、それに乗ると、学舎の窓から、

「やあ、どこの子だ」と、師の見えない隙をぬすんで暴れていた悪童たちが、墨だらけな顔や、悪戯ッぽい眼を外へのぞかせて、

「貧乏車」

「ぼろ車」

「なんぼ、くるくる廻っても」

「貧乏車は、ぼろ車」と、謡って、囃した。箭四郎は、窓のそばへ駈けて、

「雀ッ。何をいうぞ」

「わっ」と、笑いながら、いちどに、窓の首は引っ込んだ。

「箭四、大人気ないぞ、行こう」介は、牛の手綱をとつ

た。

「わしが曳く」と、箭四郎は手綱を彼の手から取って、まだ、腹だたしげに、窓をふりかえりながら、
「こんな、悪さのいる学舎へ、大事な和子様をかよわせても、よいものかの」

「それも、ご修業だ」

「朱にまじわればということもあるではないか——」

「染まるようなご素質であつたら、それは、ご素質がわるいのじゃ」

「いまましい、童どもだ」

「だが、貧乏車とは、童も嘘は歌っていない。このお粗末な車を見て、たれが、貧乏でないというか。……ああ、なんぼ、くるくる廻つても、貧乏車は、ぼろ車。世の中が回らぬうちは、どうもならん」

牛飼も、雑色も持たない古車は、轍の音さえも、がたことと、道の凸凹を揺れてゆく。

三

次の日から、十八公麿のすがたは、雨の日も、風の日も、欠かさずに、学舎に見えた。

師の日野民部忠経は、元南家の儒生で、儒学においては、朝に陰陽師の安倍泰親、野に日野民部といわれるほどであったが、磊落な質で、名利を求めず、里にかくれて、児童たちの教育を、自分の天分としていた。

民部は、十八公麿を、愛した。日のたつに従つて、そ

の天稟を認めてきた。

（これこそ、双葉の梅檀だ）まったく、十八公麿の才能は、群をぬいていた。むしろ、余りにも、ほかの児童と、かけ離れ過ぎていくくらいなのである。で児童のうちに、嫉妬はある。

がたがた車

がたぐるま

貧乏ぐるまの

音がする——

学舎の往き帰りに、さかんに、そんな歌がうたわれた。まったく、十八公麿のような古車で通つてくる者は一人もない。家の近い者は、従者に、唐傘をささせて来たり、綺羅びやかな沓をはいて通うし、遠い者は、蒔絵車や螺鈿車を打たせて、牛飼にも衣裳をかざらせ、「おれの牛は、こんなに毛艶がよいぞ」と、牛までを誇った。

そうした中に、学舎のうちでも最も年上な一人の生徒がいた。十八公麿はわすれていたが、お供の介は覚えていた。小松殿の御家人、成田兵衛の子である。まだ十八公麿が日野の館にいたころ、強かな仇をした小暴君の寿童丸なのである。

寿童は、知っていた。

虫が好かないというのか、いまだに、あのことを根にもっているのか、とかく、意地がわるい。そして、

貧乏車の音がする——という歌を流行らせた発頭人も彼であることが、後にわかった。

「介、あの悪童が、張本じゃ、和子様のため、何とかせねばいかぬ」

「うむ、懲らしてくれたいとは思うが」

「一つ、この拳固を、馳走してやろうか」

「よせよせ」

箭四郎が、しきりと逸るのを、介はあぶながつた。

介も、当然、憎々しくは思っているが、いかんせん、平家のうちでも、時めいている権門の子だ、侍の子だ、それに、学舎に通ってくるのでも、毎日五、六人ずつの郎党が車についてやってくる、撲りなどしたら、自分の首があぶないし、第一に主人の身にも災難のかかるのは知れている。

また、寿童丸の郎党たちも、傍若無人である。主人の子の学業が終るのを待っている間には、近所の里の女をからかったり、石つぶてで、雀を打ち落して、供待部屋ともまちべやの炉で炙あぶって喰いちらしたり、はなはだしい時は、こっそり、酒などをのんでいる。そして、

「おい、介、公卿奉公もよいが、選りに選ってお牛場の落魄おちぶれ藤家などへ、なんで、物好きに住みこんだのだ。おれの主人の邸やしきへ来い、厩掃除うまやをして、もうちっと、身ぎれいにしていられるぞ」などと、無礼をいう。

（よせ。かまうな）と、介は、そのたびに、箭四郎を眼で抑えていた。箭四郎の方が、年上であるけれど、介がいつも止め役だった。若い血気さにおいては、当然、介の方が先に逸るべきであるが、彼には、以前の苦い経験があるので、じっと虫を抑えているのであった。

燎原の火

—

朝だった。奥の御用で、何か町まで買物に出た箭四郎が、

「介すけ、大変だぞ」と、その買物も持たずに戻ってきていった。

「どうした？」

「戦いくさだっ」

「またか」めずらしくもないように介はつぶやく。箭四郎は、昂奮して、

「いや、こんどの火の手は、ほんものらしい。源氏の人類が、いよいよ我慢がならず、起ったらしい」

「ふーむ」介も、そう聞くと、若い眼をかがやかした。

「うわさか、見てか」

「五条、四条、出陣の六波羅の軍馬で、通れるところではない。——聞けば、高倉の宮をいただいて、源氏の老強者ふるつわもの、三位頼政さんみよりまさが、渡辺党や、三井寺法師みいでらの人類をかたらって、一門宇治平等院びやうどういんにたてこもって、やがて、都押しと聞いた」

「ほう、それは、六波羅もあわてたろう」

「勝たせたいものだ」

「……………」介すけは、何か考えこんでいたが、やがて、吉光

の前の住む北殿へ走って、そこで、彼女としばらく何か話していた。範綱も、やがて知って、

「その様子では、洛中のさわぎも、ただごとであるまい。怪我してはならぬゆえ、十八公麿も、きょうは、学舎をやすんだがよいぞ」と、いった。十八公麿は、聞く

と、

「気をつけて参ります。決して、あやうい所へは寄りませぬから、学舎へ、やって下さいませ」

と、絶った。泣かないばかりに熱心なのである。心もとない気もするが、

「では、気をつけて。——軍馬で通れぬようであつたら、戻ってくるのじゃ」注意して、ゆるした。

箭四郎が見てきた通り、洛中は、大路も小路も、鎧武者と、馬と、弓と長刀とに、埋まっていた。

心棒の弛んだ軌が、その中を、十八公麿をのせて、ぐらぐらと、傾いで通った。車の前に、薙刀が仆れかかったり、あらくれた武者が、咎めたりしたが、十八公麿は、その中で、孝経を読んでいた。

「箭四、見たか。和子様の、なんとという大胆な……」介でさえ、舌を巻いた。そして思わず、

「やはり、和子様にも、どこかに、源氏武者の血がある」とみえる」と、つぶやいた。箭四郎は、袖をひいて、

「しっ」と、たしなめた。

平家の武者の眼が道には充滿しているのである。けれど、その日は、無事だった。次の日も、無事だった。源三位頼政が旗をあげたという沙汰は、洛内はおろか、

全国の人心に、

（やったな！）という衝撃をつよくあたえた。

だが、潮のように、宇治川を破り、平等院をかこんだ平家の大軍は、数日のうちに、三位頼政父子の首、その他、渡辺党、三井寺法師の類の首を、剣頭にかけて、凱旋してきた。その首数、二千の余といひ触られ、血によごれた具足の侍が、勝ち祝の酒に酔っぱらって、洛中を、はしゃいで歩いた。

二

一敗地にまみれて、壮烈な死をとげた源三位頼政の軍に、民心は同情と、失望をもった。

そして心のうちで、

「どこまで、悪運がつよいのか」といよいよ、傲り栄える平家を憎んだ。石の上の雑草みたいな、うだつの上がない自分たちの生活に、また当分、陽があたらない諦めを嘆いた。

だが、頼政の死は、犬死でなかった。彼の悲壮な一戦は、むしろ老後の花だった。

（あの源氏の老武者ですら、これほどのことを、やったではないか）ということは、諸国に潜伏している源氏の者を、はなはだしく強く衝った。

彼の挙兵に刺戟された源家の血統は、永い冬眠からさめて起ち上がったように、諸方から、兵をうごかし始めた。

まず、八月七日には、関東の伊豆に、頼朝が義朝滅亡以来、絶えて久しく、この天が下に見なかった白旗を半島にひるがえす。

その飛報が、京の六波羅を驚かして、まだ、軍備も整わないうちに、第二報は、彼らの思いもしなかった木曾の検非違使から来て、

「木曾の冠者義仲、近江以北の諸源氏をかたらつて、伊豆の頼朝に应じて候」とある。愕然と、六波羅の人心は、揺れうごいた。

折もわるく、清盛は、このころから、不快で、大殿籠りの陰鬱な気にみたされている時である。夜ごとに、悪夢をみるらしく、宿直の者に、不気味をおぼえさせた。

大熱を發して、昼も、どうかすると大廂に、三位頼政の首がぶら下がっているの、屋根のうえを、義朝の軍馬が翔けるの、閻王を呼べの、青鬼、赤鬼どもが、炎の車について、厩舎門の外に来ていいるのと、変なうわ言ばかりを洩らすのであった。

だが、宗盛をはじめ、平家の親族は、かたく、清盛の病氣を秘して、

「口外無用」と、宿直や、典医や、出入りする将へも言いわたしていた。

頼朝の兵は、枯れ野の火のように、武蔵を焼き、常陸へ入る。

義仲は、近江路へと、はや、軍馬をすすめていると聞えた。

そうした、眼まぐるしい、一刻の落着きもない都のな

かを、毎日、十八公磨は、がたがた車で、日野の学舎へ一日も怠らずに通いつづけているのである。

すると、ある日、悪童組の寿童丸や、ほかの年上の生徒が五、六名、民部の留守を見すまして、

「やい、牛糞町の童」と、十八公磨をとりまいていった。

「おまえの父親は、六条の範綱ではあるまい。ほんとは、日野の有範の子じやろう」

それは十八公磨も、知っているの、かなしくはなかった。黙って、澄んだ、まるい眼をして、そういう悪太郎達の顔をながめていた。

寿童は、脅かすように、

「よい。か。まだ、おまえの知らないことがあるぞ。教えてやろうか——それはな、おまえの実の父、藤原有範は、世間には、病死といふらしてあるが、まことは、こっそり館をぬけだして、数年前から、源三位頼政の類と一緒に謀叛をたくらんでおったのじゃ。そして、頼政入道や、その他の者と、宇治河原で、首を打たれたのだ。……どうだ知るまい。知っているのは、わしの父、成田兵衛だけだ。わしの父はな、宇治の平等院で、源氏武者の首、七つも挙げたのだぞ」

三

今の父は、後の養父だと人がいう。

どうして自分には真の父がないのか。寿童丸のことば

をそのまま、信じはしないでも、十八公麿は、しきりと、それを考えるようになった。母に、訊ねると、
「お父君は、和子が四歳の年の春に、お亡くなり遊ばされたのじゃ」

吉光の前は、そう明らかに教えた後で、いいました。

「けれど、和子は、そのために、この六条の伯父君の手にそだてられて、御猶子となられたのです。世のことわざにも、生みの親よりは育ての親という、御養父様の恩は大きい。忘れてはなりませんぞ」

「はい」

十八公麿は、うなずいたが、すぐ次の問いに、母を驚かせた。

「父君は、戦に出て、死んだのですか」

「いいえ、お病気で」

「でも、源三位頼政の軍に加わって、討死したのじゃという人がありました」

「世間というものは、種々に、人の生活を臆測してみるものじゃ。そんなことはありません。母も、伯父さまも、介も、その折のご臨終の時には、お枕元に侍っていたのじゃもの」

「どうして、世間は、そんなことをいうのでしょうか」

「いわれのないことでもない。——それは、この母の従姉弟に、今は、奥州の藤原秀衡のもとに潜んでいる源九郎義経があり、また、近ごろ、伊豆で旗挙げをしたと沙汰する頼朝がある。——それで、亡きおもとの父も、必ずや、頼朝の軍にでも加担して果てたのであらうと、

邪推するのでしよう」そして、十八公麿の頭をなでた。
「そなたは、大きゅうなっても、頼朝、義経たちのように、血の巷に、刃をとって、功名をしようなどと思うてはなりませんぞ」

「母さま」

「なんじゃ」

「人が死ぬと、どこへ行くのでございますか」

「さあ？」吉光の前は、常には、分りきっているようなことが、子に、そう訊かれると、すぐ答えができなかった。

「行くとして、行く姿はありません。無にかえるだけです。ただ、人の心だけが、残ります。心の業だけが残ります。ですから、生ける間に、よい事をしたものは、よい名をのこし、悪業をしたものは千載の後までも、悪の名をたましいに持って、死しての後は、それを拭き改めることもできません」

死を考えることは、生を考えることである。十八公麿の眼は、うっすらと、そのころから、実社会の相に、みひらいてきた。

路傍に、飢えて、菰をかぶっている人間のすがたにも、刀槍を晃めかせて、六波羅大路を練り歩く武将にも、新たな、観る眼があいて世の中を考えだした。

そして、こういう人々の種々な仮の相が、一様に、死の無に回って、そのたましいの名だけが、宇宙にのこる。

無限に死に、無限に生れ、無限のたましいの名だけが、

不滅にある。

「ふしぎな? ……」と、彼は、つぶらな眼をじっとこらして、見ても見ても見飽かぬように、深碧^{しんぺき}な、そして深く澄んだ、空に見入っていることがあった。

そういう間^{あいだ}も、日野民部の学舎に通うことは、日々怠らなかつた。

四

孟子、老子、五経、論語と、十八公磨の学業が目ざましい進み方で上がってゆくを見て、寿童丸^{じゅうどうまる}を餓鬼^{がき}大将にする学舎の悪童連は、

「あいつ、生意気じゃ」と、いよいよ、仇敵視して、「びんぼう車の机は、このガタ机でたくさんじゃ」と、脚の曲がった机とすりかえたり、草紙^{そうし}笥^{ばこ}の中に、蛙をひそませて置いたり、襟元へ、松葉をそつと落したり、墨や筆をかくしたり、あらゆる悪戯^{いたずら}をもつて、挑戦しかけた。

だが、十八公磨は相手にならなかつた。

「こいつ、唾^わか」と寿童は、いった。

二歳まで、ものをいわなかつた十八公磨は、今でも時々、そのころのように、唾^わになった。どんな声にとり巻かれても知覚がないように澄ましていることがある。

いよいよ、悪童たちは、莫迦^{ばか}にした。

「おい、きょうは、あいつを慰さんでやろう」発議^{はつぎ}は、いつも、寿童丸であつた。

「どうするのじゃ」

「帰りは、いつも、糺^{ただす}の原^{はら}で日が暮れる。あの辺を、びんぼう車の通るのを待ち伏せして、四方から、野火焼きしてやるのじゃ」

「おもしろい」

乾いた風が、北山から吹きなぐって、屋根の石に、ときどき、霰^{あられ}のような音が走り、冬の雲が、たそがれの空をおそろしく迅^{はや}く翔^かけている。

「和子様、お風邪^{かぜ}を召^めされまするな。何ぞ、車のうちで、被^かいておいでなさいませ」供は、介^{すけ}が一人だつた。牛曳^{うひ}きが一人。

日野の学舎を出て、ぐわらぐわらと、夕霜の白い草原を走らせてきた。

車のうちでは、簾^{れん}をあげて、書を読む声が聞える。往きと、帰りと、十八公磨は、書を読んでいた。もう、星が白く、地は暗かつた。それでも、寒風^{さむかぜ}に顔を出して、書を手から離さないのであつた。

「あつ……」牛飼は、立ち竦^{すく}んだ。

行^いく^くてに當^あつて、大きな炎が、真^まつ赤に、大地を焦^やいていた。この風であるし、萱原^{かやはら}であるし、まるで、油をそそがれたように火はまわる。

「牛飼」

「へい」

「横へ曲がれ。少し、遠くはあるが、道はあろう」介^{すけ}は、煙に咽^むせながらいった。

車は、すこし戻って、石ころの多い萱原かやはらの小道を西へ駈けた。するとまた、

「駄目だっ」

「なぜ」問うまでもない、介の眼にも、すぐわかった。そこら一面も、焼けているのだ、後へ戻ると、そこにも火、あちらにも火、車は、みるまに十方の炎につつまれて、立ち往生してしまった。

「わはははは」

「あはははは」どこかで、嗤わらう声がした。

真っ黒な煙を、天てん 飈びようから、たたきつけてくる。十八公磨は、車の中で、しきりと、咳せき声をして苦しがつていた。

「さては、成田兵衛ひょうえの小せがれだな」介は、もう許せな
いというように、太刀の柄つかをにぎって、笑い声のした萱かや
の波へ躍って行った。

五

その萱かやむらから十名ほどの悪童が、蝗ばったのように逃げだした。

中に、寿童丸じゅうどうまるの姿も見えた。介は、眼をいからせて、
「おのれっ、今日こそ、もうゆるさん」

追いかけると、寿童は、半泣きに叫びながら、携たずさえていた竹の鞭むちを揮ふるって、介を打とうとした。

「小癩こやくなっ」介は、鞭むちをもぎ奪とって、寿童丸の顔を、平
手で、はたいた。

枯れ草の燃えているなかへ、寿童は尻もちをついて、
何か喚わめいた。すると、そこらの草むらから、

「やっ、若殿を」

「うぬ、よくも」子どもの背後には、大人が隠れていた。
叫びあつて、太刀や長刀ながなたを構えながら、成田家の郎党た
ちが、

「うごくなっ」と、介を取り巻いて、斬りつけてきた。

介は、驚いた。ここまで企たくらんである悪戯わるさとは思わな
かったのである。

「なにをッ」彼も太刀の鞘さやを払った。

ばちばちと、枯れ草を焼く火や、萱かやの吐く黒い煙が、
その剣つるぎをくるむ。

平氏の家人けにんとは、構えて事を争うなどは、常々、口が酸す
くなるほど、主人から誡いましめられていることではあるが、
かくなつては、相手を斃たおさねば、自分が斃たおされるのであ
る。生をまもることは、人間の絶対だ。介は、眼まなじり
をつりあげて、闘かった。

しかし、成田の郎党たちは、常に、こういう、あら業わざ
には馴なれている侍どもだし、人数も多いので、介は、見
るまに、斬りたてられた。袖はやぶれ、小手は血に染ん
だ。頬から耳の辺へかけて、薄傷うすでを負うと、血のすじが、
顔中にちらかって、凄惨せいさんな二つの眼だけが、穴みたいに
光っている。

肩で、あらい呼吸いきをつきながら、介は、一步一步と、
後ずさった。

（和子様は、どうしたか？）それが気にかかる。

十八公磨の車は、萱叢の彼方に、位置も変えずに見えるが、そこへ行こうと思っても、炎と煙と、そして相手の刃とが妨げて、近よれないのであった。

「和子さまあつ——」介は、ついにさげんだ。

すると、ひーつという声が、車の方で聞えた。思わず、炎を見ずに、介は駈けだした。

「逃がすなつ」と、刃は追う。

「あつ」と、介は、仰天した。

もう、十八公磨の車は、炎々と紅蓮を上げて、燃えているのだ。軌も、車蓋も。

うわうーつ。地が揺るぎだすように、牛が吼えた。牛は、炎の車を背負って、突然、ぐわらぐわらと狂奔した。

八方に、かくれていた悪童たちは、怖れて、きやつと、逃げ廻った。うろたえて、みずから火の方へ走って、火の海から逃げられなくなった子供もある。

「助けてーっ」自分で放った火に溺れて、寿童丸も悲鳴をあげていた。しかし、怒りだした火牛は、仮借がなかった。悪童たちを蹴ちらし、郎党たちの刃を轢いて、暗い野末へ、団々たる火のかたまりを負って駛けて行く。

「和子さまつ。——和子様あつ」介は、夢中で、それを追った。

六

火に狂った奔牛は、三、四町ほど駈けて行って、忽然と横に仆れてしまった。

牛が仆れると、燃えていた車蓋は、紅い花車が崩れるように、ぐわらぐわらと響きを立てて、解れてしまった。そして、蓋も、御簾も、轆も、一つ一つになって、めらめらと地上に美しい炎の流れを描いた。介は、発狂したように、

「和子様ッ」と、飛んで行った。

そして、必死になって、崩れた炎の板や柱を、ばらばらと、手で退けてみた。何らの熱さも感じなかった。

当然、その中にいる十八公磨は、彼の想像では、もう焼け死んでいるはずだった。けれど、車の下に何ものもなかった。

「あつ……。途中で？」介は、不安とよろこびと、二つの中に立って、そういった。

「……途中で、振り落されたか、ご自身で飛び降りたかなされたであろう、ああ、よかった」

見ると、牛は、もう焼け死んでいた。巨きな横っ腹を膨らませて、足を曲げたまま、真っ黒になっていた。

まだ多少の呼吸をしているらしく、唇から白い泡が煮えていた。介は、思わず眼をそらした。

曠野は、真っ赤に染まっている。誰か来て消さない以上、この火は、あしたの朝までつづくかも知れない。

それにしても、十八公磨が、こちらに見えないのはまだ不安である。安心するには早すぎる。一人で、六条まで帰れるはずはないし、さだめし、どこかで泣いて、自分の姿をさがしているにちがいない——

「おうっ——いッ」介は、両手を唇のはたに当てて、全

身の声で呼んでみた。

「和子さまあッ——」返辞はなく、声は、いたずらに、野末のあらしになって、真っ暗に、消えてゆく。

「……………」呼ぼうとして、涙が、眼につきあげてきた。

もしものことがあつたらどうしよう、腹を切つて、おわびをしても済まないことだ。

さっきの牛よりも、狼狽して、狂気じみた彼の影が、それから脱兎のように、野を駈けまわつたが、十八公麿は見えないのである。

「どこへおいで遊ばしたぞ。——介はここにおりますぞ。

十八公麿様っ」声も、おろおろとしてくるのであつた。

すると、河岸へ寄つた堤の上を一人の男が、誰やら、背に負つて走つて行くのが見えた。堤の下まで、炎は這つていたし、空が赤いので、黒い人影が、はっきりと介の眼に映じた。

「やつ、和子様ではないか。——そうだ、和子様にちがいない。おのれ、成田の郎党めが」

夜叉のように、介は、堤を目がけて飛んで行つたが、枯れ芦の沼がいちめんに、そこを隔てているので、遠く迂回しなければ、堤にはのぼれなかつた。

気が急ぐし、足は自由にならない。沼水はかなり深かつた。介は膝まで濡れた足をもとして、半町ほど後ろから、堤へ這い上がった。

もう、さっき見た人影は、遠く去つて、わからなかつた。介は、地だんだを踏んで、

「畜生」と、さげんだ。

そして、堤の上を、鬼のように髪を後ろへなびかせて走つた。烏帽子は背へ落ちて、躍つていた。

七

「また、空が赤い」

「どこぞのお館へ、盗賊が押しこんだのではないか」往来へ出て、町の者は、首を空に上げて見ていた。

戦いに次ぐ恐怖は、強盗だつた。

こそそと出沒するのではない。十人、二十人、多い時には五十人も手下をつれて、どこへでも堂々と押しこむのであつた。少し、きかない家来などがあると、忠義だてして闘うので、邸宅はたちまち火を放けられて焼かれてしまう。

「貧乏人には、盗賊の心配だけはない」町の人々は、赤い空をながめて、せめての慰さめのように、つぶやき合つた。

その往来を、向う見ずに、駈けて行つた男がある。介であつた。

「待てっ」と、京極の辻でさげんだ。

先へ走つてゆく影も、これまた、おそろしく迅つこい。ちらと、近くで見たところでは、それは、河原や枯れ野などによく寝ている物乞いか、菰僧の類であるらしかつた。

初めは、てっきり、成田の郎党と見て追いかけてきた介は、いよいよ、狼狽した。

十八公麿さまを誘拐^{かくわ}かして、遠国へでも売ろうとする野盗^{やとう}か人買いにちがいあるまい、と今度は考えた。

「待てッ、待てッ」叫べば、叫ぶほど、先の男は、背中に十八公麿を負っているにかかわらず魔のように迅くなる。

そして、どう抜けてきたか、六条のお牛場へと駈けこんだ。

「おおここだ」男は、築地^{ついでじ}を見上げて、佇^{たたず}んだ。そして裏門をどんと叩く。

誰か、開^あけた。開けると同時に、男は、背に負ってきた十八公麿を、抛^{ほう}りこむように、門の中へ渡して、さつさと、元の道へ、引^ひつ回^{かえ}した。

「この乞食めっ、和子さまを、どこへやった」いきなり組みついてきたのは介である。

「あっ」よろめいたが、男は、何もいわなかった。身をねじって、介の体を、勢よく振りとばした。

介は、男の足をつかんだ。男は前へのめって転んだ。得たりと、介はのしかかって、拳固で、ぼかぼかと撲^{なぐ}りつけた。

初めの勢いは、どこへやら、菰僧^{こもそう}ていの男は、両手で顔をおおって、痛いとも叫ばなかった。介は、腹が癒えないように、なおも、打って打って、打ちすえた。

すると、築地のそばから走って来た十八公麿が、それを見ると、わっと大声で泣いた。滅多に、泣いたことなどない十八公麿が、しかも、異様な感情をあらわして泣いたので、介は、びっくりした。

「和子様、こいつは、野盗か、人買いか、悪党です。なぜお泣きなさるのです」

十八公麿は、そういつて、肩で息をしている介を、うらめしげに見ていった。

「その人を、わしは覚えてる、悪党ではない」

「えっ、和子様の知っている人ですって」

「館^{やかた}の^{うまや}厩^{うまや}に、縛られていたことがある……。そうそう、もと成田兵衛の家来であった庄司七郎^{しょうしちろう}というのじや」

「げっ」介は意外な顔をして、

「あの寿童丸に付いていた成田兵衛の家人^{けにん}、庄司七郎が、その男ですか」振りかえって、見直すと、菰僧^{こもそう}は両手で顔をかくしたまま、不意に起って、恥かしそうに逃げてしまった。

八

十八公麿の手をひいて、館の坪^{つば}の内へ入ると、養父の範綱^{のりつな}も、吉光の前も、

「おお、無事か」

「怪我^{けが}はなかったか」一家が、こぞって転ぶように縁先へ出てきた。

先に逃げ帰った車の牛飼から、途中の変を聞いて、おろおろと案じていたところだった。

その危うい野火の中から、十八公麿を救って、ここまで負^{おぶ}ってきてくれた男が、以前、成田兵衛の郎党だった

庄司七郎であつたと話すと、範綱は、

「さてこそ……」と、思いあわして、うなずいた。

「この厩舎の獄から、縄を解いて、放つてやった七郎というあの侍は、その後、主家の兵衛から、役に立たぬ不屈き者と、家をも扶持をも奪われて牢人となり、菰僧に落ち魄れていると聞いたが……。それでは、当時の和子の情けや、当家の恩義を忘れかねて、あやうい機に、働いてくれたとみえる。人には情けをかけておくものじや、ありがたいお人ではある」

彼が、介や箭四郎たちに、そう語っているあいだに、吉光の前は、十八公麿をつれて、坪の石井戸のそばに立たせ、下碑の手もからずに、自身で水を汲みあげて、よごれている足や手を洗つてやつていた。

そして奥の部屋へ、抱き上げてくると、衣服を出して、着かえさせたり、摺り傷をあらためて、薬を塗けたりして、

「和子よ」と、涙ぐんだ。

「——今日の禍いは、幸いに怪我もなくすぎたが、この後とも、一身を大事にまもらねばなりません。心に、油断があつてはならぬぞ。そなたの身に、もしものことがあつたら、この母は、どうしましよう」それから、夜の更けるまで、いろいろと、十八公麿のゆく末のことを案じて、いいきかせた。

それが、母と子との、最もしみじみと心で抱き合つた最後の夜であつた。

石井戸に立つて、水づかいをしていた時に、寒気がす

るとつぶやいていた彼女は、その夜から、寝間をはずに、幾日も閉じこもつた。

良人にわかれてから、とかく、病みがちであつた彼女には、病氣以外に、二人の遺子を抱えて、また、範綱の苦しい家計や、世難の悩みをながめて、共々に、やすらかな日を味わう暇もなく暮してきた。

風邪気味と、かろく自分でも考えていた数日のあいだに、彼女の若さも、肌も、病魔の鉋に削られて、眼にも驚かれるばかり、痩せ細ってしまった。

「オオ……何やら美しい……蓮花がにおう……：：：妙なあの音は、笙の音か、頻伽の声か。……蓮華が降る、皆さま、蓮華が降つて、私の顔にかかります」信仰のふかい彼女は、熱がたかくなると、うわ言をいって、細い蛾のような手を、うごかした。

（これはいけない——）範綱は、暗然として、枕もとに泣いている十八公麿と、朝麿、二人の幼い者のすがたを見た。

「六条さま、どうぞ、お慈愛をおかけくださいませ。……：：：その二人のものを」衰えた眼が、かなしげに、枕からじつと仰いだ。そして、何ものかに命じられたように、白い掌を合せて、にこと、微笑んだ。

花は夜風に乗って

一

雨あがりの大路の黒い土は、胡粉をこぼしたように白い斑で描かれている。キリ、キリ、とさびしい軌の音が、栗田口あたりの閑寂な土塀や竹垣、生垣の桜花の下蔭を通してゆく――

「ああ」牛と並んで歩きながら、侍従介は、鼻さきの涙を指さきで、そつと拭いた。

「――昼間だが、なんとなく、夜を歩いているような気がするなあ」独り語につぶやいたのを、

「そのはずじゃ」と、牛飼が、答えた。

「――なんとこの正月は正月も早々からじゃて。さきには、高倉上皇さまがおかくれあそばされたと思うと、

――つづいて去年から大熱をわすろうていた平相国清盛公が、忽然と、あの世へ去っておしまいなされた……。

それでのうても、お館さまや、和子さまには、吉光御前さまをお亡くしなされて、さびしい年を越えられたのじゃものなあ」

「空虚な……とは、今の御主人さまや、俺たちの心だ」

「ひっそりとして、蝶も舞わぬ。堂上堂下、悲しみに沈んでいるこの春の御諒闇に、虫けらまでも、さびしさが、わかるとみえます」

「夜だ、どうしても、昼間とは思えない――」介は、道を曲がる。

その道もまた、しいんと、冷やかで、人影がなかった。明けて――十八公磨が九歳になった春の三月中旬のことだった。

牛車のうちには、墨のごとく、沈んだ人影がみえる。養父範綱の膝にだかれた十八公磨であった。母をうしなつてからの十八公磨はさらにちがってきた。面ざしすらにわか吉光の前に似かようなてきたかに見えて端麗を加えたのも変り方の一つであつたし、さらに、範綱さえ、介さえ、ときどき、驚かされることは、彼の眸であつた。黒く、飽くまで黒く、そして湖のごとく澄んでいる眼であつた。

星を見――雲を見――風を仰ぎ――そして地上の人間が描く修羅遊戲の種々な事象に、じつと、いつも、不審をだいて考えこんでいるような彼の双眸であつた。

久しく、書を教えていた叔父の宗業は、はやくも、筆を投げて、

「もう十八公磨には、あまり教えぬほうがいい」と、いったほどである。

「怖い才だ」といった人もあつた。また、「こういう、麒麟児は悪うすると若死をしますでな」と注意した老人もある。

どっちにせよ、不安であつた。周囲の大人たちは、ちよつと、戯れかねた。まだ稚ない九歳の子ではあるが、軽く抱いて、置き換えられないような巨きさというか、

気品というか、威というか、そんな気持をうけた。

しかしさすがに、範綱だけにはよく、甘えるし、範綱も、人がいうほどにも思っていないかった。ただ、なぜか、「容貌は、母御前に似よ。血は父に似よ」と、口ぐせにいった。

母系の源氏の血が、この子にうづくことを彼は極度に、怖ろしく思った。

それだけでなく、平家の眼は、近ごろ急に、十八公麿の母系と、十八公麿の身について、警戒を怠らないのみか、何か、あわやという機会さえあれば、虎狼の爪が、跳びかかってきそうに思えてならないのである。

二

古びた青銅瓦の山門を仰いで、

「ここでよい」介は、牛飼に、車を止めさせた。そして、間近う、

「お館さま、青蓮院でございます」と、箱の簾にささやいた。

轅には、鷺脚の榻を据え、前すだれの下には、沓台を置く。

「先へ」

「はい」と、十八公麿が、片脚をそっと下ろした。藤むらさきの袴に、うす紅梅の袖を垂れる。介は、抱き下ろして、美しい塗靴をその足にはかせた。

家計のくるしい養父の範綱が、きょうばかりは、車も

飾らせ、十八公麿の小袖も沓も何から何まで、清浄で新しいものを身につけさせた。

（きょうが、この子の俗世の最後の日——）と思うてのことである。

介が、門を訪れて、僧正の在否を問うと、「おいで遊ばします」と、寺侍が、山門から、内玄関へと、走ってゆく。

「よいお寺——」と、十八公麿は、しきりと、そこらを見まわして、他愛がない。

「よからう、僧院は」

「ええ」うなずいて、佇んでいるそばへ、鵲が下りて、花の散っている泥土の水に戯れている。

「六条どの、お通りあれ」廻廊の階に、寺僧や、侍たちが、立迎える。誰も彼も、十八公麿の愛くるしさに、微笑をもった。

「おいくつ？」と、ささやく者がある。

「九歳です」青蓮院の廻廊は長かった。そこからまた、橋廊下をこえると、さらに、寂とした僧正の院住がある。むら竹の葉がどこからか欄や蔀に青い光を投じている。鷺がしきりと啼くのである。せんかんと泉声が

聞えて、床をふむ足の裏が冷々とする。僧正とは、天台六十二世の座主、慈円和尚のことである。月輪関白の

御子であり、また連枝であった。介は、廊下の端に坐る。範綱と、十八公麿とは、大柱の客間をもう一間こえて、

東向きのいつも、拜謁する小間まで通って平伏していた。粟田山の春は、その部屋いっぱい香って、微風が、龕

か、瓔珞^{ようらく}か、どこかの鈴^{れい}をかすかに鳴らした。

「六条どのか」声に、おそろおそろ、頭^{つむり}を上げると、慈円^{じえん}僧正は、その襖^{ふすま}を払っていた。

若い、まだ二十七歳の座主^{ざす}であった。あいさつをのべると、

「ほ……」すぐに、眼をみはつていうのである。

「きようは、お子連れか」

「お見知りおき下さいませ。猶子^{ゆうし}、十八公麿と申しまする」

「ふーム」にこやかに、唇^{くち}で笑う。範綱は、十八公麿の水干^{すいかん}の袖をそつとひいて、

「僧正さまですぞ。ごあいさつを申しあげなさい」

「はい」十八公麿は手について、貝のような肌の白い顔をあげた。慈円と彼と、師弟の縁をむすんだ初めての眸^{ひとみ}である。

三

「よい、童形^{どうぎやう}じゃ」慈円僧正は、しげしげと見入っていたが、卓に手をのばして、そこにある銅鈴を、しずかに振った。鈴の音を聞くと、

「お召しでございますか」執事の高松衛門^{えもん}が、次の間まで来て、手をつかえた。

「衛門か。この和子に点心^{てんしん}（菓子）を与えてください」慈円がいうと、

「かしこまりました」衛門は、やがて、高盆に白紙を敷

き、その上に、紅白の花形をした捻頭^{むぎかた}や餅餡^{べいだん}とよぶ菓子をとくさんに盛ってきて、

「よい和子、僧正さまの賜わり物、召し上げれ」と、十八公麿にすすめた。そして、範綱には、古雅な器^{うつわ}に汲んだ緑色の飲みものを供えた。

器からのぼる香りに、範綱は、渴^{かつ}をおぼえて、喫してみようかと思ったが、どうして飲む物かがわからなかった。

青蓮院^{しょうれんいん}を訪れると、時々、こういう目馴れない食味や、什器^{じゅうき}を見せられて、僧正の知識に驚かされるのであった。

「ぶしつけないことをうかがいますが、この、緑いろの湯は、何というものでございますか。——よい香りがいたしますが」範綱が、問うと、僧正はわらって、

「茶というものだ」と、教えた。

「ははあ」これも唐から舶載^{はくさい}してきたものにちがいないと範綱は器^{うつわ}を手にとつて、

「このまま、いただくのでございますか」

「そうじゃ」

「頂戴いたしまする」辞儀をして、範綱はひとくち、口へ含んで、

（苦い……）と思ったが、かろい甘味が、舌頭にわいてくると、何か、爽^{さわ}やかな気分をおぼえた。

「どうじゃ、味は」

「けっこうに存じまする」

「うまきは、なかりう」

(はい) ともいえないので、範綱は、なにか、爽やかに
なると答えた。慈円は笑いながら、

「近ごろ、仏書と共に、わずかばかり手に入れたので、
試みておるが、なかなか捨てがたい風味がある。聞けば、
茶の木の胚子は、夙くから舶載されて、日本にも来てい
るそう。どんな花か、花が見たいと思う……」

などと、かたり出で、中華では魏晋のころから紳士の
あいだで愛飲されだして、唐の陸羽は、茶経という書物
さえあらわしている。また、鬱気を散じるによく、血滯
を解くによろしい。医家でも、用いているし、栽培もす
すんでいる。日本でもぜひ胚子を植えて、上下の民衆に、
用いさせてみたいものだ——などと若い知識をもつ僧正
の話はなかなか該博で、経世的であった。

ことにまた、慈円は、僧院の奥ふかい所にいるが、政
治にも、社会のうごきにも、なかなか達眼があつて、時
事にも、通じている。それとなく、世間ばなしのように
する話のうちには、熱があつた。

「それについて、今日、折入って、僧正にお願いの儀が
あつて、うかがいましたが」と、範綱は、やっと話のす
きを見つけて、いいだした。

十八公廩をつれてきたことや、衣服の改まって見える
ことや、座談のあいだに、慈円も、今日の彼の訪問が、
いつもの和歌の遊びや、閑談でないことは、察していた。

四

「いうてみい」慈円はいった。

「——身になうことならば、ほかならぬ六条どのの頼
み。——してどういうことな？」

「……実は、この十八公廩に、お得度を賜りまして、
末ながくお弟子の端にお加えくださるわけには、参りま
すまいか」

「ほ……」慈円は、眼をみはって、

「この端麗な童形を、あたたら、剃りこぼちて、僧院へ
入りたいと、仰せらるるか」

「されば、幼少からの仏心の性とみえて、常に、御寺を
慕うています」

「さあ、それだけでは」

「ことに、母を亡うてから、なおさらに……」

「あいや、六条どの、それは稚な心というものではない
か。母に仏心あれば、子に仏心のうつること当然、家に
仏音あれば、子の声に仏韻の生じることまた当然。——

すべて稚な子は、澄んだ水でござる。それを、奇瑞の、
奇童のと、見るのはすでにわれら凡俗の眼があやまって
いる。——あらゆる童心はすべて仏性でござろうぞよ、
おわかりか」

「は……」

「それを、老成の者が、この子、仏者の縁がふかいなど
思いすごして、僧院の沙弥になされたら、成人の後、ど

う恨めしく思うやも知れぬ」

「御意に相違ありません」

「せめて、自身を自身で考えられる年ごろまでお待ちなされ。得度と申しても、まだ九歳では」

「――御訓誡、ありがとうございます。……にも拘わらず、慈悲の御袖にすがつて、おねがい申さねばならぬ儀は」ここならば、どんなことを口外しても大事はないと思ひながらも、範綱は、あたりを、つい見て、

「十八公麿の一身、仏陀のお膝のほかには、置きようがないのでござります」

「なぜ」

「源氏の人々、諸国に興つて、平家を勦滅せよの声、巷を、おののかせております……。血まようた平家の衆は、源氏のもの憎しの一図で、およそ、源家の係累のものと聞けば、婦女子でも、引縛けて、なにかの口実をとつて必ず斬ります」

「……」だまつて、慈円僧正はうなずきを見せる。

「すでに、お聞き及びでもござりましょうが、この子の生みの母は、源義家の孫、義朝の従兄妹にてさいところから、大軍を糾合して、関東より攻めのぼるであらうと怖れられている頼朝、義経は、この十八公麿には、復従兄弟にあたるのでございます」

「ム。なるほど」

「母は、みまかりました。子はまだ九歳、ことに、私の猶子となつておりますゆえ、いかな平家のあらくれ武士も、よもやと思つてはおりますが、私に、恨みをふくむ者も

あつて、十八公麿の実父有範こそは、源三位頼政公の謀叛に加担して、宇治川のいくさの折に、討死したものであるなどと、あらぬ沙汰も撒きちらされ、ゆく末、怖ろしい気がいたすのでございます」

じつと、僧正は、考えこむのであつたが、ややあつて、「いさい、わかつた。頼みのこと、諾いてとらそう」意を決めて、きっぱりと答えた。

五

「衛門――」ふたたび僧正は呼んだ。襖のさかいに、

「はいっ」高松衛門はすぐ手をついて、

「お召しでございますか」

「火急に使いを立ててもらいたい。中務省へ」

「畏まりました。――して御口上は」

「前若狭守範綱どのの御猶子、十八公麿どのが望みにまかせ、今宵、得度の式を当院において仕る由を――」

「え」衛門は、耳を疑うように、

「まいちど、うかがいまするが、お得度あるおん方は？

……」

「ここにおられる、十八公麿どのである」

「や、その和子様が……。して、お幾歳でござりまする」「九歳です」と、範綱が答えた。

「それでは、まだ童形でご修行あるはずの法規でございます。古来からの山門の伝習をお破りあそばしては、恐れながら、一山の衆が、不法を鳴らして、うるそう騒

「慈円が、身にひきうけたと申せ。しかし、中務省の役人から、なにかの、諮問はあろう」

「その折は、なんと、申したものでございましょうか」

「ただ、こういえ。不肖ながら、天台六十二世の座主、覚快法親王より三昧の奥儀をうけて、青蓮院の伝燈をあずかり申す慈円が、身にかえての儀と」

「はっ」

「一山三塔の衆へは慈円より、あらためて道理を明白に申し伝うびよう候と。——わかったか」

「わかりました」

「使者の歸りを、待つのだ。いそいで」

「はいっ」高松衛門は、廊を、つつつと小走りに退がった。

範綱は、幾度となく、僧正の好意に、感涙をのんだ。

そして、十八公磨の頭をなでて、

「うれしいか」

「はい」十八公磨は、無心にいう。

しかし、慈円僧正が、身にひきうけてとまでいいきつて、官へ印可をとりに行ったのは一朝の決断ではなかった。先刻からの座談のうちに、炯眼、はやくも、十八公磨の拳止を見て、

（この子、凡にあらず）と見ていたに、ちがいないのである。

これとよく似た話が、後に十八公磨が師とあおいだ黒谷の法然上人にもある。

法然房の君が、まだ勢至丸といった稚いころ、父を亡（う）つてひとり故郷（ふるさと）の美作国（みまさかのくに）から京へのぼってくる道すがら、さる貴人が、白馬の上から彼の姿を見かけて、

（あの童子は、凡（ただ）者ともおぼえない。どこへ参るのか、身の上を聞いてやれ）と、従者にいった。

従者がなぜですかと、問うと、白馬の貴人は、こうい

った。

（おまえ達には、わからぬか。あの童子の眸は、褐色をおびて、陽に向うと、さながら瑪瑙のように光る。な

んで、凡人の子であろうぞ）と、いったという。

果たせるかな、勢至丸は、やがて後の法然上人とな

った。

その時の白馬の貴人は、九条関白忠通公で、縁といお

六

中務省へ、使に走った者は、省の役人から、むずかしい法規と諮問をうけて、手間どっているのであろうか、

なかなか、戻ってこなかった。

青蓮院のひろい内殿は、どこかの笈の水の音が、寒い夕風を生み、塗籠からは、黄昏の色が、湧いてくる。

供の侍従介は、さっきから、廊の端に、坐ったまま、苑面にちりしく白い桜花をじっと見入っていた。

「おそいのう」慈円僧正は、気の毒そうにこうつぶやいた。

ゆらゆらと、短檠たんけいの灯が、運ばれてくる。

「官の小役人には、法にしばらくられて、法の精神を知らぬものがまま多い……。こう遅うては、みずから参つて、説かねばならぬかも知れぬ」

「なんの、待ちどおしいことがございましょうぞ。お案じなく」と、範綱はいった。

「したが、あまりにおそい——。こうしてはどうじゃ」

「はい」

「明日あすか、明後日あさって、まいらば、十八公麿とものを伴うてござれ。それまでには、官のこと、一切、御印可をいただきたいおくが」

「では、そう願ひましょうか」範綱が、答えて、立ちかける、

「お父さま」十八公麿が、いう。

「僧正さまの仰せじゃ。帰ろうぞ」

「いいえ」かぶりを振って——

「いつまでも私は、待ってというござります」

「わからぬ駄々をいうではない、さ……」うながすと、十八公麿は、父が、朗詠する時の節をそのまま真似まねて、

あすありと

おもうころの

あだざくら

夜半よわにあらしの

ふかぬものは……

愛らしい唇で、童歌のようにうたった。

「おお」慈円じえん僧正は、背を寒くしたように、その声に打

たれた。

「よういった。……六条どの、待たねばなるまい、夜が明くるとも」

「はい」ほろりと、範綱のりつなはいった。

うれしいのである。この子の才智のひらめきが。同時におそろしい。

こんなに光る珠を、なんで、平家の者が、眼をつけずにおくものか。待とう。

——夜半よわにあらしのない限りもない。介すけは、今の童歌の声に、

「ああ、あのお可愛らしいお姿も、今宵かぎりか」と、涙はなをすすった。

夕闇にちる花は、白い虫のように、美しく、気味わるく、光のように明滅している。

と——そこへ、

「お使いの者、もどりました」高松衛門えもんが、あわただしく、告げてきた。待ちかねて、

「どうあった？」と、僧正がたずねると、使者は、次の間にぬかずいて、

「中務省なかつかさの御印可、無事、下さがりましてござります」と、復命した。

七

人々の顔に、喜色が、かがやいた。

「そうか、ではすぐに、得度の式をしてとらそうぞ。衛

門、用意を」僧正の一令に、

「はっ」と、衛門は立つ。やがて、どつぷりと墨いろに暮れた御堂の棟木をつたわって、梵鐘の音が、ひびいてくる。

廊には、龕の灯が、ほのかに点る。勤行の僧たちの姿が、かなたの本堂で、赤くやけて見えた。

「どうぞ、こなたへ——」と一人の僧が、それへ来て、用意のできたことを告げると、範綱は、十八公磨の手をとって、静々と、橋廊下をわたって行つた。

供の侍従介も、影に添って、おそろおそろ、二人のうしろから従いてゆく。

伽藍には、一山の僧が、居ならんで、肅としていた。

座談の時とはちがつて、慈円僧正は、やや恐いような厳やかな顔をもって、七条の袈裟を、きちつと裁いて正面に坐っていた。その前にある経机には香炉と、水瓶をのせ、やや退がって、阿闍梨性範の席、左右には、式僧が、七名ずつ、これも、眼たたきもせず、それへ入ってくる九歳の発心者を、じつと、見つめていた。僧が、そつと側へきて、

「和子、お召し物を、かえられい」と、教えた。

「はい」十八公磨は、すらり、と水干を脱いだ。

冷やかな、木綿の素服が、その前へ、与えられる。

——範綱はふと、胸がせまった。

「こちらへ」

僧が手をひいて、壇の前へ、坐らせた。小さな彼の手は、彼がするともなく、また、人が教えるともなく、ひ

たと、合掌して、頭をすこし下げた。

流転三界中
恩愛不能断……

むらさきの糸がのぼるように、縷々と、香炉の中から、おいが立って、同時に、列座の衆僧の声が朗々と、唱和した。

皈依大世尊
能度三有苦

十八公磨のくちびるも、共に、かすかにうごいていた。彼の姿は、この天井のたかい大伽藍の底にすわると、よけいに、小さく見えるのであった。

「……………」慈円僧正は、座を立った。

僧が二人、左右から、紙燭を捧げる。

一人の僧はまた、盤のうえに、剃刀をささげ、また、一人は十八公磨のそばに寄って、水瓶を捧げていた。

僧正の法衣の袖が、ふわりと、十八公磨の肩にかぶさった。その手には、剃刀が執られている。剃刀は、水瓶の水に濡らされて、きらりと、青く光った。

「……………」範綱は、思わず、横の方へ、体をまわしてにじり出していった。

（どんな顔して——）と、十八公磨のすがたが、僧正や、他の僧のために見えないのが、もどかしいのであった。

しゃくつ……と、後ろで、誰かしのび泣きをもらした者がある。はっと思つて、範綱はふり返った。板床の方に離れて控えた侍従介である。まだ、十八公磨が、乳もふくまないうちから、あやしたり、負ったり、抱いた

りしていた介としては、たまらない感情がこみあげていたに違いない。

八

（不作法者め！）声には、出さなかったが、範綱は、はたと、睨みつけた。

はっと、介は、自分の腕くびに、噛みついて、顔を俯つ伏せた。

介を、叱りはしたものの範綱自身こそ、瞼のものが、あやうく、こぼれそうだった。

（凡夫——）われを嘲りつつ、彼は、つい眼をそらしていた。あの、小さい頭がと想像すると、たまらないのである。——見たら、泣けてしまおうと思った。すると、

「ご得度の式、すみしました」と、式僧がいった。

見ると、十八公廬の頭は、もう、あのふさふさしている若木の黒髪を剃り落して、瓜のように、愛らしい青さになっていた。

「もしつ……僧正様ツ、おねがいでございますっ」突然、一人の男が壇の前へ飛びだしてきて、べたっと、手をつかえた。

「あっ」範綱は、驚いた。

僧正の足もとへ来て、泣いているのは、介であった。

「ぶしつけなっ、退がれっ」範綱が、叱りつけると、

「あ、いや」やさしく、僧正はささえて、

「なんじゃ」と、介へたずねた。介は、肩をふるわせて、「お願いの儀、ほかではござりませぬが、永年、お乳の香のするころより、お傳の役、いたしました私、今、その和子様が、御得度あそばしますのを、なんで、このまよそにながめて、俗界にもどられましょう。……どうぞ、いやしい雑人ではござりますが、この私も今宵の式のおついでに、お剃刀をいただかせて、くださいませ」

「ふーむ、そちも、主に従って僧籍に入りたいというのか」

「はい」

「しおらしいことを」僧正は、にこと、うなずいて、「主従の情、そうもあらう——六条どの、この者の望み、かなえて取らせたいが、おもとには」

「さしつかえござりませぬ」

「では」と、僧正は、ふたたび剃刀を執った。

花は、夜の風にのって、御堂の廊に、雪のように吹きこむ。音誦朗々——衆僧の読経もまたつづく。

（主従は三世——）と、介はうれしかった。

十八公廬は、もう、成りすました道心のように、彼の、剃られてゆく、頭をながめていた。

一炷、また一炷。香は、春の夜を、現世を、夢ぞと教えるように立ちのぼる。

式は、済んだ。白衣円顱のふたりのために、僧正は、法名をつけてくれた。

十八公廬は、範宴少納言。介は、性善坊。

「ありがとうぞんじまする」二人は、手をつかえて、寒

々とした頭^{づむり}を下げた。

*

その夜――、更けてから。キリ、キリ、と牛車^{わだち}の軌^きは、ただひとり、黙然と、袖を掻きあわせてさし俯^{うつむ}向^むいた六条の範綱^{はんこう}をのせて、青蓮院^{しょうれんいん}から栗田口^{あわたぐち}の、さびしい、花吹雪の中を、帰ってゆくのであった。

登岳篇

くろかみ

—

銀杏が、黄ばんでくる——

秋となると、うるさいほどな鴉の声であつた。

コウン、コウン、コン——青蓮院の山門には、足場がかかつていた。夏の暴風で破損した欄間彫へ二人の塗師と三人の彫刻師とが来て、修繕していた。

「おい、祥雲」ひとりが、鑿を休めている。

「なんだ」

「可愛らしい子じゃないか」

「ム、あの新発意か」

「どこかで、見たような気がするが……」

「おれも、そう思っている」塗師が、

「飯にしようぜ」足場を下りて行つた。

「もう、午か」木屑を払いながら、彫刻師たちも、下へ行った。

秋蟬が、啼いている。石井戸のそばに、坐りこんで、工匠たちは弁当をひらき初めた。

すると、院の廊下を、噂していた小さな新発意が、ちよちよこと通つて行つた。

「もし、もし」光斎という彫刻師がよびとめた廊下のうで、範宴少納言はにこと笑つた。

「なあに、おじさん」

「あなたは、お幾歳」

「九歳」

「へエ、それでは、お小さいわけだ、いつから、この青蓮院へおいでになりました」

「春ごろから」

「じゃあ、半年にしかありませんね」

「え、え」

「おつ母さんの乳がのみたいでしょう」

「ううん……」範宴は、首を振つた。

「お邸は、どこですか」

「六条」

「では、源氏町のご近所で」

「え」

「ご両親が、戦に出て、討死にでもしたのですか」

「いいえ」

「どうして、お坊さんなぞに、なつたんですか」

「知らない……」

「ご存知ない？」

「はい」

「お父様は、どなた」

「六条の朝臣範綱」

「え、六条さま。——道理で」光斎は、仲間の祥雲と、何かささやき合っていたが、やがて、

「範宴さん」

「はい」

「じゃ、あなたは、日野の里で、お生れなさったでしょう。私たちは日野のご実家の方へ、半月ほど、仕事に参ったことがありますたっけ——大きくおなりになった」
「では、日野の館の仏間は、おまえたがこしらえたの」

「あの中のご仏像を、やはり、修繕しにゆきました」

「おじさんたちは、仏像を彫るのがお仕事なの」

「そうです」光斎は、しげしげと、欄にもたれている範宴をながめて、

「その顔を、そのまま彫ると、ほんとに、いい作ができるがなあ」と、つぶやいた。

「じゃあ、彫ってもいいよ」範宴は、すぐにでもできるように、そういつて笑った。

二

「彫らしてくれますか」光斎と、祥雲の二人は、顔を見あわせた。

（彫りたい）

（彫ろう）という創作慾にそそられて、

「じゃあ、明日から、飯やすみのたびに、ここへ来てください」と、約束した。

午になると、二人は、足場を下りてきた。範宴は、欄の上に立った。

材は、かなり大きな木を用いた。三尺ぐらいな坐像に仕上げるつもりらしい。二人の仏師は、飯を噛みながら毎日、鑿を持って、範宴の輪郭を少しずつ写して行った。介の性善坊は、それを知ってから、毎日、側へ来て見ていた。

山門の足場に、白い霜が下りるころになると、その足場はこわされて、仏師や塗師たちも来なくなった。

すると、初冬のある日、

「ごめん下さい」範宴のいる僧院の外で、聞き馴れない声がした。次の間にいた性善坊が、

「どなた？」障子をあげると、

「おお！ 介じゃないか」

「箭四郎か」

「変ったのう」

「まあ、上がれ」

「山門のうちも、なかなか広くて、諸所に、僧房があるので、さんざん迷うた」

「達者か」

「おぬしも」

「六条のお館は、和子様が、青蓮院にお入りあそばし
てから、まるで、冬枯れの家のようにおさびしくてな」
「そうだろう。——して、お館様にも、おかわりないか」

「む……まず、ご無事と申そうか」

「して、今日は」

「この近くまで、お使いに來たので、そっと立ち寄って、和子様のご様子を聞いて帰ろうかと……」

「そうか、よく寄ってくれた。世間を去ると、世間が恋しい」ふたりは、手を取り合って、涙ぐんでいた。性善坊は、やがて立って、

「範宴さま」

「はい」範宴は、書を読んでいた。

「——誰が見えたの」

「箭四が、参りました」

「おお」と、さすがに、なつかしそうに、縁のほうへ走ってきた。

「和子様か」変った彼のすがたに、箭四郎は、涙をすすった。

「お養父様は」

「おかわりもごさいませぬ」

「朝麿は」

「おげん気で、日にまして、ご成人でございまする」

「わしのこと、問うか」

「はい……。このごろは、やっとすこし、お忘れのようございませう」

「さびしがっておろうの」範宴は、庭へ下りて、籬に咲いていた白菊を剪った。

「これ、朝麿に、持って行って賜も。——わしの土産に」
そういうと、性善坊が、

「よい土産がある。範宴さま、あれを箭四に持たせてお

つかわしなされてはいかがですか」

三

「おお、ほんに」範宴は、箭四郎の手をとって、

「よいものがある」

「なんでございますか」

「まあ、来てみやり」自分の居間へ伴れて行った。

「あ……」箭四郎は、ぺたんと、部屋のまん中に坐って、一隅にある木彫の坐像にまろい眼をみはった。

それは、得度をうける前の十八公麿のすがたのままであった。頭には、黒髪まで、ふさふさと植えられてるのである。

「これは、どうしたものでございませう」

「されば」と、性善坊は、側から、その坐像のできた由来を話すのに、つぶさであった。

光斎と、祥雲の二人の仏師は、十八公麿の面ざしを見て、よほど、心をひかれたらしい。生ける菩薩のようだといって、慾も得もなく、彫ったのである。そして、彫りあがると、

（よい勉強をいたしました）と、坐像は礼に置いて行ったのであるという。

「ははあ……」箭四は、見慌れて、

「そういわれれば、生きうつしでござりますな。して、黒髪は」

「和子さまが、得度の時の黒髪を、そっくり、仏師たち

が、植えこんでくれたのじゃ」

「道理で……。ウウム、ようできている」

「箭四よ」

「はい」

「これを、お養父君と、弟の朝麿とに、十八公麿のかたみじやと申して、そなたが、負うて帰ってくれぬか」

「なによりの儀にござります。これを、お館にお置き遊ばしたら、すこしは、おさびしさが、紛れましように」

「もう、二度と、この身にない相じや。——御恩のほどは、この像に、たましいをこめて、朝夕に、忘れずにおりますと、よう、お伝え申しての」

「しおらしいことを仰せあそばす……」箭四郎は、それから、少し話していたが、日が暮れると、近ごろは気味がわるいといって、あわてて、坐像を帯で背に負って、もどって行った。そして、山門まで送ってくる二人へ、

「ここにいては、町のことは、見も、お聞きも、遊ばしますまいが、いやもう、この夏の早やら、木曾勢を討つつもりで出かけた宗盛卿が、さんさんに敗れて、都へ逃げもどって来るやらで、京は、ひどい騒ぎの渦でござります」歩きながら、尽きない話を、喋舌っていた。

「——そんなかのう」

「現世で、地獄の風のふかない所は、まず、御所にもなし、お寺の庭だけでございましょうよ。——昨夜あたり、五条の近くまで、用たしに出ると、磔に、斬られたか、飢え死にしている死骸の着ている衣を、あさましや、野武士か、菰僧か、ようわかりませぬが、二、三人して、

あばき合って、果ては掴みかかって争っているではございませんか。まったく、眼を掩うてでなければ、町は歩いていられませぬ」山門には、鴉が啼いていた。

「ああ、暮れる……」と、つぶやいて、袖門の潜りを出て、箭四郎は、もいちど、振りかえった。

「では——ごきげんよろしゅう、和子さま、いや範宴様、これから寒くなりますから、おからだをな……介どの、さようなら」

栗田口の雑木の葉がすっかり落ちきって、冬日の射す山肌に、塔の欄が赤く見える。

霜は、朝ごとに、白さを増した。

範宴少納言は、暗いうちに起きて、他の僧たちといっしょに、氷のような廻廊を、水で拭く、庭を掃く、水を汲む。

それから勤行の座にすわる。

やっと、南天の赤い実に、陽のあたるころとなって、厨の一仕事をいいつけられる。それが済むと、学寮に入って、師の坊の講義だの、僧たちの討論をきいて、やっと、自分のからだになって、机に坐るのが、もう午であつた。

「おいたわしい」と、性善坊は、範宴のかわりに、水を汲んだり、拭き掃除をしようとしたが、他の僧に見つかり、と、

「ばか者、なんで寺へ入れた」といわれる。慈円僧正もまた、

「庇うことはならぬ」と、叱った。

以来、見て見ぬふりをしているが、時折、「ああ手が腫れていらっしやる……」と、彼のあかぎれを見ても、胸

が迫った。

こういう、世間なみの人情を、寺では、凡情とわらう。もっと、ほんとうの愛をもてという。

「そうかなあ」彼自身もまた、自身の勉強にせわしかつた。

十二月に入ると初旬の三日には、慈円僧正が叡山にのぼるということを、範宴は、弟子僧から聞いた。

叡山の座主であり、慈円僧正の師でもある覚快法親王が、世を去られたために、その後にのぞんで、一山の大衆を導くことになったのである。

だが、慈円は、そんな身辺の変化が、明日に迫っているとも知らないように、一室で、例の支那から渡来した茶の葉を、独りで、煮ている。

「お師さま」範宴は、そっと手をついた。

「なにか」

「おねがいがあります」

「ほ……。菓子でもほしいか」

「いいえ、ちがいます。——お師さまは、明日、叡山へおのぼりになると聞きました」

「うむ」

「私を、連れて行って下さい」慈円は、笑った。

「叡山を、知っているか」

「朝夕、ながめています」

「うらかな日は、慈母のように、やさしく見える。だが、あのお山のふところには、どんな苦行があるか、それを、おまえは知るまい」

「聞いています。修行は、苦しいものだ、皆さまが申します」

「でも、登る気か」

「一人では、ゆかれませんが、お師様のお供をしてなら、どんな、苦しいところへでも、従いてゆける気がします」

「もののふの戦よりも、もっと、辛いぞ」

「そういう、苦難とやらに、この身をためしてみたいのです」

「それほどに、決心してか」

「はい」ぱちりと、範宴は、眼をみはっていった。

じつと、僧正を見つめていた。うっかり、下ろし忘れた茶瓶ちやびんのふたが、かたかたと、おどった。そつと、火鉢から下ろして、

「よろしい」慈円は、うなずいた。

それまで、恐いものの前に坐っているように硬くなっていた範宴は、

「ほんとですか」よろこんで、小さい掌てを、ぱちつと叩いた。

二

ばたばたと、廊下を走ってきて、

「性善坊しょうぜんぼう」範宴が、部屋をのぞいた。

「はい」

「お師さまのおゆるしが出了。明日は、早う立つぞ。脚絆きゃはんや、笠の支度をしてたも」

「どこへ、お立ちでございますな」

「そなた、知らぬのか。お師さまは叡山の座主におなりなされたのではないか」

「それは、存じていますが」

「だから、わしも、叡山へ登って、苦行と学問をするのだ」

「ははは」

「なにを笑う？」

「お得度をうけたことでも、お師の僧正さまは、天台の宗規しゅうぎを破ったとか、横暴だとか、世間からも中務省なかつかきしょうの役人からも、非難されているのですから、とても、叡山えいざんなどへ、範宴はんえんさまを、お連れくださるわけはありません」

「だって、ゆるすと仰っしゃった。仏につかえる師の君が、嘘うそを仰っしゃるはずはない」

「でも、だめでございます。まだ、九歳ここのつのお弟子に、登岳とうがくをおゆるしになるはずがあるのですか」性善坊は、ほんとにしないのである。山の苦行にたえられるはずもなし、山の掟おきてというものは、町の寺院とはちがって、峻厳しゅんげんにして犯すべからざるものであるから、それを破っては、座主ざすとして、一山の示しもつかないというのである。

「そうかしら？」範宴は、不安になった。

「寢床よなかへ入っても、範宴は、眼をぱちぱちさせていた。夜半よなかごろから、窓の小障子に、さらさらと雪のさわる音がしていた。

範宴は、起きだして、そつと庫裡くらの方へあるいて行った。雨戸のない濡れ縁には、雪がまるく溜たまっていた。

慈円じえん僧正は、未明のうちに、脚絆きゃはんをつけて身支度を済ましていた。供に従って行く者と、後に残って見送る者とが、山門の両側にならんで、列を作っていた。

夜来の雪は、明け方にかけて、風を加えて降りしきっている。僧正は、笠のふちに手をかけて、「さらば——」と、一同へ訣別わかれを告げた。

三人の弟子は、かいがいしく身をかためて、師僧の供について歩きだした。すると、山門を降りた所の木蔭から、思いがけない範宴わんえんが、藁沓わらぐつをはき、竹の杖を持って、ふいに横から出て、供の僧のいちばん後に尾いてあるきだした。弟子僧たちは驚いて、

「おや、おまえは、どこへ行くつもりだね？」

「叡山えいざんへ、お供して参ります」

「冗談じゃない。叡山というところは、お小僧なぞの行けるところではなし、また、掟おきてとして、年端としはもゆかぬ者や、入室して、半年や一年にしかならぬ者の登岳とうがくはゆるされぬ」

「でも、参ります」

「叱られるぞよ」

「叱られても参ります」

「帰れ」

「こいつ、剛情なやつ」と、弟子僧たちが、止めているのを、振りかえって、慈円僧正は、困り顔をしながらも、苦笑をうかべて、眺めていた。

範宴は、弟子僧たちの間を、くぐり抜けてきて、師の袂たもとをつかまえて、訴えるような眼をした。

三

「お師さま。きのう仰っしゃったおことは、嘘ですか」慈円は、笑いながら、首を横にふった。範宴はたたみかけて、

「——でも、きのうは、供をゆるすと仰っしゃりながら、今朝は、知らぬ顔して、お山へ立って行こうとなさるではございませんか」

「……」慈円はまた顔を振った。

「では、どうなんですか」

「忘れたのじゃよ」やむなく、僧正はこういつて、範宴をつれてゆくことに、肚をすえてしまったようであった。

しばらく行くと、雪の中に、性善坊が立っていた。彼は、ゆうべからの範宴のすることを知っていたが、自分が生なまななことばを挟んでは、かえって、範宴の意志が徹らぬようなことになるであらうと、わざと知らぬ顔をして、先へ廻って待ちもうけていたのである。

範宴の登岳とうがくをゆるした以上、当然、性善坊の供をゆるさぬわけにはゆかなかった。で、そこから僧正に従ってゆく供の弟子僧は、すべてで五名になった。

雪は、吹きつのつてくるので、

「今日は、麓ふもと口でおやすみになって、明日あすでも、雪の霽あがるのを待ってからお登りになっては——」と、供僧のうちで、いう者があったが、気性のはげしい、そしてまだ若い僧正は、

「なんの」と、脚もとめないのであつた。

もっとも、新座主の登岳は、今日ということに、半月も前から叡山へは通牒してあるので、それを違えれば、中堂の人々や、一山の大衆に多大な手ちがいをかけなければならぬから、

「では」と、供の者も、強つてとは、止めることもしなかつた。

「おうーい」後ろで、誰か呼ぶような気がするので、五名は振り向いた。白い光の縞が、斜めに天地をかすめている、遠くからながめると、飛んでくる白鷺とも見える二つの蓑笠をかぶつた者が、

「おうーい」声をあげつつ、来るのであつた。

「誰だろう? ……」しばらくの間、雪にふきつけられたまま、五名は佇んで待っていた。

蓑笠の二人はやがて、近づいてきて、

「その中に、少納言どのは、おいであるか」と、いった。

「はい」範宴は、答えて前へ出た。

「おお」と、蓑を刎ね上げて、一人は前へすすみ、一人は、雪の中に、手をつかえた。

彼の小さい手を、握りしめた人は、彼の儒学の師範であつた日野民部忠経だつた。うしろで、手をつかえているのは、この間、範宴がかたみぞといつて植髪うゑがみの坐像をもたせて帰した六条の召使、箭四郎やしろうなのである。

「先生」範宴は、思いがけなかつたように、そして、欣しさに、こみあげらるるように、まぶた瞼を赤くした。民部は、ことばに力をこめて、

「たつた今、青蓮院へ伺つたところが、かくとのことに、追つてきたのじゃ。箭四郎をも、誘つてきた。——六条どのは、わざと来ぬが、くれぐれも、身をいとしめとお言伝ことづて……。修行の一步、こなたも、欣しくぞんずる。誓つて、勉強しなければなりませぬぞ」

「はい」泳こらえていたものを、範宴は、ぽろりと一雫ひとしずく、こぼしてしまつた。

四

性善坊は、そばから、

「範宴さま。先生のお気もちや、お養父君のお心を、お忘れあそばすな」範宴は、うなずいて、

「はい」といった。そして、

「忘れません、きつと、勉強して、お目にかかります」

「和子さま」箭四郎は、にじり寄つて、雪の中から彼の笠のうちを見上げた。

「おからだを、お大事に遊ばせや」

「あい。……お養父君や、弟にも、からだを気をつけてあげておくれ。……おまえも」

「……」箭四郎は、顔を俯伏うつぶせたまま、降る雪を、背につもらせて、泣いていた。

「参ろうぞ」慈円は弟子僧たちを、うながして、先へあゆみ出した。範宴はあわてて、

「さようなら」

「おさらば」と、日野民部が去つた。

「和子さま」箭四郎は、立ち上がって、もいちど大きく呼んだが、声は、風と雪に攫さらわれて、宙にふかれてしまった。

——後ろも見ずに、範宴は、先へゆく師の房と弟子たちの後を追って走ってゆくのであった。幾たびか、雪にまろんで。

そして、叡山えいざん口へかかって行く。

山にかかる、山はなおひどかった。師の慈円をはじめ弟子僧たちは、誰からともなく、經文きょうもんを口に誦ずして、それが、音吐高々と、雪と闘いながら踏みほってゆくのであった。

範宴も、口の裡で真似まねて、經を誦した。はじめのうちは、声も出なかったが、いつのまにか、われを忘れていた。

迂すべっても、ころんでも、傍はたの者は、彼をたすけなかった。性善坊ですら、手をとって、起してはやらないのである。それが、師の慈悲であった、弟子僧たちの友情なのであった。

「——誰か知る、千丈の雪」慈円は、つぶやいた。

「おつかれになりませんか」弟子僧たちがいたわると、「なんの」と、首を振られるばかりであった。

範宴は、おくれがちであった。雪が、雪の中をころがって行くように、峰を這った、谷道を越えた。性善坊は、後ろについて、

「もうすこしです」と励ました。

「大丈夫」と、範宴はいう。

幾たびか、ころぶので、竹の杖をにぎっている指の間から血が出ていた。

それでも、

「大丈夫」と、いうのである。

なんという意志の強さだろう、強情さであろう、負けん気であろう、そして、熱情だろう——と性善坊は、小さい範宴のうしろで、ひそかに思った。

やはり、この和子の五体には、義家からの母御の血——義經よしのね、頼朝と同じな、源家の武士の脈搏みやくはくがつよく搏うっているらしい。

境遇と、生い立ちの置き所によれば、この少年もまた、平家に弓をひく陣頭の一将となっていたかも知れない。

「御仏みほとけが、それを救うてくださるのだ。有縁うえんの山だ」と、彼は踏みしめる雪に感激をおぼえた。

一

夜がすみ、朝がすみ——叡山の春秋はしずかだった。
宙のなかに無辺のすがたを浮かべている虚のようであつた。

永い冬が過ぎる。そしてやがて春ともなると、木の芽時のほの赤い樹々のあいだに、白くみえるのは、残雪ではない。山ざくらの花である。

迦陵頻伽の声ともきこえる山千禽のチチとさえざる朝——根本中堂のあたりから手をかざして、霞の底の京洛をながめると、そこには悠久とながれる加茂の一水が帯のように光っているだけで、人間の箇々の消長や、文化の変転の何ものをも見ることはできなかったけれども、麓から登ってくるものの噂によると、どうして、この半年ほどの間に、世間のなかの変わりようは、絵にも口にも尽すことができないという——

まず、去年からの飢饉のために、盗賊がふえたことは大変なものであるとのことだ。都といわず、田舎といわず野盗の類、海盜の輩が跳梁して、政府をあるかなきがごとく、横行して、良民を泣かしているということである。

それも、平家の政庁が、あるにはあつて、なんらの善

政をしこうともせず、中央は、中央で一時的の享樂にこの幾年を送り、地方は地方で、小吏が京洛の悪風をまねて、ただ良民をくるしめて、自己の悦樂を事としていたので、その余憤も駆られ、その隙にも乗じたのが、皆、矛をとつて、賊に化つたような傾きもある。

のみならず、昨年来、関東の方から起つた源氏の革新的な軍勢は、日のたつにしたがつてその勢いはあなどり難いものになっている。

伊豆の頼朝には、いわゆる、坂東武者とよばれる郷族が、草を薙いで、呼応してくるし、熊野の僧兵が呼応するし、これだけでも平家の狼狽はかなりみぐるしいものであつたところへ、

「朝日將軍木曾義仲——」と、みずから名乗つて出た思いがけない破竹の強兵が、これも、夢想もしていなかった北国の空から、琵琶湖の湖北に迫つて、兵鼓をうちたたき、声をうしおと揚げて、京洛に近づきつつあるという情報の頻々たるものがある。

「木曾山の小冠者ばらをして、都へ、近づけしむるな」と、中央の政庁は、街道の諸大名へ向つて、飛令をとばしたけれど、人の心はいつのまにか、この二、三年のあいだに、掌のひらかえたように變つてしまつていたのであつた。

誰あつて、木曾軍に対して、

「われこそ」と、阻める一國すらないのであつた。
あわてて都から、討伐に向つた城資永は斃れ、新たに、精鋭を組織して、薩摩守忠度は今、北国路へ発向し

ている。

だが、これもどうか？

一方にまた、東海道方面へは、平知盛と清経の二将が、ものものしく押し下ったが、頼朝の軍に出遭うと、一たまりもなく、墨俣川にやぶられて、散走乱離に、味方の統制すらつかない状態であるという沙汰も、政庁では秘密にしていたが、いつのまにか、うわさになって、「——平家武者は、さすがに、花武者じゃ、露には咲くが、風には弱うて、よう散るよう散る」

などと、俗歌にまで、謡われて、市民たちにまで、小馬鹿にされ初めてきた。

平家は、あせりだした。迷い出した。——で、彼らは、叡山に使者をたてて、一山の衆僧に、源氏調伏の祈禱をすべく命じた。いつでも、敗者のすぎる神仏の力でこの時勢をささえようとした。

二

「源氏調伏」の祈願は、そうして、叡山の日課として、日々、くりかえされていた。

仏燈の油や、壇の費えを惜しまず、誦経、梵鐘の音は、雲にこたえ、谷間にひびいた。

いかなる魔魅も、こういう人間の一念な行には、近よりがたいであろうと思えた。

しかし、行の座にすわる僧たちの心には、今の平家に飽きたらぬものや、不平こそあるが、国家改革の新し

い源氏とよぶ勢力に対して、なんの恨みもないのである。調伏の灯は、壇に満ち、誦経に喉は嚙らしていても、それは、職業としてやっているに過ぎなかった。

司権者の命令であるし、近衛摂政からのお沙汰というので、（やらねばなるまい）でやっているお役目であった。形式的な、勤めであった。

その一七日の勤めが終ったので惣持院の学寮に、若い学僧たちが寄り集まって、

「ああ」伸びをしたり、

「肩がこった」と、自分で叩いたり、

「麦餅が食いたいな」と食慾をつぶやいたりして、陽溜りに、くるま座を作って、談笑していた。

ひとりが、どこからか持ってきた麦餅を、盆に盛って、「喰べんか」自分が先に、一枚とって、ばりばりと、噛む。

「もちつと、塩味があると美味しいのだが、この麦餅は、麦の粉ばかりじゃないか」

「ぜいたくをいうな、塩でも、なかなか近ごろは、手に入らぬ」

「せめて、塩ぐらいは、われわれの口へも、豊かに入るような政治が欲しいものだ」

「今になるよ」

「源氏が天下をとればか」

「ウム」

「武家の天下の廻り持ちも、あまり、あてにはならん。——天下をとるまでは、人民へも、僧侶にも、いかにも、

善政をしくようなことをいうが、おのれの望みを達して、司権者の位置に就くと、英雄どもは、自分の栄華に忙しくなつて、旗を挙げた時の意気や良心は、忘れてしまふよ」

「それでも、現在のままでいるよりはましだ」

「この叡山の上から見ていると、栄華も凋落も、一瞬間だ、まったく、浮世の変遷というものが、まざまざとわかる」

「つい昨日までは、天下の春は、六波羅の政庁と、平氏一門に聚まつて、平氏の家人でなければ、人にあらずといわれていたのが、今日は、源氏調伏の祈願に、浮身を棄てなければならぬとは、なんという醜態だろう」

「笑止、笑止」学僧たちは、手を打つて、笑いあつた。

「南都の大伽藍を焼き払つたり、大仏殿の炎上を敢てしたりした平家が、その仏にすがつて、調伏の祈願するとは、何という勝手なことだ」

「先には、十禪師の神輿をさえ、踏み躪つた、あの羅刹どもが、祈願をしたとて、何の効があるものか」学僧たちの話しているのを聞けば、むしろ、平家調伏の声であつた。

すると、実相院の朱王房という若い堂衆がいった。

「あまり、自己を、侮蔑するな、聞き苦しい」

「何だと、朱王房」学僧たちの眼は、彼の顔にあつまつた。

口論や、なぐり合ひは、日常茶飯事であるし、何か事ある時は、身を鎧い、武器をひっさげて、戦をもする当時の僧であつた。

気のあらう学僧たちは、朱王房のことばに、すぐ、眼にかどを立てて、

「誰が、いつ、自己を侮蔑したか」

「したじゃないか」朱王房も、負けていないのである。

「なるほど、皆のいう通り武家というやつは、勝手者だ、わけでも、平家の如きは旺な時には、神仏を焼き、衰えてくると、神仏にすぎる、怪しからぬ一族だが、その武家に養なわれて、平家の世には、源氏を呪い、源氏の世には平家調伏の祈りをする、われわれ僧侶という者のほうが、いくら、役目とはいへ、神仏を馬鹿にしているものだ。——だから、平家を罵ることは、自分たちを罵っているのも同じことだといえる。——そういったのは間違だらうか」

「……………」

「三塔の権威がどこにある」皆が、黙つたので、朱王房は、得意になつてなおいった。

「——この一山には、三千の僧衆がこもつて、真言を修め、經典を読んではいるが、堂塔も、碩学も、社会にとつては、縁なき石に等しい。武家が天下を取つたり取られたりするたびに、心にもない祈祷をし、能も、智恵も

なく、暮しているのが今の僧徒だ。恥しいことではないか」

すると、妙光房みょうこうぼうという学僧が、

「いかにも、朱王房の説のとおりだ——。僧徒だからとて、時の司権者に、圧おさえられて、無為無能に、納まればかりいていいものではない」と、共鳴した。

「いや、違う」という者も、出てきた。

「なぜ違う？」

「僧には、僧の使命がある。——政治だの、戦だの、そんな有為うゐ轉變てんぺんを超えて、社会よりも、高いところにあるのが僧だ、叡山えいざんだ。——平家が悩む時には、平家も救ってやろう、源氏が苦しむ時には源氏もなぐさめてやろう。それが仏徒の任務だと思う」

「ばかなっ」朱王房は、一言に退けて、

「支配者ばかりが、人間か——平家という司権者の下には、何百万の人民がいることを忘れてはならない。その民たちが、望むところを、助成してやるのが、僧徒の使命だ」

「じゃあ、僧徒は革命家か。……飛んでもないことをいう」

「そんな、大それたことを、いうのじゃない」

「でも、朱王房のいうことは、そういう結論になる」

「俺は、悪政の下に、虐しいたげられている民へ、諦あきらめの哲学や、因果などを説法して、司権者の代弁人ばかりしているのが、僧徒のつとめではないということだけをいうのだ」

「じゃ、僧徒は、何をすべきか——。それを聞かせてもらおうじゃないか」

「することは、沢山ある。——だが第一に、なさねばならぬことは、まず、僧徒自身の肅正しゆくせいだろう。叡山えいざん自体が、腐敗しては何もできない。——実社会にとって用のない、穀こくつぶしの集まりだ、堂塔からすが鴉からすの巢にならないうに、番人をしていてだけの者に過ぎない」

「生意気をいうなっ」と、学僧の一人が、法衣こころもをたくしあげて、朱王房の横顔を、拳こぶしで撲った。

四

「あっ」打たれた頬を抑えながら、

「生意気とはなんだ」朱王房も、拳をかためて、立ち上がった。

あわや、組み打ちになろうとする双方の血相なので、

「まあ、待てっ」

「議論のことは、議論でやれ」学僧たちは、引きわけて、「朱王房のことばも、あまり過激すぎる。そんなに腑甲斐ふがひのない叡山えいざんなら、自分から、さっさと山を下りたらいじゃないか」

「そうだ、いくら、叡山が無能だからといって、自己の生涯を托たくしている御山みやまのことを、今のうちに、いうのはよくない」

「若い、若い。口では誰でも、悲憤慷慨ひふんこうがいはいえるものだが、自分で、やれといわれたら、何もできるものじゃない」

い」

「社会もそうだ、山もそうだ」多勢おおぜいの声には、朱王房も、争えなかった。打たれた頬の片方を、赤くして黙りこんだ。

すると、さっき、彼のことばに賛意を表した妙光房が責任を感じたように、

「いや、朱王房のことばは、露骨で、云いかたが悪いのだ。彼には、何かほかに、感じるものがあって、ついその余憤が出たのだろう。なあおい、そうじゃないのか」

「うん……」朱王房は、うなずいた。

「この間も、俺をつかまえて、憤慨していたから、あのことをきつと、いいたかったに違いない」

「あのことは？」

「新座主しんざすの問題だ」

「ふーム」学僧たちは、新しい話題に、好奇心眼を光らしあって、

「新座主といえは、こんど、青蓮院しょうれんいんからのぼられた慈円じえん僧正だが、その座主について、何か問題があるのか」

「朱王房、いってみろ」と、いわれて、

「ないこともない——」と、朱王房は、顔を上げた。

「どんなこと？」

「ほかではないが」

「うむ」

「俺のような、一介の末輩がいうのは、おそれ多いとも思ってたまっていたが……。慈円僧正の態度は、三千のわれわれ大衆を無視しているばかりでなく、真言しんごん千古の

法則を、座主みづか自ら、勝手に紊みだしているものと、俺は思うのだ。——そんなだらしないことでは、山の厳肅げんしゆくがたもてるわけのものじゃない。だから吾々の法城ほうじょうは、もう実のところ何の力もないのだ。鴉からすの番人だというような嘆息が、つい出てしまう……。いい過ぎだろうか」

「座主が、自ら、山の法則を紊みだしたとは、どんなことか」

「誰も、知らないのか」

「知らん」

「じゃ、いうが……。この冬、新座主と共に、登岳した範宴はんえん少納言という者を、各々は、見ていないか」

「あの小さい稚僧ちそうか」

「そうだ」

「あれなら、よく見かけるが、まるで嬰あかん坊ぼうじゃないか。未丁みてい年者を、山へ連れてきたということは、ちよつと、碩学せきがくの中で、問題になったが、結局、取るにたらん子どものことだし、僧正が青蓮院に在住のころから、お側に侍かしずいていた者でもあるし……と黙認もくにんになっているのだから、そのことなら、問題にはならんぜ」

五

「いや、問題は範宴少納言を、登岳させたというだけではない」朱王房は、語気をつよめて、

「——それだけなら、何もたいして、騒ぐこともないが、近ごろ、チラと聞くとところによると、座主は、何と心得ているのか、あのわずか十歳の稚僧ちそうに、授戒入壇じゅかいにゅうだんの式

を、許されるという噂なのだ」

「はははは」学僧たちは、一笑に附して、

「そんな、馬鹿げた話が、あるものか。それや、朱王房の聞きがちがえだろう」

「なに、たしかなことだ」

「うそだよ」

「ほんとだ！」笑い去ってしまうには、あまりに、彼の顔つきは、真顔だった。

「誰に聞いた」

「中堂の執務から——」

「何日」

「近いうちに、授戒入壇をさせるからと、支度を命じられたという」

「はてな？」解せない顔つきで、人々は、小首をかしげたが、

「朱王房、よもや、嘘ではあるまいな」

「誰が、こんな嘘をいうか」

「事実とすれば、言語道断だぞ」

「怪しからぬ儀だ」

「私情というほかはない」

「法規の蹂躪だ」学僧たちは、不平と、公憤に、熱して、怒りをおびた。

「まだ、十歳や十一の小童を、山へ連れ登られたことさえ、奇怪であるのに、ものものしい入壇授戒を、あの凄惨垂れの稚僧に、ゆるすとあれば、すこし、狂気の沙汰である」

「陽気のせいだろう」

「笑いごとじゃないっ」憤然と、立つ者がある。鼎のように沸いてきた。昂奮した顔が、

「諸公！」と拳を振って、演舌した。

「聞いたか、朱王房のことばを、もし、それにして、事実ならば、吾々は、黙っていられないッ」

「そうだっ」衆が、答える。

「——範宴少納言とやら、どんな天才か、麒麟児かしらぬが、そもそも、授戒入壇のことは、円頓菩薩の大戒として、吾々が、この山にあって、十年、二十年の修行をしても、容易にゆるされない格式のものだ」

「然り、ここにいる者を、見渡しても、まだ一人も、入壇をうけたものはないぞ」

「それをだ」と、憤激の手は空を打つ。

「まだ、去年の十二月に、麓から、よたよた這い上がった十歳の稚僧に、突如として、これを授けるとは何事だ。依怙にも、ほどがある。私情をもって、大法を紊すといわれても、いい開きはあるまい。それでも、吾々は、一山の座主のする業であるからと、黙過するか」

「ならん」

「断乎と、排撃すべきである」また、座の一角から立つ者があらわれて、

「かかる、悪例をひらいては、日本四大山の戒壇にも、悪影響を及ぼそう。また、叡山そのものの恥辱である。こぞって、吾々は、座主の私心を糾弾しようじゃないか」

「そうとも、おのおのは、宿房に帰って、院主や阿闍梨たちにも、このことを告げて、一山をうごかせ！」と、さけんで、別れた。

六

根本中堂は、静かだった。

一山の若い学僧たちのあいだに範宴の問題から、座主の慈円僧正に、ごうごうと、非難が起っているなどとは登岳以来、そこに、常住していた僧正も、範宴も、性善坊も、すこしも、知らないことであつた。

中堂の薬師瑠璃光如来のまえに小さな範宴は、朝に夕べに、生涯の精進をちかつていた。この北嶺の頂へのぼってからは、何か、今までよりは、仏の側へ、一步、近づいてきたような心地がして、うれしかった。

範宴が、師の僧正に仕えているように、その範宴のゆく所に添って、影のように、彼を守っているのは、性善坊であつた。

その性善坊は、今日、東塔の南谷まで、使いに行つて歸ってくる途中であつた。

「おいっ」誰か、呼ぶので、

「はい」性善坊は、ふり向いた。肱を突つ張つた一人の大法師がつかつかと、寄ってきて、

「中堂の宿房にいる性善坊というのは、おまえか」

「そうです」

「おれは、西塔の双林寺にいる妙光房浄峨というもの

だが」

「はい」

「ま、そこへ掛ける」と、妙光房は、岩を指さした。素直に、腰かけると、

「範宴少納言という童は、おまえの主人だそうだな」

「主従とは、もとの俗縁でございます。ただいまでは、この性善坊にとりまして、天地にお一人の師の御房でございます」

「はははは」大法師は、齒の裏が見えるような、大きな口を開いて、

「あの、人形みたいな小法師が、おまえの師か。うわははは……」肩を揺すぶっておかしがるのである。性善坊は、まじめに、

「はい、私の師は、範宴さまお一人にございます」

「ものずきな奴もある。まあ……そんなことはどうでもいい、訊きたいのは、別儀でもないが、その小法師が、近いうちに、入壇いたして、大戒を授かるとかいう噂がもっぱらにあるが、嘘だろうな」

「さあ？」

「ほんとか」

「ありそうなことに存じます。けれど、嘘かも知れませぬ」

「あいまいなことをいうな。貴様の師のことを、貴様が、知らんはずはない」

「これは、迷惑なおたずねです。入壇授戒の大法は、一に、御仏のお心にあることです。それを執り行ふ碩学の

お眼にかのうた者が授かるものだと同っております。な
んで、私のような末輩が、知ろう道理はありません」

「こいつ、胡魔化し言をいうて、このほうを、小馬鹿に
いたすな」

「決して」

「じゃあ、嘘か、真か、はっきりといえ」

「いえないものは、いえないではございませんか」まだ、
登岳してから、半年も経たない新参なので、性善坊は、
できる限り、辞を低く答えてはいるけれど、根が、侍で
ある。公卿の館にはいても、太刀をさしていた人間の
根性として、余りに、相手が横柄であつたり、人をのん
でかかってくると、つい、憤つとするものが、こみあげ
てくる。

七

「知らぬことはあるまい。いわなければ、ここを通すわ
けにはいかん」と、妙光房は、くどいのである。立ちは
だかつて、性善坊を責めていた。

すると、その坂道を、降りてきた一人の堂衆が、

「やあ、妙光房」と、声をかけた。

「おお朱王房か」

「何しているのだ」

「何、今ここで、範宴少納言の弟子という性善坊に出会
ったから、例のことを、糺しているところだ」

「あの問題か。さりととは、貴公のほうが、よほど迂遠だ

ぞ」

「どうして」

「たった今、一山の諸院と各房へ宛てて、中堂から、触
れ状がまわった。——今、それを見てきたが、この月二
十八日に、少納言授戒入壇の式を執り行うによつて、そ
のむね、心得ありたしとある」

「ふーム」と、妙光房は、うなつて、

「さては、いよいよ、事実なのか。座主には、宗祖の大
法を枉げても我意と私情を押し通そうというお心とみえ
る。——だが、山には山の則がある、よしや、座主は
ゆるされても、則がゆるさぬ、弥陀如来がゆるし給う
まい」と、妙光房は、口から唾をとばして、罵った。

そして、性善坊へ、

「やい、新発意」

「はあ」

「はあじゃない。中堂の宿房へ帰ったら、貴様の師の少
納言へ、きつと、申しつたえておけ」

「……………」

「まだ人なみの骨がらも持たぬ乳臭児の分際で、宗規
を紊し、烏滸がましい授戒など受けると、この叡山の中
にただはおかぬぞと」朱王房も、彼のことばの後につい
て、

「——授戒の場を去らせず、童の首をひきぬいて、千
年槁の木の下に梟首し、鴉に眼だまをほじらせるぞと
告げるがいい」と、脅しつけて、肩をそびやかして、立
ち去った。

（うぬ！）と性善坊は、後に立って、齒がみをした。追いかけて行って、谷間へ、一投げにしてやりたいような激憤が、体を熱くさせたが、中堂から鳴る鐘の音を聞いて、

「ああ、遅くなった」と、暮れかかる道をいそいだ。

「修行だ、何事も修行だ。こんなことに、心をうごかされてどうするか。——範宴さまが、案じておいでになるだろう」後を見まいとするように、登って行く。

中堂のあたりには、夕べの灯がついていた。もう、僧正の勤行も終った時刻である。

使いの返書を、執務の僧にわたして、性善坊は、宿房の方へ、曲がって行った。範宴が佇んでいた。

「帰ったか」

「ただいまもどりました」

「おそかったのう」

「ちと、道に迷いましたので」性善坊は、途中の出来事を話さなかった。範宴に言えば、範宴は、師の僧正の難をおそれてきつと、入壇を拒むだろう。

（だが、困ったものだ）と、彼は一人で案じていた。法燈の山も、なかなかうるさい。暗闘、嫉妬、愛憎、毀誉、人間のもつあらゆる葛藤はここにもある。

八

（そつと、座主のお耳に入れておこうか。——いやいや、座主には、何か、お考えもお覚悟もあって、なされたこ

とに違いはない）性善坊は、思い悩んだ。

朝の厨の用意を、夜のうちにしておいて、ぼんやりと、院の外へ、あるきだした。

水っぱい春の月が、峰よりも低いところに、いくらか、黄いろ味をもって懸かっていた。

「山も山だが、下の巷は、なおさらだろう」

喘ぐ人間社会の息が、月を黄いろくしているように思えた。

超然と、その人間の聚落を離れて、高嶺の法城は、理想の生活に恵まれているかと思つたのは、いとも愚かな考えであつた。これも、下も、変りはないのである。人間のいる所、人間の世界でない地上はない。

西塔へ行った帰りに、自分を強迫した荒法師のことばや、態度から察すると、どうも、問題は、穏やかに納まりそうもない。一つものが間違えば、三井寺へも、攻めてゆくし、神輿をふって、御所へも強訴に出かけるというような乱暴な学僧のあつまりである。

（座主へ対しても、どんなことをするかわからぬし、師の少納言を、取って懲らすぐらいなことは、やりかねない）性善坊は、寝られない気がする。——やはり、一言、座主のお耳にいれておいたほうが——とまた迷うのであった。すると、朧なもの蔭から、

「少々、うかがいますか」

「あつ？ ……誰だ」

「旅の者でございます」

「参詣者か」

「いいえ、すこし、お訪ねしたいお方がございまして」よく分らないが、見すばらしい菰僧こもそうのような容かたちをしている。背に、菰こもを負い、手に、尺八とよぶ竹をたずさえていて、足は、藁わらで縛むすっている。

「どなたを、お訪ねですか」

「去年ごろ、栗田口あわたぐちから上のぼられた、範宴少納言さまは、

どこの房に、おいででしょうか」

「ほ、範宴様を、おたずねか」

「そうです」性善坊は、そういわれて、どこか聞き覚えのある声だとは思ったが、思い当る者もなかった。

「範宴様は、根本中堂の宿房においでになるが、して、おもとは」

「東山の弥陀堂みだどうにいる孤雲こううんという菰僧でございます」

「なんの御用で」

「すこし、お願いやら……またお顔も見たいと存じまして」

「以前に、お会いしたことが、あるのですか」

「はい、ふしぎなご縁で、六条のお館に、捕われていたこともございますし、また、その後のちも、一、二度」

「やっ」性善坊は、びっくりして、

「成田兵衛なりたのひょうえの家人けにん、庄司七郎しょうじのどのじゃないか」

「あっ……」かえって、その七郎のほうが、びっくりしたように、光る眼を、大きくみはって、しばらくじっと性善坊の顔を見つめていたが、

「おお、貴殿は、そのむかし、日野のお館やかたにいた侍従じじゅうのすけ介すけのか」

「そうじゃ」

「これは……めずらしい」今は、孤雲こううんとよぶ庄司七郎の菰僧と、性善坊とは、かつての争いも、恨みもわすれて、手を握りあって、互いの変った姿に、しばらくはことばもない……。

九

「どうしたのじゃ、七郎どの。——いや孤雲どの」

「まあ、聞いて下さい」庄司七郎の孤雲は、岩に腰をおろした。性善坊も、草むらへ坐った。

惘然むぜんとして、孤雲は、宵の月をながめていた。何か、回顧ふくろしているように。やがて、そつと、瞼まぶたをふいて、

「——もう、何年前になるか、あの六条様のお館へ、間者かんじゃに入いって、捕とらまった年からのことです」

「うむ……」

「主人の成田兵衛から、不首尾のかどで、暇いとまを出されたので、家にある老母や妻子にはすぐ飢えが見舞います。そのうちに、京の大火の晩に、足弱な老母は、煙にまかれて死ぬし、妻は病気になる、子は、流行病はやりやまにかかるといふ始末。とやこうと、悪いことつづきのうちに、この身一人、生きながらえて後の家族どもは、皆、あの世の者となつてしまい申した」

「それは、御不運な……」性善坊は、慰めようのない気がした。あの、平家の郎党としての兵つわものぶりは、今の孤雲こううんの影のどこにも見あたらぬ。

「一時は、死のうかと、思いましたが、戦ならば、死ねもするが、武家の飯をたべた人間が、飢えや、不運に負けて、路傍で死ぬのも、残念でなりません。——そのうちに不幸は、私のみでなく、旧の主人、成田兵衛さまも、宇治川の戦で、何かまずいことがあってから、御一門のお覚えもよからず、また、御子息の寿童丸様は、次の、源氏討伐の軍に、元服して初陣した方がいいが、人にそのかされたか、臆病風にふかれたか、陣の中から、脱走して、お行方知れずになってしまいなされた」

「おお、あの、日野塾でも、範宴さまとご一緒に、机をならべていた若殿でござったな」

「そうです。……ために、父の兵衛様は、人に顔向けができないといって、門を閉じておられましたか、近ごろ、沙汰するところによると、宗盛公から、死を賜わって、自害されたという話……」

「ああ、悲惨。——誰に会っても、そんな話ばかりが多い」

「ふりかえってみると、十幾歳のお年まで、お傳役として、寿童丸様のおそばに仕えていたこの私にも大きな責任がございます。——自体、わがままいっぱいにお育てしたのが、悪かったのです。ひとり、寿童丸さまばかりでなく、平家の公達のうちには、戦を怖がって、出陣の途中から、逃げてしまうような柔弱者が、かなり多いのではございますが、まったく、私のお傳のいたし方にも、多大な過ちがありました」

「しかし、そのもとはかりの罪ではない。ご両親の罪

——また平家自身のつくった世間の罪——。何ごとも、時勢ですから」

「でも、どうかして、いちど、故主の霊をなぐさめるために、寿童丸さまの行方をさがして、ご意見もし、また、微力をつくして、一人前の人間におさせ申さなければ、済まないと思うのです」

「よいいわれた。暇を出された故主のために、そこまで、義をわすれぬお心がけは、見あげたものだ。——して、範宴さまを、訪ねてきた御用は」

「人のうわさによると、戦ぎらいの公達は、よく、三井や、叡山や、根来などの、学僧のあいだに、姿をかえて匿れこむよしです。御像にすがって、中堂の座主から、もしや寿童さまに似た者が、山に登っているか、いないか、お調べねがいたいと思って、やって参ったのでございます」話し終って、孤雲は、首を垂れた。足もつかれてい

るらしい、胃も渴いているらしかった。

一

霧がくると、窓の外は、海のように青かった。

霧が去れば、机の上に、仄かな峰の月が映す。

範宴は、宿房の一間に、坐っていた。机のうえには、儒学の師、日野民部から学んだ白氏文集が載っている。

これは、山へのぼってからも、離さない書物であった。

短檠の灯が、窓をあけておいても、揺れないほどに、

夜は静かなのである。——中堂の大厨の方では、あしたの朝の僧衆のために、たくさんな豆腐を製っている

みえて、豆を煮るにおいがどこにもなく流れてくる。

「誰です？」範宴は、机から、板敷の方を振り向いた。

かたんと、音がしたようであったが、返辞がないので、

「栗鼠か」と、つぶやいた。よく、板の間を、栗鼠が後

足で踊ってあるく。

時には、巨きな禽が来たり、床下から、山猫が、琥珀色

の眼で、人の顔を、のぞきあげたりする。

食物が、失くなることは、たびたびであるし、狐の尾

に、衣の裾を払われることは、夕方など、めずらしく

ない。

(怖い) 山に馴れないうちは、範宴は、恐ろしくて幾た

びも、都の灯が恋しかった。座主から、

(そんなことでは)

と、笑われても、本能的に、恐かった。座主はまた、

(世に、恐いものがあるとすれば、それは人間だ。人間

に、恐いものがあるとすれば、それは自分だ。——自分

の中に棲む狐や、鷲や、栗鼠は、ほんとに恐い) と、い

われた。範宴にも、すこし、その意味がわかる気がした。

稚い者に話す時には、稚い者にもわかるように、よ

く噛んで話してくれるのが、慈円座主の偉さであった。

都という話が出た時に、

(範宴——、よう見えるか) と、ある時、比叡の峰から、

京都の町を指さしている。範宴が、うなずいて、

(見えます) と答えると、

(何が) と、訊ねた。

(町が、加茂川が、御所が。——それから、いろんなも

のが)

(もっと、よく見よ)

(遠いから、人は見えません)

(その人間の、生きる相、亡びる相、争う相、泣く相、

栄える相、血みどろな相——。見えるか)

(そんなのは、見えるわけはありません)

(いけない。……それでは、何も見えることにはなりは

しない。おまえは、世間にいれば、世間が見えてると思

っているだろう)

(ええ)

(大違いだ。——魚は河に棲んでいるけれど、河の大き

な相は見えないのだ。悠久な、大河の源と、果てと

を見極めるには、魚の眼ではいけない)

(では、何の眼ですか)

(仏の眼)

(ここは、河の中ではありません)

(叡山は、河の外だよ) 範宴は、なにか、うつすらと、教えをうけた。それから、都の灯を見ても、恋しいと思わなかった。

二

短檠の丁字を剪って、範宴が、ふたたび、机の上の白氏文集へ眼を曝しはじめると、

「さ……水を汲んできた、足を洗いなさい」と、入口の方で、また、物音と人の気配がした。やはり、狐狸ではなかった。

範宴は、すこし、燭の位置を移して、うしろへ身をおぼしながら、

「性善坊か」とすると、はつきり、

「ただ今帰りました」彼の返辞であった。すぐ上がってきて、

「範宴さま。ただいま、戻ってくる途中で、ふしぎな人に会いました。後ろに従って参りましたから、お会い下さいまし」といって、

「孤雲どの。こちらへ」と、呼んだ。

怖る怖る、庄司七郎の孤雲は、そこへ来て、うつむきがちに坐った。範宴は、小首をかしげて、

「はての？」

「おわかりになりませんか」

「知らないお方だ」孤雲は、その時、しずかに顔を上げて――

「ああ、よう御成人なさいましたな」

「あ。……七郎か」

「やはり覚えていらつしやった」と、孤雲は、ぼうぼうとした髭の中で、うれしげに、微笑した。

「忘れてなろうか。糺の原で、あやういところを、救うてくれた庄司七郎……。あの時、そなたは、なぜ逃げたのか」

「その仔細は――」と、性善坊がひき取って、

「途々、聞いてきたところでございます。私から、代って、お話いたしましたよう」

範宴は、眼を、つぶらにして、聞いていた。そして、
「ほう……では、日野の学舎でこの身と共に机をならべていた寿童丸は、いまでは、行方が知れぬのか」

「里のうわさによると、この叡山に、知人があるゆえ、戦がやむまでその辺りに、隠れているのではないかと申すのだそうで」

「座主に、お願い申して、よう尋ねてあげよう」

「ありがとうぞんじます」

「だが――」と、性善坊は側から――「この叡山には、三千の学僧と、なお、僧籍のない荒法師やら堂衆やら、世間を逃げてきた者たちが、随分と、一時の方便で、身を変えているのも多いゆえ、容易には、知れまいと思う

が……」

「ま……。いつまでも、おるがよい」と範宴は、なぐさめた。

孤雲は、ともすると、燭に面おもてを伏せてしまった。

——もう五、六年も前になるが寿童丸の腕白から、まだ、十八公磨まろといったころのこの君が、土で作っていた仏像を足蹴あしげにかけたことだの、日野の館へ石を投げこんで罵ののりちらしたことだの……過去を思い出すと、背なかに、冷たい汗がながれる。

だが、範宴も、性善坊も、そんなことは、さらりと、

忘れたように、

「孤雲どの、空腹すきばらではないか」と、いたわる。

「はい……。実は……」と、ありのままに答えると、

「では、粥かゆでも、煮てあげい」範宴がいう。

やはり菊の根には菊がさき、蓬よもぎの根には蓬しか出ぬと、孤雲の七郎は、旧主の子と、範宴とを心のうちで較べて、さびしい気がした。

三

月も末に近くなる。

範宴少納言の入壇の式は、近くなった。

それが、いよいよ、実現されることが、明確に知れたると、若い学僧だけの騒ぎでなくなった。

「よし、よし、われらが参って、お若い新座主をたしなめてやろう。……誰でも、一山の司権の座にすわると、

一度は、その権力を行使してみたいものだよ。……騒ぐな、必ず説服せきふくいたして、思いとどまらせて見せる」
年齢と苔こけの生はえているような長老や、碩学せきがくたちが、杖をついて、根本中堂のぼへ上のぼって行った。

そして、座主に、面談を求めて入りかわり立ちかわり、少納言の入壇授戒を、反対した。

今日もである。

静慮院じようりょいんと、四王院しおういんの阿闍梨あじやりが先に立って、その中には、少壮派の妙光房だの、学識よりは、腕ぶしにおいて自信のありそうな若い法師たちが、中堂の御房ごぼうの式台へ、汚い足をして、ぞろぞろと、上がり込んで行った。座主の僧正は、

「おう、おそろいで」と、にこやかに、書院をひらいて、待っていた。

ひろい部屋の三分の一が、人で埋うずまった。みしみしと、荒い跽音あしおとで入って来た学僧どもも、ここへ入ると、

「さ、そちらへ」とか、

「どうぞ」とか、席をゆずり合って、さすがに、壁ぎわへ、硬くなって坐るのだった。

四王院と、静慮院の二長老が、代表者として、むろん、一同の前へ出て、座を占めた。

毎日のことなので、慈円僧正じえんは、この人々が、何の用事で来たかは、訊くまでもなく、分っていた。で、機先を制して、

「二十八日の通牒つうちようは、もう、おのおのおの手許へも、届いたことと思うが、当日の式事については、諸事、ご

遺漏のないように頼みますぞ」

「……………」誰も、答えなかった。

不満と、不平とが、ぴかぴかと眼に反抗をたたえて、そういう座主の面を見つめているだけなのである。

「座主」四王院の阿闍梨が、老人のくせに、柘榴のような色をしている口をまずひらいた。

「なにか」と、慈円の眸は、静かである。

「今の御意、正気でおわすか」

「ほ……異なるおたずねである。おのおのにも、よろこんで、大戒の席に列していただきたいということが、酒にでも、酔うているように聞えますか」

「酔うているどころか、狂気の沙汰と思う」

相手の冷静な容子は、かえって、彼らの赫怒を熾にした。

「よもやと存じて、今日まで、ひかえていたが、座主、御自身のお口から、さようにいわれるからには、もう、黙してはおられん」

「何なりとも、仰せられい。叡山は、慈円のものにあらず、また、学僧のものにあらず、長老のものでもない」

「もちろん」

「衆生のものでござる」

「いや、仏のものだ」

「仏は、衆生を利したもうばかりに、下天しておわす。どちらでもよろしい」

四

後ろでひしめいている学僧たちの中で、

「阿闍梨、よいけいなことは仰せられずに、一同の疑問について、疾く、糺されい」と、誰かがどなった。四王院は、うなずいて、

「座主！」と膝をすすめた。

「——今日、吾々が推参いたしたのは、二十八日の大戒について、ちと、解せん儀があつて参ったのでござる」

「ご不審とな、何なりと、問われい」

「ほかではない」静慮院も、共に、詰問の膝を向け、

「当、叡山はおろか、日本四カ所の戒壇においても、まだかつて、範宴のごとき童僧が、伝法授戒をうけた例しは耳にいたさぬが、そも、座主には何の見どころがあつて、敢て、法城の鉄則を破つてまで、あの稚僧に、戒を授けらるるのか……。それが解せんことの第一義でござる」

返答によつては、貴人の系門であらうと、座主であらうと、ゆるすまいとするような殺伐な空氣が、四王院と静慮院の二長老を背後から煽りたてていた。

慈円は、ほほ笑んで、

「はてさて、仏徒のまじわりもひろい。一院一寺をもあずかるおのおのことゆえ、それくらいなことは、ようご会得と存じていたが」

「山の鉄則を素すような、さような心得は、相持たん」

「ははは、余りにも、お考えが狭い。いわゆる、法を作るもの法に縛らるの喩え。そもそも、授戒のことは、必ずしも、年齢を標準にはせぬものじゃ。年さえ、加えれば、誰でも、大戒をゆるさるるとあつては、刻苦する者がなくなるであらう」

「詭弁っ」と、またうしろの法師頭の中から強いいう者があつた。四王院は、それに激励されて、

「——あいや、おことばには候うが、十年二十年、この叡山に、苦行を積んでも、なおかつ、入壇はおろか、伝法のことすら受けぬものが、どれほどあるか」

「それは、その人の天稟がないか、あるいは、勉強が足らぬかの、ふたつでおざらう。——容のみ、相のみ、

いかにも、荒らかに、苦行精進いたすようになって、秋栗の皮ほども、心のはじけぬ者もある。生れながらの団栗であればひなき儀と思うよりほかはない」

「いや！ 谷の者らが、専ら取り沙汰するところによると、座主の僧正には、少納言に対して、依怙を持たれると承る」

「それは、問わるるまでもなからう」

「何ですと——では、明らかに、依怙鼻肩だと仰せられるか。——何とおのおの、そう聞いては、もう議論のほかにゃないか。座主は範宴を盲愛していられるのだ。私情のために、大法を蹂躪するとの自白だ」喚き立てると、

「ひかえなさい！」若い座主の面に、初めて、青年

らしい血しおが、漲った。

「わしは、範宴の天稟を愛す。わしは、範宴のすぐれた氣質を愛す。見よ、彼は将来の法燈を、亡すか、興隆するか、いずれかの人間にならう。叡山人多しといえど誰か、十歳を出たばかりの範宴にすら勝る法師やある。

——その才において、その克己において、その聡明において、その強情我慢なことにおいて。……嘘と思わるる方あらば、彼をここへ呼んで、まず、法論を闘わせてみられるがよい。和歌といわば和歌、儒学とあらば儒学、おそらく少納言は否むまい。望みの者は、仰せ出られい」

五

誰も、進んで、応じる者はなかった。——わずか十歳の童僧と、衆人の中で、法論をやって、いい破ったところで、誇りにはならないし、敗れたらざまはない。

そういう打算は、すぐ、誰の胸にもうかぶことだし、御連枝の出で名門の深窓から、青蓮院へ坐ったのみで、世間知らずの若い座主と心であまく見ていた慈円が、白皙な面を、やや紅らめて、きびしい態度に出たので、（これは……）と少し意外にも思ったことに違いなかった。慈円は、壁ぎわにいる人々の顔までを、ずっと見わたして、

「誰か、仰せ出られる人はないのか」

「……」いつまでも、座はしんとしていた。二人の長老も、実は、そこまで、争う本心はなかったとみえて、

尻押ししりおしの学僧がくそうたちが、だまってしまふと、立場を失つたように、もじもじしていた。

「そも、おのおのは、入壇にゅうだんとか、授戒じゆかいとかいうことを、俗人ぞくじんが、位階いがいや出世しゅっせの階梯かいていでもものぼるように、考えていられるのではないか、とんでもない間違いでおさる」慈円じえんは、そこでもう、常の温おん柔じゆうな面おもてと語氣ごきにかえつていた。濃い眉毛まゆげのうえに、ぼつんと、黒豆くろまめぐらいな黒子ほくろがある。この容貌ようばうに、二位にゐの冠かんを授けたら、どんなに、端麗たんれいであろうといつも人は見つつ想像さうぞうすることであつた。

「いうまでもなく、入壇と申す儀は菩薩ぼさつしん心への、達成たっせいでなければならぬ。生きながらすでに菩薩ぼさつたる心しんにいたれる人に、仰ぎやう讃さんの式しきを行う、それが、授戒入壇じゆかいにゅうだんの大会たいえである。なんで、いたずらに、その域いきへ達せぬものに、この大会大戒たいえたいがいの儀ぎをゆるそうか」

「……………」静かではあるが、慈円じえんの声は、たとえば檜ひのきの木蔭しんしんを深々しんしんと行く水のひびきのように、耳みみに寒さむかった。

「——また、菩薩ぼさつ心に達したものはかの龍女りやうじよのごとく、八歳はっさいにして、もう壇に入ることをゆるされた。後白河法皇ごはくわはうの大戒たいがいをうけられたのも、たしか、お十歳じふさいに満みたぬうちであつた。おのおののうちで、すでに白髭はくげんをたれ、老眼らうがんにもなりながら、まだその心域しんいきにいたれぬ方があらば、まず、自身みづかみを恥はづけるがよい——また、若輩じゃくはいな学僧がくそうたちは、そんな他人たにんのことに、騒さわぎたてて、無益むえきの時間じかんをつぶす間に、なぜ、自身の修行しゆぎやうを励はげまれぬか」

「……………」

「ふたたび申すが、わしは、ふかく範宴はんえん少納言しやうなごんの天質てんしつを

愛あいしておる、同時どうじにおそれおる。師しとして、指導しゆどうのよろしきを得ねば、梵天ぼんてんの悪魔あくまに化けすかも知れず、その珠たまたる質しつのみがきによつて、この荒すさび果はてた法界はうがいの暗流あんりゅうと濁どく濤たうをすくう名玉なぎよくとなるかも知れない。その任にんを重おもく思おもうのだ。ひとたび、山やまを追おわれて、今の修羅しゆらの世よに出て、あの雄叫おたけびを聞いたなら、おそらく、彼は、源義朝げんぎちゆうの嫡男ちやくなんたちと共に、業火ごうかの下したに、鉄弓てつきゆうもしごく男おとことなるう」

「……………」黙々と、人々は、慈円じえんの顔をみているばかりだつた。慈円じえんの眉まゆには、弟子でしとして、また一個いっごうの人間にんげん範宴はんえんのゆくすえや、範宴はんえんの性格せいかくや才さいや、あらゆる些細ささいなものまでを朝夕ちやうせきの眼めにとめて、ふかく、その将来さうらいを案あんじている容子ようすが歴々と読よめた。

「いや、ようわかりました」初めは脱兎だつとのごとく、終はつりは処女しよじよのように、四王院しやうわういんがそこに座ざをすべると、他ほかの若法師わくはうしたちも、氣きまりわるげに、退散たいさんしてしまつた。

六

朝はまだ早はやかつた。

霧きりに濡ぬれている一山いっさんの峰みねや谷々やぐやぐで、寺てらの鐘かねが、刻ときをあわせて、一斉いっせいに鳴りだした。

揺ゆするようように、横川よかわで鳴ると、西塔さいとうや、東塔とうとうの谷やでも、ごうん、ごうん……と鐘かねの音おとが答こたえ合あつた。

「おや、当院とういんの鐘かねは、どうしたのじゃ」西塔さいとうの如法堂によほうどうで、学頭がくとうの中年僧ちゅうねんそうが、方丈ほうじやうから首くびを出でした。

「鐘楼へは、誰も行っていないのか」

「けさの番は、朱王房です、たしか参っているはずです」と、中庭を隔てた学僧の房で、多勢の学僧たちが、新しい袈裟をつけながら返辞した。

「耳のせいかな、わたしには、聞えんが……」

「そういえば、鳴らんようです」

「困るではないか。今日は、根本中堂で、範宴少納言の授戒入壇式が、おごそかに上げられる日だ」

「吾々も、これから、阿闍梨に従いて、参列することになっていきます」

「それよりも、一山同鐘の礼を欠いては、当院だけが、中堂の令に叛く意志を示すわけになる。台教興隆のよこびの鐘だ。——誰か、見てこい」

「はっ」学僧の一人が、駈けて行った。

鐘楼の下から仰ぐと、誰かそこに立っている。腕ぐみをして、ぼんやりと、鐘楼の柱に凭れているのである。つい一昨年ごろ、坂本から上って来た若者で、はじめは、房の厨中間として働いていたが、なかなか、学才があるし、賤しくないし、少し才気走った嫌いはあるが、感情家で負け嫌いなところから、堂衆に取り立てられて、今では学僧のなかに伍している朱王房だった。

今朝は、彼が鐘楼役なのに、そこへ上ったまま、腑抜けのように腕ぐみをしているので、見に来た彼の友は、「おいっ、朱王房じゃないか」下から呶鳴った。

朱王房は、上から、にやりと笑った。しかし、元気がないので、

「どうしたっ」訊ねると、膠のない顔つきで、

「どうもしやしない……」

「なぜ、礼鐘を撞かん？」

「……………」

「知らぬはずはあるまい。——今朝の一山同鐘を」

「知ってる」

「横着なやつだ」とととと、石段を駈け上がった行って、「退けっ、俺が撞く」と、朱王房の肩を押しつけた。

「よし給え」

「なんだと」

「いまから撞いたって、間に合いはしない」

「じゃ、貴様は、故意に撞かなかったのだな」

「そうだ」はつきり、朱王房はいった。持ちかけた撞木の綱を放して、気色ばんだ彼の友は、朱王房の胸ぐらをつかんで睨みつけた。

「不屈きな奴だ、承知して怠ったのだと聞いては許されん、さっ、来いっ」

ずるずると、段の方へ、引き摺った。

七

「どこへ? ——」不敵な眼をしながら、朱王房は鐘楼の柱へ足を踏んばって動かなかった。

「阿闍梨の前へ連れて行くのだ。さ、来い」

「いやだ」

「卑怯者め、承知のうえで、礼鐘を撞かぬといったくせ

に。——お処罰^{しおき}をうけるのが怖いなら、なぜ撞かなかったか」

「ばか、ばかばかしくって……おれには、こんな鐘はつけないんだ……」と、朱王房は、唇をかんだ。

「貴様、それを本気でいうのか」

「いうとも。——今朝の一山の鐘の音は、虚偽だ、おべっかだ、仏陀^{ぶつだ}は、笑っていなさるだろう」

「……………」呆れて、友の顔を、見ているのだった。朱

王房は、昂奮した眼で、

「貴公は、そう思わないか」

「朱王房、貴様こそ、気はたしかなのか」

「たしかだから、おれは、この鐘を撞かんのだ。いいか、考えてもみろ、まだ十歳を出たばかりの範宴を、座主の依怙^{えこひ}鬚^{いぎ}から、輿論^{よろん}と、非難を押しきって、今朝の大戒を、強行するのじゃないか。——それが仏陀の御心かつ。

——山衆望かつ」

「執念ぶかい奴だ……。まだ貴様は、いつぞやの議論を、固持しているのか」

「あたりまえじゃないか。阿闍梨^{あじゃり}や碩学^{せきがく}たちは、蔭でこそ、とやこういうが、一人として主張を持ち張るものはない。みんな、慈円僧正に、まるめられて、ひっ込んでしまった」

「座主には座主の、ふかい信念があつてのことだ」

「見せてもらおうじゃないか、その信念というやつを」

「それは、現在では、水かけ論だ。範宴が、果たしてそういう天稟^{てんぴん}の質であつたか否かは、彼の成長を見た上で

なければ決定ができない」

「それみろ。——神仏にもわからぬことを、どうして、僧正にだけわかるか。ごまかしだつ、依怙^{えこひ}鬚^{いぎ}だつ」

「大きな声をするなっ」

「するッ——おれはするっ——仏法を亡すものは仏弟子^{ぶつでし}どもだつ」

「これっ、若輩のくせに、いいかげんにしろ」

「いつてわるいか」

「わるい！」

「じゃあ、貴公も、まやかし者だ、仏陀にそむいて、山の司権者におベツかるまやかし者だ」

「生意氣をいうなッ」朱王房の襟^{えり}がみをつかんで、そこへ仆^{たお}した。すると、房の人々が、

「どうしたのだ、どうしたのだ……」と、駈け上がったきて、

「おいっ、離せ」

「いや、縛ってしまえ。そして、阿闍梨のまえに曳いて行つて、たった今、この青二才がほざいた言葉を、嚴密な掟^{おきて}の下に、裁かなければならない」

「どんな暴言を吐いた」

「仏法を亡すものは、仏弟子どもだといっておつた」

「こいつが」と、一人は、彼の横顔を蹴って、

「一体、新参のくせに、初めから口論ずきで、少し自分の才に、思い上がっているんだ。縛れ、縛れ、くせになる」と、罵^{のの}った。

一

座主^{ざす}の室で、銅鈴が鳴った。役僧のひとりが、執務所の机を離れて、

「お召しですか」ひざまずくと、帳^{とばり}の蔭で、
「範宴^{はんえん}をよべ」と、いった。

「はっ」

「——ここではなく、表の方へ」

「かしこまりました」座主の慈円^{じえん}僧正は、そういつてから後も、しばらく帳^{とばり}の蔭の机に凭^よつて、紙屋紙^{かみやがみ}を五、六枚綴^とじてある和歌の草稿に眼をとおしていた。それが済むと、何やら消息を書いて、

「待たせたの」と、縁の方へ、眼をやった。

京から使いにきた小侍がひとり板縁に、畏^{かしこ}まっていたが、

「どう仕りました」と、頭^{かしら}を下げた。

「では、これは月輪^{つきのおわ}殿へおわたしいたして、よろしくと、伝えてください。——慈円も、登岳^{とうがく}の後、このとおり、つつがのう暮していると」

「はい」草稿と、消息をいただいて、京の使いは帰って行った。

月輪の関白兼実^{かねざね}は、すなわち座主の、血をわけた兄で

あった。で、時折に便りをよこして、便りを求めるのである。

慈円も、関白も、この兄弟は共に和歌の道に長^たけている。ことに、僧門にあって貴人の血と才分にゆたかな慈円の歌は、当代の名手といわれて、その道の人々から尊敬に値するものという評であった。

座主は、使いを返すと、そこを立って、中堂の表書院へ出て行った。

居間へ呼ばれるなら常のことであるが、表の間に待てとは、何事であろうかと、範宴は、ひろい大書院の中ほどに、小さい法体^{ほうたい}を、畏^{おそ}まらせて、待っていた。

「近う」と、慈円はいう。

畏^{おそ}る畏^{おそ}る、範宴は、前に出る。

そのすがたを、慈円は、眼の中へ入れてしまいたいように、微笑で見えて、

「入壇^{にゅうだん}のことも、まず、済んだの」

「はい」

「うれしいか」

「わかりません」

「苦しいか」

「いいえ」

「無か」

「有です」

「では、どういう気がする」

「この山へ、初めて、生れ出たような……」

「む。……しかし、入壇の戒を授けたからには、おもと

もすでに、一個の僧として、一山の大徳や碩学と、伍して行かねばならぬ」

「はい……」

「白髪はくはつの僧も、十歳の童僧も、仏のおん目からながめれば、ひとしく、同じ御弟子であり、同じ迷路の人間である」

「はい……」

「わが身を、珠たまとするか、瓦かわらとするか、修行はこれからじゃ。いつまで、わしの側にいては、その尊い苦しみをなめることができぬ、わしに、少しでも、いたわりが出てはおもとのためにならぬ。――師を離れて、真まことの師に就け。真の師とは、いうまでもなく、仏陀ぶつだでおわす。――ちょうど東塔の無動寺に人がない。枇杷大納言どののおられた由緒ゆいしょある寺。そこへ、今日からおもとを、住持として遣つかわすことにする。よろしいか、支度をいたして、明日からは、そこに住んで、ひとりで修行するのですぞ」

二

範宴は、うなずきながら、ほろりと涙をこぼした。小さい手で、その眼を横にこすっているのを見て、慈円は笑った。

「明日から、一カ寺の住職ともなる者が、涙などこぼしてはいけない。……元氣で行きなさい」

「はい」衣ころもの袖で、涙を拭いてしまうと、範宴は、別

れ難がたない眸ひとみをあげて、師の顔を仰いだ。

「では、行ってまいります。お師さまの教えを忘れないで、励みまする」礼をして、立って行くのである。その姿を廊下の方で待ちうけていたのは、さっきから板縁に坐って、案じ顔に控えていた性善坊であった。

すぐ手を取って、堂の階を降りてゆく。そして、房の方へ歩いてゆくうちに、性善坊が明るい顔で、何か訊ねているし、範宴も、今泣いたことなど忘れて、嬉々ききとして、彼の手をつかんで振ったり、その肩へ、ぶら下がったりして、戯れながら行くのだった。

（――何といっても、まだ子どもだ）慈円も、欄らんまで出て、うしろ姿を見送っていた。

だが、どうしてか、慈円には、その子どもである範宴が、巨おおきな姿に見えてならなかった。一代の碩学せきがくだの、大徳だのという人に会っても、そう仰ぎ見るような感じは滅多にうけない自分なのに――と、時には冷静に自己の批判を客観してみても、やはり、どこか範宴には凡なみの人間の子とは、違うところがある。

（どこか？）と人に訊かれたらこれも困る。

どこも違いはない。十歳の少年は、やはり十歳の少年である。

弘法大師や、古き聖ひじりの伝などには、よく、誕生の奇瑞きずいがあったり、また幼少のうちからあたかも如来にょらいの再来のような超人間的な奇蹟が必ずあって、雲を下くだし、龍を呼ぶようなことが、その御伝記を弥尊いやとんとく飾ってはいえるが、これは慈円僧正も、必ずしも、すべてが然りとは信じて

いないのである。むしろそれは、民衆が捧げた花環や背光であって、釈迦も人間、弘法も人間と考えてさしつかえないものと思っている。

近くは、黒谷の法然上人のごときも、民衆の崇拜がたかまるにつれ、

（聖のお眸は二つあって、琥珀色をしていらっしやる）とか、

（ご誕生の時には、産屋に紫雲たなびいて天楽が聞えたそうな）とか、

（文殊のご化身だ）とか、また、

（いや、唐の三蔵の再生だとおっしゃった）など、本人はすこしも知らない沙汰が、まちまちにいいふらされて、それにつられて、

（どんなお方か）と、半ば好奇心気もちで集う信徒すらあるとのことだ。しかし、その法然房には、慈円は、幾たびか会ってもみたが、いわゆる、異相の人にはちがいないが、決して、如来の再生でもなし、また、眸が二つあるわけのものでもない。ただ、違うのは、

（どこか、ふつうの人間よりは、一段ほど、高いお方だ）と思うことである。

範宴に対して、慈円の感じていることも、要するにその、

（どこか？）であった。

しかし、慈円のその信念は、決して、あやふやな——らしいの程度ではなく、山の巖根のごとく、範宴の将来に刮目しているのであった。

三

翌る日の未明である。

まだ仄暗いうちに、範宴は房を立った。供は、性善坊と菰僧の孤雲の二人だった。

性善坊は、しきりと、

「きょうからは、少納言さまも無動寺のお主、一カ寺のご住持でございますから、もう山の衆も、お小さいからといって、馬鹿にするような振舞いはいたしますまい」といった。彼には、それが、

（これ見よ）と見返したような晴がましさであり誇りであった。しかし、範宴は、

「わしに、そんな重いお勤めが、できるかしら」と、今朝は、心配していた。

「おできにならぬことを、座主がおいいつけになるわけはありません。及ばずながら、性善坊もお仕え申しておりますし、無動寺には、留守居衆が、そのまま、役僧として万事の御用はいたしますから、決して、お案じなさるには及びません」範宴はうなずいて、

「座主は、きつと、私を、お試しになるお心かも知れぬ。わしに、怠りが出たら、そちが、鞭を持って、打つたも」

「勿体ない」と、性善坊はいった。

「そのお心がけで参れば、きつとご修行をおとげあそばすにきまっています。——私こそ、お師さまのお叱りをう

けなければ」

「お互いに、修行しようぞ」

彼と性善坊とが、主従ともつかず、師弟ともつかず、親しげに話してゆく様子を後ろから眺めながら、ぽつねんと、独りで遅れて歩いて、孤雲は、淋しそうだった。その気持を察して、

「孤雲どの。——いいあんばいに、お日和（ひより）な」と、話しかけては、性善坊が、足をとめて振りかえった。「——そうですね、降るかと思いましたが、霧が散って、八瀬（やせ）の聚落（むら）や、白川あたりの麓（ふもと）が見えてきました」孤雲は、どこか、元気がない。

範宴のすがたを見ると、彼は、それにつれて、旧主の寿童丸を思いだすのであろう。羨（うらや）ましげに、独りで、嘆息をもらしている容子（ようす）が、時々見える。

（むりもない——）と性善坊は、察しるのだった。ちょうど、孤雲と寿童丸との主従の關係は、自分と範宴との間がらに似ている。さだめし、何かにつけて、（寿童丸は、どうしているか）と、旧主に厚い彼の心は傷（いた）むのであろうと思いやった。

陽がのぼるほどに、谷々や、峰で、小禽（こことり）の音が高くなつた。中堂の東塔院（とうたういん）から南へ下りて、幾つかの谷道をめぐって、四明（しめい）ヶ岳（だけ）の南の峰を仰いでゆくと、そこが、南嶺（なんれい）の無動寺である。——もう、大乗院だの、不動堂だのの建物の屋根の一端が、若葉時のまっ青な重巒（ちようらん）の頂（いただき）に、ちらと仰がれてくる。

「おや、孤雲は」

「ひとりで、沢へ下りてゆきました。おかた、口が渴（かわ）いて、竹筒（たけとう）へ、水でも汲みに行ったのでございましょう」二人が、崖（がけ）の際（きわ）に立って、孤雲の影をさがしていると、どこかで、

「やいつ、十八公廬（まっまろう）」と、甲（かん）だかい声で、呼ぶ者があつた。思いがけない鋭（えい）さなので、思わず、足を竦（すく）めて振りかえると、彼方（かなた）の山蔭（やまかげ）に、土牢（つちろう）の口が見えた。

四

山蔭の土牢の口には、雑草（ざっそう）が蔓（はびこ）つていた。じめじめとした清水が辺りを濡らしていた。

牢の口は、そこらの木を伐（き）つて、そのまま組んで頑丈（がんぢょう）に組んである。誰やら、暗い中に、人影（ひとかげ）がうごいているようだった。

ふつうの音調を失って、獣（けもの）じみた声で、何かいった者は、その土牢の中の人間で——

「そこへ来たのは、十八公廬ではないか。やいつ、耳はないのかつ」と、叫ぶのである。

もう忘れていた幼名（わらな）を呼ぶばかりでなく、悪（わる）氣（げ）のこもった罵（のの）り声に、範宴も性善坊も、ちよつと、胆（きも）を奪（さら）われて立っていた。

すると、牢の内からする声は、いよいよ躍起（えつぎ）となつて、「俗名（しやくな）を呼んだから返辞（へんじ）をせぬというのか。だが俺（おれ）は、いくら貴様（あなた）が、入壇（にだん）したからといっても、まだ乳（ち）くさい十歳（とお）やそこの洩（はな）ッ垂（た）れを、一人前の沙門（しゃもん）とは、認めな

いのだ。——座主が、いくら勿体^{もったい}らしく大戒を授けても、一山の者が、座主におもねって、盲従しても、俺だけは、認めないぞ」そう一息にいつて、また、

「だから俺は、十八公廨と呼ぶ。——貧乏公卿^{くげ}のせがれ、なぜ、返辞をせぬのか。——がたがた牛車^{くるま}で、日野の学舎^{まなびや}に通ったことを忘れたのか。いくら澄^{さや}ましても、俺のまゝでは駄目だぞ、何とかいえっ」自身が、こっちへ来ることも、迫ることもできないだけに、何とかして、明るの中に立っている二人を、自身の牢の前まで引きつけようとして、必死なのであった。声に、魔魅^{まみ}の力すら覚えるのだった。

じっと、遠くから見ていた性善坊は、牢の口に、顔を押しつけている獣のような眸^{ひとみ}を見て、思わず、「あっ！……」と、驚きの声を放った。範宴^{はんえん}も、思いだして、

「おお」牢の前へ、走って行こうとするので、性善坊は、袂^{たもと}をとらえて止めた。

「お師さま。寄ってはなりません！ 寄ってはなりません！」

「なぜ、なぜ？」範宴は、その袂を、振りもぎろうとさえするのであった。

「その中にいるのは、悪魔です。悪魔のそばへ、寄っては、お身のためにならないからです」

「悪魔？……」と、範宴は、牢にかがやいている二つの鋭い眸を見直して、

「悪魔ではない。あれは、日野の学舎^{まなびや}で、わしと机をな

らべていた寿童丸^{じゆうどうまる}じゃ」

「いいえ。……それには違いありませんが、今では、西塔の堂衆で、朱王房という悪魔です。その側^{わき}に立っている高札をごらんさい」と、性善坊は、指さしていった。

——この者、元坂本の中^{ちゆう}間僧^{けん}たりし所、西塔^{さいとう}の学僧寮に堂衆として取りたてられ、朱王房と称しおる者なり。しかる所、近来浅学小才に慢じ、事ごとに、山令に誹議^{ひぎ}を申したて、あまっさえ、範宴少納言入壇の式に、その礼鐘^{れいしやう}の役目を故意に怠り、仏法を滅するものは仏徒なりなど狂噪^{きやうそう}暴言を振舞うこと、重々罪科たるべきに附^つき、ここに、百日の禁縛^{きんばく}を命じ、謹しんで、山靈に業惡^{ごうあく}を謝せしむる者なり

西塔諸院奉行^{さいとうしよいんぶぎやう}

「おわかりでしょう。怖ろしい悪魔です。近づかない方が、お身のためです」

五

しかし、範宴は、

「かわいそうじゃ」と、かぶりを振って、肯^きかないのである。

性善坊が止める手を退^のけて、牢のそばへ、走り寄っていた。そして、懐かしげに、

「寿童どの」と、声をかけた。朱王房は、かっと、闇の中からにらみつけて、

「十八公廨^{まっまろ}、おぼえておれ、よくもこの俺を、土牢へい

れたな」性善坊は聞くに耐えないで、
「だまれっ」と側からいった。

「——お師さまには、何もご存じないことだ。糺命きゆうめいされたのは、汝の自業自得じごうじとくではないか」

「いや、貴様たちが、手を下したのも、同様だ。恨みは、こんどのことばかりではない、糺ただすの原はらでも、あの後で、野火のことを、六波羅ろくぱらの庁ちやうに、訴えたらう」

「根も葉もないことを」

「いやいや、幼少の時に、俺が、日野の館へ、石を投げこんだことを遺恨いこんに思つて、それから後は、事ごとに、貴様たちが、わしの一家を陥おとしれようと計つていたに違いない。噂は、俺の耳に入っている」

「これだから……」と、呆れ果てたように、性善坊は、範宴の顔を見て、

「……救えない悪魔です」

「なにっ、悪魔だと」朱王房は、聞き咎とがめて、かみつくように、罵ののつた。

「よくも、俺を、悪魔といったな。ようし、悪魔になつてやろう。こんな偽瞞ぎまんの山に、仏の法のりのと、虚偽ころうな衣ころもに、僧の仮面めんをかぶっているより、真っ裸の悪魔となつたほうが、まだしも、人間として、立派だ」

「こういう毒口どくぐちをたたくのだから、土牢ぼらうに抛りこまれるのも、当然じゃ。自体、幼少から、悪童ではあったが」

「大きにお世話だ。十八公磨のような、小ましゃくれた、子どものくせに、大人じみた、俺ではない。俺は、真っ裸が好きだ、嘘がきらいだ。——今にみろ、うぬらの仮面めん

や、偽装ごそうの衣ころもを剥はいでくれる」ものをいうだけが無益であると見たように、性善坊は、範宴の手をとつて、
「さ、お師さま、参りましょう……」と促うながした。

ベツと、土牢の中から、白い唾つばがとんで範宴の袂たもとにかかった。範宴は、何を考えたのか、性善坊が手をとつても歩もうとせず、両手を眼にやって泣いていた。

「……参りましょう、こんな悪魔のそばにいと、毒気をうけるだけのことです。ことばを交わすのも、愚かな沙汰です」

「………」動こうとしないで、さめざめと範宴は泣き竦すくんでいるので、

「なにがお悲しいのですか」と、性善坊がたずねると、範宴は、紅い瞼まぶたをあげて、

「かわいそう」と、唯それだけを、くりかえすのであった。

ものに感じることの強い範宴の性質を性善坊はよく知っているが、かくまで、宿命的に己れを憎んでいる敵をも、不愍ふびんと感じて、嗚咽おえつしている童心の気だかさに、性善坊も、ふたたび返すこともなく、心を打たれていた。

すると、どこからか、拙つたい尺八ねの音がしてきた。——緑の谷間から吹きあげる風につれて、虚空こくうにながれてゆくのである。

六

どこからともなく流れてくる尺八の音に、

(おや) というように、二人は眼を見あわせた。

性善坊は、ここに姿の見えない菰僧の孤雲を思い出して、

「孤雲です……きつと水を飲みに行つて、この下の谷で、何か考え出して、携えてくる尺八をすさびたくなつたのでしよう」といった。範宴は、すぐ、

「はよう呼べ。——あの孤雲が多年たずねている寿童丸は、ここにいます。それを、孤雲はまだ知らぬのじゃ」

「そうだ、孤雲が来たら、どんなによろこぶか知れません。呼んでやりましょう」性善坊はすこし離れた崖の際まで駈けて行つて、

「オオーイ」谷間をのぞいて呼んだ。

姿は青葉や山藤の花などで、見えないが、尺八の音は、糸の切れたように、やんだ。

孤雲はその時、ずっと下の溪流のふちに平たい巖を選んで、羅漢のように坐っていた。ここへは、性善坊が察したとおり、口が渴いたので、水を飲みに下りてきたのであるが、孔雀の尾のような翠巒と翠巒の抱くしいんとして澄んだ静寂のなかに立っていると、彼は、傷だらけな心を、ややしばし慈母のふところにも安らいでいるように、いつまでも、去りがてな氣持がして、そこの岩の上に、坐ってしまった。

何かは知らず、とめどもなく涙があふれてくる。昼の雲が、静かな峽のあいだを、ふわりと漂っていた。母も妻も子も、また家もない自分の境遇と似ている雲を、彼は、じつと見ていた。

誰にとも訴えようのない氣持がやがて、尺八の歌口から、哀々と思ひのかぎり、細い音を吹きだしたのであった。その音のうちには人生の儚なさだの、煩惱だの、愚痴だの、歎きだのが、纏綿とこぐらかつているように聞えた。

「おうーい」誰か、上で呼ぶ声に、孤雲はその尺八の手を解いて、

「あ……。性善坊どのだな」行く先は、分つていたので、自分は遅れて後から追いつくつもりであつたが、範宴たち二人が自分を待っているとすれば、これは、済まないことをしたと思つた。にわかに、立ち上がつて、

「おうーい」と、下からも、峰の中腹を見上げて答えた。

そして、崖道を、攀じながら、元の所へのぼつてゆくと、性善坊はそこへ駈けてきて、

「孤雲どの。よろこばしいことがあるぞ」

「え？」唐突なので、眼をしばたいたっていると、性善坊は、はや口に、その土牢の中にいる若い僧こそ、寿童丸であると告げて、

「わし達は一足先に無動寺へ参つておるから、ゆるりと、旧主にお目にかかつて、ようく、不心得を、諭してあげたがよい」といい残して、立ち去つた。

範宴と性善坊の姿が、山蔭にかくれるまで、孤雲は、茫然と見送っていた。半信半疑なのである。自分が多年探している寿童丸が、ついその土牢の中にいるなどは、どうしても、信じられないことだつた。

ふと見ると、なるほど、土牢の口が見える。高札が立

っている。——彼は、怖々と、やがてその前へ近づいて行った。

七

「おうっ——」孤雲は、土牢の口へ、われを忘れて飛びついていた。

「若様。——寿童丸様」朱王房は、牢内の闇から、じつと、孤雲の面を見つめていたが、躍り上がるように立って、

「やっ。七郎ではないか」

「七郎ですつ。わ、若様、七郎でございます」

「なつかしい」と、朱王房は、瘦せた手を牢格子のあいだから差し伸べて、

「会いたかった……」

「七郎めも、どれほど、お行方を尋ねていたか知れませぬ」

「おお」と、朱王房は、思い出したように、牢格子へ手をかけて、

「いいところへ来てくれた。お前の腰の刀を貸せ」

「どうなさるのでございますか」

「知れたこと、この牢を破るのだ。斬り破るのだ。——人の来ないうちに、早く」

「でも……」と、孤雲はおろおろして、厳めしい高札に憚ったり、道の前後を見まわしたが、折ふし、人影も見えないので、彼も、勃然と、大事を犯す気持に駆られた。

脇差を抜いて、牢格子の藤蔓を切りはじめた。朱王房は、渾身の力で、それを、揺りうごかした。

四、五本の鎧が、ぱらぱらと落ちると、牢の柱が前に仆れた。

炎の中からでも躍りだすように、朱王房は外へ出て、青空へ、両手をふりあげた。

「しめた。もう俺の体は、俺の自由になったぞ。——うぬ、見ておれ」走り出そうとするので、

「あつ、若様っ、どこへ——」と、孤雲は彼が歓びのあまりに気でも狂ったのではないかと驚いて抱きとめた。

「離せ」

「どこへおいでになるのです。若様の行く所へなら、どこへまでも七郎とてもお供をいたす覚悟でございます」

「山を去る前に、範宴の細首を引ん捻ってくれるのだ」

「滅相もない。範宴さまと、性善坊どのとは、この身に恩こそあれ、お恨み申す筋はありません」

「いや、俺は、嫌いだ」

「嫌いだからというて、人の生命をとるなどという貴方様のお心は、鬼か、悪魔です」

「貴様までが、俺を、悪魔だというか。俺は、その悪魔になって、範宴とも、闘ってやるし、この山とも、社会とも、俺は俺の力のかぎり、争ってやるのだ」

「ええ、貴方様はっ」満身の力で、狂う彼をひきもどして、道へ捻じふせた。そして、

「まだ、そのねじけたお心が、直におなり遊ばさぬかっ。お父上のご死去を、ご存じないのですか。家名を何とな

されますか。ここな、親不孝者っ」と主人の子であることも忘れて、胸ぐらを締めつけた。

「あっ、くるしい。こらっ七郎、貴様は俺を撲りに来たのか」

「打ちます、撲ります。亡きあなた様のお父上に代って、打たせていただきます」

「この野郎」刎ね返そうとすると、七郎は、さらに力をこめて、朱王房の喉を締めつけた。ううむ……と大きな呻きを一つあげて、朱王房は、悶絶してしまった。

八

ぐったりと四肢を伸ばしている朱王房の姿をながめて、孤雲は、落涙しながら、

「若様、おゆるし下さい。あなたを、範宴御房にも劣らぬ立派な者にしたいばかりに、かような、手荒な真似もするのですから」取り縋って、詫びていたが、気づいて、「そうだ人が来ては」と、にわかに鋭くなって、四辺を見まわした。

幸に、性善坊の落して行った笠がある、それを、朱王房の頭にかぶせて、背に負おうとすると、朱王房は、うーむ、と呻いて、呼吸をふきかえした。

だがもう暴れ狂う気力はなかった。永い土牢生活のつかれも一度に出たのであろう、孤雲の肩にすがったまま、ぐったり首を寝せていた。

孤雲は、谷間に下り、水にそって、比叡の山から里へ

と、いっさんに逃げて行った。

*

東塔の無動寺には、近ごろ、稚い住持が来て、日ごと勤行の場へ見えるようになった。いうまでもなく範宴である。

境内の一乗院が、彼のいる室と定められた。そこで、彼は、四教義の研究に指をそめた。

その四教義を講義してくれる人は、東塔第一という称のある篤学家の静厳法印だった。

静厳は、彼の才をひどく愛した。少納言少納言といって、自分の子のように寺務の世話までよく面倒を見てくれた。

するとある日、その静厳が、何か、報らせに来た若い法師たちを罵っていた。

「なに、まだ見つからん。そんなはずはないぞ、山狩りを始めてから、もはや今日で二十日にもなるではないか」しかし、木の根をわけても、分らないのです。所詮、この様子では、麓へ走ったにちがいないから、一度山狩りを解いて、世間のほうを探してはどうかと、西塔の衆も、申ししておりますが」

「西塔の者は、西塔の考えでやるがよい。こちらは、飽くまで、本人が、食物に困って、姿をあらわしてくるまで、固めを解いてはいかん」静厳に一喝されてすすごと、谷の方へ下りてゆく法師たちの疲れた姿を、範宴は、

一乗院の窓から見ていた。

何のための山狩りか、範宴には、よくわかっていた。で、心のうちで、

（どうか、見つからないように……。無事に、里へ逃げてくれるように）と祈っていた。大雨が降ると、

（どこかの樹木の下で、あの主従は、この雨に打たれているのではないか）と人知れず案じたり、また、朝夕の食事に、箸^{はし}をとる時も、ふと、

（あの主従は、何を食べているだろう？）と思いやった。

しかし、それから、七日すぎても、十日過ぎても、土牢を破った者が捕まったという噂は聞えてこなかった。

叡山には、夏が過ぎ、秋が更^ふけ、やがて雪の白い冬が訪れた。

雪に埋った一乗院の窓からは、どんな寒い晩も、四教義を音読する範宴の声が聞えてこない晩はなかった。

去来篇

大和路へ

一

大自然のすがたには、眼に見えて、これが変ったというともないが、人間の上にながれる十年の歲月には、驚かれるほどの推移があつた。

建久二年の年は、範宴少納言がこの東塔の無動寺に入つてから、ちょうど九年目に当たる。

彼は、十九歳になった。白衣を着て、黒い袈裟をかけて、端麗で白哲な青年は俗界の塵の何ものにもまだ染まっていなかった。処女のように、きれいであつた。

「何と気高いお姿だろう」と、その九年の間、一日も離れることなく侍っている性善坊ですら、時には、見惚れることがあつた。

背は高く、肩幅もひろいほうであつた。無動寺の奥深く閉じ籠っているのが多いので、色は白く、唇は丹のようであつた。眉は濃く太く、おそろしく男性的である。ことに、きつと一文字に結んでいる口もとには不壊の意志がひそんでいるように見えた。ある者は、

「範宴御房のお貌は、前から見るとやさしいお方だと思ふが、横からふと見ると、実に怖いお貌だ」といった。そういうわけてから、性善坊も、

「なるほど」と気がついた。怖いと見れば怖い。やさしいと見れば優しい。

健康の点では、骨格も、気力も頼もしい頑健さを天質的に備えていた。これも母系の祖父の遺伝に恵まれているのかも知れないと彼は思った。たくましい肋骨の張った胸幅の下には、どんな大きい心臓が坐っているのかと思われるくらいだった。

その実証を、性善坊は、この九年間に眼のあたりに見えてきて、ひそかに、

（自分にはとでもできない）と舌を巻いて驚いているのであつた。それは、範宴の知識慾の旺なこと、それを、満たしてゆく究学心の強さであつた。

唯識論とか、百法問答鈔とかいう難解なものすら、十二歳のころに上げてしまつたし、十五歳の時には、明禅法印から、密法の秘奥をうけて、かつて、慈円僧正が大戒を授けた破例を、（依怙鼻眞である）と、罵つた一山の大衆も、今では、口を黙して、

（やはり、彼の質は天稟なのだ）と認めるようになっていた。

けれど範宴自身は、それに誇るようなふうは少しもなく、林泉院の智海に随つて、天台の三大部を卒業するし、また、仁和寺の慶存をたずねて、華嚴を聴き、南都の碩学たちで、彼はといわれるほどの人物には、すすんで、学

問を受けた。

「お体を、おこわしにならないように——」と性善坊は、日夜の彼の精進に、口ぐせのようにいつていたが、それは杞憂にすぎなかった。

やがて範宴の体質がそんなことでこわれるような脆弱なものでないことがわかると、

「まったく、異常なお方だ」と心から頭が下がってきて、もう、そんな通常人にいうようないたわりはいえなくなってきたのであった。そして、同じ侍いて仕えているにしても、九年前と今日とは、まったく違った畏敬の心をもって、

（師の御房）と呼び、そして範宴から垂示を受ける一弟子となりきっていた。

二

七月の末だった。かねてから、範宴の宿望であった大和の法隆寺へ遊学する願いが、中堂の総務所に聴き届けられて、彼は、この初秋を、旅に出た。

「何年ぶりのご下山でございましょう……」と性善坊は、無論、供に従っていた。そして、下山することによっている世間を見ることが、やはり、軽い楽しみであるらしかった。

それでも、性善坊の方は、麓や町へ使いに下りることが、年に幾度かあったが、範宴は、ほとんどそれがなかった。

「すべてが、一昔前になったな」京都の町へ入ると、範宴は、眼に見るものすべてに、推移を感じた。

「ごらんなさい」と性善坊は、五条の橋に立って、指さした。

「——あの空地の草原で、子供たちや、牛が遊んでおりましよう。あれは、小松殿のお館のあった薔薇園の跡でございます。また、右手の東詰には、平相国清盛どの、西八条の館があったのですが、荒れ果てている状態を見ると、今は、誰の武者溜りになっておりますことやら」

「変ったのう」しみじみと、範宴はいつて、ふと、橋の欄から見下ろすと、そこを行く加茂の水ばかりは、涼々として変りがない。

いや、水にも刻々の変化はあるが、人間のような儚い空骸や相を止めないだけのことである。西八条や薔薇園の女房たちの脂粉をながした川水に、今では、京洛に満ちる源氏の輩が、鉄漿の溶き水や、兵馬の汚水を流しているのである。

「変れば変わるもの——」いつまで立っていても飽かない心地がするのだった、無限の真理と直面しているように——。そして、生ける經典を眼のあたりに見ているように。

儚いと見ればただ儚い。進歩とみれば進歩。また、虚無とみれば虚無——

社会はあまりに大きすぎて、人生の真がつかみ難い。そこらを往来する物売りや、工匠や、侍や、雑多な市人

は、ただ、今日から明日への生活に、短い希望をつないで、あくせくと、足を迅めているに過ぎないのだった。

鞍馬の峰にあって、奥州へ逃げのびた遮那王の義経も、短くて華やかなその生涯を、つい二年ほど前に閉じて、人もあろうに、兄の頼朝の兵に伐たれてしまった。そして、その頼朝が、今では鎌倉に覇府をひらいて、天下に覇を唱えているのであるから、平家の文化が一変して、世も、京洛も、加茂川の水までが、源氏色に染め直されてしまったのは当然な変遷なのである。

だが、あまりに眼まぐるしい人生の流相を見てしまった民衆たちは、

（また、明日にも）という不安と虚無観が消え去らないと見えて、往來の市人の顔には、どれもこれも、落着かない色が見えていた。

「——行こうか」範宴は、そう見ながら、ただの雲水の法師のように、五条を北川の方へ歩みだした。

三

それから六条の大路へ足を入れると、二人はさらに、「変ったな」というつぶやきをくりかえした。

辻の市場は、目立って繁昌しているし、往來の両側にある商い家も、平氏の世盛りのころより、ずっと、数が殖えていた。

空地にさえも、傀儡師か、香具師か、人寄せの銅鑼を鳴らしている男が、何か喚いてるし、被衣をかぶって、

濃い脂粉をほどこした女が、あやしげな眼ざしをくばって、鼻の下の長い男を物色している。

「人間の社会というものは、ちょうど春先の野火焼とおなじようなものでございますな。——焼けば焼くほど、後から草が伸びてくる……」と、性善坊は、感心していた。

一見、戦は、急速に社会を進化させるもののように見える。そして、誰一人、ここに生きているものは戦を呪っていないかった。

その代りに、人間は、おそろしく、刹那主義になっていた。平家の治世がすでにそうだったが、一転して、源氏の世になると、なおさら、その信念を徹底してきたかのように、女は、あらん限り美衣をかざり、男は、絶えず、息に酒の香をもって歩いていた。

「——坊さん」

「お法師さま」六条のお牛場のあたりを、二人は、見まわしていると、かつて、その辺の空地に寝ころんでいた斑ら牛や、牛の糞に群れていた青蠅のすがたは一変して、どこもかしこも、入口の瀟洒な新しい小屋や小館で埋っていた。

店の前を、網代垣でかこんだ家もあるし、朽葉色や浅黄の布を垂れて部屋をかくしている構えもある。また塗堀ふうに、目かくし窓を作って、そこから、呼んでいる女もあるのだった。

「これが、元のお牛場であろうか——」と、範宴も、性善坊も、茫然としてたたずんでしまった。

このつい近くであったはずの六条の範綱のりつなの館やかたはどこだろう。跡かたもない幼少ようしょうのころの家をさがし廻めぐって、範宴はんえんは、ここでもまた、憮然ぶぜんとした。

「きれいなお坊んさんと、お供の方——」黄いろい女たちの声が、家々の窓や垂たれ布ぬのの蔭かげから、しきりと、呼びぬくのであったが、自分が呼ばれているのであるとは二人とも気がつかない。

で、なお、狭い露地へまで入って行こうとすると、低い檜垣ひがきの蔭かげから、

「いらっしやいよ」と、白い手が法衣ころもの袂たもとをつかんだ。

範宴は、眼をまろくして、

「なにか御用ですか」女は、白い首を二つそこから出して、

「あなた方は、何を探しているんです」

「六条の三位範綱さんみさまのお館を」

「ホ、ホ、ホ。……そんな家は、もう一軒ありませんよ。ここは、遊女町ですからね」

「え。……遊女町」

「往来から見れば分りきっているじゃありませんか。お入りなさいよ」性善坊が横から、

「馬鹿っ」と叱しかって、範宴の袂たもとをつかんでいる女の手を、ぴしりと打った。

四

性善坊も怒っていった。

「あたりまえだ」

遊女はまけずに、

「人を打つのが当りまえなら私も打ってやる」と手を出して、性善坊の横顔を打つ真似まねしたが、性善坊は顔を避けて、

「けがらわしい」とその手を払った。

今度は、ほんとに怒って、遊女は性善坊の胸ぐらをつかまえた。

「何がけがらわしいのさ」

「離せ、僧侶に向って、不埒ふらちなまねをする奴だ」

「ふん……だ……」と、遊女は嘲ちやうしやう笑わらのくちびるを、柘榴ざくろの花みたいに毒々しくすぼめて、

「坊さんだから、女は汚らわしいっていうの。……ちょッ、笑わずよ、この人は」と、家のうちにいる朋輩ほうばいの女たちをかえりみて、

「あそこにいる花扇はなあうぎさん、その隣にいる梶葉かじはさん、みんな、坊さんを情夫いろに持つてるんだよ。私のところへだつて、叡山えいざんから来る人もあるし、寺町へ、こっちから、隠れて行くことだってあるんだよ」

「人が見る。離せ」性善坊が、むきになっていうと、
「そう。人が見るから、いけないというなら、話は分っている。人が見てさえないなければいいんだろう。……晩にお出で」と、女は、胸ぐらを離して、性善坊の肩をぽんと突いた。

「よくも人を打ったね」遊女は、怒った。

泥濘ぬかるみに足を落して、性善坊は、脚絆きやはんを泥水によごした。

「こいつめ」いち早く、家の中へ逃げこんだ女を追って、何か罵^{のの}っている、露地の外で、

「性善坊——」範宴の呼ぶのが聞えた。

「はいっ」彼は、大人げない自分の動作に恥じて、顔をあからめながら、往来へ出てきた。そして、範宴へ、「とんだことをいたしました」と謝った。

「ほかを探そう」範宴が歩みだすと、

「ちよつと、お待ち遊ばせ」と性善坊は、師の法衣^{ころも}の袂^{たもと}をつかんで、そのまま、道傍^{みちばた}の井戸のそばへ連れて行った。

（何をするのか）と範宴はだまつて彼のするとおりにさせていた。性善坊は、井戸のつる瓶^{べい}を上げると、師の法衣の袂をつまんで、ざぶざぶと洗って、

「さ……これでよろしゅうございます。不浄な浮かれ女の手に、お袖をけがしたままではいけませんから」と水を絞って、それから自分の手も洗って、やっと、気がすんだような顔をした。

それからもう遊女の手につかまらないように注意して二人は歩いたが、脂粉^{しふん}のにおいは、袂を水で洗っても消えないような気がするのだった。

のみならず六条の館は、どう探しても見つからなかった。

五

あきらめて、二人はまた、もとの五条口の方へ引返

した。そして五条大橋を、こんどは東の方へと渡って行く姿に、もう黄昏^{たそが}れの霧が白く流れていた。

栗田^{あわたぐち}口の青蓮院^{しょうれんいん}についたころは、すでにとつぷりと暮れた宵^よの闇だった。ここばかりは、兵燹^{へいせん}の禍^{わざわ}いもうけず、世俗の変遷にも塗られず、昔ながらに、寂^{せき}としていたので二人は、

（やはり法門こそ自分たちの安住の地だ）という心地がした。

かたく閉じられてある門の外に立って、性善坊は、「おたのみ申す」と、ほとほと叩いた。

範宴は、うしろに立って、錆びた山門の屋根だの、楼^{ろう}の様^{さま}だの、そこから枝をのばしている松の木ぶりだのを眺めて、

「十年……」なつかしげに眼を閉じて、十年前の、自分の幼い姿を睨^{まぶた}に描いていた。ぎいと、小門が開いて、「どなたじゃの」番僧の声がした。

「無動寺の範宴にござりますが、このたび、奈良の法隆寺へ遊学のため、下山いたしましたので、僧正の君に、よそながらお目にかかって参りとう存じて、夜中^{やちゆう}ですが、立ち寄りました。お取次ぎをねがわしゅう存じまする」「お待ちください」しばらくすると、番僧がふたたび顔をだして、

「どうぞ」と、先に立って案内した。

慈円^{じえん}僧正は、その後、座主^{ざす}の任を辞して、叡山^{えいざん}からまもとの青蓮院へもどって、いたって心やすい私生活のうちに、茶だの和歌だのに毎日を楽しくくらししている

のだった。

清楚な小屋に、二人を迎えて、慈円は、心からよろこんだ。

「大きゅうなったのう」まず、そういうのだった。得度をうけた時の小さい稚子僧ちごそうの時のすがたと、十九歳の今の範宴を思い比べれば、まったく、そういう声が出るのだった。

しかし、四、五年見ない慈円のすがたは、まだ初老というほどでもないが、かなり老けていた。

「僧正にも、お変りなく」範宴がいうと、

「されば、花鳥風月と仏の道におく身には、年齢としはないからの」と若々しく慈円は微笑した。そして、

「このたびは、法隆寺へ修学のよしじゃが、あまり励つとめて、からだを、そこねるなよ」

「覚かく運僧都うんそうずについて、疑義を、御垂示うけたいと存じて参りました。からだは、このとおり健固にございますゆえ、どうぞ、御安心くださいまし」後ろの小縁にひかえていた性善坊が、そのとき、畏る畏るたずねた。

「ついては、この折に、御養父の範綱様や、また御舎弟ごしやていの朝あさ鷹たか様にも、十年ぶりでお会いなされてはと、私からおすすめ申しあげて、実は、これへ参る先に、六条の館をさがしました所が、まるで町の様子は変って、お行き先も知れません。で、——青蓮院でおうかがいいいたせば分るであろうと、戻って参ったわけでございますが、範綱様にはその後、どこにお住まいでございますでしょうか」「その儀なれば、心配はせぬがよい。かねて、約束した

とおり、変りがあれば当所から知らせるし、知らせがないうちは、お変りのないものと思うていよ——とわしが申したとおりに」

六

無事さえ知ればよいようなものの、やはり範宴はんえんは一目でも会いたいと思った。

僧正は、その顔いろを見て、明日あすの朝でも寺の者に案内させるから久しぶりに訪れて行ったがよからうといった。

「まあ、今宵は、旅装を解いて、ゆるりと休んだがよい」「ありがとう存じます」範宴は、退さがって、風呂所ふろしよで湯浴みを終えた後、性善坊と共に、晩の膳を馳走されていた。するとそこへ、執事が来て、

「ただ今、僧正のお居間へ、おひきあわせ申したい客人まろうどがお見えになりましたから、お食事がお済み遊ばしたら、もいちど、お越しくださるようにとの仰せでござる」と告げた。

（誰であろう？ ……自分に紹介ひきあわせたい客とは）範宴は、ともかく、行つて見た。

見ると、寛くわいだ衣きぬを着て、大口袴おおくちを豊かにひらいた貴人が、短たん褌けいをそばにして、正面に坐っている。

僧正よりは幾歳いくつか年上であろう。四十四、五と見れば大差はあるまい。鼻すじのとおった下に薄い美髯びぜんを蓄たくわえている。その髯を上品に見せているのは、つつましく

て、柔和な唇のせいである。

「……………」範宴を見ると、貴人は、前から知っているように、にこと眼で微笑んだ。慈円僧正はそばから、「兄上、これが、範宴少納言でございます」と秘蔵のもでも誇るように紹介した。

「うむ……」貴人は、うなずいて、

「なるほど、よい若者じやの」間のわるいほど、じっと、見ているのであった。僧正はまた、範宴に向って、

「月輪関白様じゃ」と教えた。

「お……月輪様ですか」範宴は驚いた。そして礼儀を正しかけると、関白兼実は、

「いやそのまま」といって、いたって、気軽を好まれるらしく、叡山の近状だの、世間ばなしをし向けてくるのであった。

月輪兼実が、師の僧正の血を分けた兄君であることは、かねがね承知していたが、関白の現職にある貴族なので、こんな所で、膝近くこうして言葉を交わすことなぞは思いがけないことなのである。

「華厳を研究して、叡山の若僧のうちでは、並ぶ者が
ないよしを噂に聞いたが」

「お恥かしいことです。まだ、何らの眼もあかぬ学生
にござりまする」

「弟も、おもとのうわさをするごとに、精進の態を、わ
がことのように、よろこんでおる」

「高恩を、無にせぬように、励むつもりでございます」

「いちど、月輪の館の方へも、遊びに出向いて賜もれ」

「ありがとうございます」

「若くて、求法に執心な者も多勢いるから、いちど、範宴御房の華厳經の講義でもしてもらいたいものじゃ。」

——この身も、聴いておきたいし」と兼実はいった。

それから僧正が、自慢の舶載の緑茶を煮たり、一、二首の和歌を作って、懷紙に認め合ったりして、間もなく、兼実は、舍人をつれて、待たせてある牛車に乗って帰った。

七

修行の山を下りて十年目の第一夜だった。久しぶりで範宴は人間の中で眠ったような温か味を抱いて眠った。

眼をさまして、朝の勤めをすますと、きれいに掃かれた青蓮院の境内には、針葉樹の木洩れ陽が映して、初秋の朝雲が、栗田山の肩に、白い小猫のように戯れていた。

「性善坊、参ろうぞ」範宴は、いつの間にか、もう脚絆や笠の旅仕度をしていて、草鞋を穿きにかかるのであった。

「や、もうお立ちですか」とかえって、性善坊のほうがあわてるほどであった。

「僧正には、勤行の後で、お別れをすましたから」と範宴は、何か思い断るように足を早めて山門を出た。

性善坊は、笈を担って、後から追いついた。

すると、執事の高松衛門が、山門の外に待っていて、

「範宴殿、ご出立ですか」

「おせわになりました」

「僧正のおいっつけで、今日は、六条範綱様のお住居へ、ご案内申すつもりで、お待ちうけいたしていたのですが――」

「ありがとうございます」

「まさか、このまま、お発足のおつもりではございますまいが」

「いや」と、範宴はゆうべから悶えていた眉を苦しげに見せていった。

「……養父の顔も見だし、弟にも会いたしと、昨日は、愚かな思慕に迷って、一途に養父の住居を探しあるきましたが、昨夜、眠ってから静かに反省みて恥かしい氣がいたして参りました。そんなことでは、まだほんとの出家とはいわれません。僧正もお心のうちで、いたらぬ奴と、お蔑みであつたらうと存じます。いわんや、初歩の修行をやつと踏んで、これから第二步の遊学に出ようとする途中で、もうそんな心の弛みを起したというのは、われながら口惜しい不束でした。折角のご好意、ありがとうございますぞんじますが、養父にも弟にも、会わないで立つと心に決めましたから、どうぞ、お引きとり下さいまし」

「さすがは、範宴御房、よう仰せられた。――それでは、その辺りまで、お見送りなと仕ろう」

衛門は、先に立って、青蓮院の長い土堀にそって歩きだした。そして、裏門の方へと二十歩ほど、杉木立の中を行くと、小やかな篠垣に囲まれた草庵があつて、朝

顔の花が、そこらに、二、三輪濃く咲いていた。

「きれいではございませぬか」衛門は、垣の内の朝顔へ、範宴の注意を呼んでおいて、そこから黙って、帰ってしまった。

性善坊は、何気なく、垣のう치를覗いて、愕然としながら、範宴の袂をひいた。

「お師さま。……ここでもござりますぞ」

「なにが」

「ご覧じませ」

「おお」

性善坊に袖をひかれて、草庵のう치를覗いた範宴の眼は、涙がいっぱいであつた。

姿は、ひどく変っているが、日あたりのよい草堂の縁に小机を向けて、何やら写し物の筆をとっている老法師こそ、紛れもない、養父の範綱なのであつた。

八

「いつ、ご法体になられたのか」範宴は、涙で、養父のすがたが見えなくなるのだった。

「……面影もない」と昔の姿とひき比べて、十年の養父の労苦を思いやった。

性善坊は、たまりかねたように、その門を押して、入ろうとした。

「これ、訪れてはならぬ」範宴は叱った。そして、心づよく、垣のそばを離れて、歩きだした。

「お会いなされませ、お師様、そのお姿を一目でも、見せておあげなされませ」

「……………」範宴は、首を横に振りながら、後も見ずに足を早めた。

すると、鍛冶ヶ池のそばに二人の若い男女が、親しげに、顔を寄せ合っていたが、範宴の跽音に驚いて、

「あら」と、女が先に離れた。

この辺の、刀鍛冶の娘でもあろうか、野趣があつて、そして美しい小娘だった。

男も、まだ十七、八歳の小冠者だった。秘密のさざめ語を、人に聞かれたかと、恥じるように、顔を赧らめて振りかへった。

「おや……………」範宴は、その面ざしを見て、立ちすくんだ。

若者も、びくっと、眼をすえた。

幼い時のうろ覚えだし、十年も見ないので、明確に、誰ということも思ひだせないのであったが、骨肉の血液が互いに心で呼び合った。

ややしばらく、じっと見ているうちに、どっちからともなく、

「朝麿ではないか」

「兄上か」寄ったかと思うと、ふたつの影が、一つもののように、抱きあつて、朝麿は範宴の胸に、顔を押しあてて泣いていた。

「——会いとうございました。毎日、兄君の植髪の御像をながめてばかりおりました」

「大きゅうなられたのう」

「兄上も」

「このとおり、健やかじゃ。——して、お養父君も、その後は、お達者か」

「まだ、お会い遊ばさないのでございますか」

「たった今、垣の外から、お姿は拝んできたが」

「では、案内いたしましょう。養父も、びっくりするでしょう」

「いや、こんどは、お目にかかるまい」

「なぜですか」

「自然に、お目にかかる折もあろう。ご孝養をたのむぞ」

「兄上——。どうして、養父上に、会わないのですか」

朝麿は、恨むように、兄の手へ縋った。女は、池のふちから、じっとそれを見ていた。処女心は、自分への男の愛を、ふいに、他人へ奪られたような憂いをもって、見ているのだった。

「……………」性善坊は、すこし、傍へ避けて、兄弟の姿から眼をそむけながら、ぼろぼろと、頬をながれるものを、忙しげに、手の甲でこすっていたが、そのうちに、範宴は、何を思ったか、不意に、弟の手を払って、後も見ずに、走ってしまった。

一

ちらと、彼方に灯が見えた。町の灯である。

生紙へ墨を落したように町も灯も山も滲んでいた。

「宇治だの」範宴は立ちどまった。足の下を速い水音が聞える。やっと、黄昏れに迫って、この宇治川の大橋へかかったのであった。

「さようでございます。——もういくらもございますまい」云い合わせたように、性善坊も、橋の中ほどまで来ると、欄に身を寄せかけて、一憩みした。

ひろい薄暮の視野を、涼々と、秋の水の清冽が駈けてゆく。範宴は冷ややかな川の氣に顔を吹かれながら、

「——治承四年」とつぶやいた。

「わしはまだ幼かった。おもとはよく覚えておろう」

「宇治の戦でございますか」

「されば、源三位頼政殿の討死せられたのは、この辺りではないか」

「確か。……月は、五月のころでした」

「わしには、母の君が亡逝られた年であった。……母は源家の娘であったゆえ、草ふかく、住む良人には、貞節な妻であり、子には、おやさしい母性でおわした以外、何ものでもなかったが、とかく、源氏の衆と、何か、

謀叛氣でもあったかのように、一族どもは、平家から睨まれていたらしい。さだめし、子らの知らぬご苦勞もなされたであろう」

「いろいろな取り沙汰が、そのころは、ご両親様を取り巻いたものでございました」

「さあれ、十年と経てば、この水のように、涼々と、すべては泡沫の跡形もない。——平家の、源氏のと、憎しみおうた人々の戦の跡には何も無い」

「ただ、秋草が、河原に咲いています。——三位殿は、老花を咲かせました」範宴は、法衣の袂から数珠を取りだして、指にかけた。

高倉の宮の御謀議むなしく、うかばれない武士たちの亡魂が、秋のかげの暗い空を、啾々と駈けているかと、性善坊は背を寒くした。

母の吉光の前と源三位頼政とは、おなじ族の出であるし、そのほか、この河原には、幾多の同血が、屍となつていたのである。範宴は、復従兄弟にあたる義経の若くして死んだ姿をも一緒に思いうかべた。そして、そういう薄命に弄ばれてはならないと、わが子の未来を慮かって、自分を、僧院に入れた母や養父や、周囲の人々の氣もちが、ここに立って、ひととありがたく思ひあわされてくるのもあった。

その霜除けの囲いがなければ、自分とても、果たして、今日この成長があったかどうか疑わしい。自分の生命は、決して、自分の生命でない気がする。母のものであり同族のものであり、そして、何らかの使命をおびて、自身

の肉体に課されているこの歲月ではあるまいか——などとも思われてくるのであった。

「……」数珠が鳴った。性善坊も、瞑目していた。すると、その二人のうしろを、さびしい蹙音をしのばせて、通りぬけてゆく若い女があった。

二

ふと、振りかえって、女のうしろ姿を見送りながら、「もし……」性善坊は、範宴の袂を、そつと引いた。

「——あの女房、泣いているではありませんか」

「町の者であろう」

「欄干へ寄って、考えこんでいます。おかしな女子だ」

「見るな、人に、泣き顔を見られるのは憂いものじゃ」

「参りましょう」二人は、そういつて、歩みかけたが、やはり気にかかっていた。五、六歩ほど運んでから再び後ろを振り向いたが、その僅かな間に、女のすがたはもう見えなかった。

「や、や？」性善坊は、突然、笈を下ろして、女のいたあたりへ駈けて行った。そして、欄干から、のめり込むように川底をのぞき下ろして、「お師様つ、身投げですっ」と手を振った。範宴は、驚いた。そして自分の迂濶を悔いながら、

「どこへ」と側へ走った。性善坊は、暗い川面を指さして、

「あれ——、あそこに」といった。

水は異様な渦を描いていた。女の帯であろう。黒い波紋のなかに、浮いては、沈んで見える。

「あつ、あぶないっ……」性善坊が驚いたのは、それよりも、側にいた範宴が、橋の欄に足をかけて、一丈の余もあるそこから、跳び込もうとしているからであった。抱きとめて、

「滅相もないっ」と、叫んだ。

「——私が救います、お大事なお体に、もしものことがあったら」と、彼は手ばやく、法衣を解きかけた。すると、河原の方で、

「おうい……」と、男の声がした。

二、三人の影が呼び合つて、駈けつけてきたのである。川狩をしていた漁夫であろうか、一人はもうざぶざぶと水音を立てている。川瀬は早いが、幸いに浅い淵に近かったので苦もなく救われたのであろう、間もなく、藻のようにになった女の体をかかえて岸へ上がってきた。

「ありがとう」範宴は、礼をいいながら、男たちの側へ寄って行った。

女は、まだ気を失っていないとみえて、おいおいと泣きぬいていた。両手を顔にあてながら身を揺すぶって泣くのである。

「どう召された」性善坊が、やさしく、女の肩に手をやってさし覗くと、女は不意に、

「知らないっ、知らないっ」その手を振り払って、まっしぐらに、宇治の橋を、町の方へ、駈けだして行くのであった。

「あつ、また飛びこむぞ」男たちは、そういったが、もう追おうともしないで、舌打ちをして見送っていた。

三

捨てておけない気がした。範宴は駆けだしつつ、
「ああ早い足だ、性善坊、おもと一人で、先に走ってあの女を抱きとめい」

「かしこまりました」性善坊は、宙をとんで、もう宇治の大橋を彼方へ越えてしまった女の影を追って行った。

案のじよう、女は橋をこえると、町の方へは向わないで、河原にそって上流の方へ盲目的に取り乱したまま駆けてゆく。

「これっ、どこへ参る」性善坊がうしろから抱き竦めると、女は、甲ばしった声で、

「どこへ行こうと、大きなお世話ですよ、離してください」

「離せません。おまえは死のうとする気じやろう」

「死んでわるいんですか」青白い顔を向けて、女は、食ってかかってくる。その眼ざしを見て、

（これは）と性善坊は思わず面を背けてしまった。

つりあがった女の眼は、光の窓みたいに尖っていた。

髪は肩へ散らかっているし、水浸しになった着物だの、肌だのを持って、寒いとも感じないほど、逆上してしまっている。

「なぜ悪いのさ」女は僧侶のすがたを見て、ことさらに反感を抱いたらしく、かえって、詰問してくるのだった。
「わるいにきまっています。人間にはおのずから、定められた寿命がある。一時の感情で、生命をすてるなどは、愚か者のすることです」

「どうせ私は、愚か者です。愚か者なればこそ」しゅくつと、嗚咽して、

「男に……男に……」他愛なくわめいて、また、

「死なして下さい」

「そんなことはできない」

「面当に、死んでやるんです」と、おそろしい力でもがいた。

性善坊が持ち前で、そのかぼそい手頸を捻じ上げて、範宴の来るのを待っていると、女は性善坊が憎い敵でもあるように、指へ噛みつこうとさえするのだった。

「落着きなさい。……痴情の業のするところだ、醒めた後では、己れの心が、己れでもわからないほど、呆っ気ないものになってくる」

「お説教ならお寺でおしなさい。私は、坊さんは嫌いです」

「そうですか」苦笑するほかはない。範宴が、追いついてきた。

「どうした、性善坊」

「抑えました」

「ひどいことはせぬがよい」

「なに、自分で狂い廻って、泣きさけぶのです」

「お女房——」範宴は背をなでてやって、
「行きましよう」

「どこへさ」

「あなたのお宅まで、送ってあげます。風邪をひいては
なりません、着物も濡れているし……」

「死ぬ人間に、よけいなおせっかいです。かまわないで
下さい」女人は救い難いものとはかねがね聞かされてい
るところであったが、こういうものかと、範宴は、しみ
じみと見つめていた。

四

あさましいこの女の狂態を見るにつけて、範宴は、
一昨日、鍛冶ヶ池の畔で逢った弟のことを思い出した。
弟は、あの時、池のふちで年ごろの若い娘と列んでい
た。

まさか、人目にとやこういわれるほどのことではある
まいが、弟は、自分とちがって、蒲柳だし、優しいし、
それに、意志がよい。

範宴が、今度、叡山を下りてから、何よりもふかく多
く心に映ったものは、「女」だった。女のいない山から
下りてみると、世間は女の国に見える。女だらけに見え
る。わずらわしいことにも思い、何か急に明るい気もち
もして、自分の年頃に、おぼろな不安と温かさを醸して
いた。

「お師さま、弱りました」さっきから、女をなだめすか

していた性善坊は、持てあましたようにいった。

「どうしても、家へ帰らないのです」範宴が今度
は、

「宇治かの、おもとの家は」と訊いた。

「いやです。帰るくらいなら、一人で帰る」

「そういわないで、私たちも、宇治の町へ行く者です。
送ってあげよう」

「くだい坊さんだね」

「私たちの使命ですから、気に食わないでも、ゆるして
下さい。私は、おもとを幸福にしてあげたいのだ」

「笑わすよ、この人は。人間を幸福にしてやるなんて、
そんな器用なまねが、人間にできるものか」

「私の力ではできません。仏の御力で——」

「その仏が、私は大嫌いだよ。——死にたいというのに、
邪魔をするし、嫌いだというものを押しつけるし、お前
たちは、人を不幸にするのが上手だよ」

「とにかく、歩きましょう」

「嫌——」

「おもとの望みのようにして上げたらよからう」

「わたしの望みは、わたしの男を自分のものにするこ
とだ」

「やさしい願いではありませんか」

「とんでもないことおいでない、男には、ほかに、女
ができているんだよ」

「その男とは、おもとの良人でしょう」

「まだ、ちゃんと、何はしないけれど……」

「ようございます。私も真ごころを尽して、男の方^{かた}に申しましょう。わるいようにはしない……さ、歩いてください」やっと、宇治の町まで連れてきて、女の家をたずねると、

「そこ——」と、裏町の穢^{きたな}い板長屋の一軒を指さした。

御烏帽子^{おんえぼし}作国助^{さくくにすけ}と古板に打ちつけてある。範宴が、板

戸をたたいて、

「こん晩は」訪れると、その際^{すき}に、女は性善坊の手を振り挽^もいで、逃げようとした。

五

「はい、どなた？」若い男の返辞だった。すぐ家の中から板戸を開けて、そこに立っていた者が、二人の僧であつたのに意外な顔をしたが、さらに、性善坊の手から逃げようともがいている女の姿を見ると、

「この阿女^{あま}」と、裸足^{はだし}で飛び出してきて、女の黒髪をつかんだ。

「どこへ行っているやがったのだ。——おや、ずぶ濡れになって、また、馬鹿なまねをしやがったな」あまり無造作に家の中へ引き摺り上げてしまったので、範宴は、「もしつ、そんな乱暴はせずに下さい」共に、家のうちへ入ったが、もうその時は、女のほうが、俄然、血相を烈しくして、

「何をするんだッ、そんなに、私が憎いかつ。殺せ」

「気がいいめ」

「さ、殺せ」いいつつ、男の胸ぐらへつかみかかつて、「そのかわりに、私一人じゃ死なないぞ。この浮気男め、薄情者め。口惜しいっ」

範宴も、これには手を下しかねた顔つきで、眺めていた。しかし、抛^ほつとけば限りもないので、

「止めてやれ」と、性善坊にいうと、

「こらっ」彼は、まず男のほうを隔^{へだ}て、

「やめぬか、まさか、仇^{かたき}同士でもあるまい」

「仇より憎い」と女はさげんだ。

それからは油紙に火がついたように、男のざんそを人前もなく喋^{しゃべ}り立てて、男が自分を虐^{ぎゃく}待^{たい}して、ほかで馴染んだ売女^{ばいじょ}をひき入れようとしていることだの、この家が貧乏なために、自分が持ち物を売りつくして貢^{みつ}いだのと、あらゆる醜悪な感情をおよそ舌のつづく限り早口でいった。

さすがに、間がわるくなつたと見えて、烏帽子師^{えぼしし}の男は、青白い顔して、うつ向いていた。

そして今になってから、気がついたように、範宴へ、

「どうも相すみません」と、いった。

「あなたの内儀^{ないぎ}ですか」と性善坊が口を入れた。

「いいえ、でき合って、ずるずるに暮^くしている萱乃^{かやの}という女です。けれど、萱乃のいうような、そんな、私は悪い男じゃないつもりです」

「仲を直してはどうじゃ」

「私は、可愛いくって、しかたがないくらいなんだが、ご覧のとおりな……」女は、眸^めから針を放って、

「嘘をおつきッ」

六

女がさらに血相を持ち直して、甲だかく猛りかけると、その時、門の戸を開けて、

「娘、われはまた、ここへ来ていくさるのか」誰やら、老人らしい声がした。

その声を聞くと、萱乃は、びくりとして、

「あつ、お父さん」水を浴びたように、今までの狂態を醒まし、にわかに、穴へでも入りたいように、居竦んでしまふ。

烏帽子師の国助も、面目なげにうろうろとしていた。するともう案内もなく上がって来た萱乃の父なる人は、厳つい顔を硬ばらしてそこに突っ立ちながら、若い男女を見下ろして、さも忌々しげに、

「恥さらしめっ」と、唾でも吐きかけたいように睨めつけた。

宇治の郷土でもあろうか、粗末な野太刀を佩いた老人だった。

「さ、家へこい、家へ帰れ。こんな怠け者の職人と、痴話狂いをさせようとて、親は、子を育てはせぬぞ。不届き者め」

萱乃の襟がみをつかんで、叱りながら、引っ立てると、

「嫌です、嫌です」娘は、筵へしがみ伏して、

「——家へは帰りません」と必死でいった。

「なぜ帰らない」

「でも私は、国助さんと、どんな苦勞でもしたいのです」

「親の許さぬ男に？」

「かにんして下さい」

「ならぬっ」と老人は一喝して、

「こんな男に、見込みはない。親のゆるさぬ男の家へ入りこんで、仲よくでも暮していることか、町の衆が、笑っている。嫌ならよし、親の威光でも、しょッ引いて行かねばならぬ」

憤怒して、老人は、娘の体を二、三尺ずるずると門の方へ引きずり出した。

皺の深い唇のまわりに、ばらっと、針のような無精髭の伸びているその老人の顔と、物言い振りを、それまでじっと傍観していた性善坊は、その時始めて口をひらいて、

「待て。——おぬしは、六条のお館に奉公していた箭四郎じゃないか」といった。

「げっ？」老人は開いた口をしばらくそのまま、

「……」小皺の中の眼をこらして、いつまでもいつまでも性善坊の顔を見つめ、一転して、その側にきちんと坐っている範宴の姿を見て、

「や、や、や……」萱乃の襟がみから手を離して、そこへ、べたっと坐ってしまった。

「お——。……おぬしは元の侍従介？」

「介じゃよ」

「では、これにお在すのは……」

「わからぬか、あまりご成長あそばしたので、見違うたも無理じゃない。日野の和子さま……十八公鷹様じゃ」
「あつ、何としよう」

箭四老人は、両手をつき、額を筵につけたまましばらくは面を上げようとしない。

七

彼の鬢の白さに、

「おもとも、変ったのう」しみじみと、範宴も見入っていた。

箭四老人の語るところによると過ぎつる年のころ、木曾殿乱入の時にあたつて、平家は捨てて行く都に火を放ち、また日ごろ、憎く思う者や、少しでも源家に由縁のある者といえ、見あたり次第に斬つて、西国へと落ちて行った。

その折、六条の館も、あの附近も、一様に焼き払われて、範綱は身辺すら危ない身を、朝麿の手をひいて、からくも、青蓮院のうちに隠れ、箭四郎も供をして、しばらく世の成りゆきを見ていたが、つらつら感じるこのあつたときみえて範綱は、ふたたび世間へ帰ろうとはせず、髪を下ろして、院の裏にあたるわずかな藪地を拓いて草庵をむすび、名も、観真とあらためていた。

で、箭四郎にも暇が出たので、宇治の縁家に一人の娘が預けてあるのを頼りに、故郷へ戻つて、共に、生活を励もうと一家をもつたのであるが、久しく離れていた

実の父よりは、年ごろの娘には思い合うた若者の方が遙かによいとみえて、家に落着いていることなどはほとんどなく、姿が見えないと思えば、烏帽子師の国助の家に入りびたっている始末なのでほとほと持て余しているところなので——と彼は長物語りの末に、

「どうしたものでございましょう」と面目ないが、包み隠しもならず、恥をしのんで、打ち明けるのであった。「なるほど」それで仔細は分つたが、そう聞けば、萱乃の恋もいじらしいものである。それを、男の国助は、ほかに女があつて、かくばかり萱乃を苦しませているのはよろしくない。遊女とかいう国助の一方の情婦をこそ、この際、どれほど、深い仲なのか、正直に聞かしてもらおうではないか。それが、解決の一策というものだ、と、まず性善坊が、なれない話ながら、相談あいてになつてみると、国助のいうには、

「てまえが、遊女屋がよいをいたしたのは、まったくでございますが、決して、浮いた沙汰ではなく、何を隠しましよう、東国を流浪しているうちに、木賊四郎という野盗に誘拐かされて、この宇治の色町へ売られた妹なのでございします。——けれど、妹が売女などという沙汰が、人に知られては外聞もわるし、この萱乃にも、つい初手に打ち明けかねて、近ごろになつて、そう申しても、もう信じてもくれないのでございします。けれどてまえは、決して、萱乃が憎いものではございません。どうかして、妹の身代金だけを、兄妹して稼いで抜こうとお互いに慰めていきますので、少しでも生活の剩りができ

れば妹にわたし、妹も幾らでも客にもらえば私に見せて、共々に、月に二度か三度の会う日を、楽しんでいたのでございます。決して、萱乃がいうような浮いた話ではありません」唸々（とつとつ）ということばには真実があつて、むしろ、妹思いな兄と、兄思いな妹とが、髻髻（ほうふつ）として、眼を閉じて聞いている人々の臉（まはた）に迫ってくるほどののである。「すみませんッ……」突然、泣き伏したのは萱乃であつた。身悶え（みもた）をして咽び（むせ）つつけた。

八

悔いと慚愧（ざんき）に、うちたたかれて萱乃は、「——何もかも、私の嫉妬（しつと）からでした。……すみません、国助さんにも、お父さんにも」くりかえすばかりだった。嫉妬（しつと）は、女を炎にするが、その迷いから出ると、女は、不愍（ふびん）なほど、真実な姿にかえつて、浄化される。性善坊は、箭四郎に、「おぬしは、娘御のこれほど慕っている国助が、気に喰わぬのか」とたずねた。「いや、気に喰わんというわけじゃないが、世間でとかくよいいわぬから、娘の行く末を託するに足らぬ男と思うていたまでじゃ」「その誤解も、今は、解けたであろうが」「うむ……」「解けたついでに、心まで打ち溶（と）けてみる気はないか。——親がゆるして、添わせてやるのじゃ」

「わしにも、落度（らくど）があつた。国助の心ばえも、今夜はよく分つたゆえ、男女（ふたり）の望みにまかせましょう。——そして萱乃」

「はい……」

「良人の力になつて、共稼ぎに働いて、一日もはやく、遊女の群れに落ちてゐる国助の妹とやらを救うてあげるのだ」

「きつと、働きます」初めて、和（なご）やかなものが、家のうちに盈（み）ちた。範宴（はんえん）も、うれしく思つた。夜も更けたほどに、人々は、空腹であつた。炉（ろ）に薪（たきぎ）を加えて、萱乃は、粥（かゆ）などを煮はじめた。

話（わ）がつかないまま、人々は、明け方のわずかを、炉のそばに、まどろんだきりであつた。

夜が明けると、

「では——機嫌（きげん）よう、暮（く）せよ」二人は旅の笠（かさ）を持つ。

きのうとは、生れ代つたような萱乃と国助は、明るい顔して、途中（ちゆうちゆう）まで見送（みおく）つてきた。箭四郎（やしろろう）も、従（したが）つてきた。

「もう、この辺で結構（けっこう）です。職人（しやくじん）は、時間が金、きょうからは、約束（やくそく）したように、共稼ぎ（きざせ）で働いてください」範宴（はんえん）は、そういつて、宇治川（うじがわ）の河原（かはら）にたたずんだ。名残惜（なごりおし）しげに、

「では、渡船場（わたくしば）まで」と話（わ）しつつ、歩いてゆく。

「あれをごらんない」別（わか）れ際に、範宴（はんえん）は、悠久（ゆうきう）とながれている大河（たいが）の姿（すがた）を指（さ）して、若い男女（ふたり）へいつた。

「——天地（てんち）の創造（そうぞう）された始め（はじ）から、水（みづ）は、天地（てんち）の終（は）るまで、無窮（むきゆう）の相（すがた）をもつて流（なが）れています。われわれ人間（にんげん）と

てもその通り、人類生じて以来何万年、またこの後人類の終るまで何億万年かわからぬ。その、無窮にして無限の時の流れから見ると、人の一生などは、電光のような瞬間です。その瞬間に、こうして、同じ時代に生れ合ったというだけでも、実に奇しき縁と申さねばならぬ。いわんや、同じ国土に生れ、同じ日のもとに、知る辺となり、友となり、親となり、子となり、また、夫婦となるということは、よくよくふかい宿命です。……だのに、そのまたと、去つては会い難い機縁の者同士が、憎みあい、呪いあい、罵りあうなどということは、あまりにも、口惜しいことではないか。——見るがよい、こう話している間も、水は無窮に流れて、流れた水は、ふたたびこの宇治の山河に、会いはしない……」

九

「わかりました」若い夫婦は、しみじみと、範宴のことはを心に沁み入れてうなずいた。

渡船が出る。範宴は、性善坊と一緒に、舷へ立った。

狭霧が霽れてきた。箭四老人は、幾たびも、

「和子様——おからだをお大切に——ご修行を遊ばしませ」彼にはまだ、範宴が、昔の十八公磨のように稚く見えてならなかった。今も、和子様と、呼ぶのであった。

「爺も、無事に」と、範宴が答えると、

「おさらばでございます」萱乃と国助が、うるんだ眼をして、じつと見送る。

早瀬へ、渡船はかかっていた。下流へ下流へと、船脚はながされてゆく。箭四郎のすがたが、次第に小さくなった。若い男女のすがたに、朝の陽が、かがやいていた。（あの夫婦に、永く、幸福のあるように）と範宴は、仏陀に祈った。

河原には、小禽が、いっばいに啼いている。何ともいえない、清々しさが、皮膚から沁み入るように覺えた。

だが、範宴は、山を下りてから事ごとに何か考えさせられた。それは、

（学問のための学問ではだめだ）ということだった。

自分が、きょうまで、霧の中に、刻苦してきたことは、要するに、それである。人間を対象としない、古典との燃烧であった。いくら、研学に身を燃烧しても、それがただ、古典に通ずるだけのものであったら、意味はとばしい。

生きた学問とはいえない。衆生に向つて、心の燈火となる学問ではない。自分の胸に、明りを点けて、自分のみ明るしとする狭いものでしかない。

人間を知ろう。社会を知ろう。——それこそ生々しい大蔵の教典だ。それによつてこそ、初めて、真の仏教がものをいう。

河内路の白い土を踏みながら、範宴は、そんなことを考えたりした。

（しかし？……）とまた、惑いもするのだった。

（そういう考えは、まだ、生意気かもしれない。人生だの、社会だのというのは、そんな簡単なものではない。

それに……まだ古典のほうだって、自分はまだ、ほんの九牛の一毛を、学んだばかりの黄口の青年ではないか。まず、しばらくは、無想と、無明の中に入って、専念、学ぶことが必要だ。——ただ専念に」と、行く手の法隆寺に、その希望をつなぎ、おのずから足に力が入るのを覚えて大和へ急いだ。

—

「はてな？」性善坊は、雑鬧する駅路の辻に立って、うろうろと、見まわしていた。

木津川を渡って直ぐの木津の宿であった。

源氏の府庁から布かれた大きな高札が立っている。

その官文の前にも、範宴は見えなかった。

汚い木賃宿だの、馬飼の馬小屋だの、その前に立って罵っている侍だの、川魚を桶にならべて売る女だの、雑多な旅人の群れだのが、秋の蠅と一緒にあって騒いでいる。

「この、阿呆っ、高い所にのぼりたけれや、鴉になれっ」と、柿売りの男が、屋根の上にあがって遊んでいる子どもを、引きずり下ろして、往来の真中で、尻を、どやしつけていると、その子の女親が、裸足で駈けてきて、

「人の子を、何で、打ちくさるのじゃ」と柿売りの男を、横から突く。

「てめえの家の餓鬼か。この悪戯のために、雨漏りがして、どうもならぬゆえ、懲らしめてくれたのが、何とした」

「雨が漏るのは、古家のせいじゃ、自分の子を、打て」

「打ったが、悪いか」と、またなぐる。子どもは泣き喚く。

「女と思うて、馬鹿にしくさるか」と、子どもの母親は、柿売りに、むしゃぶりついた。

親同士の喧嘩になって、見物は蠅のようにたかってくるし、駅路の馬はいなくなり、犬は吠えたてる。性善坊は、探しあぐねて、

「お師様あ」と呼んでみたが、そこらの家の中に、休んでいる様子もない。

木津の渡船で、すこし、うるさいことがあったので、宿の辻で待ちあわしているようにと、自分は、一足後から駆けつけてきたのであったが――。

ここに見えないとすると、もう奈良も近いので、あるいは、先へ気ままに歩いて、奈良の口で待っているおつもりか？

「そうかも知れない」性善坊は、先の道へ、眼をあげながら、急ぎ足になった。

その足もとが、鶏に蹴つまずいた。埃をあげて、鶏が、けたたましく、往來を横に飛ぶ。

宿場を出ると、やがて、相楽の並木からふくろ坂にかかった。その埃の白い草むらに、

西、河内生駒路、東、伊賀上野道。

道しるべの石碑が立っていた。さっきからその石碑のそばに、黙然と、笈ずるを下ろし、腰かけている山伏がある。

「……喉が渴いた」つぶやいて、辺りを見まわした。清

水が欲しいらしいのであるが、水がないので、あきらめて、またむしゃむしゃと柏の葉でくるんだ飯を食べている。

その前を、性善坊が、急ぎ足に通ったので、山伏はふと顔を上げたが、はっと突き上げられたように立ち上がって、

「おいっ、おいっ」杖をつかんで、呼びとめた。

二

つい、行き過ぎると、山伏はふたたび、

「坊主、耳がないのか」性善坊は聞きとめて、

「何？」思わずむっとした顔いろをして振りかえった。

傲岸な態度をもつて、自分へ、手をあげている山伏は、陽に焦けて色の黒い、二十七、八の男だった。

雨露に汚れた柿いろの篠懸を着て、金剛杖を立て、額に、例の兜巾とよぶものを当てていた。

「なにか御用か」性善坊がいうと、

「おお、用があればこそ、呼んだのだ」

「急ぎの折ゆえ、宗法のことならゆるされい」

「宗旨の議論をやろうというのじゃない。まあ、戻りたまえ」はなはだ迷惑に思ったが、由来、修験者と僧侶とは、同じ仏法というものの上に立ちながら、その姿がひどく相違しているように、気風もちがうし、礼儀もちがうし、經典の解釈も、修行の法も、まるで別ものになっているので、ことごとに反目して、僧は、修験者を邪道

視し、修験者は僧を、仏陀を飯のためにする人間とみ、常に、仲がよいのであった。

ことに、山伏の一派は、山法師のそれよりも、兇暴なのが多かった。また、社会から姿をくramsす者にとって、都合のよい集団でもあったので、腰には、戒刀とよび、また降魔のつるぎとよぶ鋭利な一刀を横たえて、何ぞという、それに物をいわそうとするような風もあるのである。

（からまれては、うるさい……）性善坊は、そう考えたので、面持ちを直して、

「では、御用のこと仰せられい」と、素直に彼の方へ、足をもどして行った。

山伏は、いい分が通ったことに優越感をもったらしく、「うむ」とうなずいた。

そして、近づいた性善坊へ向って、横柄に、

「貴様、一人か」と訊いた。

「何のことじゃ、それは」

「わからぬ奴、一人旅かと、訊ねるのだ」

「連れがおる。その連れを見失うたので、急いで行くところじゃ。御用は、それだけか」

「待て待て。それだけのことで、呼びとめはせぬ。……では連れというのは、範宴少納言であろうが」

「どうして知っているのか」

「知らないでか。貴様も、うとい男だ。この朱王房の顔を忘れたか。俺は、叡山の土牢から逃亡した成田兵衛の子

——寿童丸が成れの果て——今では修験者の

播磨房弁海」

「あつ？——」思わず跳びさがって、

「寿童めかッ」と性善坊は見直した。

山伏の弁海は、赤い口をあけて、げたげた笑った。

「奇遇、奇遇。……だが、ここに範宴のいないのは残念だ。範宴はどこにいるか」

三

弁海と名は変わっても、腕白者はやはり腕白者、寿童丸といったころの面影が、今でも、彼の姿のどこかにはある。

「おい、範宴は、どこにいる？……」と、重ねて訊く。

性善坊は、この男の眼に合うと何かしら、むかむかとしてならなかった。呪詛の火みたいに粘りこい眼である、また、いつでも、人を挑むような眼であった。

それに釣り込まれて、くわつと激したがる自分の血を、性善坊はおそれるのであった。

「存じませぬ」穏やかに顔を振ると、弁海は、ずかと一歩前へ迫ってきて、

「知らぬはずはあるまい。汝の師ではないか」

「でも、今日は、わたくし一人ですから」

「嘘をつけ。たった今、連れがあるので先を急いでゆくところだとその口でいったじゃないか。範宴は、俺の生涯の敵だ、久しぶりで、会ってやろう。案内せい」と、強迫する。

性善坊は、唇の隅に、哀れむような微笑をたたえた。

「寿童殿——いや弁海どの」

「なんじゃ」

「どうして、そのもとは、範宴様に、さような恨みをふくんでいるのか」

「今では、理由よりも、ただ生涯のうちに、あいつを、俺の足もとに跪ひざまずかせてやれば、それでよい。それが、望みだ」

「ああ、お気の毒せんばん千万です。人を呪のろう者は、終生呪いの苦患くげんから救われぬと申します」

「貴様も、いつの間にもや、坊主くさい文句を覚えたな。まあなんでもいい範宴のいる所へ、案内しろ」

「まず、断ります」

「なんだと」

「師の御房は、そのもとのような閑人ひまじんと、争まっている間まはありません。一念ご修行の最中です。不肖ふしょうながら、私は、身をもつて、邪魔者を防ぐ楯たてとなる者です。用があるなら、私に、仰うっしゃってください」

「生意気な」と弁海べんかいは、唾つばを横に吐いて、

「俺に、会わせんというのか」

「そうです」

「そんなに、弁海が怖いのか。……いや怖おそかろう、あいつは、日野の学舎まなびやにいても、叡山えいざんにいても、師に取り入るのが巧く、長上へつちやうに諂うづっては、出世したやつだ。俺に会うと、その偽面を剥はがれるので嫌なのだろう、——しかし、俺は生涯に、きつと、範宴の小賢こざかしい仮面めんを剥はぎ、

あいつの上に出て、あいつを、大地に両手をつかせて見せると心に誓ちかっている」

「その意気で、おん身も、勉強なされたがよい。孤雲こううんどのは、お達者かの」

「そんなことは、問わいでもよいさ……範宴を出せ、いる所を教えろ、これ以上、口をきかせると、面倒だから、このほうでものをいわすぞ」

じりつと、左に腰をひねると、腰の戒刀が、鞘さやを脱して、性善坊の胸いたへ、その白い光が真っすぐに伸びてきた。

四

二十歳はたちのころまでは太刀を帯びて侍奉公したこともある性善坊なので、刃やいばを突きつけられたからといって、にわかに顔色を失うほどの臆病者ではなかった。

「貴様は、身をもつて、範宴の楯たてになるといったな」

「はい」

「くだらぬ強がりはやせ。それよりは、俺に、範宴を会わせろ。……嫌か、嫌ならば、抜いた刀だ、ただは鞘さやにかえらぬが、覚悟か」

「……………」

「覚悟か、やい」ふた声目がかかると、弁海の手は、刃をさつとふりかぶって、睨ねめつけた。

風を割って、白い光が、相手のすがたを斜めにかけて走ったと思うと、小さい埃ほこりが上がって、性善坊のすが

たは、彼方^{かなた}の草むらへ跳んでいた。

「弁海、さほど、自分の愚鈍が口惜しいならば、心を砥^とにかけて、勉強をし直してこい。そうして、一人前の人間になれたら、師の御房に会わせてやろうし、第一、そのほうも、救われるというものだ」そこから性善坊がいうと、

「なにをっ」柿色の篠懸^{すずかけ}を躍らして、

「野郎、うごくな」と弁海は、眼をいからせて、躍りかかってきた。

「あっ——」よろめくように、性善坊は逃げだした。

「待てっ」うしろから迫る怒号を耳にしながら、彼は、坂の上まで、息もつかずに出た。そこまで登るともう広やかなる耕地の彼方^{かなた}に、奈良の丘や、東大寺の塔の先や、紅葉^{もみじ}した旧都の秋が、遙かに望まれてきたのであったが、ふと思うことには、万一このまま奈良の町へ入って、範宴が、そこに自分を待ってでもいたらはなはだまずいものになろうという懸念であった。

「いったい、弁海と師の房とは、どういう宿縁なのか。

師の房は、彼を憎んだことも、墜^{おと}し入れたこともないのに、幼少から今日まで弁海が範宴を憎悪することはまるで仇敵のようである。

日野の学舎^{まなびや}で、自分より小さい者に、学問や素行においても、絶えずおかれていたことが、幼少の魂に沁みて、口惜しくて、忘れられないのか。

糺^{ただす}の原^{はら}で、他人^{ひと}を、野火に墜^{おと}し入れようとした悪戯^{わるさ}が、かえって、自分を焼く火となって手痛い目に会った

ので、その遺恨が、今もって、消えないのか。

いや、なかなかそんなことではあるまい。要するに、成田兵衛^{ひょうえ}という者の家庭は知らないが、家庭の罪に違いない。全盛の世には、思いあがらせて育て、没落する時には、ねじけ者に作ってしまったものだろう。そして、すべての逆境が、みな自分の罪とは思えず、他人^{ひと}のせいのように考える人間が、いつとはなく、今日の弁海になつてきたのではあるまいか。

（こんな、ねじけ者に、範宴様を会わせて、怪我^{けが}でもおさせ申したらつまらぬことだ。逃げるに如くはない）性善坊は、道を横に反^そらして、眼をつぶって、どこまでも逃げた。

一

どこで行きがちだったのか、範宴は性善坊とはぐれて、奈良の杉林のあたりに、ただ一人でたたずんでいた。

そして町の方から来る人影を黄昏れのころまで克明に待ちつつ見まもっていたが、性善坊らしい者は見えなかった。

もうここまで来れば、行く先の法隆寺は近いし、先そこへさえ行っていれば、後から彼の来ることはわかっているが、

「どうしたのか」と性善坊の身も案じられ、またせっかくの連れを捨てて、先へ行く気も出なかった。

幾百年も経たような杉の梢が、亭々と、宵の空をおおっていた。空は月の冴えに、黄昏れのころよりは澄明な浅黄いろに澄んでいて、樹蔭の暗い所と、月光で昼間のような所とが、くっきりと、縞や斑になつていた。

ほう、ほう、と鹿の啼く声がある——。それに気づいて眸をこらして見ると、牝鹿や牡鹿が、月の夜を戯れつつさまよっているのだった。範宴の腰をかけた杉の根のまわりにも、一、二疋寝そべっていて、彼が手を伸べると、人馴れた眸を向けて、体をそばへ摺り寄せてくる。「おう」範宴は鹿の背を撫でながら膝へ抱きよせた。若

い牝鹿の毛なみはつやつやとして、肌は温かだった。

「鹿は、餌に飢えているらしいが。……はて、何もやる物が無い」と、範宴はつぶやいて、

「飢えているといえ、わしにも何か飢えが感じられる。

食ではない。眠りでも、安逸でもない。……この飢えた気持は、母の肌を恋うような血しおの淋しさだ。たまたま、山を下りて、俗界の灯を見、世間の享樂をのぞいたので、若い血が、うずきたがるのだろう」

彼は牝鹿の体温をおそれるように、膝から突き退けようとしたり。けれど、鹿は動こうとしなかった。

思春期の若い鹿たちは、牝鹿の声にあやつられて、追いつ追われつ夜を忘れていたのだった。範宴は、立ちあがって、もいちど、猿沢の池の方へ戻ってみた。

ここにはまた、町の男女が、月見にあるいていた。恋をささやきながら肩を並べて行く男女は、しょんぼりと、さまよっている範宴のすがたを振向いて、気の毒そうな眼を投げた。

彼らは今が幸福にちがいない。だが、やがて生活を蝕んでくる毒を呷っているに等しい。清浄身の沙門からみれば、むしろ、あわれなのはああした儂い夢の中に生きがいを感じている多くの男や女たちではあるまいか。

範宴は、そう考えて、むしろあわれと見て過ぎたが、しかし、なんととはなく自身の中に、自身をさびしがらせるものがあることは否めなかった。ただ、彼の理念と、修行とが、石のようにそれを冷たく抑えていて、うすく

笑っておられるに過ぎないのである。

ばたばたと誰か駈けてくる蹠音あしおとがして、

「お師さま！」と、呼んだ。

さがしあぐねていた性善坊しょうぜんぼうの声なのであった。

二

範宴は性善坊をさがし、性善坊は範宴をさがして、半日を徒勞に暮したが、それでもここで会えたことはまだ僥倖ぎょうこうのように思えて、

「どうなさったかと思いました」と性善坊は、師の無事を見て、欣ぶよろこのだった。

「そちこそ、木津で行きちがったにしても、余りに晩おそかったではないか」範宴にいわれて、性善坊は返辞に窮した。途中で、山伏の弁海べんかいに会い、執念深く追いかけられて、それを撒まくためにさんざん道を迂回うかいした事情を告げればいいことであるが、ああいふ呪魔じゅまみたいな人間が師の房の影身につきまといっていることを、話したがいいか、話さないほうがいいかといえ、むろん聞いて愉快になるわけのものではなし、知らさずにおけるものなら、いわないに限ると、独りで決め込んでいたので、

「いえ、私もちと、どうかしておりまして。木津の宿しゆくで、師の房に似たお方が、河内路かわちじへ曲がったと聞いたので、方角ちがいをしてしまったので」そんなふうにあいまいに紛まぎらして、さて、疲れてもいるが、月明を幸いに、これから二里とはない法隆寺のこと、夜をかけて、

歩いてしまおうではないかとなった。

それから月の白い道を、露に濡れて、法隆寺の門に辿りついたのは、夜も更けたところで、境内の西園院さいおんいんの戸をたたき、そこに、何もかもそのままに一睡いっすいして、明る日、改めて、覚運僧都かくうんそうずに対面した。

僧都そうずには、あらかじめ、叡山えいざんから書状を出しておいたことだし、慈円僧正じえんそうじょうからも口添えがあったことなので、「幾年でも、おるがよい」と覚運は、快く、留学をゆるしたうえで、

「しかし、わしもまだ、一介の学僧にすぎんのじゃから、果たして、範宴どのの求められるほどの蘊蓄うんじくがこちらにあるかないかは知らぬ」と謙遜けんそんした。

しかし、当代の碩学せきがくのうちで、華嚴けごんの真髓しんずいを体得している人といえ、この人の右に出ずるものはないということは、世の定評であり、慈円僧正も常にいわれているところである。範宴はなんとしても、この人の持っているすべてを自分に授け賜わらなければならぬと思つて、

「鈍物どんぶつの性さがにござりますが、一心仏学によって生涯し、また、生きがいを見出したいと念じまする者、何とぞ、お鞭むちを加えて、御垂示ごすいじをねがいまする」と、大床の板の間まにひれ伏して、門に入るの礼を執とった。

ふつうの学がく生しやうたちとまじって、範宴は、朝は暗い内から夜まで、勤行ごんぎやうに、労役に、勉学めんがくに、ほとんど寝る間もなく、肉体と精神をつかった。

「あれは、九歳ここのつで入壇して大戒だいがいを受けた叡山えいざんの範宴少納

言だそうだ」と、学寮の同窓たちは、うすうす彼の生い立ちを知って、あまりな労働は課さなかったが、範宴は自分からすすんで、薪も割り、水も汲んで、ここ一年の余は、性善坊とも、まったく、べつべつに起居していた。冬の朝など——まだ霜の白い地をふんで炊事場から三町もある法輪寺川へ、荷担に水桶を吊って水を汲みにゆく範宴のすがたが、よく河原に見えた。

すると、ある朝のこと、

「もしや、あなたは、範宴様ではございませんか」若い旅の娘が、そばへ来て訊ねた。

三

「はい、私はおたずねの範宴ですが……」答えながら、彼は、自分の前に立った娘に対して、どこかで見たような記憶をよび起したが、どこでも、思い当らなかった。（ああよかった）というように娘は安堵の色を見せ、同時にすこし羞恥いもしている容子。

年ごろは十七、八であろうか。しかし年よりはやや早熟た眸と、純な処女とも受けとれない肌や髪のおいを持ってゐる。それだけに、男には蠱惑で、面ざしたの姿だの、総体から見て、美人ということには、誰に見せても抗議はあるまいと思われるほどである。

「あの……実は……私は京都の栗田口の者でございますが」

「はあ」範宴は、水桶を下ろして、行きずりの旅の娘が、

どうして、自分の名を知っているのかと、不審な顔をしていた。

「一昨年の秋でございましたか、鍛冶ヶ池のそばを通りになった時、よそながら、お姿を見ておりました」

「ははあ……私をご存じですか」

「後で、あれが、肉親のお兄上様だと、朝鷹様からうかがいましたので」

「え、弟から？」

「私は、あの時、朝鷹様と一緒にいた梢という者でございますの。……父は、栗田口宗次といつて、あの近くで、刀鍛冶を生業にしています」

「……そうですか」と、驚きの眼をみはりながら、範宴は、なにか弟の身にかかわることと、安からぬ予感がしきりと胸にさわいでくるのだった。

「梢どのと仰っしゃるか。——どこかで見たような思つたが」

「私も、一昨日から、法隆寺のまわりを歩いて、幾人も、同じお年ごろの学僧様が多いので、お探しのに困りました。……というて、寺内へおたずねするのも悪いと思うて」

「なんぞ、この範宴に、御用があつておいでなされたのか」

「え……」梢は、足もとへ眼を落して、河原の冬草を、足の先でまさぐりながら、

「ご相談があるんですの」

「私に」

「あの……実は……」うす紅い血のいろが、耳の根から頬へのぼって、梢は、もじもじしていた。

「相談とは？」

「弟御さまと、私のことで」範宴は、どきっと、心臓に小石でも打つけられたような動悸をうけた。

「弟が、どうかしましたか？」

「あの……みんな私が悪いんです……」範宴の足もとへ、泣きくずれて、梢は次のようなことを、断れ断れに訴えた。

朝麿と梢とは、ちょうど、同じ年の今年が十九であるが、二年ほど前から、恋に墜ちて、ゆく末を語らっていたが、それが、世間にも知れ、男女の家庭にも知れ、ついにきびしい監視の下に隔てられてしまったので、若い二人は、謀しあわせて、無断で家を脱け出してきたというのである。

「あの弟が」と範宴は、霜を踏んだまま、凍ったように、唇の色を失って、梢のいうのを聞いていた。

四

なお仔細に事情を訊くと、弟の朝麿は、梢と逃げてくる旅の途中風邪をこじらせて、食物もすすまぬようになり、この附近の木賃旅籠に寝こんでしまって、持ち合せの小遣いは失くなるし、途方にくれているところだというのである。

「では……弟はわしに会いたいというて、おもとを使ひ

によこしたわけか」

「ええ……」梢は、打ち消れたまま、

「いっそ、二人して死んでしまおうかと、何度も、刃物を手に取ってみましたが、やはり、死ぬこともできません」と、肩をふるわせて泣き入るのであった。

無考な若い男女も、途方に暮れたことであろうが、より以上に困惑したのは範宴であった。

まず第一に思いやられるのは、髪をおろして、せっかく、老後の安住を得た養父の気持だった。次には、生来、腺病質でかばそい体の弟が、旅先で、金もなく、落着くあてもなく、これも定めて悶えているだろう容子が眼に見える心地がする。病のほども、案じられる。

「どこですか、その旅籠は」

「ここから近い、小泉の宿端れでございます。経本を商ぐ家の隣で、軒端に、きちんと板札が、打ってあります」

「見らるる通り、わしは今、朝のお勤めをしている途中、これから勤行の座にすわり、寮の日課をすまさねば、自分の体にはなれぬのじゃ。……それを了えてから訪ねてゆくほどに、おもとは、弟の看護をして下さるように」

「では、来て下さいますか」梢は、ほっとした顔いろでいった。兄は、きつと怒るであろうと弟からいわれたものともえ、範宴の返辞を聞くと、迷路に一つの灯を見たように彼女はよろこんだ。

「参ります。何でも、捨てておかれよう。きつと行くほどに、弟にも、心をつよく持てといってください」

「はい。……それだけでも、きつと、元気がつくでしょ

う」

「では……」と範宴は、学寮の朝の忙しさが思いだされて、急に、水桶を担いだした。

すべらぬように藁で縛ってある足の裏は、冷たいとも痛いとも感覚は失せているが、血がにじみ出していた。

真っ黒な天井の下に、三つの大きな土泥竈が並んでいた。その炊事場には、薪を割る者だの、櫂がけで野菜を刻んでいるもののだのが朝の一刻を、法師に似げない荒っぽい言葉や唄をうたい交わして働いていた。

範宴が、水桶を担って入ってきたのを見ると、泥竈のまえに、金火箸を持って入ってきたのを見ると、泥竈の

「範宴っ、何をしとった？」と、焼けた金火箸を下げて、彼の方へ歩いてきた。

五

「どこまで、水を汲みに行ったのだ？」学頭は、睨みつけていった。

「はい」範宴が、詫びると、

「はいじゃない」と金火箸で、胸を突いて――

「貴公、この法隆寺へ、遊びにきたのか、修行にきたのか」

「……………」

「怠惰の性を、懲らしてやる」学頭は、金火箸をふりかぶって彼の肩を打ちすえた。

範宴は炊事場の濡れている土に膝も手もついて、

「わるうございました」

「不埒なっ」庖丁を持ったり、たすきを掛けたりした同僚たちが、がやがやと寄ってきて、

「俺たちが、働いているのに、怪しからん奴」と、一緒になって罵詈する学僧もあるし、

「荒仕事に馴れないから、無理もないよ」と庇う者もあった。

だが、庇う者のことばに対して学頭はよけいに呶鳴った。

「こんなことがなんで荒仕事か、僧院に住む以上、当りまえな勤めだ。叡山あたりでは、中間僧や、堂衆をこきつかって、据膳下げ膳で朝夕すんでいるか知らんが、当寺の学生寮では、そんな情弱な生活はゆるさん。

――また、貴族の子でも誰の子でも、身分などに、仮借もせんのだ。それが覚運僧都の仰せでもあり、法隆寺の掟でもあるのだぞ。よいかつ」

「はい」

「おぼえておけ」法衣の上は何ともなかったが、打たれた肩の皮膚がやぶれたのであろう。土についている手の甲へ、袖の奥から紅い血が蚯蚓のように走ってきた。

血を見て、学頭は、口をつぐんだ。範宴は桶の水を、大瓶にあけて、また、川の方へ水を汲みに行った。

もう、梢のすがたは見えなかった。白い枯野の朝靄から、鴉が立ってゆく。

「かるい容態ならよいが……」弟の病気が、しきりと、胸に不安を告げていた。――仏陀の加護を祈りながら、

範宴は、同じ大地を、何度も踏みしめて通った。

半日の日課がすんで、やっと、自分の体になると、範宴は、性善坊にも告げず、法隆寺から一人で町の方へ出て行った。

小泉の宿^{しゆく}には、この附近の寺院を相手に商^{あきな}いしている家々や、河内^{かわち}がよいの荷駄の馬方や、樵夫^{せうこ}や、野武士などかなり聚^{しゅうごう}合して軒をならべていた。

「あ……ここか」範宴は、立ちどまって、薄暗い一軒のあばら屋をのぞきこんだ。大きな古笠が軒に掛けてあって、

「きちん」と書いてある。

何か、煮物をしていると見えて家の中は、櫓火^{ぼたび}の煙がいつぱいだった。ぎやあぎやあと、嬰兒^{あかこ}の泣く声やら、亭主のどなる声やらして、どうして、それ以外の旅人を泊^とめる席があるだろうかと疑われるような狭さであった。

六

とにかく、此宿^{ここ}には違いなので、範宴が門口に寄って尋ねると、

「ああ、病人の旅のもんならば、裏の離れにおるだあ。この露地から、裏へ廻らっしゃい」木賃^{きちん}の亭主が、煙っている家の中で呶鳴る。

「少々、その者に、会いとう存じますから、それでは、裏へ入らせていただきます」と範宴は、一応断って、教

えられた裏の方へ廻ってみた。

百姓もするのであるう、木賃旅籠^{はたご}の裏には、牛なども繋いであるし、農具だの、筵^{むしろ}だのが散らかっている。

亭主のいう離れとはどこかと思まわしていると、飼蚕^{しさん}小屋^{こや}でも繕^{つくろ}わしたのであるう、ひどい板小屋を二間に仕切って、その一方に、誰やら寝ている者がある。

(こんな所に寝ているのか) 弟の境遇は、その板小屋を見ただけでわかった。旅の空に病んでいる気持、恋のため、世間から追いつめられて、その恋をすら楽しめずに死を考えている気持——。まざまざと、眼に見せられて、彼は、胸が痛くなった。

驚かせてはならないと、しのび足に、板屋の口へ寄って、異臭のする薄暗い中を覗きながら、

「朝麿」と呼んでみた。

すると、そこに見えた薄い蒲団^{ふとん}を刎^はねのけて、寝ていた者は、むっくりと、起き上がった。

「あ……これは」と範宴は、あわてて頭を下げた。蒲団のうえに坐りこんで、こっちを見つめているのは、似ても似つかない男なのである。

年ごろ二十四、五歳の、色浅ぐろい苦み走った人物であった。鷹^{たか}のように精悍^{せいこん}な眼をして、起きるとたんに右の手には、枕元にあった革巻^{かわまき}の野太刀を膝へよせていた。野武士の着るような獣皮の袖無しを着、飲みからの酒壺^{さかづぼ}が、隅の方に押しやってある。

「失礼いたしました。人違いをして、お寝^{やす}みのところを」と詫び入ると、男は、

「なんだ、坊主か」と、口のうちでつぶやいて――

「誰をたずねてきたのだ」

「身寄りの者が、この木賃にわずろうてしていると聞きましたので」

「それじゃ、若い女を連れている小倅こせがれだろう」

「はい」

「隣だよ」無造作に、顎あどで板壁を指して、男はまた、蒲団をかぶって、ごろりと横になつてしまう。

「ありがとうございます」すぐ足を移して、隣を見ると、そこには、破れた紙ぶすまが閉めてある。

「ごめん……」と今度は念を入れて、範宴は小声におとずれた。

七

けさ、法輪寺川のほとりで会った梢こずえが、声をきくとすぐそこを開けて、

「お兄さんが見えましたよ」と、病人の枕へ、顔をよせて告げた。

「えっ……兄君が」待ちかねていたのであろう。朝麿あさまろは聞くや否や、あわてて褥しとねの外へ這いだした。

「朝麿、そのままにしていなさい、寒い風に、あたられように」

「兄君……」涙でいっぱいになった弟の眼を見ると、範宴も、熱いものが瞼まぶたを突いてくるのを覚えた。

「め……めんぼく次第もございません……。こ、こんな

ところで」

「まあよい。さ……梢こずえどの、衾ふすまのうちへ、病人を」寝るようにすすめたが、朝麿は、兄のまえにひれ伏したまま、ただ泣き濡れているのであった。範宴は、手をとつて、

「何年いっであつたか、おもとと、鍛冶かじヶ池いけのそばで会った時に、わしは、およそのことを察していた。今日のことが必要ればよいがと案じていました」

「すみませぬ」

「今さら、どういうたとて、及ばぬことだ。――それよりは、体が大切、また後々の思案が大事。とにかく、衾ふすまのうえにいるがよい、ゆるりと話そう」無理に、蒲団の中へもどして、弟にも梢にも、元気がつくように努めて微笑をもちながら先行きの覚悟のほどを聞いてみると、もちろん、恋し合つてここまで来た若い二人は、死ぬまでも、別れる気もちはないというし、またふたたび、親たちのいる都へ帰る気もないという。

そして絶えず、死への誘惑に迷っている影が、朝麿にも、梢にも、見えるのだった。

範宴は、そのあぶない瀬戸ぎわにある二人の心を見ぬいて当惑した。沙門しゃもんの身でなければ、当座の思案だけでもあるのであつたが、きびしい山門のうちへ二人を連れてゆくわけにはゆかないし、このまま、この風の洩もれる汚い板屋に寝かせておけば、弟の病勢がつるのは眼にみえているし、その病氣と、心の病氣とは、何時いつ、死を甘い夢のように追つて、敢あえない悔いを後に噛むことに立

ちいたるかもわからない。

すると、外に、その時^{あしわと}聲音がしてきた。ここの木賃の亭主であつた。無遠慮に入口を開けて、

「沙門さん、おめえは、法隆寺で勉強している学生^{がくしやう}かい？」と訊くのであつた。範宴は、自分の顔を見て問われたので、

「さようございます」と答えると、亭主は、

「そして、この病人の兄弟ということだが、ほんとかね」

「はい」

「じゃあ、木賃の代だの、薬代だの、病人の借財は、もちろん、おぬしが払ってくれるだろうな」答えぬうちに、亭主は、ふところから書きつけたものを出して、範宴の前へ置くのであつた。

八

もとより金などは持ちあわせていないけれど、弟の借財があるというならば、性善坊に相談したうえで、どうにでもしなければなるまいと、四、五日の猶^{ゆうよ}予を頼むと、亭主は首を振って、

「ふざけては困る」頑^{がんぜん}然と、怒った。

「そう幾日も幾日も、病人などを置いておかれるか。毎晩、ほかの泊^かり客もあるのに、それを断^きつていては、おいらの嬢^{かみ}や餓鬼^{がき}が干ばしになるわい」

「迷惑でございましょう」

「大迷惑じゃ。とうに、追^おん出したいのは山々だったが、

薬代のたてかえもあるで、法隆寺に身寄りがあるという言い訳をあてにして、おぬしの来るのを待っていたのじや、持ち物なり、衣類なり、抵^{かた}当において、すぐ連れて行^いつてくれい」

「ごもつともです。けれど、永いご猶^{ゆうよ}予はおねがいしませぬゆえ——」

「……………」

「両、三日でも」

「ばかをぬかせ。病人なればこそ、きょうまででも、こらえていたのじや」

「私は、僧門の身、この病人と女子^{おなご}を、山門へ連れもどるわけには参りませぬ」

「——だから、知らぬというのか、借りをふみ倒^{たふ}す気か」

「決して」

「ならば、その法衣^{ころも}を脱いで出せ、女の帯を貰おう、いや、そんなことじゃまだ足りんわ、そうだ、よい数珠^{じゆず}を持^もつておるな、水晶じゃろう、それもよこせ」

すると——いつのまにやら彼の後ろから入^いってきて、のっそりと突^つつ立^たつていた隣の野武士^{やぶさ}ていの若い男^{おとこ}が、左手^{ひだりて}に提^さげている革巻^{かわまき}の刀^{かた}の鞘^{さや}で、わめいている亭主の横顔^{よこがは}を、がつんと撲^{なぐ}つた。

「あつ、痛^{いた}つ」顔を抑えて振りかえつた亭主は、そこに立^たっている野武士の顔を仰^あいで、

「おぬしは、隣に泊^かつているお客^{きやく}じゃないか」

「さよう」

「なにをさらすのじや、なんでわしを、撲^{なぐ}つたか」

「やかましい」野武士ていの男は、遅^{たぐ}しい腕を亭主の襟がみへ伸ばしたかと思うと、蝗^{いなご}でも抓^{つま}んで捨てるように、

「おととい来い」吊り上げて、その弱腰を蹴^けとばした。

「わっ」亭主は、外へもんどり打って、霜解けのぬかるみへ突っ込んだ泥の手で、

「おれを。……畜生っ、おれをよくも」むしゃぶりついてくる手を払って、野武士ていの男は、その鷹^{たか}のように底光りのする眼でつよく睨^{にら}みつけた。

「さつきから隣でだまって聞いていれば、慈悲も情けもない云い草、もういつぺん吐^はざいてみる」

「貸しを取るのが、なぜわるい。おれたちに、飢え死にしろというのかい」

「だまれ、誰が、汝^{うぬ}らの貸しを倒すといったか。さもし奴だ、それっ、俺が立て替えておいてやるから持ってゆけ。その代りに、病人のほうも、俺のほうも、客らしく鄭^{てい}重^{ちゆう}にあつかわないと承知せぬぞ。……何をふるえているのだ、手を出せ」と野武士ていの男は、ふところから金入れを出して、まだ疑っている亭主の目先へ、金をつきつけた。

九

金を見ると木賃の亭主は、平蜘蛛^{ひらぐも}のように謝^{あやま}り入って、それからは手のひらを返すように、頼みもしない薪^{まき}を持ってきたり、粥^{かゆ}を煮ようの、薬はあるかのと、うる

さいほど、親切の安売りをする。

「……現金な奴だ」野武士ていの男は苦笑しながら梢^{こずえ}にむかつて、

「お女房。ご病人のようすはどうだな、すこしはいいか」「いつも、ありがとうございまする、おかげ様で、きょうあたりは……」梢は、範宴にむかつて、

「お兄さま。この隣のお方には、毎日何くれとなくお世話になっております。お礼を申しあげて下さいませ」といった。

範宴はそういわれぬうちから、なんと礼をいったらよいかと、胸のうちでいっぱいに感謝しているのだった。

世には奇特な人もある、弱肉強食の巷^{ちまた}とばかり世間を見るのは偏見^{へんけん}であって、こういう隣人があればこそ、修羅^{しゆら}火宅^{かたく}のなかにも楽土がある。あえぐことのみ多い生活のうちにも清泉に息づく思いができるというものであらう。

かかる人こそ、仏心を意識しないで仏心を権化^{ごんげ}している奇特人というべきである。何を職業としている者かありがたい存在といわねばならぬ。

範宴は、両手をつかえて、真ごころから礼を述べ、立て替えてくれた金子^{きんす}は、沙門^{しゃもん}の身ゆえ、すぐには調達はできないが、兩三日うちには必ず持ってきて返済するということ、男は磊落^{らいらく}に笑って、

「そんな義理がたいことには及ばないさ。奈良の茶屋町で、一晚遊べば、あれくらいな金はすぐにけし飛んでしまふ。お坊さんへ、喜捨^{きしや}いたしますよ。ははははは」

「それでは余り恐れいます。失礼ですが、ご尊名は」
「名まえかい。——名をいうほどな人間でもないが、これでも、先祖は伊豆の一族。今では浪人をしているので、生国しょうこくの名をとって、天城あまぎ四郎とよんでいる田舎武士だよ」

「では、旅先のお体でございますか。さすればなおのこ
と、路銀のうちを私どもの難儀のためにお割きくだされ
ては、ご不自由でございましょうに」

「なんの、長者ほどはないが、路銀ぐらいに、不自由は
しない。くれぐれも、心配なさるな。そう案じてくれ
ては、せつかくのこっちの好意がかえって無になる。：
：ああ思わず邪魔をした。どれ、自分の疳ねぐらに入ろうか」
そういうと、男は隣の間に入って、ふたたび顔を見せも
しない。

やがて、黄昏たそがれの寒鴉かんあの声を聞きながら、範宴も、法
隆寺へ帰って行った。そして、山門の外から本堂の御扉みとびら
を拝して、弟のために、祈念をこらした。

その夜——凍りつく筆毛ふでげを走らせて、彼は、栗田口あわたぐちの
草庵そうあんにいる養父ちちの範綱——今ではその俗名を捨てて観真かんしん
とよぶ養父へ宛てて、書くにも辛い手紙を書き、あくる
朝、駅うまやつかい使にたのんで京へ出しておいた。

—

食物だの、衣服だの、また心づいた薬などの手に入る
たびに、性善坊しょうぜんぼうは、範宴の旨をうけて、町の木賃へ運
んで行った。

「きょうは、たいへんお元気でございました。あのご容子ようす
ならば、もう明日あたりは、お床を上げられましょう」
きょうも、町から戻ってきた性善坊が、彼の部屋へ来て
告げた。

範宴の眉は、幾分か、明るくなって、

「——そうか。それではまず、弟の病気のほうは、一安
心だが……」

「後が、もう一苦勞でございますな」

「あの女子おなごとの問題はどうしたものか。……もう養父上
から、誰か迎えの者が来るころだが」

「観真様にも、さだめし、御心痛でございましょうに」
「それをいうてくれるな、わしたち兄弟は、生みの母君
もともに、今の養父にひきとられて、乱世の中を、また
貧困の中を、どれほど、ご苦勞ばかりおかけ申してきた
ことか。……思うても胸がいとうなる」

「ぜひないことでございます……」

「やや世の中がしずまって、養父も、頭つむりを落し、せめ

て老後の月日をわずらいなく自適していらっしゃると思えば、またもこうしたことが起きてくる。……朝麿の罪ばかりは責められぬ、この範宴とても、いつ、養父にご安心をおさせ申したか。わしも、もっと励まねばならぬ。弟は病身じゃ、せめてわしだけでも、養父上の長いご苦労に酬わねばならぬ。それが、亡き母君への唯一のお手向けではあるまいか」性善坊は、胸がいつぱいになって、何もいえなくなつた。範宴の肉体に赫々と燃えている火のような希望も頼もしく思いながらも、目の前の当惑には、つい弱いが嘆息が出てしまうのであつた。

「範宴どの。——都から早文が着いておるぞ。寮の執務所まで、取りにおいでなさい」庭先で、誰かいった。

さては——と範宴はすぐ書面を取ってきて、封を切つた。待ちわびていた養父からの返事である。返書が来たところを見ると、若い二人を迎える使いはよこさないものとみえる。養父はどう考えているのだろうか、どう処置をせよと仰っしゃるのだろうか。

読みくだしてゆくうちに、彼は養父の筆のあとに、養父の顔つきだの心だのがなまなまと眼にみえた。親子の恩愛というものが、惻々と胸をうってくる。

しかし養父が書中にいっている要点は、その慈愛とは反対に次のような厳格な意見であつた。

（女子の親とも相談したが、言語にたえた不所存者である。家を捨てて出た以上、かまいつけることはないと決めた。おもとも、不埒な駈落ち者などに関つておらずに、専心勉学をされたがよい。当人たちが困ろうと、飢えよ

うと自業自得であり、むしろ生きた学問となろう。親のことばより実際の社会から少し学ばせたほうが慈悲というものだ。迎への使いなどは断じて出さぬ」というのである。

二

手紙の一字一字が養父の顔つきであり声であるように範宴には感じられた。慈愛をかくして峻烈に不肖の子を叱りながらもどこやらに惻々と悩んでいる養父のところが傷ましい強さで、（かまいつけるな）といつてある。

しかし、手紙の養父のことばを、そのままに解して、自分までが厳格な態度をとつたら、弟は、どこへ行くのだろうかと思つた。おそらく、死を選ぶほかに彼の道はないのではないかと考えた。

性善坊が案じるのもそれだつた。恋というものは熱病のようなものである。健康な人間が、自分の健康な氣もちを標準にして荒療治をしようとする、若氣な男女は、春をいそぐ花のように、夢を追つて身を散らしてしまうことをなんの惜しみともしないものである。その弱い木を揺りうごかして、傍から花の散るのを急がすような心ない処置をとつては、なんにもならない。——ましてや人間の苦患に対しては絶対な慈悲をもつて接しなければならぬ。仏の御弟子である以上はなおさらのことである。

「どうしたらよいか」範宴は、その夜、眠らずに考えた。

しかし、よい解決は見つからなかった。それは、範宴自身が、仏の御弟子であり、きびしい山門の学生であるから、おのずから法城の道德だの、行動の自由にしばられて考えるからであつた。ふと、彼は、

（もし、ここに、兄弟の母がまだ生きておいでになったら、どうなさるだろうか）と考えた。

するとすぐ、範宴も、決心がついたのであつた。

（——自分が母にかわれればよい）ということであつた。

何といつても、朝麿も自分も、幼少に母を亡つていたので、母のあまい愛に飢えていることは事実である。

——何ものよりも高い養父の御恩は御恩としても、男性の親にはない母性の肌や、あまえないものや、おろかなほど優しい愛撫だのに——飢えていたことは事実であるう。

自分にすらそれを時折は感じるのであるから、あの病身な、気の弱い弟は、なおさらであるにちがいない。

そういう永年のさびしさが、青春の処女と、燃えついたのは、人間の生理や心理からいえば、当然である。けれど、人間の作つた社会の道德から、見る時には、ゆるしがたい不良児の行為として、肉親からも社会からも追われるのが当然であつて、誰をうらむこともない。

もしも今なお世に在すものとすれば、こんな時こそ、母性は身をもつても、この不良の児を救うにちがいない。あらゆるものを敵としても、母は、敢然と子のために戦うにちがいないのだ。

範宴は、朝になつてから、もいちど胸のうちでつぶや

いた。

「——そうだ、わしは、母になつて、母がいてなさるように、弟の苦境を考え、弟と共に考えてやればよい！」

三

いつものように、学生たちへ、華嚴法相の講義をすまして、法隆寺の覚運が、橋廊下をもどつてくると、

「僧都さま」と、いう声が足もとで聞えた。

覚運は、橋廊下から地上へ、そこに、手をついている範宴のすがたへ、じろりと眼を落して、

「——何じゃ」

「おねがいがございます」と、範宴は顔を上げた。

そして、覚運が眸でうなずいたのを見て、十日ほどの暇をいただいで京都へ行つてきたいという願いを申し出ると、覚運は、

「観真どのでもご病氣か」と、たずねた。

「いえ、弟のことについて」範宴は、そういう俗事に囚われて、僧都から叱咤されはしないかと、おそれながらいうと、

「行つてくるがよい」と案外な許しであつた。

そればかりでなく、覚運はまたこういった。

「おん身が、ここへ参られてからはや一年の余にもなる。わしの持つている華嚴の真髓は、すでに、あらましおん身に講じもし、また、おん身はそれを味得せられたと思う。このうへの学問は一に自己の発明にある。ちやうど、

よい機おりでもある。都のぼへ上られたならば、慈円じえん僧正にもそう申されて、次の修行の道を計られたがよからう」

そういうわれると、範宴はなお去り難い気もちがして、なおもう一年もとどまって研学したいといったが、僧都は、

「いやこれ以上、法隆寺に留学する必要はない」といった。

計らぬ時に、覚運との別れも来たのである。範宴は、あつく礼をのべて引き退ひきさがった。性善坊にも告げ、学寮の人々にもそのよしを告げて、翌る日、山門を出た。同寮の学生たちは、

「おさらば」

「元気でやり給え」

「ご精進を祈るぞ」などと、口では祝福して、見送ったが、心のうちでは、

（ここの烈しい苦学に参ってしまって、とうとう、僧都にお暇をねがい出たのだらう）と、わらっていた。

範宴は、一年余の学窓にわかれて、山門を数歩出ると、（まだなにか残してきたような気がしてならぬ）と、振りかえった。そして、

（これでいいのか）と自分の研鑽けんさんを疑った。なんとなく、自信がなかった。

そして、朝夕に艱苦かんくを汲んだ法輪寺川ともわかれて、小泉こいずみの宿場町にはいると、すぐ、頭のうちは弟のことでいっぱいになっていた。

四

朝麿あさまろは、見ちがえるほど恢復かいふくして、病床とこを離れていた。

兄と、性善坊とが、旅装たびようそいをして、ふいに訪ねてきたので、彼は梢こすえとともに、驚きの眼をみはって、

「どこへお旅立ちですか」と、もう淋しげな顔をした。性善坊が、

「いや、お師様には、もはや華嚴をご卒業あそばしたので、南都にとどまることはない、法隆寺の僧都様からゆるしが出たために、お別れを告げてきたのです」と話すと、朝麿は、

「では、叡山えいざんへ、お帰りですか」と、なお心細げにいうのであった。

「されば……帰ろうと思う」範宴はそういつて、

「ついては、おともも京都へ共に帰らぬか」

「………」

「わしが一緒に行つてあげよう。そして、ともどもに、養父ちちうへ上へお詫びをするが子の道ではないか」

「兄上。ご心配をかけて、なんともおそれ入りまする。けれど、今さら養父の家へは帰れません」

「なぜ」

「……お察しくださいます……どの顔をさげて」

「そのために、兄がついて行くではないか。何事も、まかせておきなさい」

そばで聞いていた梢は、不安な顔をして、朝麿がそこ

を立つと、寝小屋の裏へ連れて行って、

「あなたは、帰る気ですか」と男を責めていた。

「——わたしは嫌です、死んだって嫌ですよ。あなたの兄様は、きつと、お父さんのいいつけをうけて、私たちを、うまく京都へ連れ帰ってこいといわれているに違いありません」女には、いわれるし、兄には叛けない気がして、朝麿は、板ばさみになって当惑そうに俯つ向いていた。

すると、性善坊が様子を見にきて、

「梢どの、それは、あなたの邪推です。お師様には、決して、お二人の心を無視して、ただ生木を裂くようなことをなさろうというのではなく、あなたの父上にも、朝麿様の養父君にも、子としての道へもどつて、罪は詫び、希望は、おすがり申そうというお考えなのです」諄々と、説いてきかせると、梢もやっと得心したので、にわかに、京へ立つことになった。

ところで、このあいだ宿の借財をたて替えてくれた親切な相客の浪人にも一言、礼をのべて行きたいがと、隣の寝小屋をさしのぞくと、誰も人氣はない。亭主にきくと、

「はい、今朝ほどはやく、お立ちになりました。皆さまへ、よろしくといい残して——」

「や。もうお立ちになったのか。……今日は、改めてお礼を申しあげようと思うていたのに……。済まぬことであった」

範宴は、胸に借物でも残されたように、自分の怠りが

悔いられた。

五

若い男女は、先にあゆみ、範宴と性善坊とは、ずっと離れてあるいた。

冬の日ではあるが、陽がぼかぼかと枯れ草に蒸れて、山蔭は、暖かだった。

「——幸福にさせたい」範宴は、先にゆく、弟と弟の愛人のうしろ姿を見て、心から、いっぱい思った。

「のう、性善坊」

「はい」

「栗田口の養父上にお会いしたらそちも共に、おすがり申してくれ」

「はい」

「万一、どうしても、お聞き入れがなかったら青蓮院の師の君におすがりしてもと、わしは思う……。あの幸福そうなすがたを見い、あの二人は、世間も何もわすれている、ただ青春をたのしんでいる姿じゃ」

黄昏れになった。

女連れでもあるし、夜になるとめつきり寒いので、泊りを求めたが、狛田の部落を先刻すぎたので富野の荘までたどらなければ、家らしいものはない。

だが、そこも今のぼっている丘を一つ越えれば、もう西の麓には、木賃もあろうし、農家もあろうと思われる。丘の上に立つと、

「おお……」と、範宴は笠をあげた。

河内平のあちこちの野で、野焼きをしている火がひろい闇の中に美しく見えたからである。

平野の闇を焼いてゆく野火のひかりはなんとなく彼の若い心にも燃え移ってくるような気がした。

範宴は自分の行く末を照らす法の火のようにそれを見ていた。彼の頬の隈が、赤くなすられていた。黙然と、火に対して、祈祷と誓いをむすんでいた。すると――

「いや、弟御様は」と、性善坊があわてだした。

「先へ行ったのであらう」

「そうかも知れませんが」足を早めかけると、どこかで、ひいっツ――という少女の悲鳴がきこえた。

耳のせいではなかった。たしかに、梢の声なのである。そこはもう下りにかかった勾配で、真っ暗な道が、のぞきおろしに、雑木ばやしの崖へとなだれこんでいた。

「――誰か来てえッ……」ふた声めが、帛を裂くように、二人の耳を打った。

それにしても、朝麿の声はしないし、いったい、どうしたというのだろうか？

「あっ、お師さま」先へ駆けだした性善坊は、何ものかにつまずいたらしく、坂道に、もんどり打っていた。範宴も、駆けつづいて、

「どうしたのじゃ」

「朝麿様が、そこに」

「えっ、弟が」びっくりして、地上をすかしてみると、たしかに人らしいものが、顔を横にして、仆れていた。

六

その時から、原のあなたで、女の泣きさけぶ声がして、範宴と性善坊の耳のそばを糸のように流れた。

「やあっ、あの声は梢ではないか」ここには、朝麿が、なに者かにふいに棒かなんぞでうちたたかれたように気を失っているし、あなたには、けたたましく救いを呼ぶ梢の声がきこえるし、事態はただごととは思われない。兄に抱き起されて、気がつくと、朝麿は、

「梢が――梢が――」と、必死になって、道もない萱原の中へまろび入った。

遠い野火の炎が、雨もよいの、ひくい雲を紅くすすっていた。

火光に透いて、萱原の中に駆けおどって行く、十名ほどの人影が黒く見える。

「梢――」朝麿が、さけぶと、なにか罵る声が激しく聞えて、彼はまたそこで、中の一人の一撃にあってよろめいた。

性善坊と範宴は、朝麿の身を案じながら、すぐその後につけていた。

まぢかに迫ったとき、二人の瞳があざやかに見た十名ほどの人影は、うたがうまでもなく、人里といわず、山野といわず、野獣のように跳梁する野盗の群れにちがいない。

それはいいが、中に、たしかに、目立って屈強な男が、

梢のからだを横向きに抱いていた。範宴は、
「やつ、あなたは、小泉の宿^{しゆく}でお会い申した、天城四郎^{あまぎのしろう}殿ではありませんか」いうと四郎は、からからと四辺^{あたり}へ響くような声で笑った。

「そうだ、この女は小泉の木賃に宿^{やど}り合わせたときから、それと言い交わした約束があるので、もらってゆく、天城四郎とは偽^{いつわ}り、天城四郎とも、木賊四郎ともいう盗賊だ。異存があるなら、なんなりとそこでぼざいて見るがいい」範宴は、この怖ろしい魔人の声を聞くと、世の中のすべてが、暗澹^{あんたん}とわからないものになってしまった。つい、今がいままで、世にも奇特な人として、胸のうちに、あの時の感謝を忘れなかった、その人物が、仮面を剥^はいで、そういうのであるだけに、啞然^{あぜん}として、しばらくはいいかえすべき言葉もない。

七

「ははあ……。それではあなたは、真面目な職業のお方ではなく、天城の住人で、木賊四郎と呼ぶ野盗^{かしろ}の頭であつたのですか。——けれど、そういわれても、私にはまだ信じられません」範宴がいうと、四郎は、
「なにが信じられねえと？」聞き咎^{とが}めて、兇悪な眼で睨^{にら}みつけた。

「——さればです。いつぞや、小泉の宿^{しゆく}で、私や弟の難儀な場合をああして救つて下された時のありがたいあなたの姿が、今もって、私の臉^{まはた}から消え去らないので

ございます。どうあつても、あなたは善根の隣人に思われて、さような、魔界に棲^すむ人とは、考えても考えられないのでございます」

「馬鹿者！」四郎は、齒ぐきを剥^むきだして、嘲笑^{あざわら}いながら、

「あれは悪事をする者の資本^{もと}も同じで、悪党の詐術^{さじゆつ}というもの。俺という人間は、善根どころか、悪根ばかりこの社会に植え歩いている、魔界の頭領なのだ。またこの先、こんな策^てに乗らねえように、よく面^らをおぼえておけ」範宴の身をかばいながら、杖を横に構えていた性善坊は、たまりかねて、

「おのれが、人をあざむき世を毒す食わせ者であることはもう分つた。多言をつがえる要はない。ただ、その女子^{おなご}をおいて、どこなと立ち去るがいい」

「ふざけたことを申すな。この美貌の女子を手に入れるために、俺は、二十日^{はつか}あまりの日を費やし、旅籠料^{はたご}やら何やらと、沢山な資本^{もと}もかけたのだ。これからは、しばらく自分の持ち物として楽しんだうえで港の遊女へ売るなり、陸奥^{みちのく}の人買いに値をよく渡すなりして資本をとらなければあならない。なんで貴様などに、返していいものか」

「渡さぬとあれば——」

「どうする気だつ、坊主」

「こうしてやる」性善坊が、振り込む杖を、天城四郎は、
「汝^{うぬ}ら、下手^{へた}なまねをすると、地獄へ遍路^{へんろ}に行かせるぞ

よ」

「だまれっ」杖を、奪いあいながら、性善坊は、全身を瘤こぶのようにして、怒った。

「われらを、ただの僧侶と思うとちがうぞ。これにおわすおん方こそ、六条の三位さんみのりつなめ範綱朝臣の御猶子ごゆうし少納言範宴様。また、自分とてもむかしは、打物とった武家の果てじゃ」

「はははは。それほど、腕立てがしたいならば、四郎の手下にも、ずいぶん、血を見ることの好きなのが大勢いるから、まず、そこいらの男もと、噛み合ってみるがいい。——おいっ」と、後は後ろにいる八、九名の手下をかえりみて、

「この二人の坊主を、どこかその辺の木へ、裸にして、縛り付けてしまえ」と、いいつけた。

それまで唾のように眼を光らしていた男たちは、おおという声とともに、兇悪な餓狼がろうとなって、範宴と性善坊を輪のなかにつつみ、八方から、躍りかかった。

八

範宴が、止めるのもきかず、衆に向ってかかったので、性善坊は、さんざんに打ちのめされてしまった。

そして、ほとんど半死半生のすがたになった彼を、萱原かやはらの枯れ木の幹に賊たちは縛りつけて、やがて、範宴の身も、朝鷹の身も、同様に、うしろ手に縛いしめて、「ざまあみろ、いらざる腕立てをしやがって」と、凱歌がい

をあげた。

そして、野盗の手下は、当然の労銀を求めるように、性善坊のふところから、路銀を奪い取って、

「生命いのちだけは、お慈悲に、助けてやる」といった。

性善坊は、そんな目にあつても、まだ、賊に向つて罵ののることをやめなかった。

「悪魔どもめ！ 汝らは、他人の財物をうばい、他人を苦しめて、それで自分が利を得たとか、勝ったとか思っているで大間違いだぞ。そうやって、横手を打っていられるが、それらの罪業はみな、自分に回かえってくるものなのだ。おのれの天禄てんろくをおのれで奪い、おのれの肉身をおのれで苦患くげんへ追いやっているのだ。今にみろ、汝らのまえには、針の山、血の池が待っているだろう」

「あははは」野盗の手下たちは、放下師ほうかしの道化ばなしでも聞くように、おもしろがった。

「この坊主め、おれたちに向つて、子どもだましの説法していくさる。地獄があるなら、見物に行ってみたくらいなものだ」一人がいうと、また一人が、

「地獄というのは、今のてめえの身の上だ。いい加減な戯言たわごとばかりいって、愚民をだましてきた罪で、坊主はみんな、地獄に落ちるものと相場がきまっているらしい」悪口雑言を吐いて、

「お頭かしら、行きましようか」と、天城あまぎ四郎をうながした。

四郎は、梢こずえの手をひいて、

「俺は、この女と一緒に、しばらく、都の方へ行き、半年ほど町屋住いをするつもりだ。てめえたちは、勝手に、

どこへでも散らかるがいい」と、いま、性善坊のふところから奪った金に、自分の持ち合せの金を、手下たちに分配して、すたすたと、先に立ち去ってしまった。

もう反抗する力を失ってしまったのか、梢は、四郎の小脇に、片方の腕をかかえ込まれたまま、彼の赴く方へ、羊のように、従ってゆくのだった。

「あばよ」賊の乾分たちは、そういつて、性善坊や朝麿の口惜しげな顔を、揶揄しながら、夜鴉のように、おのおの、思い思いの方角へ、散り失せてしまった。

範宴は、木の幹に、縛られたまま、耳に声をきかず、口に怒りを出さず、胸にはただ仏陀の御名だけをとнаえて、じっと、眼をつむっていた。

夜半の霜がまっ白に野へ下りて月が一つ、さむ風の空に吹き研がれていた。

しゅくっ……と朝麿の泣く声だけが、ときどき、性善坊の耳のそばでした。

九

暁に近くなると、大地は霜の針を植えならべ、樹々の枝には、氷柱の剣が下がり、八寒の地獄もかくやと思えばかり、冷たい風が、手脚の先を凍らせてくる。

肉体の知覚がなくなると、範宴は自分の肉体のうちに、冬の月のような冴えた魂が無想の光にかがやいているのを見いだして、

（ありがたや、自分のような穢身のうちにも、弥陀如来

が棲みてお在す）と思った。

わが身を、かくまで尊いものに感じたのは、今夜が、初めてであった。天城四郎が、八寒地獄の氷柱の樹にこうして、自分たちを縛しめてくれたお蔭である。

範宴は、彼をうらむ気にはなれなかった。彼を救うことのできない自分の無力さの方が遙かにうらみといえばうらみであった。

なおのこと、肉親の弟をすら救うてやることのできない自分が口惜しい。

叡山に苦行し、南都に学び、あらゆる研鑽にうきみを窺っていたところで、それが単なる自分の栄達だけにすぎないならば、なんの意義があるのであろう。学問のための学問や栄達のための修行ならば、あえて僧籍に身をおいて、不自然な戒律だの法規だのにしばられずに、黄金を蓄えても同じである。武士となつて、野望のつるぎを風雲に賭しても目的はとげられるのだ。けれど仏徒の大願というものは、そんな小我を目的とするものではないはずである。衆生の救船ともなり、人生を遍照する月ともならなければならない。飄々と、雲水にあそび、悠々と春日をたのしむ隠遁僧のような境界を自分のはぞんでいるのではなかった。この骨肉争鬭の世をながめていても立つてもいられない心地がするのだ。身をもつて、この悪濁の世にうめいている人々を両の手に、しかとかかえ入れてやりたいという気持にすらなつて、そのたくましい広大な自分をつくり上げたがために、かく学び、かく苦しみ、かく悶えているのではないか。

その大願にもえている身にとっては、ひとりの野盗に對して怒る気も出ないかわりに、ひとりの弟をすら救えない自分を、範宴は、慟哭どうこくして嘆かずにはいられなかった。けれど、さらに深く考えてみると、弟はおろか、わが身というもののさえ、まだ自分で解決もできていなければ、救えてもいないのである。

（なんで、人の身をや）と範宴は、痛切に今思うのだった。

自分をすら解決し得ない自分に、自分以外の人間の解決ができるはずはない。その根本は、学問も思念も、すべてが、到らないためだというほかはない。こういう悩みをすることすら、僭越せんえつなのかも知れぬ。何よりもまず自身の解決からしとげなければならぬ。——栄達や功名の小我のためでなく、濁海の救船くせんとなって彼岸の大願へ棹さおさすために。

「おや、坊さんが、縛しばられてるぜ……」

「やれやれ、追剥おいはぎにでも会ったのか、かわいそうに」夜はいつか明けて、範宴のまわりにも、性善坊や朝麿のそばにも、旅人だの馬子まごだのが、取り巻いていた。

十

すると、旅人の群れのうちから、
「おお、おお」一人の老婆が、同情の声をあげて、そこに立っている往來の者たちに、

「おまえ方は、なんで手をつかねて、見物していなさる

のじゃ。人の災難がおもしろいのか」と、叱りつけた。

そして、すぐ自分は、範宴のそばへ寄って、

「この辺は、野伏のぶせりが多いから、悪いやつに遭あいなされたのじゃろう。オオ、オオ、オオ、体も氷のように冷つめとうなつて、さだめし、お辛いことでござったろうに」老婆の行動に刺戟されて、それまで憚はばかっていた往來の者が、われもわれもと、寄りたかつて、性善坊の縄を解いたり、朝麿をいたわったりして、ある者はまた、

「わしの家は、この丘のすぐ下じゃ。火でも焚たいて、粥かゆでも進ぜるほどに、一伴いっしょにござれ」と、いいだした。

馬を曳いている馬子はまた、

「駄賃はいらぬほどに、そこまで乗って行かつしやれ」と、朝麿へすすめて歩きだした。

「路銀を奪とられなすつたろう。これはすくないが」と、金をつつんで喜捨きしゃする人々もある。

天城四郎のことばを聞けば、この社会よのなかほど恐ろしい仮面につつまれているものはないと思えるし、こうして、うるわしい人情の人々にあえば、この世ほど温かい人情の浄土はないと思われもする。

三名は、麓ふもとの農家で、充分に体をあたため、飢えをしのぎ、あつく礼をのべて、やがて昨日きのうとかわらぬ冬の日の温かい街道へ立ち出でた。

河内かわちざかいの竜田街道の岐われまで来ると、範宴は、足をとめて、

「性善坊、わしは、少し思う仔細があつて、これから磯長しながの里さとへまわりたいと思うが……」

「ほ、石川郷の叡福寺のある？ ……」

「そうじゃ、聖徳太子と、そのおん母君、お妃、三尊の御墳がある太子廟へ詣でて、七日ほど、参籠いたしたい」

「さようでございますか。よい思い立ちとぞんじますが、朝麿様もおつれ遊ばしますか」

「いやいや、ちと、思念いたしたいこともあるゆえ、この身ひとりがこのましい。そちは、朝麿を伴うて、京都のお養父上にお目にかかり、かたがた青蓮院の師の君にもおとりなしを願うて、ひとまず弟の身を、家に帰してくれい」

「かしこまりました」

「朝麿」と、向き直って――

「おもとにも、異存はあるまいの」

「はい……」しかし、朝麿の心には、どうしても、梢のことが、不安で、悲しく、このまま自分ばかり京都へもどることは心がすまない様子であった。

「たのみますぞ」範宴は、性善坊にそういうと、やがてただ一人で河内路の方へ曲がって行った。

壁文

一

真空のような静寂と、骨のしんまで霜になりそうな寒さである。

夜も更けると、さらに生物の棲まない世界のような冱寒の気が、耳も鼻も唇もほとんど無知覚にさせてしまふ。

どこかで、先一昨日から、法華経をよむ声がもれていた。

それは今夜で、四晩になるが、夜があけても、日が暮れてきても、水のように絶え間がなく、ある時は低く、ある時にはまた高く、やむ時のない誦経であった。

「誰だろう」と、磯長の叡福寺の者は、炉のそばでうわさをしていた。

「また、ものずきな雲水だろう」と、笑う者もあるし、「廟のうちで、まさか、火などは焚いていまいな」と火の用心を案じる者もあった。

「いや、火の気はないようだ」と一人がいう。

「そうか、それならよいが……。だが、どんな男か」

「まだ、二十歳ぐらいな若い僧さ。三尊の拝殿から入って、いちばん奥の廟窟の床に、ひとりで坐りこんだまま、ものも食わずに、参籠しているのだ」――そんな話

を、だまって、眼をふさいで聞いている四十ちかい僧があった。その僧は、この寺の客とみえて、他の者から、法師、法師と敬称されて、時々、寺僧のかたまる炉ばたにみえて冗談をいったり、飄然として見えなくなったり、また、裏山から木の根瘤などを見つけてきて、小刀でなにか彫っていたり、仙味のあるような、俗人のような一向つかまえてどころのない人間のように見える男だったが、太子廟の奥に、この四日ばかり、法華経の声がもれるようになってからは、いつも、じつと、さし俯向いて、聞き入っているのであったが、今、寺僧のうわさを聞くと、なにを思いだしたか、ふいと、その部屋を出て、どこかへ、立ち去ってしまった。

今夜も、まっ白に、月が冴えていた。法師は、庫裡から草履をはいて、ぴたぴたと、静かな跣音を、そこから離れている太子廟の方へ運んで行った。

法華経の声は、近づいてくる。

石垣をあがると、廟の廻廊に、金剛獅子の常明燈が、あたりを淡く照らしていて、その大屋根を圧している敏達帝の御陵のある冬山のあたりを、千鳥の影がかすめて行った。

廻廊の下をめぐって、法師は、御墳のある廟窟の方へまわった。もうそこへゆくと、身のしまるような寒烈な氣と、神秘的闇がただよっていて、寺僧でも、それは何となく不気味だと常にいつている所である。

風雨に古びたまま、幾百年も手入れもしていない建物に、月の白い光が、扉の朽ちた四方の破れから刃のよう

に中へさしこんでいた。

法師が、そっと覗いてみると、なるほど、瑯玕みたいに白く凍えきった若者が、孤寂として、中の床にひとりで端座しているのである。そして、彼の路音も耳へは入らないらしく朗々と、法華経を誦しつづけていた。「あ……。やはり範宴少納言であった……」法師はつぶやいて、そっと、路音をしのばせながら、そのまま、寺の方へ帰って行った。

二

ここに参籠してから六日目の朝が白々と明けた。

二日め、三日めは、飢えと寒気に、肉体の苦痛がはなはだしかったが、きのうあたりからは、身心ともに痺れて生ける屍のような肉体の殻に、ただ、彼の意念の火が——生命の火だけが——赫々と求法の扉に向って燃えているのであった。

一椀の食も、一滴の湯も、喉にとおしていないのである。声はかれ、眸はかすみ、さしも意志のつよい範宴もその夕がたには、がたっと、痩せおとろえた細い手を床について、しばらく、意識もなかった様子である。

すぐ御葉山の下の鐘樓の鐘が、耳もとで鳴るように、いんいんと初更をつけわたると、範宴は、はっとわれに回って、思わず大喝に、

「南無。聖徳太子」そして、廟窟の石の扉に向い、無我の掌をかたくあわせた。

「——迷える凡愚範宴に、求通のみちを教えたまえ。この肉身、この形骸を、艱苦に打ちくだき給わんもよし。ただ、一道の光と信とを与えたまえ」思念をこらすと、落ちくぼんだ彼のひとみは、あたかも、鞆の窓のように、灼熱の光をおびて、唇は一文字にかたくむすばれて、太子の廟窟から求める声があるか、この身ここに朽ち死ぬか、不退の膝を、磐石のようにくみなおした。彼が、この古廟に詣でて、こうした思念の闘いに坐したのは、必ずしも、途中の出来ごころや偶然ではない。範宴は夙くから、聖徳太子のなしたもうた大業と御生涯とを、景慕していて、折もあらば、太子の古廟にこもつて、夢になりと、その御面影を現身にえがいてみたいと宿望にしていたのである。

若い太子は、日本文化の大祖であると共に、仏教興隆の祖でもあった。日本の仏法というものは、青年にして大智大徳の太子の手によって、初めて、皇国日本の民心に、

(汝らの心の光たれ)と点された聖業であった。

かつては、弘法大師も、この御廟に百日の参籠をして、凡愚の闇に光を求めたといいつたえられている。

凡愚のなやみ、妄闇のまよい、それは、誰でも通つてこなければならぬ道であろう。弘法大師ですらそうであった。いわんや、自分のごときをや。

範宴は、この生命力のあらんかぎりは——と祈念した。叡山で学んだところの仏学と世間の実相と自身という一個の人間と、すべてが、疑惑であり、渾然と一になりき

れない矛盾に対して、解決の光をみたいと念願するのであった。

しかし、およそ人間の体力に限りがあると共に、精神力というものにも、限度があるのであろう。夜がふけて、深々と、大気の冷澄がすべて刃のように冴えてくると範宴は、ふたたび、ぱたっと、昏倒してしまった。すると、誰か、

「範宴御房——」初めは遠くの方で呼ぶように思えていたが、

「範宴どの。少納言どの」いくたびとなく、耳のそばでくりかえされているうちに、はっとわれに回った。

紙燭を、そばにおいて、誰やら自分を抱きかかえているのであった。

三

「……お氣がつかれたか」と、その人はいう。

範宴は、自分の凍えている体を、温い両手で抱いてくれている人を、誰であろうかと、半ば、あやしみながら瞳をあげて見た。

「お……」彼は、びっくりして叫んだ。

「あなたは、叡山の竹林房静庵の御弟子、安居院の法印聖覚どのではありませんか」

「そうです」法印は微笑して、

「去年の秋ごろから、私も、すこし現状の仏法に、疑問をもちだして、ただ一人で、叡山を下りこの磯長の叡福

寺に、ずっと逗留^{とうりゅう}していたのです。……でもあなたの、剛気には驚きました。こんな、無理な修行をしては、体をこわしてしまいますぞ」

「ありがとう存じます……。じゃ私は、氣を失っていたものとみえます」

「よそながら、私が注意していたからよいが、さもなく、夜明けまで、こうしていたら、おそらく、凍死してしまっただしょう」

「いっそ死んだほうが、よかったかも知れません」

「なにをいうのです。人一倍、剛気なあなたが、自殺をのぞんでいるのですか。そんな意志のよいお方とは思わなかった」

「つい、本音を吐いて恥しく思います。しかし、いくら思念しても苦行しても、蒙^{もう}のひらき得ない凡質^{なま}が、生^{なま}なか大智をもとめてのたうちまわっているのは、自分でもたまらない苦悶^{くもん}ですし、世間にも、無用の人間です。そういう意味で、死んでも、生きていても、同じだと思うのです」範宴の痛切なことが切れると、聖覚法印は、うしろへ持つてきている食器を彼のまえに並べて、

「あたたかいうちに、粥^{かゆ}でも一口おあがりなさい。それから話しましょう」

「七日のおちかいを立てて、参籠^{さんろう}したのですから、ご好意は謝しますが、粥は頂戴いたしません」

「今夜で、その満七日ではありませんか。——もう夜半^{よなか}をすぎていますから、八日の暁^{あき}です。冷めないうちに、召上がってください、そして、力をつけてから、あなた

の必死なお気もちもうかがい、私も、話したいと思えますから……」そういわれて、範宴は、初めて、椀^{わん}を押しただいた。うすい温湯^{ぬるゆ}のような粥であつたが、食物が、胃へながれこむと、全身はにわかに、火のようなほてりを覚えてきた。

叡^{じよう}山の静^{じやう}厳^{げん}には、範宴も師事したことがあるので、その高足^{こうそく}の聖覚法印とは、常に見知っていたし、また、山の大講堂などで智弁をふるう法印の才には、ひそかに、敬慕をもっていた。

この人ならばと、範宴は、ぞんぶんに、自分のなやみも打ち明ける氣になれた。聖覚もやはり彼に似た懷疑者のひとりであつて、どうしても、叡^{けい}山の現状には、安心と決定^{けつじやう}ができないために、一時は、ちかごろ支那から帰朝^{きやう}した栄西^{えいさい}禅師のところへ走つたが、そこでも、求道^{ぐどう}の光がつかめないの、あなたこなた、漂泊^{ひやうはく}したあげくに、去年の秋から、磯^{いそ}長^{なが}に来て無為の日を送っているのであると話した。

四

「迷える者と、迷える者とが、ここで、ゆくりなくお目にかかるというのも、太子のおひきあわせというものでしょう」聖覚法印は、語りやまないで、語りゆくほど、ことばに熱をおびてきた。

「いったい、今の叡^{えい}山^{さん}の人々が、何を信念に安住^{あんじ}しているのか、私にはふしぎでならない。——僧正の位階

とか、金欄きんらんのほこりとかなら、むしろ、もっと赤裸な俗人になって、金でも、榮譽でも、気がねなく争ったがよいし、学問を競うなら、学者で立つがよいし、職業としてなら、他人ひとに、五戒ごけいだの精進しやうじん堅固などを強いるにも及ぶまい、また、強いる権能もないわけではありませんか」

範宴は、黙然とうなずいた。

「あなたは、どう思う。おもてには、静浄を装って、救世ぐせを口にしながら、山を下りれば、俗人以上に、酒色をぬすみ、事があれば、太刀薙刀なぎなたをふるって、暴力で仏法の権威を認めさせようとする。——平安期のころ、仏徒の腐敗をなげいて、伝教大師でんぎやうだいしが、叡山をひらき、あまねく日本の仏界を照らした光は、もう油がぎれてしまったのでしよう、現状の叡山は、もはや、われわれ真摯しんしな者にとつては、立命の地でもなし、安住の域いきでもありません。……で、私は、迷って出たのです、しかし実社会に接して、なまなましい現世の人たちの苦悩を見、逸楽を見、流々るるてんそう転相てんそうのあわただしさをあまりに見てしまうと、私のような智の浅いものには、魚に河が見えないように、よけいに昏迷してしまえばかりで、ほとんど、何ひとつ、把握はあくすることができないのであります」

法印の声は、切実であった。

若い範宴は、感激のあまり、思わず彼の手をにぎって、「聖しやう覚かくどの。あなたがいわゆることは、いちいち私のいおうとするところと同じです。二人は、ほとんど同じ苦悶をもって同じ迷路へさまよってきたのです」

「七日七夜の参籠で、範宴どの、何を得られたか」

「何も得ません。飢えと、寒気とだけでした。——ただ、あなたという同じ悩みをもつ人を見出して、こういう苦悶は自分のみではないということを知りました」

「私はそれが唯一のみやげです。あしたは叡福寺えいふくじを立とうと思うが、もう叡山には帰らないつもりです」

「して、これから、どこへさして行かれるか」

「あてはない……」聖覚はうつ向いて、さびしげに、「ただ、まことの師をたずねて、まことの道を探して歩く。——それが生涯果てのない道であっても……」二人の若い弥陀みだの弟子たちは、じっと、そばにある紙燭ししよくの消えかかる灯を見つめていた。

すると、更けた夜気を裂いて、どこかで、かなしげな女のさけび声ながれ、やがて、嗚咽おえつするような声にかわって、しゆくしゆくと、いつまでも、泣きつづけている——

「はて、怪しい声がする」範宴が、面おもてをあげると、聖覚法印も立ちあがって、

「どこでしょう。この霊地に、女の泣き声などがするはずはないが……」と、縁へ顔を出して、白い冬の夜を見まわした。

五

「はての……普請ふしんの経堂きやうどうの中でする声らしい。……ちよっと見てきましょう」法印は外へ出て、経堂のほうへ

出て行ったが、やがて、しばらくすると戻ってきて、
「世間には、悪い奴が絶えぬ」と義憤の眼を燃やしな
ら、範宴へいのであった。

「若い女でも誘拐かしてきたのですか」

「そうです。——行ってみると、野武士ていの男が、経
堂の柱に、ひとりの女を縛りつけ、凄文句をならべてい
ましたが、どうしても、女が素直な返辞をしないために、
腕ずくで従がわせようとしているのでした」

「この附近にも、野盗が横行するとみえますな」

「いや、どこか、他国の者らしいのです。私が、声をか
けると、賊は、よほど大胆なやつとみえて、驚きもせず、
おれは天城四郎という大盗だとみずから名乗りました」

「えっ、天城四郎ですって？」

「ごぞんじですか」

「聞いています。どこの街道へもあらわれる男で、うわ
べは柔和にみえますが、おそろしい兇暴な人間です」

「——と、私、怪我をしてはつまらないと思い、
わざとていねいに、ここは清浄な仏地であるから、ここ
で悪業をすることだけはやめてくれと頼みますと、天城
四郎はせせら笑って、さほどにいうならば、まず第一に、
醜汚な坊主どもから先に追い退けなければ、仏地を真の
清浄界とはいわれまい。坊主が、偽面をかぶって醜汚な
行いをつつんでいるのと、俺たちが素面のままでやりた
いと思うことをやるのと、どっちが、人間として正直か
——などと理窟をならべるのです。これには、私もちと
返答にこまりました」

「そして……どうしました」

「理窟はいうものの、やはり、賊にも本心には怯むもの
があるとみえ、それを捨て科白に、ふたたび、女を引っ
張って、どこへともなく立ち去りました」

「では、その女というのは、十九か、二十歳ほどの、京
都ふうの愛くるしい娘ではありませんでしたか」

「よく見ませんでしたか、天城四郎は、梢、梢と呼ん
でいたようです」

「あつ、それでは、やはり……」範宴は、弟の愛人が、
まだ弟に思慕をもちつつ、賊の四郎に反抗し、彼の強迫
と闘っている悲惨なすがたを胸にえがいて、たえられな
い不慙さを感じた。

「どの方角へ行きましたか」彼は、そういつて、立ちか
けたが、衰えている肉体は、朽ち木のようにすぐ膝を折
ってよろめいてしまうのであった。法印は、抱きささえ
て、

「賊を追ってゆくおつもりですか。およしなさい、一人
の女を救うために、貴重な体で追いかけても、風のよう
な賊の足に、追いつくものではありません」

「ああ……」涙こそながさないが、範宴は全身の悲し
みを投げだして、氷のような大床へ俯つ伏してしまった。

自分の無力が自分を責めるのであった。弟はあれで救
われたといえようか。弟の女は、どうなってゆくのだろ
うか。裁く力のない者に裁かれた者の不幸さが思いやら
れる。

「——もうやがて夜が明けましょう。範宴どの、またあ

すの朝お目にかかります」燈りだけをそこにおいて、聖
覺法印は、木履の音をさせて、ことごとと立ち去った。

六

遠くで、夜明けの鶏の声がする――

しかし、顔をあげてみると、まだ外は暗いのであった。
ジ、ジ、ジ……と燈りの蠟涙が泣くように消えかかる。
その明滅する燈火の光が、廟の古びた壁にゆらゆら
うごいた。

「？ ……」夜明けまでのもう一刻をと、しずかに瞑想
していた範宴は、ふと、太子の御靈廟にちかい一方の古
壁に何やら無数の蜘蛛のようにうごめいているものをみ
いだして眸を吸いつけられていた。

燈灯が消えかかるので、彼はそつと掌で風をかこいな
がら、その壁ぎわまで進んで行った。

見ると、誰が書いたのか、年経た墨のあとが、壁の古
びと共に、消えのこっていて、じつと、眼をこらせば、
かすかにこう読まれる――

日域は大乗相応の地たり

あきらかに聴け

諦かに聴け、

我が教令を

汝の命根まさに十余歳なるべし

命終りて

速かに浄土に入らん

善信、善信、真の菩薩
幾たびか口のうちに範宴はくりかえして読んだ。そし
て、

（誰の筆か？）と考えた。

弘法大師や、また自分のような一学僧や、そのほかに
も、幾多の迷える雲水が、この廟に参籠したにちがい
ない。それらのうちの何者かが、書き残して行った字句
にはちがいない。

けれど、範宴のところに、その数行の文字は、決して
偶然なものには思えなかった。七日七夜、彼が死に身に
なつて向つていた聖徳太子の御声でなくてなんであろ
う。自己の必死な思念に答えてくれた靈示にちがいない
と思つた。闇夜に一つの光を見たように、範宴は、文字
へ眸を焦きつけた。わけても、

汝の命根まさに十余歳なるべし

とは明らかに自分のことではないか。指をくれば、か
ぞえ年二十一歳の自分にちようどその辞句は当てはま
る。しかも、

命終りて――

とは何の靈示ぞ。迷愚の十余歳は、こよいかぎり死ん
だ身ぞという太子のおことばか。

「――日域は大乗相応の地たり……日域は大乗相応の地
たり。ああ、この日の本に、われを生ましめたもうとい
う御使命の声が胸にこたえる。そうだ……自分はゆうべ、
法印へ向つて、死の気もちがあることまで打ち明けた。
太子は、死せよと仰っしゃるのだ。そして迷愚の殻を脱

いだ誕生^{たんじょうしん}身に立ち回^{かえ}って、わが教令を、この日の本に布
けよと自分へ仰^{おほ}っしゃるのだ」
もう、戸外^{そと}には、小禽^{ことり}がチチと啼^ないていた。紙燭^{しろう}の蠟
がとぼりきれると共に、朝は白々とあけて、御葉山^{みはやま}の丘
の針葉樹に、若い太陽^ひの光がチカチカと耀^{かがや}いていた。

春のけはい

一

この世に——この日の本^{もと}に生れてきた自分の使命が何
であるかを、範宴^{はんえん}は自覚した。

同時に、

（自分は二十歳にして死んだものである）という觀念の
下から新しく生れかわった。

この二つの信念は、磯長^{しなが}の廟^{びやう}に籠った賜物^{たまもの}であつた。
聖徳太子からささやかれた靈示であると彼は感激にみち
て思う。けれど、

（では一体、自分は何をもつて、その重い使命を果すか）
となると、彼はまた混沌^{こんとん}たる迷いの子になった。

太子廟^{びやう}の壁文^{へきぶん}には、

——日域^{にちいき}は大乗相応の地、あきらかに聴けわが教令を。
とあつた。けれどもそれは暗示であり、提案である、
「わが教令を聴け」といわれても、太子のふまれた足蹟^{そくせき}
はあまりに偉大であり、あまりに模糊^{もこ}としている。

「——聴く耳がなければ」と範宴は新しくもだえた。

「聴ける耳がほしい」迷える彼は、それからいずことも
なく二年のあいだをさまよいあるいた。

東大寺の光円を訪れ、唐招提寺^{とうしやうだいじ}をたたき、そのほか、
法燈のあるところといえは、嶮^{けわ}しさに怯^{ひる}まず、遠きに倦^う

まず、雨や風に打たれても尋ねて行つた。

けれど、彼の求める真理の鍵はなかった。太子がひろめられた教令のかたちはあつても、いつか、真理のたましいはどこにも失われていた。堂塔伽藍はぬけ殻であつた。ひとり叡山ばかりがそうなのではない。

求めるものが求められないのみか、さまよえば、さまようほど、彼の迷いは濃くなつてゆく。

二年あまりを、そうして、あてもなく疲れあるいた彼は、ふいに、青蓮院の門前にあらわれて、取次を乞い、見ちがえるほど痩せおとろえた姿で、師の慈円僧正のまえに坐つた。慈円は、ひと目みて、

「どうしたのじゃ」と驚いていった。

範宴は、あまりに消息を欠いたので、師の房を見舞うつもりで来たのであるが、その師の房から、先に見舞われて、

「べつに、自分は変りもございませんが……」と答えた。

彼のつよい精神力は、ほんとに、自分の肉体のおとろえなどは、少しも気にしていなかったのである。

「かわりはないというが、ひどく痩せたではないか。第一、顔の色つやも悪い。叡山にいたところのおもかげもありはしない」

「そう仰せられてみますと、あるいはそうかもしれませぬ。どうか、一日もはやく生涯の——いや人類永劫の安心と大決定をつかみたいと願ひして、すこし修行に肉体をいじめましたから……」

「そうであろう」慈円は、傷ましいものを見るように、

彼の尖つた肩や膝ぶしを見まもるのであつた。稚子髪の時代の十八公磨が、いつまでも、慈円の臉にはのこつていて、そのころの何も思わない艶やかな頬と今の範宴とを心のうちで思いくらべているのであつた。

「おん身は今、焦心つてゐる。火のように身を焦いて真理をさがしているのであらう。それはよいが、体をこわしてはなるまいが」と、慈円は愛し子を諭すようにいつた。

二

師にお目にかかったら——と幾つもの疑問を宿題にして範宴は胸に蓄めていたが、あまりに、彼が憔悴しているさまを見たせいか、慈円僧正は、彼が、なにを問うても、

「まあ、養生をせい」というのみで、法問に対しては、答えてくれなかった。

実際、そのころの範宴は、食物すらいつとも味を知らずに噛むせいか、すこしも胃に慾がなく、梅花を見れば、ただ白いと見、小禽の声を聴けば、ただ何か啼いてゐると知るだけであつた。

それが、青蓮院へ辿りついて、師のやさしいことばにふれ、ふと安息を感じたせいか、二年余りのつかれが一時に出てきたように、病人のように、日ごとに頬の肉がこけ、眼はくぼんで、眸の光ばかりがつよくなつてきた。

範宴自身が感じているより幾層倍も、慈円のほうが、案じているらしくみえた。

「どうじゃ範宴、きょうは、わしに尾いてこないか」陽が暖かくて、梅花の薫ばしい日であった。庭さきでも歩うように、慈円はかくく彼にすすめる。

「どちらへお出ましますか」

「五条まで」

「お供いたしましょう」何気なく、範宴は従いて行ったのである。

もとより仰山な奥など好まれる人ではなかった。というて、あまり往来の者に顔をみられたり、礼をされるのもうるさいらしく、慈円は、白紬の法師頭巾をふかくかぶって、汚い木履をぼくぼくと鳴らしてゆくのである。

五条とはいわれたが、何しにとは訊かなかったので、範宴は、師の君はいったいどこへゆくのかと疑っている、やがて、五条の西洞院までくると、この界限では第一の構えに見える宏壮な門のうちへ入って行った。

範宴は、はつと思つた。

「ここは、月輪関白どのの別荘ではないか」と足をとめて見まわしていると、

「範宴、はようこい」と、慈円はふり向いて、中門のまえから手招きをした。

正面の車寄には、眩ゆいような輦が横についていた。慈円は、そこへはかからずに中門を勝手にあけ、ひろい坪のうちをあるいて東の屋の廻廊へだまって上がってゆく。

（よろしいのでございますか）範宴は訊こうと思ったが、関白どののは、師の君の実兄である。なんの他人行儀もない間からであるし、ことには、骨肉であつても、風雅の交わりにとどめているおん仲でもあるから、いつもこうなのであらうと思つて、彼もまた無言のまま上がつて行った。

奥まった寢殿には、催馬楽の笛や笙が遠く鳴っていた。時折、女房たちの笑いさざめく声が、いかにも、春の日らしくのどかにもれてくる。

「きょうは、表の侍たちも見えぬの。たれぞ、出てこぬか。客人が見えてあるぞ」慈円は、中庭の橋廊下へ向いながら、手をたたいた。

三

小侍が走ってきて、

「あつ、青蓮院様でいらつしやいますか」と、平伏した。慈円は、もう橋廊下の半ばをこえながら、

「お客人にはあるまいな」

「はい、お内方ばかりでございます」答えつつ、小侍は、腰を屈めながら慈円の前を、つつと抜けて、

「——青蓮院さまがお越し遊ばしました」渡殿の奥へこう告げると、舞曲の樂が急にやんで、それから、華やかな女たちの笑い声だの、衣ずれの音などが、楚々とみだれて、

「おう、青蓮院どのか」月輪兼実がもうそこに立っている。

る。

兼実は、手に、横笛を持っていた。それをながめて慈円が、

「おあそびか、いつも、賑わしいことのう」と、微笑しながら、兼実や、侍たちに、伴われてゆく。

漆と、箔と、砂子と、うんげん縁の畳と、すべてが、庶民階級の家には見馴れないものばかりで、焚きにおう名木のかおりが、豪奢に鼻をむせさせてくるし、飼う鶯の啼くねがどこかでしきりとする。

しかし、その十畳ほどなうんげん縁のたたみの間には、今はいって来た客と主のほか一人の人も見えないのである。ただ、扇だの、鼓だの、絃だの、胡弓だの、また笙のそばに濃むらさきの頭巾布だの、仮面だのが、秩序なく取り落してあって、それらの在りどころに坐っていた人々は、風で持ってゆかれてしまったように消えうせていた。

「——なんじゃ、誰も見えんではないか」慈円がいぶかると、兼実は、

「はははは——。お身が参られたので、恥かしがって、みんなかくれたのじゃ」

「なにも、かくれいでもよいに」

「きようは、姫の誕生日とあって、何がなして遊ぼうぞと、舎人の女房たちをかたろうて、管絃のまねごとしたり、猿楽などを道化っていたので、むずかしい僧門のお客と聞いて、あわてて皆失せたらしい」

「女房たちは、どうして、僧を嫌うかのう」

「いや、僧が女房たちを、忌むのでござろう。女人は禁戒のはずではないか」

「というて、同じ人ではないか」

「ははは。ただ、けむたい気がするのじゃろ」

「そうけむたがらずに、呼ばれい、呼ばれい、わしも共に笛吹こう」

慈円が、笛をふこうというのと、唐織の布を垂れた一方の几帳が揺れて、そのかげに、裳だけを重ね合って潜んでいた幾人も女房たちが、こらえきれなくなったように、一人がくすりと洩らすと、それはずみに、いちどに、

「ホ、ホ、ホ、ホ」

「ホホホ……」と笑いくずれ、さらに、嬉々としていちだんたかく笑った十三、四歳かと見えるひとりの姫が、几帳の横から、

「ああ、おかしや」と、お腹を抑えながら、まだ笑いやまないで姿を見せた。

つづいて、侍女だの、乳人だのが、後から後からと、幾人もそこから出てきた。

四

「姫、ごあいさつをせぬか、叔父さまに——」

兼実がいうと、まだどっかこうあどけない姫は、笑ってばかりいて、

「後で」と、女房たちの後ろにかくれた。

慈円には姪にあたる姫であつて、兼実にとっては、この世にまたとなき一人息女の玉日姫である。

「玉日——」慈円は呼んで、

「あいさつは、あずけておこうほどに、猿楽の真似を一つ見せい」すると、また、玉日も、女房たちも、何かおかしいのか、いよいよ笑つて、返辞をしない。

「せっかく、面白う遊戯していたに、この慈円が来たために、やめさせては悪い。舞わねば、わしは帰るほかあるまい」

すると、玉日は、父のそばへ小走りに寄つてきて、その膝に甘えながら、

「叔父さまを、帰しては嫌です」

「それでは、管絃を始めたがよい」

「叔父さまも、なされば——」

「するともよ」慈円は、わざと興めいて、

「わしは、歌を朗詠しよう」

「ほんとに？」姫は、念を押して、女房たちへ向いながら、

「叔父さまが、朗詠をあそばすと仰っしゃった。そなた達も、聞いていらっしゃい」

「はい、はい、僧正さまのお謡など、めったにはうかがえませぬから、ちゃんと、聞いておりまする」

「そのかわりに、姫も、舞うのじゃぞ」

「いや」玉日は、慈円のうしろをちらと見た。そこに、青白い顔をして梅の幹のように痩せてはいるが凜として

ひとりの青年がさっきからひかえている、その範宴をながめて、はにかむのであった。慈円は気がついて、

「そうそう、姫はまだこのお人を知るまい」

「……」玉日は、あどけなく、うなずいて見せた。父の兼実が、

「叔父さまの御弟子で、範宴少納言という秀才じゃ。そなたがまだ、乳人のふところに抱かれて青蓮院へ詣でたころには、たしか、範宴も愛くるしい稚子僧でいたはずじゃが、どちらもおぼえてはいまい」

「そんな遠い幼子のころのことなど、覚えてはいるはずはありませんわ」

「だから、恥らうことはないのじゃ」

「恥らつてなどおりません」姫も、いつか、馴れていう。

「じゃあ、舞うて見せい」

「舞うのは嫌、胡弓か、箏なら弾いてもよいけれど」

「それもよからう」

「叔父さま、謡うんですよ、きつと」

「おう、謡うとも」慈円が、まじめくさつて、胸をのばすと、兼実も、女房たちも、笑いをこらえている。

範宴は、ほほ笑みもせず、黙然としたきりで、澄んだ眸をうごかしもしない。

五

そこへ、侍女が、菓子を運んできて、慈円のまえと、範宴のまえにおいた。

慈円は、その菓子をつたべ、白湯にのどをうるおして、

「えへん」と咳ばらいした。

姫も、女房たちも、おのおの、楽器をもって、待っていたが、いつまでも慈円が謡わないので、

「いやな叔父さま」と、姫はすこしむずかかって、

「はやくお謡いあそばせよ」あどけなく、鈴のような眼をして、玉日姫が睨まねをすると、慈円はもう素直に歌っていた。

西寺の、西寺の

老い鼠、若鼠

おん裳喰んず

袈裟喰んず

法師に申せ

いなとよ、師に申せ

歌い終るとすぐ、

「兄上、ちと、話したいことがあるが」と、兼実へいった。

「では、あちらで」と兼実は、慈円と共に、そこを立つて、別室へ行ってしまった。

姫は、つまらなそうな顔をして、二人の後を追って行ったが、父に何かいわれて、もどってきた。

乳入や女房たちは、機嫌をそこねないようにと、

「さあ、お姫さま、もう、誰もいませんから、また、猿楽あそびか、鬼ごとあそびいたしましょう」

「でも……」と、玉日は顔を振った。

範宴が、片隅に、ぽつねんと取り残されていた。女房たちのうちから、一人が、側へ寄って、

「お弟子さま。あなたも、お入りなさいませ」

「は」

「鬼ごとを、いたしましょう」

「はい……」範宴は、答えて、窮していた。

「お姫さまが、おむずかりになると、困りますから、おめいわくでしょうが」と手を取った。そして、

「お姫さま、この御房が、いちばん先に、鬼になつてくださるそうですから、よいでしょう」玉日は、貝のような白い顎をひいて、にこりとうなずいた。

いうがごとく、迷惑至極なことであつたが、拒むまもなく、ひとりの女房が、むらさきの布をもって、範宴のうしろに廻り、眼かくしをしてしまった。

ばたばたと、衣ずれが、四方にわかれて、みんなどこかへ隠れたらしい。時々、

東寺の鬼は

何さがす――

と歌いつつ、手拍子をならした。

範宴は、つま先でさぐりながら、壁や、柱をなであつて、そしてふと、眼かくしをされた自分の現身が、自分の今の心をそのままあらわしているような気がして、かなしい皮肉にうたれていた。

六

くすくすと、そこで忍びわらいがする。

それを目あてに、範宴は手さぐりをしては、室内をさまよった。

そして、几帳きちようの蔭にかくれていた人をとらえて、「つかまえました」と、目かくしをとった。それは、玉日姫であった。姫は、

「あら……」と困った顔をし、範宴は、何かはつとして、捕えていた手を放した。

「さあ、こんどは、お姫さまが鬼にならなければいけません」と、乳人や女房たちは、彼女の顔をむらさきの布きれで縛ろうとすると、

「嫌っ」と姫は、うぐいすのように、縁へ、逃げてしまった。出あいがしらに小侍こむすひが、

「範宴どの、青蓮院しょうれんいんさまが、お帰りでございますぞ」と告げた。範宴はほつとして、

「あ。おもどりですか」人々へ、あいさつをして、帰りにかけると、姫は、急に、さびしそうに、範宴のうしろ姿へ、

「また、おいで遊ばせ」といった。振向いて、範宴は、「はい、ありがとうございます」

しかし——彼は何か重くるしいものの中から遁のがれるような心地であった。こういう豪華な大宮人の生活に触れることは夢のように遠い幼少のころの記憶にかすかにあ

るだけであって、九歳の時からもう十年以上というものの、いつのまにか、僧門の枯淡と寂寞せきばくが身に沁みこんで、かかる絢爛けんらんの空気は、そこにいるだにもたえない気がするのであった。

慈円はもう木履はきを穿はいて、丁子ちようじの花のおう前栽ぜんざいをあるいていた。

供をして、外へ出てから、範宴はこういつて慈円にたずねた。

「お師さまは、叡山えいざんにいれば、叡山の人となり、青蓮院にいらっしゃれば、青蓮院の人となり、俗家へいらっしゃれば、俗家の人となる。女房たちや、お子たちの中へまじっても、また、それにうち解とけているご様子です。よく、あんな謠うたなど平氣におうたいになれますな」すると、慈円はこういった。

「そうなたは、このごろじゃよ。——つまり、いるところに楽しむという境界きょうがいにやつと心がおけてきたのじや」

「——いるところに楽しむ。……」

範宴は、口のうちで、おうむ返しにつぶやきながら考えこんだ。慈円はまた、

「だが、おもとなどは、そういう逃避を見つけてはいけない。わしなどは、いわゆる和歌詠うたよみの風流僧にとどまるのだから、そうした心境こころに、小さい安住を見つけているのじゃ。やはり、おもとの今のもたえのほうが尊い——」

「でも、私は、真っ暗でございます」

「まいちど、叡山へのぼるがよい。そして、あせらず、逃避せず、そして無明をあゆむことじゃ。歩むだけは歩まねば、彼岸にはいたるまいよ」
どこかの築地の紅梅が、風ともなく春のけはいを仄かに陽なたの道に香わせていた。

七

青蓮院の門が見えた。その門を潜る時、慈円はまた、ことばをくりかえして、

「まいちど叡山へもどったがよいぞ」と、いった。

「はい」範宴はそう答えるまでに自分でも心を決めていたらしく、

「明日、お暇をいたしまする」

「うむ……」慈円はうなずいて、木履の音を房のほうへ運んで行った。すると、房の式台の下にかがまって、手をついている出迎えの若僧があった。

慈円は、一瞥して、ずっと奥へはいつてしまったが、

つづいて範宴が上がりうとすると、若僧はふいに彼の法衣の袂をつかんで、

「兄上」と、呼んだ。

思いがけないことであつた。それは性善坊と共に、先年、都に帰った弟の朝麿なのである。

常々、心がかかりになつていたことでもあるし、この青蓮院へついてもまっ先にその後の消息をたずねたいと思つていたのであるが、まさか、髪を剃ろして、ここに

いるとは思わなかつたし、師の慈円も、そんなことは少しも話に出さなかつたので、彼は驚きの眼をみはつたま、

「おお……」とはいいいながらも、しばらく、弟の変つた姿に茫然としていた。

朝麿はまた、兄の痩せ尖つた顔に、眼を曇らせながら、
「——」とこでお目にかかるも面目ない気がいたしますが、ご覧のとおり、ただ今では、僧正のお得度をうけて、名も、尋有と改めております。……どうか、その後のことは、ご安心くださいますように」と、さしうつむいていった。

「そうか」範宴は、大きな息をついて、うなずいた。それで何か弟の安住が決まつたように心がやすらぐと共に、もういつそう深刻な弟の気もちを察しているのでもあつた。

「お養父君も、ご得心ですか？」

「わたくしのすべての罪をおゆるしくださいまして、今では、兄上と共に、仏の一弟子として、修行いたしております」

「それはよかった……さだめしお養父君もご安心なされたであろう。おもとも、発心いたしたうえは、懸命に、勉められい。精進一途におのれを研いでいるうちには、必ず、仏天のおめぐみがあるう。惑わず、疑わずに……」

範宴は弟にむかつて、そう諭したが、自分でも信念のない声だと思つた。しかし、尋有は素直であつた。兄のことばを身に沁み受けて、

「はい、きっと、懸命に修行いたしまする」と、懺悔の
いろをあらわしているのであった。

あくる朝、範宴は、叡山の道をさして、飄然と門を
出た。尋有の顔が、いつまでも、青蓮院の門のそばに立
って見送っていた。

どこかで、やぶ鶯のささ鳴きが、風のやむたびに聞
えていた。

古いもの新しいもの

—

「範宴が山へもどってきた——」叡山の人々のあいだに、
それは大きな衝動であった。

彼らの頭には、範宴という人物が、いつのまにか大き
な存在になっていた。自分たちに利害があるないにか
わらず、範宴のうごきがたえず気がかりであった。

それというのも、この山の人々の頭には、十歳にみた
ない少年僧であった時から、授戒登壇をゆるされて、そ
の後も、群をぬいて学識を研いてきた範宴というものが、
近ごろになって何となく自分たちの脅威に感じられてき
たからであった。

「一乗院が帰山したというが、いつごろじゃ」

「もう、十日ほど前にもなろう、例の性善坊は、それ
よりもずっと前に戻っていたが、範宴のすがたが見えた
は、ついこのごろらしい」

「ちょうど、三年ぶりの」

「そうさ。範宴が下山したのは、先一昨年の冬だったから
……」

「だいぶ修行もつんだであらう」

「なあに、奈良は女の都だ、若い範宴が何を修行してき
たかわかるのか」

「それは、貴僧たちのことだ。範宴がおそろしい信念で勉強しているということは、いつか山へ来た宇治の客僧からも聞いたし、麓でもだいぶうわさが高い」一人が口をきわめて範宴の学才とその後の真摯な態度を賞めたたえると、怠惰な者の常として、かるい嫉妬をたたえた顔がちよつと白けてみえた。

「その範宴が、明日から横川の禿谷で、講義をひらくということだが——」と、思いだしたようにいうと、
「そうそう、小止観と、往生要集を講義するそうだが、まだ二十二、三の若年者が、山の大徳や碩学をまえにおいて、どんなことをしゃべるか、聞きものだて」

「碩学たちも意地がわるい、ぜひにと、懇望しておいて、実は、あげ足をとって、つツ込もうという肚じゃないかな？」

「そうかもしれん。いや、そうなるとおもしろいが」

惰眠の耳もとへ鐘をつかれたように、人々は、範宴を嫉妬した。

禿谷には、その翌日、一山の人々が踵をついでぞろぞろと群れてきた。講堂は立錐の余地もなく人で埋った。若い学僧がむろん大部分であったが、中には、一院の主も、一方の雄僧も見えて、白い眉毛をしかめていた。

やがて、講壇のむしろに、一人の青年が法衣をさばいて坐った。色の青じろい肩の尖った姿を、人々はふと見ちがえて、

「ほ……あれが範宴か」と、その変りように思わず眼をみはった。

「瘦せたのう」

「眼ばかりがするどいではないか」

「病氣でもしたとみえる」

聴座の人々のあいだに、そんな囁きがこそそなわれた。しかし、範宴の唇だけは誰よりも紅かった。そして一礼すると、その唇をひらいて、おもむろに小止観を講義して行つた。

二

その日の範宴の講義は、あくまで範宴自身の苦悩から生れた独自の新解釈の信念に基づいたものであって、従来の型にばかり囚われた仏法のための仏法であつたり、学問のための学問であつたりするものとは、大いに趣が変つていた。

従つて、今までの碩学や大徳の説いた教えに養われてきた人々には、耳馴れない範宴の講義が、いちいち異端者の声のように聞えてならなかったし、新しい学説を取つて、若い範宴の銜学だと思ふ者が多かつた。

「ふふん……」という態度なのである。中には明らかに反感を示して、

「若いものが、すこし遊学でもしてくると、あれだから困るのじゃよ」と、嘲むようにいう長老もあつた。

ただ、終始、熱心に聞いていたのは、権智房ひとりであつた。権智房は、青蓮院の慈円僧正から、きょうの講義の首尾を案じて、麓からわざわざ様子を見によこ

した僧である。

それと、もうひとり、どこの房に僧籍をおいているのかわからないが、おそろしい武骨な逞しい体軀をもった法師が、最も前の方に坐りこんで、睨むような眼ざしで、範宴の講義が終るまで身うごきもせず聞き入っていたのが目立っていた。

長い日も暮れて、禿^{かむろだに}谷の講堂にも霧のようなものが流れこんできた。講堂の三方から壁のように見える山の巖^{ひだ}には、たそがれの陰影が紫ばんで陽は春^{うす}きかけている。

範宴は、およそ半日にわたる講義を閉じて、

「短い一日では、到底、小止観の真髓^{しんずい}まで、お話はできかねる。きょうは、法筵^{ほうえん}を閉じて、また明日^{あす}、究めたいと思います」礼をして、壇を下りた。

大勢のなかには、彼の新しい解義に共鳴したものも何人かあったとみえて、

「範宴御房！ 夜に入っても、苦しゅうない。ねがわくは、小止観の結論まで、講じていただきたいが」という者もあるし、また、

「きょうのお説は、われらが今まで聴^{ちやうもん}聞いたしてきた先覚の解釈とは、はなはだ異なっている。われわれ後輩のものは、従来の説を信じていいか、御房の学説に拠^よつていいか、迷わざるを得ません」と訴える人々もあるし、「学問には、長老や先覚にも、遠慮はいらぬはずだ。どうか、もっと話してもらいたい。堂衆たち！ 明りを点^つけろ」

立ちさわぐものもあったが、範宴は、もう席を去って、いかにもつかれたような面もちを、夕方の山影に向けながら、縁に立って、呼吸をしていた。

すると、そこへもまた、若い学徒がすぐ行って、彼を取り巻きながら、

「きょうのご講義のうちに、ちと腑^ふに落ちない所があるのですが」とか、

「あすこのおことばは、いかなる意味か、とくともう一度、ご説明をねがいたい」とかいつて、容易に、彼を離さなかった。

席をあらためて、範宴は、その人々の質疑へ、いちいち流れるような回答を与えていたが、そのうちに、互いの顔が見えないほど、講堂のうちとはとつぷりと暮れてしまった。

三

性善坊が迎えにきていた。

「お師さま、あまり遅くならぬうち——」そばへ寄って促^{うなが}した。

それを機^{しお}に範宴は人々の群れを抜けて講堂の外へでた。夜の大気が冷^ひんやりと山の威厳を感じさせる。

「お待ち下さいませ」性善坊は、松明^{たいまつ}をともし、彼のあゆむ先へ立って明りをかざした。

松明は、焰^{ほのお}よりも多く、墨のような煙を吐いてゆく。明滅する山の道は浮きあがって眼に迫ってきたり、眼か

ら消えて谷のように暗くなったりする。

「^{がけみち}峯道にかかります、なるべく、左の方へ寄っておあるきなさいませ」そう注意しながら——「お師さま」と、性善坊は改まっていった。

「きょうのご講義は、わたくしがよそながら、聴いておりましたも、胸のおどるほど、ありがたいお教えと存じましたが、そこでささやく声のうちには、とかく嫉^{ねた}みや、反感も多かったようでございます。やはり、あまり真情に仰^{おほ}っしゃるのは、かえって、ご一身のおためによくないのではないかと案じられてなりません」

「真情にいうて悪いとすると、自分の信念は語れぬことになる」

「郷^{ごう}に入^いっては、郷にしたがえと申します。やはり叡^{えい}山には叡^{えい}山の伝統もあり、ここの法師たちの気風だの、学風だのというものもございますから……」

「それに順^{すむ}応^{おう}せいというのか」

「ご気性^{そむ}には反^{そむ}きましうが」

「ここの人々の氣にいるようなことを説いて、それをもつて足れりとするくらいなら、範^{はん}宴は何をか今日までの苦しみをしようか。たとえ、嫉^{しっし}視^し、迫害、排撃、あらゆるものがこの一身にあつまろうとも、範^{はん}宴が講堂に立つからには御^み仏^{ほとけ}を偽^ぎ瞞^{まん}の衣^{きぬ}につつまような業^{わざ}はできぬ」いつにないつよい語氣であった。性善坊は、その当然なことを知っているだけに、後のことが出なかつた。

右手の闇の下には、横川の流れが、どうどうと、闇の底に鳴っていた。松^{たいまつ}明^{めい}の火が、時々、螢^{ほたる}みたいな粉に

なつて谷へ飛んだ。

「^{がけみち}峯道がきれると、ややひろい、平地^{ひらち}へ出た。一乗院までは、もう一つの峰をめぐらなければならぬ。しかし、そこに立つと、遙かに京都の灯がちらちらと見え、あざぎ色の星空がひらけて足もとはずっと明るくなつた。

「待てっ！」突然、草むらの中から、誰かそう呶鳴^{なうめい}ったものがある。範^{はん}宴の眼にも、性善坊の眼にも、あきらかに黒い人影が五つ六つそこから躍り出したのが見えた。

「誰だっ」性善坊は、本能的に、範^{はん}宴の身をかばつた。ばらばらとあつまってきた五、六人の法師たちは、たしかに昼間、講堂の聴衆の中にいた者にちがひなかつた。棒のような物を引っさげているものもあるし、剣をつかんでいるものもあつた。

「異端者め！」と一人がいうのである。そして、いっせいに、

「若輩^{わくはい}のくせにして、異説を唱える不届きな範^{はん}宴は、この山にはおけぬ、山を下りるか、ここで、自分の学説は過^かりであること、仏陀に誓^{ちか}うか、返答をせいつ」と、威^いたけだかに、脅^{おど}すのであつた。

四

眉の毛もうごかさず相手の顔を正視していた範^{はん}宴は、唇で微笑した。

「わたくしの学説はわたくしの学説であつて、それを撮ると撮らぬとは聴く人の心々にあることです。いかなる仰せがあろうとも、学徒が信念する自己の説を曲げたり変えたりすることはできません」静かにいうことばが、えって相手の怒りきつてゐる感情を煽りたて、

「よしつ、それでは、叡山から去れ、去らねば、抓みだすぞ」と、法師たちは、袖を肩へたくしあげた。

範宴の脚は、地から生えてゐるように動じなかつた。

「なんで私に山を去れと仰っしゃるのか、私には、御山を追われる覚えはない」

「貴様がきよう講堂でしゃべつたことは、すべて、仏法を冒瀆するものだ」

「それを指摘してください」

「いちいちいうまでもないことだ。汝の精神に訊け。汝は仏弟子でありながら、仏陀を心から信仰しているのではあるまい」

「そうです、私は、仏陀を偶像的に拝みたくありません、仏陀もわれらと等しい人間であり、われらの煩惱を持ち、われらと共に生きつつある凡人として礼拝したいのです、ります。そういう気持ちから、きょうの講義のうちには、多少、偶像として仏陀にひざまずいてゐるあなた方には、すこし耳なれない言辞があつたかも知れませんが、それも私の信念でありますから、にわかに、その考え方を曲げろの変えろの仰っしゃられてもどうすることもできません」範宴のことばが終るか終らないうちに一人の法師がかためていた拳がふいに彼の肩先を烈しく突きとは

して、

「この青二才め、仏陀も人間もいっしょに考えておる。懲らしめてやれ」

「思い知れ、仏罰をツ」つづいてまた一人の者の振り込んだ棒が、範宴の腰ぼねを強たかに打った。性善坊はすでに、暴力になったとたんに二人の法師を相手に取つてゐた。

ここの山法師には僧兵という別名さえあるほどで、武力においては、常に侍に劣らない訓練をしているのであるから、性善坊といえども、そのうちの二人を相手に格闘することは容易でなかつた。

ましてや範宴には力ではどうする術もなかつた。性善坊があちらで格闘しながらしきりに逃げる逃げろと叫んでいるようであつたが、範宴は逃げなかつた。

四人の荒法師は、そこへ坐つてしまつた範宴に向つて、足をあげて蹴ったり、棒を揮つて打ちすえたりしながら、「生意気だツ」

「仏陀に対して不敬なやつ！」

「片輪にしてやれ」と口々に罵つて、半殺しの目にあわせなければ熄まぬような勢いだった。

すると、最前から彼方の草のなかに、腕ぐみをしながらのそりと立っていた大男があつて、もう見るにたえないと思つたか、大きな革巻の太刀を横につかみながら範宴の方へ駈けてきた。

その法師武者は、昼間、範宴が講堂で小止観を講義しているながい間を、法筵のいちばん前に坐って終始じつと居眠っているもののようにつ向いて聞いていた、この山に見馴れない四十前後の——あの男なのであった。

駈けてきて、

「狼藉者ろうぜきものつ」と叱りつけた。声に、ただならぬ底力そこちからがあつて、鉄くろがねのような拳こぶしをふりあげると、

「法の御山のりみやまにおいて暴力を働くものこそ、仏賊だ、仏敵だ。疾く、消えうせぬと、太夫房覚明がただはおかぬぞ」と、一人の横顔を、頬の碎けるほど打った。撲られた法師は、

「わっ」と顔をかかえて、崖のかどを踏み外はずした。

他の者たちは、

「おのれ、叡山えいざんの者とも見えぬが、どこの乞食法師だ。

よくも、朋輩を打ったな」太刀や棒切れが、こぞって彼の一身へ暴風のように喚わめきかかってきた。

自分から太夫房覚明と名乗ったその男は、面倒と思つたか、腰に横たえている陣刀のような大太刀をぬいて、

「虫けらめ！　なんと吐はざいたッ——」ぴゅんと、刃やいばのみねが鳴って、一人の法師の首すじを打った。刎はねとばされた棒切れは、宙に飛んで二、三人が左右へもんどり打ってちらかった。

（かなわぬ）と思ったのであろう、法師たちは、何か犬

のように吠えかわしながら、尾を巻いて逃げてしまった。性善坊と組みあつていた者も、仲間の者が怯ひるみ立って逃げだすと、もう、勇氣も失うせて、彼を捨てていちばん後から鹿のように影を消してしまった。

「どなたか存じませぬが……」性善坊は、あらい息を肩でついて、

「——あやうい所を……ありがとうございます」

「どこも、お怪我けがはなさらぬか」

「はい」範宴も頭をさげて、心から礼をのべた。そして、星明りに、自分よりも背のすぐれて高い逞しい大法師の姿を見あげながら、どこかで見たように思った。

太夫房覚明は、あたりの草むらや樹蔭をなお入念に見まわしながら、

「いずこの房の者か、卑怯な法師輩はらじゃ、学問の上のことは、当然、学問をもって反駁はんぱくするがよいに、公おおやけの講堂では論議せずに、暴力をもって、途上に、範宴どのを要して、無法なまねをいたすとは、仏徒のかざ上かみにもおけぬ曲者くせもの、まだどんな、卑怯な振舞いをせぬとも限らぬ、一乗院まで、お送りして進ぜよう」

そういつて、彼は先にあゆみだした。その足ぶみや、物腰には、どこか武人らしい力があつて、

「おそれいまする」といいつつも、範宴は心づよい気がして、彼の好意に甘えて後ろに従いて行つた。

それにしても、太夫房覚明などという名は、この叡山でも南都でも聞いたことがない、いったいこの人物は何者なのだろうかと考えていた。

六

やがて無動寺の一乗院へたどりついた。その間に、太夫房覚明と性善坊とは、範宴を先に立ててかなり親しく話していたが、一乗院まで来ると、

「どうぞ、幾日でもお泊りください。師の房も、あのように無口なお方ではございますが、決して、お氣がねなさるようなお人ではございません」性善坊はしきりと覚明をひきとめていた。

覚明も、元よりどこへ泊るというあてもないのであつて、すすめられたことは、幸いであつたらしい、

「それでは」と、草鞋の緒を解き、範宴へも断つて、奥へ通つた。

師弟はまだ食事をすましていないし、覚明も空腹らしかった。性善坊は炉のある大きな部屋に薪をかかえて行つて、

「お客人には、失礼じゃが、かえつてここが親しかろう、どうぞ炉べりへ」と席をすすめた。

範宴もやがてそこへ来て、師弟も客も一つ座になつて粥をすすりあつた。

覚明はうち解けたもてなしにすっかり欣んで、

「家の中に眠るのは久しぶりでござる。ゆうべは、塔の縁に、一昨日はふもとの辻堂に、毎夜、冷たい床にばかり眠っていたが、おかげで、今夜は人心地がついた」といった。範宴は苦笑して、

「あなたも何か迷うているお人と見える。私も、時々この山から迷いだすのです」

「いや」と、覚明は武骨に手を振つて――

「御房の迷いと、拙者の迷いとは、だいぶ隔りがある。

――われらごとき武辺者は、まだまだ迷いなどというのも烏滸がましい。ただ余りに血に飽いて荒んだ心のやすみ場を探しているに過ぎないので」

「武辺者と仰せられたが、そもあなたのご本名は何といわるるか、おさしつかえなくばお聞かせください」

「お恥しいことだ」覚明は、慚然としながら、楯火の煤でまつ黒になつた天井を見あげた。そして、

「今は、それも前身の仮の名にすぎぬが、実は、拙者は海野信濃守行親の子です」

「えっ」思わず範宴は眼をみはつた。

「――では勸学院の文章博士であり、また進士蔵人の職にあつた海野道広どのは、あなたでしたか」

「いかにもその道広です。木曾どのの旗挙げにくみして、

大いに志を展べようとしたのですが、義仲公は時代の破壊者としては英邁な人でしたが、新しい時代の建設者ではなかつたのです。ことすべて志とちがって、ご承知

のような滅亡をとげました。拙者も、男児の事業はすでに終つたと考えて、一時は死ななりましたが、どうい

うものか、最後の戦いにまで生きのこつて、はや、世俗のあいだに用事のないこの一身を、かように持てあましているわけでござる」自嘲するように太夫房覚明はそういつてわらつた。

炉辺の夜がたりは尽きない。

覚明は昼間、範宴の講義を聴いた時から、

(これは凡僧でない)とふかく心を囚とらわれていたが、さらに一夜を語り明かしてから、

(この人こそ、虚無と紛乱ふんらんと暗黒の巷ちまたにまよう現世界の明しとなる大先覚ではなからうか)という気がした。で、あくる日あらためて覚明は範宴のまえに出た。

「お願いがござるが」範宴はやわらかい眼ざしを向ける。この処女おとめのような眸まなこのどこにきのう講堂で吐いたような大胆な、そして強い信念がかくされているのかと覚明はあやしくさえ思う。

「拙者を、今日から、御弟子みでしの端に加えていただきたいのです——」

「弟子に」

「されば」覚明は力をこめていった。

「今日までの自分というものは、昨夜も申しあげたとおり、武辺ぶへんの敗亡者であり、生きる信念を欠いた自己のもてあましたものでありましたが、もういちど、人間として真に生き直してみたいのでござる。おききとどけ下さらば、覚明は、今日をもって、誕生の一歳とおもい、お師の驥尾きびに附いて、大願の道へあゆみたいと存するのでござる」

「あなたは、すでに、勸学院の文章博士もんじょうはかせとし、学識も世

事の体験も、この範宴よりは遥かに積まれている先輩です。——私がおそるるのはその学問です。あなた、今までのすべてを——学問も智慧も武力も——一切かなぐりすてて、まこと今日誕生した一歳の嬰兒あかごとなることのできますかの」

「できる。——できるつもりです」

「それをお誓いあるならば、不肖ふしょうですが、範宴は、一歳のあなたよりは、何歳かの長上ですからお導きいたしてもよいが」

「どうぞ、おねがいいたします」覚明は誓った。

かつて、木曾義仲にくみして、矢をむけた時の平家追討へんかんの返翰へんに、

——清盛は平家の塵芥じんがい、武家の糟糠そうこうなり。

と罵倒ばとうして気を吐いた快男児かくみよ覚明も、そうして、次の日からは、半僧半俗のすがたをすてて、誕生一歳の仏徒となり、性善坊に對しても、

(兄弟子)と、よんで、侍かしずく身になった。

覚明ひとりではない。時勢は、源頼朝よりともの赫々かつかくたる偉業を迎えながら、一方には、その成功者以上の敗亡者を社会から追いだしていた。

壇だんの浦を墓場とした平家の一族門葉もそうである。

それを討つに先駆した木曾の郎党も没落し、また、あの華やかな勲功を持った義経よしつねすらが、またたく間に帷幕いばくの人々と共に剿滅そうめつされて、社会の表からその影を失ってしまった。

だが——亡びた者、必ずしも死者ではない。生きとし

生けるものの慣いとして、生き得る限りはどこかに生きようとしているのである。平家の残党、木曾の残党、義経の残党、その一門係累はことごとく世間にすがたは消していても、どこかで呼吸し、何かの容で、更生にもがいている。

太夫房覚明も、そういう中の一人なのである。

八

新しい力が興ろうとする時には必ず古いものの力がこぞってそれを誹謗してくる。

「範宴の講義を聴いたか」一山の者の眼は、彼の声にその新しい力を感じて不安に駆られた。

「どんなことをいうのか」

「まあ、いちど行ってみろ」禿谷の講堂は、一日ごとに大衆で埋まった。法筵にすわれない人々は講堂の縁だの窓の外に立って彼の声だけを聞いていた。

彼の講義が熱をおびるほど、大衆も熱し、そして、内心深く考え直して衝たれているものと、範宴に対して飽くまでも闘争的に反感をいだいている者とが、はっきりと分れていた。

むろん彼に帰依する者よりは、彼を嫉視し、彼を憎悪する者のほうが遥かに多い。その険悪な大勢の顔からは、殺氣が立ちのぼっていて、講義の要点にすすむと、

「邪説っ、邪説っ」と、どなったり、

「奇を衒うなっ」と弥次ったりして、時には、立って講

壇へ迫ろうとするような乱暴者があったりした。

そして範宴の帰りは、いつも薄暮になるので、性善坊は師の一身を案じて、

「どうか、はやくご講義を切りあげて下さるように」と、頼むようにいった。

範宴はうなずいたが、やがて、小止観の講義が終ると、すぐ続いて、往生要集の解をあたらしく始めた。

「困ったことだ」

性善坊は大不服である。

「講義が大事か、お体が大事か、それくらいなことは、お分りと存じますに、毎日、危険をおかしてまで、禿谷へお出かけになるのはいかがと存じます。ことに、一山の大部分のものは、日にまして、師の房を悪しざまに沙汰するのみか、伝教以来の法文を自分一個の見解でふみにじる学匪だとさえ罵っているではございませぬか。このうえ講義をおつづけになることは、火に油をそそいでみずから焰に苦しむようなものだと思はれますが」口を極めて苦諫するのであった。けれど範宴は、

「初めの約束もあるから——」というのみで、彼を叱って説伏しようとしもない代りに、思いとまって講義をやる様子もない。

ただこの際、性善坊にとって心づよいことは、新しく弟子となった太夫房覚明が、範宴の身を守ることは自分の使命であるかのように、範宴のそばに付いて、見張っていてくれることであった。そのためか、往生要集の解も、無事にすんで、範宴は、翌年の夏までを一乗院の奥

に送っていたが、やがて秋の静かな跫音^{あしおと}を聞くと、

「興福寺へ行つてまいる」と、性善坊も覚明もつれずに、ただ一人で、雲のふところを下りて、奈良へ行つた。

彼の念願は、興福寺の経藏^{きやうぞう}のうちにあった。許しをうけて、その大藏^{だいぞう}の暗闇にはいった範宴は、日も見ず、月も仰がず、一穗^{いっすい}の燈^{とも}し灯^びをそばにおいて、大部な一切経^{いっさいきやう}に眼をさらし始めたのである。

ふつうの人間の精力では五年かかって到底読みつくせないといわれている一切経を、範宴は五ヵ月ばかりで読破してしまった。おそらく眼で読んだのではあるまい、心で読んだのだ、そして充血して赤く爛^{ただ}れた眼と、陽にあたらないために蟬^{せみ}のように青白くなった顔をもって、大藏^{だいぞう}の闇から彼がこの世へ出てきた時には、世は木枯^{こがら}しのふきすさぶ建久^{けんきゅう}七年の真冬になっていた。